IBM<sup>®</sup> DB2 Universal Database<sup>™</sup>



# Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス

バージョン 8

IBM<sup>®</sup> DB2 Universal Database<sup>™</sup>



# Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス

バージョン 8

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、特記事項に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。 http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは http://www.ibm.com/jp/manuals/ の「ご注文について」をご覧ください。 (URL は、変更になる場合があります)

原典: SC27-1221-00 IBM<sup>®</sup> DB2 Universal Database<sup>™</sup> Data Links Manager Administration Guide and Reference Version 8

発行: 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当: ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2002.10

この文書では、平成明朝体<sup>™</sup>W3、平成明朝体<sup>™</sup>W9、平成角ゴシック体<sup>™</sup>W3、平成角ゴシック体<sup>™</sup>W5、および平成角ゴ シック体<sup>™</sup>W7を使用しています。この(書体\*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォ ントとして無断複製することは禁止されています。

注\* 平成明朝体"W3、平成明朝体"W9、平成角ゴシック体"W3、平成角ゴシック体"W5、平成角ゴシック体"W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1998 - 2002. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2002

# 目次

表 vii
<b>本書について </b>
第 1 部 概要 1
第1章 DB2 Data Links Manager 入門3
DB2 Data Links Manager ハーション 8 の利機
HE
DB2 Data Links Manager
DB2 Data Links の環境
Data Links Manager 環境での DB2 クライアン
butter     butter
Data Links Manager 環境での DB2 サーバー 9
ファイル・システムの枠組み9
DB2 Data Links Manager およびご使用のアプ
リケーション
DATALINK $\mathcal{O}\mathcal{F} - \mathcal{P} \cdot \mathcal{P} \mathcal{T}$
DB2 Data Links Manager の典型的セットアッ
$\gamma$
 第 <b>2</b> 部 管理ガイドおよびリファレ
ンス
<b>第 2 章 システム管理オプション21</b> Data Links サーバー・ファイルのバックアッ
プ
Data Links サーバー・ファイルのバックアッ
プ: 詳細
バックアップ・ストレージのロケーション 22
サイズに関する考慮事項23
Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サー
バーとしての使用 (AIX)
Tivoli Storage Manager のアーカイフ・サー
バーとしての使用 (Solaris オペレーティン

Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サー	
バーとしての使用 (Windows)	28
アーカイブ域でのローカル・ディレクトリ	
ーの使用	30
XBSA 準拠のストレージ・マネージャーの	
使用	31
ユーザーに対するアクションの実行の許可	33
基本的な DLFM 構成作業	37
基本的な DLFM 構成作業: 評細	39
Data Links サーバーにおける追加のテー	•
タ・リンク・ファイル・システムの作成	39
Data Links サーバー上に追加の Data Links	
File System を作成 $9 \diamond$	41
テータ・リンク・ファイル・システムの変	10
	46
Data Links File System のワイスの変史: 作	10
	46
Data Links リーバー上の DLFM への DB2	40
リークペースの追加	49
	51
の DLFM の追加	51
DB2 小人下の存足の DB2 ノ シベ スパー らの Data Links Manager のドロップ	54
Data Links Manager $\sqrt{217}$ .	54
しata Links Manager レノリリ ション リ ーモンの使用可能化	55
構成のチョーニング	57
構成のチューニング・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	57
システム・クロックの同期化	57
DLFM DB に対する十分な DB2 ログ・ス	51
ペースの確保	58
コピー・プロヤス数の設定	59
	0,
第 3 章 データ・リンク・ファイル・マネー	
ジャーでの作業	61
基本操作: DLFM の始動、停止、再始動	61
異常終了後の DLFM の再始動	62

ファイル・システムの使用可能化と DLFM へ	
の登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境).	65
DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレ	
ーティング・システム)	67
登録済みファイル・システムのリスト表示	
(AIX、Solaris オペレーティング環境)	68
登録済みドライブのリスト表示 (Windows オ	
ペレーティング・システム)	69
DLFF のロード、照会、アンロード (AIX)	69
DLFF のロード、照会、アンロード (Solaris	
オペレーティング環境)	70
DLFF の登録、照会、登録解除 (Windows オ	
ペレーティング・システム)	71
DLFF コントロールのファイル・システム・サ	
イズを増加する (AIX、Solaris オペレーティン	
グ環境)	72
データ・リンク・サーバーへの DB2 Universal	
Databases の登録	73
データ・リンク・サーバーに登録済みのデー	
タベースのリスト表示	74
Data Links Manager からの DB2 データベー	
ス情報の除去	75
エラー・メッセージ・ログ・ファイルの診断	
レベルの変更	76
データ・リンク・ファイル・システム・フィ	
ルター (DLFF) 処埋のロキングの変更 (AIX).	77
DLFF ドライバーをロードした後のメッセージ	
のロギング (AIX)	79
テータ・リンク・ファイル・システム・フィ	
ルター (DLFF) 処理のロキンクの最小化	
(Solaris オペレーティング境境)	80
テータ・リンク・ファイル・システム・フィ	
ルター (DLFF) 処理のロキンクの変更	
(Windows オペレーティング・ンステム)	80
DLFF 使用可能ファイル・システムの異なるハ	
ート・テイスクへの移行 — 概要	81
異なるハート・ナイスクへの DLFS の移動:	~ •
	82
DLFS の異なるハート・ティスクへの移行	0.0
$(AIX)  \dots  \dots  \dots  \dots  \dots  \dots  \dots  \dots  \dots  $	82
DLFS の異なるハード・テイスクへの移行	0
(Solaris A ハレーナイノク 東現)	86
DLFS の異なるトフイノへの移行	00
(Windows)	90
COPY の代わりに SCOPY を使用する	93

アーカイブ・サーバー・バックアップ・ファ	
イル情報の検索9	)4
第4章 セキュリティー	7
Data Links Manager のセキュリティーの概要 9	97
組み込みセキュリティーの機能 9	97
データ・アクセス・セキュリティー機能9	98
データ・アクセス・セキュリティー機能:詳	
細	99
リンクされたファイルの基本セキュリティ	
一管理	99
高度なファイル管理セキュリティー機能 10	)1
高度なファイル管理セキュリティー機能 :	
詳細	)3
読み取り操作のセキュリティー 10	)7
書き込み操作のセキュリティー 10	)8
更新中のリンクされたファイルの保護・	
問題点	)9

# 第3部 アプリケーション・プログ ラマーのための参考情報....113

第5章 リンクされたファイルの更新	115
更新方法の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 115
アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新	
/ 再リンク . . . . . . . . . .	. 117
アプローチ 1: 手順 . . . . . . .	. 118
ファイルのリンク解除および再リンク .	. 118
アプローチ 2: リンクされたファイルの更新	
/ ネイティブ・ファイル・システムによるア	
クセスの定義	. 119
アプローチ 3: リンクされたファイルの更新	
/ ファイル・アクセス特権のカスタマイズ.	. 121
アプローチ 3: 詳細	. 122
アプローチ 3 の構成作業	. 122
アプローチ 3 の保守作業	. 125
アプローチ 3 のアプリケーション・プロ	
グラムのフロー	. 127
進行中の更新のバックアウト....	. 131
書き込みトークンの使用上の考慮事項.	. 132
失われた書き込みトークンのリカバー	. 133
アプローチ 4: リンクされたファイルの内容	
の置き換え..............	. 135
アプローチ 4: 詳細	. 136
アプローチ 4 を使用した、リンクされた	
ファイルの内容の置き換え	. 136

アプローチ 4 の使用例.			. 137
更新アプローチのサマリー.			. 138

# 第4部トラブルシューティング 143

第6章 サーバーのリカバリー	145
データ・リンク・サーバー・マシンの障害	145
障害とリカバリーの概要	145
DB2 Data Links Manager システムのセット	
アップとバックアップに関する推奨事項 .	147
ファイル・システムのバックアップとリスト	
アに関する推奨事項	147
ファイル・システム・ディレクトリー階層を	
現時点の状態まで戻す.......	148
db2_recon_aid ユーティリティー	150
DB2 Data Links Manager のリカバリーのシ	
ナリオ	152

																			2.
第	7	章	デ	-	タ	•	IJ	ン	ク	•	フ	ア・	イル	•	マ.	ネー	-		D
ジ	ヤ-	-の	)T	ラ・	_	•	メ	ッ	セ	—	ジ	の角	解説					159	D
DL	.FN	400	1I															161	D
DL	.FN	<b>A</b> 10	1E															161	D
DL	.FN	/112	1E															162	D
DL	.FN	/112	2E															162	D
DL	.FN	/112	4E															163	D
DL	.FN	/112	6E															163	D
DL	.FN	/112	8E															163	D
DL	.FN	/112	9I															163	D
DL	.FN	/115	1I															164	D
DL	.FN	/120	1E															164	D
DL	.FN	/120	2E															165	D
DL	.FN	/120	3E															165	D
DL	.FN	/120	4E															165	D
DL	.FN	/120	5E															165	D
DL	.FN	/120	6E															166	D
DL	.FN	/120	7E															166	D
DL	.FN	/120	8I															166	
DL	.FN	/120	9E															167	付
DL	.FN	<b>A</b> 21	0E															167	ジ
DL	.FN	/121	1E															167	dl
DL	.FN	/122	1E															167	dl
DL	.FN	/122	2I															168	dl
DL	.FN	/122	3E															168	dl
DL	.FN	/125	2E															168	dl
DL	.FN	/125	4I															169	dl
DL	.FN	//34	1E															169	dl

DLFM402E													170
DLFM501E													170
DLFM701E													178
DLFM703E													178
DLFM704E													178
DLFM706W													179
DLFM707I													179
DLFM721E													179
DLFM741E													179
DLFM742E													180
DLFM743E													180
DLFM744E													181
DLFM746E													181
DLFM747E													181
DLFM748I													182
DLFM749E					·		·						182
DLFM750I					·		·						182
DLFM751E	·	•	•	•	•	•	•	•	·	•	•	•	183
DI FM8011	•	•	·	•	•	•	•	•	•	•	•	•	183
DI FM802I	·	·	•	·	•	·	•	·	·	·	·	•	183
DI FM803I	·	·	•	·	•	·	•	·	·	·	·	•	184
DI FM804I	·	·	•	·	•	·	•	·	·	·	·	•	184
DI FM8051	·	•	•	•	•	•	•	•	·	•	•	•	184
DI FM806I	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	185
DI FM807I	·	•	•	•	•	•	•	•	·	•	•	•	185
DI FM808I	·	•	•	•	•	•	•	•	·	•	•	•	185
DI FM8091	·	•	•	·	•	·	•	•	·	·	·	•	186
DI FM810I	·	•	•	•	•	•	•	•	·	•	•	•	186
DI FM811F	·	•	•	•	•	•	•	•	·	•	•	•	186
DI FM812I	·	·	·	•	·	·	•	·	·	•	•	·	187
DLFM8121	·	·	·	•	·	·	•	·	·	•	•	·	187
DI FM814I	·	·	·	·	•	·	•	·	·	•	•	·	187
DI FM900I	·	·	·	•	·	·	•	·	·	•	•	·	187
DLFM001E	·	·	·	·	•	·	•	·	·	•	•	·	188
DLFM901E	·	·	•	·	•	·	•	·	·	·	·	•	100
DLFM908E	·	·	·	•	·	•	·	•	·	•	•	·	100
DLFM909E	·	·	·	•	·	·	•	·	·	·	·	·	109
付録 A. デ-	-5	, .	IJ	~	ヶ・	っ	7.	イル	,.	रः	ネー	_	
ジャーのコ		ィド	-				ĺ						191
dlfm コマン	K			-	-	-		-	-	-	-		191
dlfm add db		I 7	シ	к.									191
dlfm add pre	efix		¬	シン	ド	•		•	•	•	•	•	192
dlfm bind	17	$\sum$	к.	÷.	•	·		·	·	·	·	•	193
dlfm create	ביב	z)	/	:	•	•	•	·	·	·	·	•	193
dlfm create	db	J	7	ント		•	•	•	•	•	•	•	194
												-	

dlfm drop_db コマ	ンド .						. 196
dlfm drop_dlm ⊐~	マンド.						. 197
dlfm grant コマン	ド						. 197
dlfm grant replicati	on read	コマ	ンド				. 200
dlfm grant replicati	on write	37	マント				. 201
dlfm help コマント	·						. 202
dlfm list registered	database	es ⊐	マン	ド			. 202
dlfm list registered	director	ies 🗆	マン	ィド			. 203
dlfm list registered	prefixes	コマ	マント				. 204
dlfm list registered	replicati	ion a	ccess	co	ntro	ol	
コマンド...							. 204
dlfm list registered	users $\Xi$	コマン	イド				. 205
dlfm list upd_in_pr	ogress fi	iles f	or dł	) =	17	ン	
ド							. 206
dlfm list upd_in_pr	ogress fi	iles f	or pr	efiz	κ Ξ	17	
ンド....							. 208
dlfm refresh key	コマンド						. 209
dlfm restart コマン	ド						. 210
dlfm retrieve コマ	ンド .						. 210
dlfm revoke コマン	~ド .						. 211
dlfm revoke replica	tion ]	マント	× .				. 213
dlfm see コマンド	(AIX ⋠	うよて	K So	lari	sŻ	トペ	
レーティング環境)							. 214
dlfm set link secur	ity コマ	ンド					. 214
dlfm setup $\exists \forall \forall \rangle$	ド						. 215
dlfm shutdown コマ	マンド.						. 216
dlfm start コマント	÷						. 216
dlfm startdbm コマ	ンド.						. 217
dlfm stop コマンド	·						. 217
dlfm stopdbm コマ	ンド.						. 218
dlfm ? コマンド							. 218

### 付録 B. データ・リンク・ファイル・システ ム・フィルターのファンド

ム・フィルターのコマンド	•	•	•	•	•	. 221
dlff add $\exists \forall \lor \lor \lor$ (Windows	5 才	s م	/	テ	ィン	/
グ・システム)						. 221
エラー・メッセージ						. 221

dlff get dlfmaccount コマンド (Windows オペ	
レーティング・システム)	22
dlff get loglevel コマンド (Windows オペレ	
ーティング・システム)	23
dlff list コマンド (Windows オペレーティン	
グ・システム)	24
dlff refreshtrace コマンド (Windows オペレー	
ティング・システム)	24
dlff remove コマンド (Windows オペレーテ	
ィング・システム)	25
エラー・メッセージ	25
dlff set dlfm_write_group $\exists \forall \lor \lor$ (Windows	
オペレーティング・システム)	26
dlff set dlfmaccount コマンド (Windows オペ	
レーティング・システム)	27
エラー・メッセージ	28
dlff set loglevel コマンド (Windows オペレー	
ティング・システム)	29

# 付録 C. Data Links File System (DLFS)

$\mathcal{O}_{\perp}$	フー	-	•	•	•				•	•		•	•		231
J7.	ンド	に	対	する	5 I	DLE	FS	I	ラー	- (1	AIX	. (I			231
J7.	ンド	に	対	する	5 I	DLF	FS	I	ラー	- (	Sola	aris	才		
ペレー	ーテ	-1	ン	グ現	影境	Î).									239
J7.	ンド	に	対	する	5 I	DLE	FS	I	ラー	- ('	Wir	dov	vs)		246
WRIT	Е	PE	RM	IISS	SIO	Ν	AD	MI	N	で気	と義	さ	ħ,t	Ż	
列で都	参照	は	れ	たこ	ファ	1	ルオ	μĒ	の	DI	FS	I	ラ		251
DB2	Da	ta	Li	nks	5 N	lan	ag	er	用詞	語身	₹.				255
DB2	Da	ta	Liı	nks	5 N	lan	ag	er	用詞	語身	€.	•	•	•	255
DB2 特記	Da 事項	ta į	Liı	nks	5 N	lan	ag	er	用 :	语身 .					255 261
<b>DB2</b> 特記 商標	Da 事項	ta Į	Liı	nks	• N •	lan	ag	er	用 • ·	语 ·	•	• •	• •	•	<b>255</b> <b>261</b> 264
DB2 特記 商標	Da 事項	ta Į	Liı	nks	• N	lan		er	用 •	语身 •		•	•	•	<b>255</b> <b>261</b> 264
DB2 特記 商標 索引	Da 事項	ta Į	Liı	nks	• N • •	lan		er	用 : ·	语身 ·	•	•	• • •	• • •	<ul> <li>255</li> <li>261</li> <li>264</li> <li>267</li> </ul>

IBM	と連絡	fe	5	る					. 271
製品	情報.								. 271

# 表

1.	Data Links Manager のアーカイブ域に影 響を与えるデータベース構成パラメータ
2.	リンクされたファイルに対する禁止操作 100
3.	DATALINK 列属性および適用できる
	DLM セキュリティー特権 101
4.	アプローチ 3 で必要な DATALINK 列
	の属性
5.	リンクされたファイルの更新アプローチ
	のサマリー
6.	DATALINK 列属性および適用できる
	DLM セキュリティー特権 195
7.	DATALINK 列属性および適用できる
	DLM セキュリティー特権 198
8.	トークンなしでファイルをオープンする
	のに使用できる AIX コマンドの一部
	と、関連するエラー・メッセージのリス
	▶ <sub>•</sub>
9.	有効期限が切れたトークンでファイルを
	オープンするのに使用する可能性のある
	AIX コマンドの一部と、関連するエラ
	ー・メッセージのリスト。 236
10.	無効なトークンでファイルをオープンす
	るのに使用する可能性のある AIX コマ
	ンドの一部と、関連するエラー・メッセ
	ージのリスト。
11.	トークンなしでファイルをオープンする
	のに Solaris オペレーティング環境使用
	できるコマンドの一部と、関連するエラ
	ー・メッセージのリスト。 243

- 有効期限が切れたトークンでファイルを オープンするのに使用する可能性のある Windows コマンドの一部と、関連する エラー・メッセージのリスト。 . . . 250

# 本書について

本書は、Windows NT、Windows 2000、AIX、Solaris オペレーティング環境における DB2 Data Links Manager について詳細に解説し、さらにその使用法、管理の方法、ア プリケーションの作成の方法についても解説します。

本書は、読者が、「DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」、 GC88-9141-00 をお読みになり、DB2 Data Links Manager を既にインストールして、構 成を行い、検証をされているという想定で書かれています。

### 本書の対象読者

本書は、Windows NT、Windows 2000、AIX、Solaris オペレーティング環境において DB2 Data Links Manager をご使用になるデータベース管理者、システム管理者、IT ス ペシャリスト、アプリケーション・プログラマー、およびその他の DB2 Data Links Manager をお使いになる方を対象にしています。

本書をお使いになる前に、以下のことについて理解しておく必要があります。

- DB2 Universal Database
- 構造化照会言語 (SQL)
- DB2 と Data Links Manager が稼働するオペレーティング・システムの環境

ー般情報については、「*IBM DB2 Universal Database* 管理ガイド: プランニング」 (SC88-9135-00)、「*IBM DB2 Universal Database* 管理ガイド: インプリメンテーショ ン」 (SC88-9133-00)、「*IBM DB2 Universal Database* 管理ガイド: パフォーマンス」 (SC88-9134-00) をご覧ください。DB2 コマンドに関する説明は、「*IBM DB2 Universal Database* コマンド・リファレンス」 (SC88-9140-00) をご覧ください。SQL について は、「*IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス*」の第 1 巻と第 2 巻 (SC88-9155-00 と SC88-9156-00) をご覧ください。

推奨事項: 各種のデータ・ソースとの接続の経験のあるシステムとネットワーク・サポ ートのエキスパートへの連絡手段を確保しておくことも必要です。

**重要:**本書には、DB2 Data Links Manager のインストールの説明はありません。 「DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」に DB2 Data Links Manager の インストール、構成、検証の方法が記載されています。

DB2 Data Links Manager の Web サイト、http://www.ibm.com/software/data/db2/datalinks に DB2 Data Links Manager のその他の情報、たとえば事例研究、文献、プレゼンテー ションなどがあります。

# 本書の構成

本書では、以下のトピックをカバーします。

- 3ページの『第1章 DB2 Data Links Manager 入門』には、DB2 Data Links Manager 入門と概説が記載されています。
- 21 ページの『第 2 章 システム管理オプション』では、Data Links Manager システム・オプションと、それらの構成方法を説明しています。
- 61ページの『第3章 データ・リンク・ファイル・マネージャーでの作業』では、 データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) コンポーネントの使用法について 説明します。
- 97 ページの『第4章 セキュリティー』では、Data Links Manager が持ついろいろ なタイプのセキュリティー機能をリストし、さらにその使い方について説明します。
- 115ページの『第5章 リンクされたファイルの更新』では、リンクされたファイルのいろいろな更新の仕方を説明します。
- 145 ページの『第6章 サーバーのリカバリー』では、データ・リンク・サーバーの 障害時のリカバーの方法について説明します。
- 159ページの『第7章 データ・リンク・ファイル・マネージャーのエラー・メッセ ージの解説』には、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM)のエラー・コ ード、メッセージ、推奨アクションのリストがあります。
- 191ページの『付録 A. データ・リンク・ファイル・マネージャーのコマンド』では、すべてのデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) コマンドをリストしています。
- 221ページの『付録 B. データ・リンク・ファイル・システム・フィルターのコマンド』では、Windows NT と Windows 2000 オペレーティング・システムのデータ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) コマンドすべてをリストしています。
- 231 ページの『付録 C. Data Links File System (DLFS) のエラー』では、Data Links File System (DLFS)の操作と、出されるエラー・メッセージをリストしています。
- 255 ページの『DB2 Data Links Manager 用語集』は、Data Links Manager の用語と 略語の解説です。

# 規則

特に断りのない限り、*Windows* は、Windows NT と Windows 2000 オペレーティン グ・システムの両方を意味します。

本書では、以下のような強調表示の規則を用いています。

 太文字は、コマンドやフィールド名、フォルダー名、アイコン、メニュー選択などの グラフィカル・ユーザー・インターフェー (GUI) コントロールを示します。

- イタリック体は、値によって入れ替える変数を示します。また、資料のタイトルや 強調語にも使われます。
- モノスペース体は、ファイル名、ディレクトリー・パス、コマンドやその通りに入れ なければいけないテキストを示します。

# 第1部概要

第1章 DB2 Data Links Manager 入門 :	3
DB2 Data Links Manager バージョン 8 の新機	
能	3
DB2 Data Links Manager	4
DB2 Data Links の環境	5
Data Links サーバー・コンポーネント	б
Data Links Manager 環境での DB2 クライアン	
<b>ト</b>	8
Data Links Manager 環境での DB2 サーバー .	9
ファイル・システムの枠組み	9
DB2 Data Links Manager およびご使用のアプ	
リケーション	1
DATALINK のデータ・タイプ	3
DB2 Data Links Manager の典型的セットアッ	
$\mathcal{I}$	5

# 第1章 DB2 Data Links Manager 入門

## DB2 Data Links Manager バージョン 8 の新機能

バージョン8には、以下の拡張機能が含まれています。

- 新しい「DB2 Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」は、システム管理者、データベース管理者、およびアプリケーション・プログラマーのための解説書です。以下の内容が説明されています。
  - ファイルのリンクおよびリンク解除
  - リンクされたファイルの更新
  - DB2 DataPropagator を使用した、リンクされたファイルの複製
  - Data Links サーバー上でのデータとアクセスの両方の管理と保護
  - Data Links サーバーのリカバー
  - Data Links Manager 構成の調整
  - Data Links Manager のトラブルシューティング
  - Data Links Manager と一緒に動作するさまざまなファイル・システムの統合
- DB2 Data Links Manager は、現在、Windows NT、AIX、Solaris オペレーティング環 境以外に、Windows 2000 オペレーティング・システムでも使用できるようになって います。
- DB2 Data Links Manager は、現在、バージョン 8 とバージョン 7 の Solaris オペレ ーティング環境をサポートしています。
- DB2 Data Links Manager の管理下にあるファイルも更新できるようになりました。
   「リンクされたファイル」とは、Data Links Manager に管理されているファイルです。
   DB2 のバージョン 8 以前は、ファイルのリンクを解除し、ファイルを変更してから、ファイルを再度リンクする必要がありました。
- リンクされたファイルに関するアーカイブ、データ・リカバリー、複製の各操作で、 パフォーマンスが向上しました。以下のとおりです。
  - リンクされたファイルを含むバックアップの開始時間の減少
  - Reconcile ユーティリティーの実行時間の減少
  - リンクされたファイルについての、DB2 DataPropagator を使用した複製のスループ ットの向上
- ファイル・リンクを許可ユーザーに制限するためのセキュリティー機能の向上

### **DB2** Data Links Manager

DB2 と一緒に働くことによって、Data Links Manager は、次の 4 つの基本的な外部デ ータ制御を行うことができます。

- 参照保全
- アクセス制御
- リカバリー機能
- トランザクションの整合性

Data Links Manager を使用すると、リレーショナル・データベース管理システム (RDBMS) とファイル・システム両方のデータ・ストレージ機能を利用できます。画 像、製品図面、レントゲン写真などの非構造化データをファイル・システムに保管し続 けながら、RDBMS を使用してデータベース内に保管されているデータを管理すること もできます。

Data Links Manager を使用すると、ファイル・システムの枠組みに基づいた e-commerce アプリケーションやインターネット・アプリケーションを、RDBMS データ と一緒に単一の管理ポイントから管理するという特別の方法を実行できます。その他の Data Links Manager の利点には、以下のものがあります。

- 既存アプリケーションの変更を最小限にできること、あるいは変更しないで済むこと
- 外部ファイルを意図的にアプリケーションに近づけることによって、アプリケーション・パフォーマンスを最大化できること、およびネットワーク・トラフィックを減ら せること
- ネイティブ・ファイル・システム API を使用して、リンクされたファイルに直接ア クセスできること
- UNIX<sup>®</sup> ファイル・システムおよび Windows<sup>®</sup> ファイル・システムと一緒に動作する ため、それらのファイル・システムがもつ固有の利点を利用できること

Data Links Manager 製品は、参照保全、バリュー・ベースのセキュリティー、トランザ クションの整合性、およびデータベースの外部に存在するファイルに対する調整された バックアップやリカバリーという、リレーショナル DBMS 機能を拡張します。 Data Links Manager は、データベース機能を外部ファイル・システムに拡張することによっ て、これらのファイルを、論理的にデータベース内にあるかのように管理します。

Data Links Manager を使用すると、ファイルとデータベースのデータを単一ポイントか ら管理できるようになるため、システム管理の費用を減らすことができると同時に、複 雑なシステム管理を簡略化できます。Data Links Manager では、以下のことが保証され ています。

- 外部ファイルに対する参照保全
- ・ オプションとして、外部ファイルに対する RDBMS データ値に基づくアクセス制御
- トランザクション環境内での、調整された自動的なバックアップとリストアの機能

#### 関連概念:

- 9 ページの『ファイル・システムの枠組み』
- 11 ページの『DB2 Data Links Manager およびご使用のアプリケーション』
- 13 ページの『DATALINK のデータ・タイプ』
- 5 ページの『DB2 Data Links の環境』
- 15 ページの『DB2 Data Links Manager の典型的セットアップ』
- 6 ページの『Data Links サーバー・コンポーネント』
- 8 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 クライアント』
- 9 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 サーバー』

#### 関連作業:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『db2\_install コマンドによる DB2 Data Links の手動インストール (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストール の『DB2 セットアップ・ウィザードに よる DB2 Data Links Manager のインストール (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストール の『DB2 セットアップ・ウィザードに よる DB2 Data Links Manager のインストール (Solaris オペレーティング環境)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager のインス トール (Windows)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『db2\_install コマンドによる DB2 Data Links Manager の手動インストール (Solaris オペレーティング環境)』

#### DB2 Data Links の環境

DB2<sup>®</sup> Data Links の環境は以下のものから構成されています。

- DB2 Data Links Manager を実行する Data Links サーバー
- DB2 Universal Database<sup>™</sup> サーバー
- DB2 クライアント
- (オプション) ファイル・アーカイブ・サーバー Tivoli<sup>®</sup> Storage Manager または XBSA 標準インターフェースをサポートするすべての製品

DB2 Data Links Manager は、以下のシステムにインストールできます。

- Journaled File System (JFS) または Transarc の DCE Distributed File Service (DCE-DFS) に保管されているファイルを管理する AIX<sup>®</sup> システム。
- UNIX<sup>®</sup> File System (UFS) に保管されているファイルを管理する Solaris オペレーティング環境。
- NTFS フォーマット設定ドライブをもった Windows<sup>®</sup> NT システムまたは Windows 2000 システム。

• AIX 上の Tivoli Space Manager 管理のファイル・システム。

#### 関連概念:

- 15 ページの『DB2 Data Links Manager の典型的セットアップ』
- 6 ページの『Data Links サーバー・コンポーネント』
- 8 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 クライアント』
- 9 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 サーバー』

# Data Links サーバー・コンポーネント

Data Links サーバーには以下のコンポーネントがあります。

- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM)
- データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) を制御するデータ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF)
- DB2<sup>®</sup> (ロギング・マネージャー)

#### データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM)

DLFM は、1 つ以上の DB2 データベースにリンクされている、Data Links server 上か、DCE セルにあるすべてのファイルを追跡します。DLFM は、 DATALINK 列を参照する SQL INSERT、SQL UPDATE、SQL DELETE のス テートメントから生ずる *link-file* メッセージと *unlink-file* メッセージを受け取 り、処理します。リンクされたそれぞれのファイルごとに、DLFM は、ファイ ルが参照される SQL ステートメントで参照する、データベース・インスタン ス、完全修飾表名、および列名を論理的に追跡します。

DLFM は、これまでにリンクされているファイルが *RECOVERY YES* オプションが指定されている DATALINK 列にリンクされている場合は、それらのファイルも追跡します。このオプションが指定されていると、DATALINK 列で指定されているすべてのファイルについて、DB2 で時刻指定のロールフォワード・リカバリーを行うことができます。

### データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF)

DLFF は、操作をフィルターに掛けて、リンクされたファイルが削除または名 前変更されないように、またファイルの属性が変更されないようにします。ま た、オプションとして、コマンドをフィルターに掛けて、READ PERMISSION DB ファイルと WRITE PERMISSION ADMIN ファイルに対して適切なアクセ ス権限が存在するようにします。DLFF に制御された AIX と Solaris オペレー ティング環境のファイル・システムは、NFS 内でエクスポートできます。 DLFF に制御された Windows NT<sup>®</sup> と Windows 2000 のファイル・システム は、ネットワーク内で共有できます。

DLFF に制御されたファイル・システムは、DLFS ファイル・システムと呼ば れます。

- データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) DMAPP (データ・リンク・アプリケー
- ション) DLFS ファイル・システムには、FSM (File System Migrator; Tivoli<sup>®</sup> Space Manager のフィルター・ファイル・システム・コンポーネント)、JFS、NTFS、 または UFS の環境が含まれます。あるいは、DCE-DFS 環境でのデータ・リン ク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) DMAPP (データ・マネージャ ー・アプリケーション) が含まれます。

DCE-DFS 環境では、DMAPP コンポーネントが、コマンドをフィルターに掛けて、リンクされたファイルが削除または名前変更されないように、またファ イルの属性が変更されないようにします。DMAPP コンポーネントは、Data Links Manager を使用できるようにされている DMLFS 集合体にあるファイ ル・セットをモニターします。集合体で Data Links Manager を使用できるよ うにすると、この集合体に、Data Links の制御下に置けるファイル・セットを 入れることができます。これにより、この集合体がネーム・スペースにエクス ポートされると、DMAPP は、これらのファイル・セット内のデータを管理で きるようになります。 LFS 集合体を使用できる Data Links Manager は、 Transarc が提供する Storage Management Toolkit (SMT) の中に入っています。

#### DB2 (ロギング・マネージャー)

DLFM\_DB と呼ばれる DB2 データベースは、Data Links サーバーのロギング・ マネージャーとして機能します。このデータベースには、Data Links サーバー に接続できるデータベースに関する登録情報が含まれます。また、DLFF が管 理する、AIX<sup>®</sup> や Solaris オペレーティング環境上のファイル・システムのマ ウント・ポイント、または Windows NT や Windows 2000 上のドライブの共 有名に関する情報が含まれます。

注: リカバリーのために、必要に応じて、バックアップをとり、リストアやロ ールフォワードの操作を行ったり、ロギングなどのための適切なスペース を確保するために、特定のデータベース構成パラメーターを設定する場合 を除いて、DLFM\_DB データベースと直接対話しないようにすることをお 勧めします (たとえば、データベースに直接接続し、情報を照会したり、 特に、その情報を更新することなど)。

このデータベースの内容は文書化されておらず、ユーザーが、DLFM\_DB に対して文書化されていない処理を実行した場合のサポートはこの製品で は行われていません。これは、このデータベースの内容が製品内部に属す るものと見なされているからです。

DLFM\_DB データベースには、Data Links サーバー上や DCE セル内で、リンク されているか、リンク解除されているファイル、あるいはバックアップされて いるファイルに関する情報も含まれています。DB2 Data Links Manager のイ ンストール・プログラムは、インストール時にこのデータベースを作成しま す。 RECOVERY YES が指定された DATALINK 列で指定されたすべてのファイル について、DB2 を使用すると、Data Links サーバー上で時刻指定のロールフォ ワード・リカバリーを行うことができます。Tivoli Storage Manager や XBSA 準拠のバックアップとアーカイブのユーティリティーを使用して、ディスク上 のこれらのファイルをバックアップできます。

このデータベース・バックアップによって、DATALINK 列を使用してこのデ ータベースにリンクされている、ファイル・サーバー上のすべてのファイルを バックアップすることもできます。ファイルのバックアップは非同期に行われ ます。

将来のログ・ファイル容量の問題に関するチューニングを最低限に抑えるに は、LOGFILSIZ、LOGPRIMARY、LOGSECOND という DLFM\_DB のデータ ベース構成変数が、十分なディスク・スペースを使用できるようにすることを お勧めします。

#### 関連概念:

- 5 ページの『DB2 Data Links の環境』
- 15 ページの『DB2 Data Links Manager の典型的セットアップ』
- 8 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 クライアント』
- 9 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 サーバー』

#### 関連資料:

データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス の『データベース・ロギングの構成パラメーター』

### Data Links Manager 環境での DB2 クライアント

DB2<sup>®</sup> クライアントは、通常、リモート DB2 サーバーに接続し、そのデータベースに アクセスします。

リモート・クライアントは、Data Links サーバー上にインストールされたデータ・リン ク・ファイル・システム・フィルターの制御の下で、AIX<sup>®</sup> や Solaris オペレーティン グ環境にあるファイル・システムに NFS マウントしたり、Windows 上のドライブを共 有したりできます。このようにして、クライアントは、Data Links サーバー上のファイ ルに直接アクセスできます。

AIX システム上の DCE-DFS 環境では、クライアントは DFS<sup>M</sup> クライアントを使用し ます。 READ PERMISSION DB を指定して作成した DATALINK 列にあるリンクされ たファイルにアクセスするには、DLFS キャッシュ・マネージャーまたは DLFS-CM と も呼ばれる、DB2 Data Links DFS Client Enabler も必要です。

#### 関連概念:

- 5 ページの『DB2 Data Links の環境』
- 15 ページの『DB2 Data Links Manager の典型的セットアップ』
- 6 ページの『Data Links サーバー・コンポーネント』
- 9 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 サーバー』

## Data Links Manager 環境での DB2 サーバー

Data Links Manager は、DB2 UDB サーバー上で稼働している DB2<sup>®</sup> データベースに 登録できます。FSM、NTFS、JFS、UFS のファイル・システムを使用している Data Links サーバーの場合は、特定の DB2 データベースに複数の Data Links Manager を登 録できます。

**注:** Data Links Manager では、区画に分割された DB2 Enterprise Server Edition はサポ ートされていません。

DFS<sup>™</sup> ファイル・システムに保管されたファイルを参照する DATALINK 列を含んだ表 をもったデータベースでは、ADD DATALINKS MANAGER コマンドを使用して、DCE セルを登録する必要があります。DCE-DFS 環境では、DB2 サーバーは、DCE セルを 1 つしか登録できません。また、DFS に保管されている構成情報にアクセスできるように するには、DB2 サーバーに DFS クライアントをインストールする必要があります。

AIX<sup>®</sup> と Solaris オペレーティング環境では、DLFS を DB2 サーバーにマウントする必要はなく、また、Windows<sup>®</sup> 環境では、DB2 サーバー上で、DLFS をネットワーク内共有にする必要はありません。これらのそれぞれの環境では、DB2 サーバーは、ファイル・サーバー上で確保された TCP/IP ポートを使用して、データ・リンク・ファイル・マネージャーとの通信を行います。

#### 関連概念:

- 5 ページの『DB2 Data Links の環境』
- 15 ページの『DB2 Data Links Manager の典型的セットアップ』
- 6 ページの『Data Links サーバー・コンポーネント』
- 8 ページの『Data Links Manager 環境での DB2 クライアント』

## ファイル・システムの枠組み

現在の e-business の傾向である、e-commerce、サプライ・チェーン・マネージメント、 カスタマー・リレーションシップ・マネージメントなどでは、さまざまな DBMS から の構造化データとファイル・システム上にある非構造化データを統合するアプリケーシ ョンが必要です。そのような非構造化データの例としては、これまでファイル・フォー マットを組み合わせて保管されてきた、オーディオ、ビデオ、画像などがあります。 DB2<sup>®</sup> Data Links Manager では、ファイル・システムに基づく既存のアプリケーション や新しいアプリケーションを、そのままの状態で使用できます。 DB2 Data Links Manager を使用すると、これらと同様のファイルを、整合性、セキュリティー、および トランザクションに関する e-business の厳格な要求を満たすデータベース・システムと 統合できます。

このような利点があるため、自分の組織に最も適合する構成を自由に決めることができ ます。重要なデータをそっくり RDBMS に移動させる際に、業務を中断したり、それら のデータへのお客様のアクセスを中断する必要はありません。このデータをファイル・ システムの枠組みから移動させる場合は、このデータのアクセスに使用するアプリケー ションを大幅に書き直す必要もでてきます。

Data Links Manager の場合は、従来のデータベース・リポジトリーにファイルを移動せずに、ファイル・システムの枠組みを使用し続けながら、これらのファイルの保管、アクセス、変更を行うことができます。ファイル・システムをデータ・ストレージの1つとして使用し続けることによって、多くの利点が生まれます。

#### パフォーマンス

データのストア・アンド・フォワード・モデルは、パフォーマンス上の理由か ら受け入れることはできません。たとえば、データをファイルとしてアクセス する必要があるたびに、バイナリー・ラージ・オブジェクト (BLOB) をファイ ルに具体化したり、あるいはその逆のことを行ったりすることは、データベー ス・マネージャーには受け入れがたいことです。また、データを大量に取り込 むときは、これらのデータをデータベースに保管したくない場合があります。

Data Links Manager では、ファイルの読み取り操作や書き込み操作で、オーバ ーヘッドが追加されることはありません。Data Links では、ファイル参照の整 合性を損なう可能性のあるオープン、削除、名前変更などのファイル操作をイ ンターセプトすることによって、データベースからのファイル参照の参照保全 を保証しています。ファイルの読み取り操作と書き込み操作で参照保全が損な われることはないため、これらの操作は Data Links の操作範囲内にはありま せん。また、ファイルの読み取り操作や書き込み操作の回数は、一般的に、フ ァイルのオープンや削除、または名前変更の回数より多いため、性能低下があ ったとしても、それはわずかなものにすぎません。

#### ネットワークの考慮事項

ワークステーションに物理的に近いファイル・サーバーから、直接データをア クセスする場合があります。たとえば、ユーザーにとって、BLOB が保管され ているデータベースと比較して、ネットワークの距離がかなり短くなるよう に、ファイル・サーバーを構成できます。ラージ・オブジェクトと典型的な SQL 照会からの応答を比較すると、ラージ・オブジェクトのほうが、かなり大 きなバイト数が流れます。したがって、リソース間のネットワーク距離は重要 な考慮事項になります。 ストリーム・サーバーは、伝送と取り込みに関するリアルタイム要件を満たし ているため、このサーバーを使用するアプリケーションを使用する場合があり ます。これは等時性伝送と呼ばれます。等時性伝送の例として、高品質(波形 の乱れがない)ビデオをリアルタイムでクライアント・ワークステーションに 伝送するビデオ・サーバーをあげることができます。このような種類のアプリ ケーションでは、たいていの場合、伝送されるデータは、BLOB としてデータ ベースに入ったり、データベースから出て行くことはなく、即時アクセスのた めにファイル・サーバー上に置かれます。

コスト データベースをリポジトリーとして使用することを考えている場合は、標準のファイル入出力セマンティクスを現在使用しているアプリケーションの書き直しにかかる費用を、まず考慮に入れる必要があります。ご使用のアプリケーションで、ファイル・システムの枠組みで機能する既存のツールを使用できる場合があります。これらのツールを置き換えるのにも高いコストがかかる可能性があります。 Data Links Manager を使用すると、既存のファイル・システム・アプリケーションを変更する場合でもほとんどコストはかかりません。

ラージ・オブジェクトをデータベースの外部に置くことにより、データベース がより管理しやすいサイズになると、データベースの管理コストは低下しま す。データベースに、ファイルに対するポインター (DATALINK 列値のよう な)しか含まれていない場合は、データベースをバックアップする時間は少な くなります。バックアップの間、DB2 は、このデータベースにリンクされたフ ァイルがバックアップされるように、DLFM をチェックします。DLFM は、フ ァイルがデータベースにリンクされると、ファイルの非同期バックアップを開 始します。

#### 関連概念:

- 4 ページの『DB2 Data Links Manager』
- 11 ページの『DB2 Data Links Manager およびご使用のアプリケーション』

# DB2 Data Links Manager およびご使用のアプリケーション

データベースやファイル・システムを含む、複数の異質なソースからの処理情報を扱う すべてのアプリケーションに対して、DB2<sup>®</sup> Data Links Manager を使用することができ ます。この場合、異なるソース間で、情報はセキュアで正確であり、時宜を得たもので なければならず、情報に矛盾があってはなりません。

e-commerce、カスタマー・リレーションシップ・マネージメント、サプライ・チェー ン・マネージメントの e-business 以外に、Data Links Manager は、以下のアプリケーシ ョンでも効果的に使用できます。

 ファイル・サーバーがレントゲン写真を保管し、データベースがそれらの属性を保管 する、医療アプリケーション。

- ビデオ・クリップの資産管理を行うエンターテイメント産業のアプリケーション。ファイル・サーバーがビデオ・クリップを保管し、データベースがクリップの属性を保管します。全情報にアクセスするためのデータベース特権に基づいて、ビデオ・クリップにアクセスするには、アクセス制御が必要です。
- 数百万のファイルを管理し、データベース特権に基づいたアクセス制御を許可する World Wide Web アプリケーション。
- 小切手の画像をさまざまな場所で取り込み、それらの画像を中央で管理する必要のある金融アプリケーション。
- 製品図面がファイルとして保持され、データベースがそれらの属性を保管する CAD アプリケーション。図面属性に対して照会を実行することができます。

これらのアプリケーションの多くのものでは、ファイル内のデータを探すための検索機 能が必要です。ただし、これらの検索機能では、照会の際に生の内容は必要でないた め、データを物理的にデータベース・システムにもってくる必要はありません。典型的 な例としては、画像やビデオの特徴を抽出し、抽出された特徴に関する検索を実行する ために、それらをデータベースに保管する場合があります。これらのアプリケーション は、SQLの検索機能と生データの直接操作を結び付けるために、そのようなファイルに 対する参照やそれらの内容を記述するパラメーター・データを保管する機能を用いた方 法を使用します。

テキスト、音声、画像などのための DB2 リレーショナル・エクステンダーには、この 機能が備わっています。このエクステンダーを使用すると、データに関する特別な索引 を作成し、このデータを検索できます。このデータは、DB2 に保管するか、DB2 Data Links を使用してファイル・システムに保管できます。

Data Links Manager は、データがデータベースにない場合でも、これらのすべての機能 を提供できますが、DB2 リレーショナル・エクステンダーの検索機能と一緒に使用し て、このデータを検索したり、さらにパラメトリック検索を行うこともできます。さら に、DB2 エクステンダーが作成するデータや索引は、同期化して保持できます。

#### 中央管理ポイント:

Data Links Manager を使用すると、論理的にデータベース情報と統合された外部ファイルを管理することに関連した多くの操作を簡略化できます。たとえば、Data Links Manager を使用すると、データベースのバックアップを、そのデータベースで参照されたすべてのファイルのバックアップと連係させることができます。例としては、データベースとファイル・データを組み合わせて、時刻指定イメージを取り込むなどの場合があります。

また、バックアップからデータベースをリストアすると、Data Links Manager が自動的 に対応するファイルの内容をリストアするため、整合性が保証されます。データベース とファイル・システムを同期をとって保持するという大変な作業がデータベース管理者 に任せられており、エラーが発生しやすいその他のシステムとこの状況を比べてみてく ださい。このような構成では、情報とアプリケーションの保全性が損なわれる危険性が 存在します。

#### 関連概念:

- 4 ページの『DB2 Data Links Manager』
- •9ページの『ファイル・システムの枠組み』

# DATALINK のデータ・タイプ

Data Links では、DB2<sup>®</sup> Universal Database で SQL データ・タイプとしてインプリメ ントされている DATALINK データ・タイプが使用されます。このデータ・タイプは、 データベースの外部に保管されたオブジェクトを参照します。 DATALINK データ・タ イプを、その他の SQL データ・タイプとまったく同じように使用して、表の列を定義 できます。DATALINK のデータ・タイプは SQL の標準データ・タイプの一部であり、 標準規格に準拠したデータベース製品で使用できます。

File System Migrator (FSM)、NT File System (NTFS)、Journaled File System (JFS)、および UNIX<sup>®</sup> File System (UFS) の環境では、ファイルやファイル名を含む Data Links Manager サーバーの名前は、URL の形式で DATALINK 値としてエンコードされています。

URL は、次のような一般的形式をもったテキスト・ストリングです。

http://www.ibm.com/datalinks/datalinks.txt

DB2 は、データベースに保管されている SQL データ値に対して行うのとまったく同じ ように、DATALINK 値 (ファイル参照) を検査します。一組の既知の Data Links Manager サーバーを登録します。DATALINK 値で指定できる Data Links Manager のサ ーバー名は、DB2 データベースに登録されているものに限られます。Data Links は URL 構文を使用してファイルを参照しますが、このことは、Data Links Manager サー バーが自動的に Web サーバーとして機能することを意味するわけではありません。

DCE-DFS 環境では、Data Links Manager はセル全体に登録されます。リンクされたファイルは、"dfs" の構造をもった URL やファイルの DFS<sup>™</sup> パス名の形式で参照されます。

DATALINK 値はデータベース・システムの外部に保管されたオブジェクトを表します が、SQL 照会を使用して、照会結果に対応するファイル名を取得するために、パラメト リック・データを検索できます。DATALINK 値と一緒に、ビデオ、画像、テキスト、 その他のメディア・フォーマットを含むファイルに関する索引などの属性を、表に保管 できます。ファイル・サーバー上のファイルやデータベース内の DATALINK データ・ タイプの中央リポジトリーを使用して、それらの内容の一覧表を入手して、必要な情報 を得るための戦略を考案できます。 アプリケーション設計者は Data Links を使用して、既存のオペレーティング・システム・ファイルに対する参照を、DB2 表の列に保持できます。この参照は、URL 構文を 使用した DATALINK データ・タイプを使用して保管されます。この表のその他の列に は、通常、リンクされたファイルに関するメタ・データが保持されます。

アプリケーション・プログラマーは、普通、この表の行にファイルに関するメタ・デー タを挿入し、DATALINK 列にそのファイルの参照 (URL 構文) を挿入します。次に、 アプリケーションは、通常、メタ・データ列上のこの表に対して SQL 照会を使用して 目的のファイルを探し、DATALINK 列でファイル参照を検索してから、その URL を 使用して、ファイル・システムのネイティブ API やブラウザーでファイルに直接アク セスします。

リンクされたファイルを更新したり、削除するには、アプリケーションは、まず、ファ イルの参照が行われる DB2 UDB 表からファイルのリンクを解除する必要があります。 ただし、部分更新の方法によってファイルの更新を実行する場合は、リンク解除は行わ ないでください。リンク解除 / 更新 / 再リンク、部分更新、または置換など、さまざま な方式を使用して、リンクされたファイルを更新できます。

リンクされたファイルを更新したり、削除するには、ファイルのリンク解除を必要とす る方法を使用してファイルをリンクした場合、アプリケーションは、まず、DB2 UDB 表からファイルのリンクを解除しなければ、その操作を進めることができません。1 つ の DB2 UDB 表に対して、複数の DATALINK 列を定義できます。

Data Links Manager は、あたかも論理的にデータベース内にあるように、ファイル・シ ステム内の情報を扱うため、既存アプリケーションをまったく変更する必要はありませ ん。DB2 UDB のオブジェクト・リレーショナル機能を使用すると、アプリケーション 設計者は、BLOB 内に保管されているファイルか、DATALINK 列の参照として保管さ れているファイルか、DATALINK タイプにマッピングされる特殊タイプである UDT の参照として保管されているファイルを処理する UDF を作成できます。

ファイルが BLOB 内に保管されており、現在、既存アプリケーションで使用されてい るときは、次のような場合に BLOB とネイティブ・ファイル情報の間で同期問題が発 生する可能性があります。BLOB が外部ファイルとして具体化されているときに、デー タベース外部の 異なるユーザーが同時に BLOB を更新する場合、およびファイル操作 だけを行うアプリケーションが更新する場合です。オブジェクトが、単一のデータベー ス作業単位の一部としてではなく、データベースの外部で更新される場合は、常に、あ る更新と別の更新がオーバーレイする可能性があります。 Data Links に内蔵されてい るいくつかのシリアライゼーション手法 (たとえば、部分更新機能を使用するなど)を 使用すると、この問題を回避することができます。

したがって、BLOB と DATALINK タイプは両方とも、データベースを使用したファイ ル処理をサポートしていますが、それらは異なったアプリケーション要件に対処してい るため、実際は相互補完的な役割を果たしています。DB2 UDB は、アプリケーション に関するお客様の要求にもっとも役に立つこれら 2 つの選択肢を、お客様に提供しているという点で、業界の中でも特別な製品といえます。

Data Links Manager は、分散コンピューティング環境をサポートするために設計されており、次のような機能をもっています。

- DB2 UDB 表の DATALINK 列で、AIX<sup>®</sup> や Windows<sup>®</sup> 2000 などの異なるオペレー ティング・システムに関連した、1 つ以上のファイル・システム・サーバー上に分散 した 1 つ以上のファイル・システムを参照できます。
- 1 つの Data Links Manager を、1 つ以上の DB2 UDB データベースの DATALINK 列に関連付けることができます。
- DATALINK 列を使用して、Transarc の分散ファイル・システム DCE-DFS にあるフ ァイルを参照できます。
- リンクされたファイルの単一方向の複製と双方向の複製が、原子的、自動的、および 一貫性のある方法で、DB2 DataPropagator による DB2 UDB のデータベース複製機 能と一緒にサポートされています。

#### 関連概念:

- 4 ページの『DB2 Data Links Manager』
- 9 ページの『ファイル・システムの枠組み』
- 11 ページの『DB2 Data Links Manager およびご使用のアプリケーション』
- 115 ページの『更新方法の概要』

#### 関連資料:

• 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

#### DB2 Data Links Manager の典型的セットアップ

16 ページの図1 は、AIX、NTFS、JFS、UFS 環境上の FSM での、DB2<sup>®</sup> サーバー、 DB2 Data Links Manager コンポーネント、バックアップ・メディア、およびリモー ト・クライアント・アプリケーション間の対話の概要を示しています。



# \*シングル・パーティション・データベース・システム \*\*Windows 上の NTFS、AIX 上の JFS または Solaris 上の UFS

図 1. Data Links Manager の処理の概要 (AIX 上の FSM、NTFS、JFS、または UFS の環境)

この例では、クライアント・アプリケーションは、DATALINK データ・タイプをもっ たデータベースに接続し、このデータベースから DATALINK 値を選択してから、デー タ・ファイルを次のように更新します。

- 1. クライアント・アプリケーションは、**CONNECT** ステートメントを出して、DB2 サ ーバー上のデータベースに接続する。
- 2. 次に、このアプリケーションは、DATALINK 列を含む SELECT ステートメントを 出す。たとえば、次のようにします。

select dlurlpath(dl1) into :var\_dl1 from EMPLOYEE

- 3. 次に、このアプリケーションは、Windows<sup>®</sup>上の共有ドライブか、AIX<sup>®</sup>または Solaris オペレーティング環境上の NFS マウントを介して、:var\_dll ファイルを new\_version ファイルにコピーする。
- 次に、このアプリケーションは、new\_version ファイルを編集する。データベースの 変更を保管するために、このアプリケーションは、UPDATE ステートメントを出し ます。たとえば、次のようにします。

update EMPLOYEE set dl1=dlvalue(:new\_version)
commit

次の図は、AIX 上の DCE-DFS 環境での Data Links Manager のインプリメンテーショ ンを示しています。図の番号は、前のステップに対応しています。



図 2. Data Links Manager の処理の概要 (DCE-DFS 環境)

## 関連概念:

- ・ 4 ページの『DB2 Data Links Manager』
- 5 ページの『DB2 Data Links の環境』

# 第2部管理ガイドおよびリファレンス

第 2 章 システム管理オプション	21
Data Links サーバー・ファイルのバックアッ	
プ	21
Data Links サーバー・ファイルのバックアッ	
プ:詳細	22
バックアップ・ストレージのロケーション	22
サイズに関する考慮事項.......	23
Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サー	
バーとしての使用 (AIX)	24
Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サー	
バーとしての使用 (Solaris オペレーティン	
グ環境)	26
Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サー	
バーとしての使用 (Windows)	28
アーカイブ域でのローカル・ディレクトリ	
ーの使用	30
XBSA 準拠のストレージ・マネージャーの	
使用	31
ユーザーに対するアクションの実行の許可	33
基本的な DLFM 構成作業	37
基本的な DLFM 構成作業: 詳細	39
Data Links サーバーにおける追加のデー	
タ・リンク・ファイル・システムの作成	39
Data Links サーバー上に追加の Data Links	
File System を作成する	41
リンク・ファイルを含む DLFS パスの	
識別	41
新規 UNIX ファイル・システムの作成	
(オプショナル)	42
ファイル・システム共有の使用可能化	
(AIX、Solaris オペレーティング環境) .	43
ファイル・システム共有の使用可能化	
(Windows)	44
データ・リンク・ファイル・システム・	
フィルターの活動化	45
テータ・リンク・ファイル・システムの変	
	46
Data Links File System のサイスの変更: 作	
業 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	46
ファイル・ンステム・サイスの変更	47

Data Links サーバー上の DLFM への DB2	
データベースの追加	49
DB2 ホストの特定の DB2 データベースへ	
の DLFM の追加	51
DB2 ホストの特定の DB2 データベースか	
らの Data Links Manager のドロップ	54
Data Links Manager レプリケーション・デ	
ーモンの使用可能化	55
構成のチューニング	57
構成のチューニング:詳細	57
システム・クロックの同期化	57
DLFM_DB に対する十分な DB2 ログ・ス	
ペースの確保	58
コピー・プロセス数の設定	59
第 3 章 データ・リンク・ファイル・マネー	

ジャーでの作業...............	61
基本操作:DLFM の始動、停止、再始動	61
異常終了後の DLFM の再始動	62
DLFM バックグラウンド・プロセスのモニタ	
ー (AIX、Solaris オペレーティング環境)	63
DLFM バックグラウンド・プロセスのモニタ	
— (Windows).	64
ファイル・システムの使用可能化と DLFM へ	
の登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境).	65
DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレ	
ーティング・システム)	67
登録済みファイル・システムのリスト表示	
(AIX、Solaris オペレーティング環境)	68
登録済みドライブのリスト表示 (Windows オ	
ペレーティング・システム)	69
DLFF のロード、照会、アンロード (AIX)	69
DLFF のロード、照会、アンロード (Solaris	
オペレーティング環境)	70
DLFF の登録、照会、登録解除 (Windows オ	
ペレーティング・システム)	71
DLFF コントロールのファイル・システム・サ	
イズを増加する (AIX、Solaris オペレーティン	
グ環境)	72
データ・リンク・サーバーへの DB2 Universal	
Databases の登録	73

データ・リンク・サーバーに登録済みのデー
タベースのリスト表示
Data Links Manager からの DB2 データベー
ス情報の除去
エラー・メッセージ・ログ・ファイルの診断
レベルの変更
データ・リンク・ファイル・システム・フィ
ルター (DLFF) 処理のロギングの変更 (AIX) . 77
DLFF ドライバーをロードした後のメッセージ
のロギング (AIX)
データ・リンク・ファイル・システム・フィ
ルター (DLFF) 処理のロギングの最小化
(Solaris オペレーティング環境) 80
データ・リンク・ファイル・システム・フィ
ルター (DLFF) 処理のロギングの変更
(Windows オペレーティング・システム) 80
DLFF 使用可能ファイル・システムの異なるハ
ード・ディスクへの移行 — 概要81
異なるハード・ディスクへの DLFS の移動:
詳細
DLFS の異なるハード・ディスクへの移行
(AIX)
DLFS の異なるハード・ディスクへの移行
(Solaris オペレーティング環境) 86
DLFS の異なるドライブへの移行
(Windows)
COPY の代わりに SCOPY を使用する93
SCOPY と COPY の比較 93
アーカイブ・サーバー・バックアップ・ファ
イル情報の検索
第 4 章 セキュリティー
Data Links Manager のセキュリティーの概要 97
組み込みセキュリティーの機能 97
データ・アクセス・セキュリティー機能98
データ・アクセス・セキュリティー機能 : 詳
細
リンクされたファイルの基本セキュリティ
一管理
高度なファイル管理セキュリティー機能 101
高度なファイル管理セキュリティー機能 :
詳細
ファイル管理の高度なセキュリティ
ー・ルールおよびガイドライン 103
読み取り操作のセキュリティー 107
書き込み操作のセキュリティー 108

更新中のリンクされたファイルの保護:

- - のセキュリティー問題 . . . . . 110

# 第2章 システム管理オプション

この章では、いろいろな Data Links Manager システム管理オプションと、それらの管理および構成方法を説明しています。

# Data Links サーバー・ファイルのバックアップ

- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) は、Data Links サーバーにおい て、以下の項目を自動的にバックアップします。
- データ・リンク・ファイル・マネージャー自体のデータベースである DLFM\_DB。
   このバックアップは、表スペースのバックアップまたはデータベース全体のバックアップのいずれかです。

表スペースのバックアップは、特定の DLFM\_DB 表が変更された場合 (たとえば、 Data Links サーバーで dlfm add\_prefix または dlfm add\_db コマンドが使用され た場合) に起動されます。データベース全体のバックアップは、DLFM\_DB の作成や DLFM\_DB の移行などの重要なイベントの間に起動されます。

ファイル更新操作中に DATALINK 列に RECOVERY YES と定義されているすべての表に関連したリンク・ファイル。

関連した DB2<sup>®</sup> ホストが、リンク・ファイルのバックアップ・アクティビティーと ホストのバックアップ・アクティビティーを必要に応じて自動的に調整します。

DLFM が Data Links サーバー・データのバックアップを開始する場合、バックアップ のプロセスはアーカイブ と呼ばれます。バックアップされたデータが保管されるロケー ションは、アーカイブ域 と呼ばれます。アーカイブ域は、ローカル・ディスク上でも、 アーカイブ・サーバー 上でもかまいません。

特定の Data Links サーバーに関するアーカイブ・ファイルのリストおよびリスト上の 各ファイルの状況を検索する場合は、dlfm retrieve コマンドを使用します。

Data Links Manager のインストールのデフォルトを受け入れている場合、アーカイブ域 は、ローカル・ディスク上の Data Links Manager 管理者アカウントのホーム・ディレ クトリーになります。アーカイブ域構成の特性 (ディレクトリーのロケーションやスト レージ・メディアなど) は、必要に応じて変更できます。ローカル・ディスク、Tivoli<sup>®</sup> Storage Manager のアーカイブ・サーバー、または XBSA 準拠のアーカイブ・サーバー (たとえば、Legato NetWorker) を使用することができます。

また、Data Links サーバーでアクティブにするコピー・プロセスの数をカスタマイズす ることもできます。コピー・プロセスの数は、ファイルをアーカイブ域にコピーする際 の速度に影響します。

#### 関連概念:

- 22 ページの『バックアップ・ストレージのロケーション』
- 23 ページの『サイズに関する考慮事項』
- 31 ページの『XBSA 準拠のストレージ・マネージャーの使用』

#### 関連作業:

- 24 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (AIX)』
- 26 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Solaris オペレーティング環境)』
- 28 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Windows)』
- 30 ページの『アーカイブ域でのローカル・ディレクトリーの使用』
- 59 ページの『コピー・プロセス数の設定』
- 94 ページの『アーカイブ・サーバー・バックアップ・ファイル情報の検索』

#### 関連資料:

210 ページの『dlfm retrieve コマンド』

## Data Links サーバー・ファイルのバックアップ: 詳細

以下のセクションでは、Data Links サーバー・ファイルのバックアップ方式の計画と設 定方法について詳細に説明しています。

## バックアップ・ストレージのロケーション

Data Links サーバーのアーカイブ域は、以下のいずれの場所でもかまいません。

- ローカル・ディスク上のディレクトリー (インストール時のデフォルトは、Data Links Manager 管理者アカウントのホーム・ディレクトリーです)。
- Tivoli<sup>®</sup> Storage Manager のアーカイブ・サーバー。
- XBSA クライアント API を使用しているアーカイブ・サーバー。

利点およびトレードオフは、潜在的なアーカイブ域のロケーションに関連します。たと えば、ローカル・ディスク上のディレクトリーの場合、管理の労力は少なくて済みます が、ストレージ・スペースの量に制限がある場合があります。別のアーカイブ・サーバ ーを使用する場合には、サーバーの構成およびそのサイズを管理するためのプログラム が別途必要になり、余分な管理労力が必要になります。しかし、ローカル・ディスクよ りも記憶容量が大きいこと、また、ファイル・ストレージの移行を自動的に行う機能が あることなどは、余分な管理労力が必要であることを十分に補う利点です。IBM Tivoli Storage Manager や、Legato NetWorker のような他社の XBSA 準拠プログラムなどのス トレージ・マネージャー・アプリケーションをすでにご使用になっている場合には、さ らに必要な管理労力を最小限に抑えることができます。
組織の必要性に基づいたアーカイブ域のロケーションを選択する必要があります。

# サイズに関する考慮事項

アーカイブ域を構成する際には、組織の必要性に応じて、領域のサイズを十分なものに するか、または十分に拡張できるようにしなければなりません。Data Links Manager の インストール時のデフォルトを受け入れた場合、アーカイブ域は、ローカル・ディスク 上の Data Links Manager 管理者アカウントのホーム・ディレクトリーになります。

アーカイブ域のサイズに影響を及ぼす可能性があるのは、次の項目です。

 DATALINK 列に RECOVERY YES と定義されている各表は、関連したリンク・ファ イルのバックアップを起動します。リンク・ファイルが更新されるたびに、別のバッ クアップが行われます。

**要件:** 保管場所には、少なくとも、DATALINK 列に RECOVERY YES 属性が定義されている特定のデータベースに関して、リンクされるすべてのファイルと同じ量のスペースが必要です。

 複数の DB2<sup>®</sup> データベースが、リンク・ファイルを同じ Data Links サーバー上に保 管することができます。

保管場所には、特定の Data Links サーバーにファイルを保管しているすべてのデー タベースに関するすべてのバックアップを収容するのに十分なスペースがなければな りません。

 特定の DB2 ホスト・データベース構成パラメーターの値が、アーカイブ域に必要な ストレージ・スペースに影響を及ぼします。表1 に、これらのデータベース構成パラ メーターをリストします。

**重要:** 1 つのデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が複数の DB2 デー タベースのファイルを管理する場合は、これらの各パラメーターの値が各データベー スごとに異なる可能性があります。

表 1. Data Links Manager のアーカイブ域に影響を与えるデータベース構成パラメーター

パラメーター	説明	デフォルト値 [範囲]	コメント
num_db_backups	保存する最新のデ ータベース・バッ クアップの数。	12 [0~32,768]	指定された値に達する と、最も古いバックアッ プがアーカイブ域から削 除される。
dl_num_copies	ファイルがリンク されている場合 に、アーカイブ域 に作成される追加 コピーの数。	0 [0~15]	推奨:同じファイルの複数コピーに必要以上のスペースが不要になるように、デフォルト値である ゼロ (0)を使用してください。

表 1. Data	Links .	Manager	のアーカ1	ブ垣	<b>ばに影響</b>	を与え	るデー	タベー	ス構成ノ	パラメー	ータ
ー (続き)											

パラメーター	説明	デフォルト値 [範囲]	コメント
dl_time_drop	DROP	1 [0~365]	値がゼロ (0) の場合、フ
	<b>DATABASE</b> コマ		ァイルは、DROP
	ンドが実行されて		DATABASE コマンドの
	から、ファイルが		実行後、即時にアーカイ
	アーカイブ域に保		ブ・サーバーから削除さ
	存される日数。		れる。

# 関連資料:

- *管理ガイド:* パフォーマンスの『Data Links Number of Copies configuration parameter - dl\_num\_copies』
- *管理ガイド: パフォーマンスの*『Data Links Time After Drop configuration parameter - dl\_time\_drop』
- コマンド・リファレンスの『UPDATE DATABASE MANAGER CONFIGURATION コマンド』
- 管理ガイド: パフォーマンスの『Number of Database Backups configuration parameter
   num\_db\_backups』
- ・ 管理ガイド: パフォーマンスの『構成パラメーターの要約』

# Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (AIX)

Tivoli Storage Manager (TSM) を使用して、Data Links サーバー上にあるファイルをバックアップすることができます。

# 前提条件:

使用する Data Links サーバー・マシンにおいて、Data Links Manager の管理者権限お よび root 権限の両方を持っている必要があります。

#### 手順:

Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用するには、次のようにします。

- 1. Tivoli Storage Manager クライアントを Data Links サーバー・マシンにインストー ルします。詳しくは、Tivoli Storage Manager 製品の資料を参照してください。
- Data Links サーバー・クライアント・アプリケーションを Tivoli Storage Manager サーバーに登録します。詳しくは、Tivoli Storage Manager 製品の資料を参照してく ださい。

次の環境変数を Data Links Manager 管理者の db2profile または db2cshrc スクリプト・ファイルに追加します。

```
(for Bash, Bourne, or Korn shell)
export DSMI_DIR=/usr/tivoli/tsm/client/api/bin
export DSMI_CONFIG=$HOME/tsm/dsm.opt
export DSMI_LOG=$HOME/dldump
export PATH=$PATH:$DSMI_DIR
```

(for C shell)
setenv DSMI\_DIR /usr/tivoli/tsm/client/api/bin
setenv DSMI\_CONFIG \${HOME}/tsm/dsm.opt
setenv DSMI\_LOG \${HOME}/dldump
setenv PATH=\${PATH}:\$DSMI\_DIR

- 4. dsm.sys TSM システム・オプション・ファイルが \$DSMI\_DIR ディレクトリーにあ ることを確認します。
- 5. dsm.opt TSM ユーザー・オプション・ファイルが *INSTHOME*/tsm ディレクトリー にあることを確認します。ここで、*INSTHOME* は、Data Links Manager 管理者の ホーム・ディレクトリーです。
- Tivoli Storage Manager システム・オプション・ファイル /usr/tivoli/tsm/client/api/bin/dsm.sys の PASSWORDACCESS オプションを generate に設定します。
- Tivoli Storage Manager をバックアップ・ターゲットとして使用しているデータ・リ ンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を開始する前に、TSM パスワードを generate オプションに登録します。こうすることによって、DLFM が TSM サー バーへの接続を開始する際に、パスワードを指定する必要がなくなります。詳しく は、TSM 製品の資料を参照してください。
- 8. Data Links Manager 管理者として Data Links サーバーにログオンします。
- db2set コマンドを使用して、DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数を TSM に設定します。この場合、DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値は無 視されます。DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数を TSM に変更すると、 Tivoli Storage Manager のバックアップ・オプションがアクティブになります。
  - 注:
  - a. 次の理由により、アクティブな Data Links サーバーの DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数の設定を変更しないでください。
    - 以前にアーカイブしたファイルは、新しく指定されたアーカイブ・ロケーションに移動されません。たとえば、DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー値をTSM に設定して DLFM を開始し、レジストリー値をディスク・ロケーションに変更すると、新しくアーカイブされたすべてのファイルはディスク上の新しいロケーションに保管されます。以前に TSM にアーカイブされたファイルは、新しいディスク・ロケーションに移動されません。

- 以前にアーカイブされたファイルを使用して、フル・リカバリーあるいは調整 操作を行うことができません。RESTORE ユーティリティーはフル・リカバリ ーを実行できません。また、RECONCILE ユーティリティーは多数の例外を 示します。
- b. デフォルトの TSM 管理クラスを DLFM\_TSM\_MGMTCLASS レジストリー変 数でオーバーライドすることができます。このレジストリー変数が設定されてい ない場合には、デフォルトの TSM 管理クラスが使用されます。
- 10. dlfm restart コマンドを呼び出して、DLFM を再始動します。

## 関連作業:

- 26 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Solaris オペレーティング環境)』
- 28 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Windows)』
- 30 ページの『アーカイブ域でのローカル・ディレクトリーの使用』

## 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『db2set DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』
- データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンスの『Tivoli Storage Manager』
- 管理ガイド: パフォーマンスの『データ・リンク変数』

# Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Solaris オペレーティング環境)

Tivoli Storage Manager (TSM) を使用して、Data Links サーバー上にあるファイルをバックアップすることができます。

# 前提条件:

使用する Data Links サーバー・マシンにおいて、Data Links Manager の管理者権限お よび root 権限の両方を持っている必要があります。

# 手順:

Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用するには、次のようにします。

- 1. Tivoli Storage Manager クライアントを Data Links サーバー・マシンにインストー ルします。詳しくは、Tivoli Storage Manager 製品の資料を参照してください。
- Data Links サーバー・クライアント・アプリケーションを Tivoli Storage Manager サーバーに登録します。詳しくは、ご使用になっている Tivoli Storage Manager 製品の資料を参照してください。

次の環境変数を Data Links Manager 管理者の db2profile または db2cshrc スクリプト・ファイルに追加します。

```
(for Bash, Bourne, or Korn shell)
export DSMI_DIR=/opt/tivoli/tsm/client/api/bin
export DSMI_CONFIG=$HOME/tsm/dsm.opt
export DSMI_LOG=$HOME/dldump
export PATH=$PATH:/opt/tivoli/tsm/client/api/bin
```

(for C shell)
setenv DSMI\_DIR /opt/tivoli/tsm/client/api/bin
setenv DSMI\_CONFIG \${HOME}/tsm/dsm.opt
setenv DSMI\_LOG \${HOME}/dldump
setenv PATH=\${PATH}:/opt/tivoli/tsm/client/api/bin

- 4. dsm.sys TSM システム・オプション・ファイルが /opt/tivoli/tsm/client/api/bin ディレ クトリーにあることを確認します。
- 5. dsm.opt TSM ユーザー・オプション・ファイルが *INSTHOME*/tsm ディレクトリー にあることを確認します。ここで、*INSTHOME* は、Data Links Manager 管理者の ホーム・ディレクトリーです。
- Tivoli Storage Manager システム・オプション・ファイル /opt/tivoli/tsm/client/api/bin/dsm.sys の PASSWORDACCESS オプションを generate に設定します。
- Tivoli Storage Manager をバックアップ・ターゲットとして使用しているデータ・リ ンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を開始する前に、TSM パスワードを generate オプションに登録します。こうすることによって、DLFM が TSM サー バーへの接続を開始する際に、パスワードを指定する必要がなくなります。詳しく は、TSM 製品の資料を参照してください。
- 8. Data Links Manager 管理者として Data Links サーバーにログオンします。
- db2set コマンドを使用して、DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数を TSM に設定します。この場合、DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値は無 視されます。DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数を TSM に変更すると、 Tivoli Storage Manager のバックアップ・オプションがアクティブになります。
  - 注:
  - a. 次の理由により、アクティブな Data Links サーバーの DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数の設定を変更しないでください。
    - 以前にアーカイブしたファイルは、新しく指定されたアーカイブ・ロケーションに移動されません。たとえば、DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー値をTSM に設定して DLFM を開始し、レジストリー値をディスク・ロケーションに変更すると、新しくアーカイブされたすべてのファイルはディスク上の新しいロケーションに保管されます。以前に TSM にアーカイブされたファイルは、新しいディスク・ロケーションに移動されません。

- 以前にアーカイブされたファイルを使用して、フル・リカバリーあるいは調整 操作を行うことができません。RESTORE ユーティリティーはフル・リカバリ ーを実行できません。また、RECONCILE ユーティリティーは多数の例外を 示します。
- b. デフォルトの TSM 管理クラスを DLFM\_TSM\_MGMTCLASS レジストリー変 数でオーバーライドすることができます。このレジストリー変数が設定されてい ない場合には、デフォルトの TSM 管理クラスが使用されます。
- 10. dlfm restart コマンドを呼び出して、DLFM を再始動します。

## 関連作業:

- 24 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (AIX)』
- 28 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Windows)』
- 30 ページの『アーカイブ域でのローカル・ディレクトリーの使用』

# 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『db2set DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』
- データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンスの『Tivoli Storage Manager』
- 管理ガイド: パフォーマンスの『データ・リンク変数』

# Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Windows)

Tivoli Storage Manager (TSM) を使用して、Data Links サーバー上にあるファイルをバックアップすることができます。

## 前提条件:

使用する Data Links サーバー・マシンにおいて、Data Links Manager の管理者権限お よび Windows システムの管理者権限の両方を持っている必要があります。

# 手順:

Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用するには、次のようにします。

- 1. Tivoli Storage Manager クライアントを Data Links サーバー・マシンにインストー ルします。詳しくは、Tivoli Storage Manager 製品の資料を参照してください。
- Data Links サーバー・クライアント・アプリケーションを Tivoli Storage Manager サーバーに登録します。詳しくは、Tivoli Storage Manager 製品の資料を参照してく ださい。
- 3. Data Links Manager 管理者として Data Links サーバーにログオンします。

「開始」をクリックして、「設定」 --> 「コントロール パネル」 --> 「システム」を選択します。「システムのプロパティー」ウィンドウがオープンします。
 「環境変数」にナビゲートして、次のシステム環境変数および対応する値を入力します。

変数	値
DSMI_DIR	c:¥tsm¥baclient
DSMI_CONFIG	c:¥tsm¥baclient¥dsm.opt
DSMI_LOG	c:¥tsm¥dldump

- 5. dsm.sys TSM システム・オプション・ファイルが c:¥tsm¥baclient ディレクトリー にあることを確認します。
- 6. dsm.opt TSM ユーザー・オプション・ファイルが c:¥tsm¥baclient ディレクトリー にあることを確認します。
- c:¥tsm¥baclient¥dsm.sys Tivoli Storage Manager システム・オプション・ファイルの PASSWORDACCESS オプションを generate に設定します。
- Tivoli Storage Manager をバックアップ・ターゲットとして使用しているデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を開始する前に、TSM パスワードを generate オプションに登録します。こうすることによって、データ・リンク・ファ イル・マネージャーが TSM サーバーへの接続を開始する際に、パスワードを指定 する必要がなくなります。詳しくは、TSM 製品の資料を参照してください。
- 9. 次のコマンドを使用して、DLFM\_BACKUP\_TARGET 環境変数を TSM に設定しま す。

db2set -g DLFM\_BACKUP\_TARGET=TSM

この場合、DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME 環境変数の値は無視されます。 DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数を TSM に変更すると、Tivoli Storage Manager のバックアップ・オプションがアクティブになります。

# 注:

a. 次の理由により、アクティブな Data Links サーバーの

DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数の設定を変更しないでください。

- 以前にアーカイブしたファイルは、新しく指定されたアーカイブ・ロケーションに移動されません。たとえば、DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー値をTSM に設定して DLFM を開始し、レジストリー値をディスク・ロケーションに変更すると、新しくアーカイブされたすべてのファイルはディスク上の新しいロケーションに保管されます。以前に TSM にアーカイブされたファイルは、新しいディスク・ロケーションに移動されません。
- 以前にアーカイブされたファイルを使用して、フル・リカバリーあるいは調整 操作を行うことができません。RESTORE ユーティリティーはフル・リカバリ ーを実行できません。また、RECONCILE ユーティリティーは多数の例外を 示します。

- b. デフォルトの TSM 管理クラスを DLFM\_TSM\_MGMTCLASS レジストリー変 数でオーバーライドすることができます。このレジストリー変数が設定されてい ない場合には、デフォルトの TSM 管理クラスが使用されます。
- 10. dlfm restart コマンドを呼び出して、DLFM を再始動します。

# 関連作業:

- 24 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (AIX)』
- 26 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Solaris オペレーティング環境)』
- 30 ページの『アーカイブ域でのローカル・ディレクトリーの使用』

# 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『db2set DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』
- データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンスの『Tivoli Storage Manager』
- ・ 管理ガイド: パフォーマンスの『データ・リンク変数』

# アーカイブ域でのローカル・ディレクトリーの使用

この手順を使用して、ローカル・ディスク上のアーカイブ域のバックアップ・ディレク トリー・ロケーションを変更します。

#### 前提条件:

- Data Links サーバーが、アーカイブ域としてローカル・ディスクを使用するように、 構成済みでなければなりません。
- 使用したい新規ディレクトリーが存在していなければなりません。
- 使用したい新規ディレクトリーに必要なスペースがなければなりません。アーカイブ 域のスペース要件について詳しくは、このトピックの最後にあるリンク先を参照して ください。
- DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。
- UNIX システムのみ: NFS がマウントされているディレクトリーを使用するには、そのファイル・サーバーにおいて root 権限を持つユーザー名が、マウントされているディレクトリーに対する読み取りおよび書き込みアクセス権限を持っていることを確認する必要があります。また、DB2 Data Links Manager 管理者のユーザー名が、このディレクトリーが NFS マウントおよびエクスポートされたマシンになければなりません。

# 制約事項:

データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) を使用しているファイル・ システム上にあるディレクトリーを使用することはできません。

#### 手順:

Data Links サーバー・アーカイブ域のディレクトリー・ロケーションを変更するには、 次のようにします。

- 1. ディレクトリー・ロケーションを変更したい、特定の Data Links サーバー・マシン にログオンします。
- 2. dlfm stop コマンドで、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を停止 します。
- 現行のバックアップ・ディレクトリーの内容全体を、オリジナルのファイル名、ディレクトリー名、タイム・スタンプ、ディレクトリー構造を保ったまま、新しいバックアップ・ディレクトリーにコピーします。

**重要:** この手順全体が正常に完了するまで、以前のバックアップ・ディレクトリーを 除去または削除することはできません。

4. db2set コマンドを使用して、レジストリー変数 DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME を使 用したいディレクトリーの絶対パスとして設定します。たとえば、次のようにしま す。

db2set DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME=/home/dlfm/dlfm\_backup\_dir

5. dlfm start コマンドを使用して、DLFM を再始動します。

# 関連概念:

• 21 ページの『Data Links サーバー・ファイルのバックアップ』

#### 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『db2set DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』
- 管理ガイド: パフォーマンスの『データ・リンク変数』

# XBSA 準拠のストレージ・マネージャーの使用

XBSA 準拠のストレージ・アプリケーションを使用して、Data Links サーバー上にある ファイルをバックアップすることができます。XBSA 準拠のストレージ・アプリケーシ ョンとは、バックアップおよびリストア操作に業界標準の XBSA API を使用している プログラムです。

# 前提条件:

使用する Data Links サーバー・マシンにおいて、Data Links Manager の管理者権限お よび スーパーユーザー権限の両方を持っている必要があります。

UNIX<sup>®</sup> システム: root 権限が必要です。

Windows: システム管理者アカウント (たとえば、dlmadmin アカウント) を使用する必要があります。

#### 手順:

XBSA 準拠のストレージ・アプリケーションをアーカイブ・サーバーとして使用するには、次のようにします。

- 1. XBSA クライアントを Data Links サーバーにインストールします。詳しくは、ご使 用になっている XBSA ベンダー製品の資料を参照してください。
- 2. Data Links サーバー・クライアント・アプリケーションを XBSA サーバーに登録し ます。詳しくは、ご使用になっている XBSA ベンダー・サーバーの資料を参照して ください。
- 3. 必要な環境変数を DB2<sup>®</sup> Data Links Manager 管理者アカウント構成に追加します。
  - UNIX システムの場合は、Data Links Manager 管理者アカウントの db2profile または db2cshrc スクリプト・ファイルに追加します。たとえば、Legato NetWorkerでは、次の変数が必要です。

(for bash,Bourne,or Korn shell)
export NSR\_SERVER=fully\_qualified\_server\_hostname

(for C shell)
setenv NSR SERVER=fully qualified server hostname

*fully\_qualified\_server\_hostname* は、Legato NetWorker サーバー・マシンの完 全修飾ホスト名です。

- Windows の場合は、Windows<sup>®</sup> システム・プロパティー環境変数を使用して、必要な環境変数を Data Links Manager 管理者アカウント構成に追加します。
  - a. 「開始」をクリックして、「設定」 --> 「コントロール パネル」 --> 「シ ステム」を選択します。「システムのプロパティー」ウィンドウがオープンし ます。
  - b. 「環境」タブを選択して、必要なシステム環境変数を入力します。

たとえば、Legato NetWorker では、NSR\_SERVER というシステム環境変数を Legato NetWorker サーバー・マシンの完全修飾ホスト名を使用して設定する必要 があります。

- 4. Data Links Manager 管理者として Data Links サーバーにログオンします。
- 5. **db2set** コマンドを使用して、DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数を XBSA に設定します。
- 6. db2set コマンドを使用して、DLFM\_BACKUP\_TARGET\_LIBRARY レジストリー変数をベンダーから提供されている完全修飾共用ライブラリーに設定します。UNIX システムの場合は、ライブラリー名が、使用されるライブラリー内の共有オブジェクトを指定する必要があります。共有オブジェクトの名前は、ベンダーから提供されている XBSA 準拠の共用ライブラリーから判別することができます。

次の例では、Legato NetWorker アプリケーションを使用する場合の変数の設定を示しています。共有オブジェクトの名前は bsashr10.0 です。

db2set DLFM\_BACKUP\_TARGET\_LIBRARY=/usr/lpp/Legato/libxdb2.a(bsashr10.o) //AIX db2set DLFM\_BACKUP\_TARGET\_LIBRARY=/opt/IBM/db2/v8.1/Legato/libxdb2.so(bsashr10.o) //Solaris db2set DLFM\_BACKUP\_TARGET\_LIBRARY=c:\Program Files\nsr\bin\libxbsa.dll //Windows

7. dlfm restart コマンドを使用して、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を再始動します。

#### 関連作業:

- 24 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (AIX)』
- 26 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Solaris オペレーティング環境)』
- 28 ページの『Tivoli Storage Manager のアーカイブ・サーバーとしての使用 (Windows)』
- 30 ページの『アーカイブ域でのローカル・ディレクトリーの使用』

# ユーザーに対するアクションの実行の許可

このトピックでは、Data Links Manager のユーザーが行う共通のアクションと、これら のアクションを実行するユーザーに割り当てる必要がある各アクションごとの許可をリ ストします。また、このトピックでは、許可の割り当てや許可レベルのカスタマイズ時 に考慮する必要があるその他の項目についてリストします。

共通の許可には、次のものがあります。

- 『ファイルのリンクに対する許可』
- 34ページの『リンク・ファイルの更新に対する許可』
- 35ページの『リンク・ファイルの複製に対する許可』

# ファイルのリンクに対する許可

Data Links Manager には、特定の Data Links サーバー上にあるファイルに対するリン クをユーザーに許可することができるように、カスタマイズ可能なセキュリティー機能 があります。このような操作をユーザーに明示的に許可しない限り、ユーザーはファイ ルのリンク操作を禁止されています。

ユーザーにファイルのリンク操作を許可するには、次のデータ・リンク・ファイル・マ ネージャー (DLFM) コマンドを使用します。

#### dlfm set link security

このコマンドは、Data Links サーバーのファイル・リンク・セキュリティー機 能を活動化 (および非活動化) します。ファイル・リンク・セキュリティー は、特定のユーザーに対するファイルのリンク特権の許可が有効になる前に、 活動化しなければなりません。

デフォルトでは、Data Links Manager をインストールすると、ファイル・リン ク・セキュリティーが オン になります。

# dlfm grant

このコマンドは、Data Links サーバー上に保管されているファイルにアクセス

するためのリンク特権を、特定の DB2<sup>®</sup> データベース・ユーザーに付与しま す。これらの特権を、特定のユーザー、ユーザー・グループ、または特定の DB2 データベースのすべてのユーザーに対して付与することができます。

インストール時にデフォルトによりファイル・リンク・セキュリティー管理機 能がオン (アクティブ) になっているため、リンク特権が明示的に付与される まで、いかなるユーザーも Data Links サーバー上のファイルにリンクするこ とはできません。そのため、Data Links Manager をインストールしたら、**dlfm grant** コマンドを使用して、ファイル・リンク特権をユーザーに明示的に付与 しなければなりません。

リンク特権を禁止する、またはファイル・リンク許可を除去するには、次のコマンドを 使用します。

#### dlfm deny

このコマンドは、ユーザーに対して、Data Links サーバー上に保管されている ファイルのリンクを禁止します。特定の Data Links サーバー・ディレクトリ ーにおいて、個々のユーザーまたはユーザー・グループに対して特権を取り消 すことができます。

# dlfm revoke

このコマンドは、dlfm grant または dlfm deny コマンドの効力を取り消しま す。

ファイルのリンクを許可されているユーザーのリストを表示するには、次の DLFM コ マンドを使用します。

#### dlfm list registered users

このコマンドは、特定の Data Links サーバー・ディレクトリーに対するリン ク特権を持っているユーザーをリストします。

#### dlfm list registered directories

このコマンドは、すべての Data Links サーバー・ディレクトリーと、特定の ユーザー、ユーザー・グループ、または特定の DB2 データベース、データベ ース・インスタンス、およびデータベース・サーバー・ノード上のすべてのユ ーザーのアクセス特権をリストします。

# リンク・ファイルの更新に対する許可

表の DATALINK 列に WRITE PERMISSION ADMIN 属性が定義されている場合に は、ユーザーに、Data Links サーバー上に保管されているリンク・ファイルの内容を変 更することを許可することができます。

ユーザーがリンク・ファイルを更新できるようにするには、dlfm grant コマンドを使 用します。このコマンドにより、書き込み (更新) 特権を付与することができるので、 指定されたユーザーは書き込みトークンを生成および獲得することができます。有効な 書き込みトークンを使用しないと、ユーザーはリンク・ファイルを更新できません。 適切な更新を行うリンク・ファイル更新アプローチを使用したい場合には、次の設定お よび許可を確認する必要があります。

- ユーザーが、リンク・ファイル参照が保管されている DB2 データベースに対するア クセス、および Data Links サーバー上のリンク・ファイルに対するアクセスおよび 更新を許可されていることを確認します。
- DB2 表の DATALINK 列に、正しい READ PERMISSION および RECOVERY 属性 設定が定義されていることを確認します。

更新特権を禁止する、またはこれらの許可を逆にするには、次のコマンドを使用しま す。

#### dlfm deny

このコマンドは、ユーザーに対して、Data Links サーバー上に保管されている リンク・ファイルの更新を禁止します。

# dlfm revoke

このコマンドは、dlfm grant または dlfm deny コマンドの効力を取り消しま す。

リンク・ファイルの更新を許可されているユーザーのリストを表示するには、次の DLFM コマンドを使用します。

# dlfm list registered users

このコマンドは、特定の Data Links サーバー・ディレクトリーに対する更新 特権を持っているユーザーをリストします。

# dlfm list registered directories

このコマンドは、すべての Data Links サーバー・ディレクトリーと、特定の ユーザー、ユーザー・グループ、または特定の DB2 データベース、データベ ース・インスタンス、およびデータベース・サーバー・ノード上のすべてのユ ーザーのアクセス特権をリストします。

# リンク・ファイルの複製に対する許可

Data Links Manager には、リンクされたデータを複製するためにリンク・ファイルにア クセスする必要がある DB2 レプリケーション・ユーザーをサポートするための許可コ マンドがあります。

**重要:** Data Links Manager のインストール・プロセスで、Data Links Manager レプリケ ーション・ファイル・コピー・デーモン (DLFM\_ASNCOPYD) を使用可能にするように 指示するプロンプトが表示されます。Data Links Manager をレプリケーションに使用す る計画がある場合は、インストール・プロセスで DLFM\_ASNCOPYD デーモンを使用 可能にしてください。必要であれば、インストール後にこのデーモンを使用可能にする こともできます。 DB2 レプリケーション・ユーザーに、データ・レプリケーションのためにリンク・ファ イルへのアクセスを許可するには、次の DLFM コマンドを使用します。

# dlfm grant replication read

このコマンドは、特定の Data Links サーバー・システム・ユーザーに、Data Links サーバー上の特定のディレクトリー内のすべてのリンク・ファイルを読 み取る権限を付与します。この権限を、特定のユーザー、ユーザー・グルー プ、または登録されているすべての Data Link サーバー・システム・ユーザー に対して付与することができます。

# dlfm grant replication write request

このコマンドは、特定の Data Link サーバー・システム・ユーザーに、 DLFM\_ASNCOPYD デーモンに対してファイル書き込み要求を発行する権限を 付与します。DLFM\_ASNCOPYD は、DB2 レプリケーションの一部である ASNDLCOPY 出口ルーチンと通信を行って、リンク・ファイルを複製します。

**重要:** このコマンドは、ファイルを作成および変更する権限は付与しません。 また、このコマンドは、ディレクトリーを作成する権限も付与しません。これ らすべての操作は、ユーザーのファイル・システム・アクセス許可により制御 されます。

レプリケーションのためにリンク・ファイルにアクセスする必要がなくなったユーザ ー・アカウントから読み取り特権または書き込み要求特権を取り消すには、dlfm revoke replication コマンドを使用します。このコマンドは、許可されたユーザーか ら、リンク・ファイルに対する読み取りアクセス権や DLFM\_ASNCOPYD デーモンに 対するファイル書き込み要求を発行する権限を取り消します。

Data Links サーバー・ユーザーが実行できる現行の読み取りおよび書き込み要求を表示 するには、dlfm list registered replication access control コマンドを使用します。 このコマンドは、特定のシステム・ユーザー、システム・グループ、またはすべての Data Links サーバー・ユーザーの DLFM\_ASNCOPYD デーモンに定義されている読み 取りおよび書き込み要求特権のリストを表示します。

#### 関連概念:

- 99 ページの『リンクされたファイルの基本セキュリティー管理』
- 101 ページの『高度なファイル管理セキュリティー機能』
- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

#### 関連作業:

- レプリケーションのガイドおよびリファレンスの『特殊なデータ・タイプのレプリケーション』
- 55 ページの『Data Links Manager レプリケーション・デーモンの使用可能化』
   関連資料:
- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 200 ページの『dlfm grant replication read コマンド』
- 201 ページの『dlfm grant replication write コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 204 ページの『dlfm list registered replication access control コマンド』
- 205 ページの『dlfm list registered users コマンド』
- 203 ページの『dlfm list registered directories コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』
- 213 ページの『dlfm revoke replication コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

# 基本的な DLFM 構成作業

データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) は、Data Links サーバーの主要コ ンポーネントの 1 つです。Data Links Manager システムの管理に含まれている大部分 の作業は、DLFM との対話を必要とします。

DLFM は、1 つまたは複数の DB2 データベースにリンクされている、Data Links サー バー上にあるすべてのファイルを追跡します。DLFM は、DATALINK 列を参照する SQL INSERT、SQL UPDATE、および SQL DELETE ステートメントの結果として発生 する link-file メッセージと unlink-file メッセージを受け取り、処理します。リンクされ たそれぞれのファイルごとに、DLFM は、ファイルが参照される SQL ステートメント で参照する、データベース・インスタンス、完全修飾表名、および列名を論理的に追跡 します。

DLFM は、これまでにリンクされているファイルが RECOVERY YES オプションが指 定されている表 DATALINK 列にリンクされている場合は、それらのファイルも追跡し ます。このオプションが指定されていると、DATALINK 列で指定されているすべての ファイルについて、DB2 でポイント・イン・タイムのロールフォワード・リカバリーを 行うことができます。

Data Links Manager の最初のインストール時に、単一の DLFM と単一の DB2 データ ベースと間の通信が使用可能になります。ただし、複数の DB2 データベースと複数の DLFM との間のリレーションシップは、Data Links Manager を使用してユーザーが確立 します。単一の DB2 データベースは、最大 16 の DLFM と通信できます。 **重要:** 複数の DB2 データベースと複数の DLFM との間のリレーションシップの数が多 くなるほど、管理が複雑になります。要件の範囲内で、できるだけ簡単なシステム構成 になるようにしてください。

次のいずれか、または両方を行うことによって、Data Links Manager システムをいつで も拡張する ことができます。

- Data Links サーバー・マシンを新規に追加する (この作業では、新規マシン上に Data Links Manager をインストールする必要があります)。
- 既存の Data Links サーバー・マシン上に追加のデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS) を作成する。

次のいずれか、またはすべての作業を行うことによって、既存のシステム構成をいつで も変更 することができます。

- 既存の Data Links サーバー上の DLFS のサイズを変更する
- DLFM を DB2 データベースに追加する
- DB2 データベースを DLFM に追加する
- Data Links Manager を DB2 データベースからドロップする
- Tivoli Space Manager を DLFS に追加する (AIX システムのみ)
- Data Links サーバーにおいて DB2 レプリケーションを使用可能にする

#### 関連概念:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Solaris オペレーティング環境)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Windows)』
- 54 ページの『DB2 ホストの特定の DB2 データベースからの Data Links Manager のドロップ』

#### 関連作業:

- 39 ページの『Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・シス テムの作成』
- 46 ページの『データ・リンク・ファイル・システムの変更』
- 51 ページの『DB2 ホストの特定の DB2 データベースへの DLFM の追加』
- 49 ページの『Data Links サーバー上の DLFM への DB2 データベースの追加』
- 55 ページの『Data Links Manager レプリケーション・デーモンの使用可能化』

# 基本的な DLFM 構成作業: 詳細

以下のセクションでは、次の事柄に関する詳細と手順について説明しています。

- 既存の Data Links サーバー上に追加の Data Links File System (DLFS) を作成する
- 既存の Data Links サーバーにある DLFS のサイズを変更する
- DLFM を DB2 データベースに追加する
- DB2 データベースを DLFM に追加する
- DB2 データベースから Data Links Manager をドロップする
- Data Links サーバー上で DB2 レプリケーションを使用可能にする

他の DLFM 関連作業については、61 ページの『第 3 章 データ・リンク・ファイル・ マネージャーでの作業』で説明しています。

# Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・システムの作 成

ここでは、Data Links サーバー上に新規 DLFS を作成する処理の概要を説明します。 手順内のほとんどのステップについて、詳細が記載されたリンク先がこの手順説明の最 後に示されていますので、参照してください。

# 前提条件:

使用する Data Links サーバー・マシンにおいて、Data Links Manager の管理者権限お よび スーパーユーザー権限の両方を持っている必要があります。

UNIX システム: システム root 権限が必要です。

Windows: システム管理者アカウント (たとえば、dlmadmin アカウント) を使用する必要があります。

#### 手順:

既存の Data Links サーバー・マシン上に新規 DLFS を作成するには、次のようにします。

- 1. リンク・ファイルが含まれる DLFS パスを識別します。
- 2. 新規ファイル・システムを作成します (オプショナル)。

データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF)の制御による競合が起 こらない限り、既存のファイル・システムを使用することができます。

Windows の場合には、Windows NT「ディスク アドミニストレータ」ツールか、 Windows 2000「ディスクの管理」を使用して、新規 NTFS パーティションを作成し ます。

3. 選択したファイル・システムを共有可能にします。

- データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) を活動化して、選択したファイル・システムを DLFS の下に置きます。
   この作業の一部として、dlfm add\_prefix コマンドを使用して、DLFM に DLFS パスを定義します。
- 5. DLFS に対するクライアント接続を使用可能にします。クライアント接続は、この手順の一部として使用可能にしても、後で使用可能にしてもかまいません。
  - UNIX システムの場合には、クライアントが mount コマンドを使用して、ローカル・ファイル・システムを開始します。mount コマンドのパラメーターは、mount コマンドに直接指定することも、クライアントの /etc/filesystems ファイル (AIX) または /etc/vfstab ファイル (Solaris オペレーティング環境) に指定することもできます。クライアントのファイルに指定した場合、クライアントは、マウントされるディレクトリーを指定するだけでマウントを実行することができ、マウント・パラメーターが該当するファイルから自動的に取り込まれます。

また、該当するクライアント・ファイルに、ブート時にファイル・システムが自動的にマウントされるように指定したり、マウントに関する NFS キャッシング特性を指定することもできます。自動マウントについて詳しくは、AIX または Solaris オペレーティング環境の資料を参照してください。

**AIX のみ**: SMIT admin ツールを使用すると、mount コマンドを容易に作成する ことができます。

- Windows の場合には、net use コマンド、または Windows エクスプローラの 「ネットワーク・ドライブの割り当て」機能を使用して、クライアントが共有ド ライブに対するアクセスを開始することができます。
- ユーザーが DLFS に関するアクションを実行することを許可します。
   ユーザー許可は、この手順の一部として使用可能にすることも、後で使用可能にする こともできます。

#### 関連概念:

• 33 ページの『ユーザーに対するアクションの実行の許可』

## 関連作業:

- 41 ページの『リンク・ファイルを含む DLFS パスの識別』
- 42 ページの『新規 UNIX ファイル・システムの作成 (オプショナル)』
- 45 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの活動化』
- 43 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (AIX、Solaris オペレーティング 環境)』
- 44 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (Windows)』

#### 関連資料:

37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# Data Links サーバー上に追加の Data Links File System を作成する

以下のセクションでは、Data Links サーバー上に新規の DLFS を作成するための手順 を詳細に説明しています。

# リンク・ファイルを含む DLFS パスの識別

リンク・ファイルを含むデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS) パスの識別 は、 既存の Data Links サーバーにおける新規 DLFS の作成のより大きな作業の一部です。

既存の Data Links サーバーに DLFS を追加する作業を始める前に、リンク・ファイル を保管するディレクトリーまたはディレクトリー・パスを決定する必要があります。保 管する必要があるデータの種類や、データ量が増えた際に古いデータをどのように編成 する必要があるかについて考慮してください。

リンク・ファイルの保管ディレクトリーを決定したら、そのロケーションに対応する接 頭部を Data Links サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) に 登録します。Data Links Manager では、接頭部は、リンク・ファイルが保管されている DLFS マウント・ポイント (UNIX システムの場合) またはドライブ共有名 (Windows の場合)の絶対パス です。絶対パスとは、オブジェクトの絶対パス名です。絶対パス名 は最上位レベルのディレクトリー、または「root」ディレクトリー (スラッシュ (/) 文字 または逆方向スラッシュ ()) 文字で示される) で始まります。

DLFS につき 1 つの接頭部しか指定できません。また、一度指定したら、変更すること はできません。ただし、接頭部のサブディレクトリーは、必要に応じていつでも作成す ることができます。既存の接頭部のサブディレクトリーを DLFF または DLFM に登録 または定義する必要はありません。

リンク・ファイルの DATALINK 列の URL 値がどのようになっているか調べてみることも、接頭部の値を決定する際に役立ちます。

**重要:**次の例および説明では、UNIX のファイル・パス命名規則を使用しています。ただし、ディレクトリーおよび接頭部の命名に関する考慮事項については、すべてのファイルおよびオペレーティング・システムに該当します。

#### 例:

従業員データベースに従業員の摘要を追加する場合を考えてみます。摘要ファイルを固 有の形式で保管したいとします。すでに mercury という名前の Data Links サーバー・ マシンを所有しています。摘要ファイルの 1 つに対する URL は、 http://mercury/resumes/jdoe1.doc のようになります。この場合、resumes はサーバ ー・ディレクトリーで、jdoe1.doc がリンクされる摘要ファイルです。

例で示されている接頭部ロケーションは、有効ですが、将来的な拡張が考慮されていないという点で実用的ではありません。将来、他のタイプのデータ(従業員の写真など) を追加する場合に、問題が発生する可能性があります。1 つの DLFS につき 1 つの接 頭部しか指定することができません。この制限を何とか切り抜けることはできるかもし れませんが、潜在的な解決策では、エンド・ユーザーやマシンの管理者などの他のシス テム・ユーザーを混乱させる可能性があります。たとえば、すべての従業員データをタ イプに関係無く、resumes ディレクトリーに保管することはできます。しかし、resume というディレクトリーで従業員の写真を探すユーザーはいないでしょう。次に考えられ る解決策として、resumes ディレクトリーに photos というサブディレクトリーを作成し たとします。しかし、ディレクトリー構造がおかしくなる (/resumes/photos/) だけで なく、このサブディレクトリーを探すユーザーもいないでしょう。

現在の必要性(従業員の摘要ファイルを保管する)と将来の必要性(この例の場合、従業 員の写真を保管する)の両方を満たすには、mercury に empdata という汎用ディレクト リーを作成した方がよいでしょう。DLFS 接頭部は /empdata になります。このディレ クトリー構造は、将来必要になった場合に、/empdata/resumes/ および /empdata/photos/ というパスを含むように、容易に拡張することができるでしょう。こ れらのパスを作成するために Data Links Manager で余分な管理作業を行う必要は決し て ありません — ファイル・システムにサブディレクトリーを作成するだけで済みま す。

汎用的な接頭部を作成および使用することにより、Data Links Manager における管理作 業を最小限にして、将来に渡って有効な方法で、ディレクトリー構造を拡張する柔軟性 が実現します。

#### 関連作業:

- 39 ページの『Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・シス テムの作成』
- 45 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの活動化』
- 43 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (AIX、Solaris オペレーティング 環境)』
- 44 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (Windows)』

#### 関連資料:

37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# 新規 UNIX ファイル・システムの作成 (オプショナル)

新規 UNIX ファイル・システムの作成 は、既存の Data Links サーバーにおける新規 DLFS の作成のより大きな作業の一部です。

この手順はオプションです。Data Links Filesystem Filter (DLFF) の制御による競合が起 こらない限り、既存の JFS (AIX) または UFS (Solaris オペレーティング環境) ファイ ル・システムを使用することができます。

# 前提条件:

root 権限を持つユーザー ID。

新規 JFS または UFS を作成するには、次のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてデータ・リンク・サーバーにログオンします。
- 2. 適切なコマンドを使用して、新規ファイル・システムを作成します。
  - AIX システムでは、smit manfs コマンドを使用して JFS を作成し、「Mount AUTOMATICALLY at system restart?」オプションを no に設定します。新しい JFS 作成の詳細については、AIX の製品資料または「MAN」ページを参照してく ださい。
  - Solaris オペレーティング環境では、newfs コマンドで UFS を作成します。
     newfs コマンドについて詳しくは、Solaris 製品の資料または「man」ページを参照してください。
- 3. ログアウトします。

#### 関連作業:

- 39 ページの『Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・シス テムの作成』
- 45 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの活動化』
- 43 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (AIX、Solaris オペレーティング 環境)』
- 44 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (Windows)』

#### 関連資料:

• 37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

ファイル・システム共有の使用可能化 (AIX、Solaris オペレーティング環境) ファイル・システム共有の使用可能化 は、既存の Data Links サーバーにおける新規 DLFS の作成のより大きな作業の一部です。

#### 前提条件:

root 権限を持つユーザー ID。

#### 手順:

UNIX ファイル・システムで共有を使用可能にするには、次のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてデータ・リンク・サーバーにログオンします。
- exportfs コマンドを使用して、クライアントによって共有可能 (読み取り可能) な DLFS に変換したいファイル・システムを定義します。

エクスポート・ファイル・システムを、特定のクライアント・マシンに対して、読み 取り専用、読み取り / 書き込み、または読み取り / 書き込み専用としてマークする ことができます。 さらに、別のシステム共有制御を指定したい場合もあります。exportfs コマンドの 詳細および使用方法については、AIX または Solaris オペレーティング環境のシステ ム資料を参照してください。

AIX のみ: SMIT を使用して、exportfs コマンドを生成することもできます。

# 関連作業:

- 39 ページの『Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・シス テムの作成』
- 41 ページの『リンク・ファイルを含む DLFS パスの識別』
- 42 ページの『新規 UNIX ファイル・システムの作成 (オプショナル)』
- 45 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの活動化』
- 44 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (Windows)』

#### 関連資料:

• 37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# ファイル・システム共有の使用可能化 (Windows)

ファイル・システム共有の使用可能化 は、既存の Data Links サーバーにおける新規 DLFS の作成のより大きな作業の一部です。

#### 前提条件:

システム管理者アカウント (たとえば、dlmadmin アカウント)。

# 手順:

Windows NTFS で共有を使用可能にするには、次のようにします。

- 1. Windows システム管理者として Data Links サーバーにログオンします。
- 「開始」をクリックして、「プログラム」 —> 「Windows エクスプローラ」を選 択します。
- 3. 共有したいドライブを右マウス・ボタンでクリックして、「共有」を選択します。
   DLFS によって制御したいドライブをすでに共有している場合には、ステップ 6 に 進みます。
- 4. 「共有する」を選択します。
- 5. 「新規共有」をクリックします。
- 6. 「共有名」フィールドにこのドライブの共有名を入力して、「**OK**」をクリックしま す。
- 7. 「許可」をクリックします。
- 8. 「**すべてのユーザー**」オプションを選択します。
- 9. 「**アクセスの種類**」をクリックして、「フルアクセス」を選択します。
- 10. 「**OK**」をクリックして、新規共有名を登録します。

#### 関連作業:

- 39 ページの『Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・シス テムの作成』
- 41 ページの『リンク・ファイルを含む DLFS パスの識別』
- 42 ページの『新規 UNIX ファイル・システムの作成 (オプショナル)』
- 45 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの活動化』
- 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

#### 関連資料:

37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの活動化

データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (*DLFF*) の活動化 は、既存の Data Link サーバーにおいて新規 DLFF を作成する、より大きな作業の一部です。DLFF の 活動化には、2 つのメインタスクがあります。

- ファイル・システムが DLFF を使用できるようにする
- そのファイル・システムを Data Links サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) に登録する

# 前提条件:

- DB2 Data Links Manager の管理者権限。
- UNIX システムの場合には、さらに、root 権限を持つユーザー ID が必要です。
- Windows の場合には、さらに、スーパーユーザー ID (たとえば dlmadmin) が必要です。

#### 手順:

ファイル・システムの DLFF を活動化するには、次のようにします。

- 1. root 権限を持っているユーザー (UNIX) または管理者 (Windows) として、ファイ ル・システムがあるマシンにログオンします。
- 2. 以降のステップは、使用しているファイル・システムのタイプによって異なります。
  - JFS および UFS の場合、以降の手順は、ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録を参照してください。
  - Windows NTFS の場合、以降の手順は、DLFF へのドライブの登録を参照してく ださい。

# 関連作業:

- 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』
- 67 ページの『DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)』

- 39 ページの『Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・シス テムの作成』
- 41 ページの『リンク・ファイルを含む DLFS パスの識別』
- 42 ページの『新規 UNIX ファイル・システムの作成 (オプショナル)』
- 43 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (AIX、Solaris オペレーティング 環境)』
- 44 ページの『ファイル・システム共有の使用可能化 (Windows)』

## 関連資料:

37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# データ・リンク・ファイル・システムの変更

データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) の作成後、システムの必要性に応じて、 サイズを変更することができます。

AIX JFS の場合には、Tivoli Space Manager の機能を利用することができます。Tivoli Space Manager Hierarchical Storage Manager (HSM) クライアント・プログラムは、適格 なファイルを 2 次ストレージに自動的に移行して、ローカル・ファイル・システムにお いて特定レベルのフリー・スペースを維持します。この機能の前提条件は、Tivoli Space Manager バージョン 4.2 以降です。

AIX ベースの DLFS では、いつでも Tivoli Space Manager を使用可能にすることがで きます。また、その反対に、DLFS から、いつでも Tivoli Space Manager を除去するこ ともできます。

# 関連概念:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『Tivoli Space Manager Hierarchical Storage Manager (AIX)』

# 関連作業:

• 47 ページの『ファイル・システム・サイズの変更』

# 関連資料:

- データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンスの『Tivoli Storage Manager』
- 37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# Data Links File System のサイズの変更: 作業

以下のセクションでは、Data Links File System のサイズの変更方法について説明しています。

# ファイル・システム・サイズの変更

この手順を使用して、Windows におけるデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS) のサイズを拡大または縮小します。または、UNIX システムにおける DLFS のサイズを 縮小します。

UNIX システムにおける DLFS のサイズの拡大については、このトピックの最後に示されている別のトピックで説明します。

# 前提条件:

Data Links サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) をシャッ トダウンする必要があります。

使用するシステムに関して、スーパーユーザー権限を持っている必要があります。UNIX システムの場合は、root 権限を持っている必要があります。Windows の場合は、管理者 アカウント (たとえば、dlmadmin アカウント)を使用する必要があります。

Windows の場合には、ディスク管理プログラムに対するアクセス権も持っている必要があります。

#### 制約事項:

DLFS のサイズを拡大 することができるのは、DLFS がある物理ハード・ディスク (またはハード・ディスク) に使用可能なフリー・スペースがある場合のみです。

# 手順:

DLFF を使用している既存の UNIX ファイル・システムからスペースを削減するには、 以下のようにします。

- 1. 変更したい DLFS が含まれているシステムに root 権限を持つユーザーとしてログオ ンします。
- 2. ファイル・システムから DLFF ドライバーをアンロードします。必要なステップ は、 DLFF のロード、照会、アンロード (AIX) および DLFF のロード、照会、ア ンロード (Solaris オペレーティング環境) に記載されています。
- 次のいずれかのコマンドを入力して、ファイル・システムをアンマウントします。

/usr/opt/db2\_08\_01/instance/dlfmfsmd -j filesystem\_name //AIX /opt/IBM/db2/V8.1/instance/dlfmfsmd -j filesystem\_name //Solaris

ここで、*filesystem\_name* は、DLFF を使用しているマウントされたファイル・システムの名前を指定します。

- 4. スペース割り振りを縮小します。
  - AIX システムの場合は、基本ファイル・システムのスペース割り振りの縮小に必要な固有のステップについて、AIX の資料を参照してください。

- Solaris オペレーティング環境の場合は、Solstice DiskSuite などのユーティリティ ー・プログラムを使用して、ファイル・システムのサイズを縮小します。基本フ ァイル・システムのスペース割り振りの縮小に必要な固有のステップに関して は、ご使用になっているユーティリティー・プログラムの資料を参照してください。
- 5. DLFF ドライバーを再度ロードします。必要なステップは、 DLFF のロード、照 会、アンロード (AIX) および DLFF のロード、照会、アンロード (Solaris オペレー ティング環境) に記載されています。
- 6. 次のいずれかのコマンドを入力して、ファイル・システムをマウントします。

/usr/opt/db2\_08\_01/instance/dlfmfsmd dlfm\_mountpoint //AIX /opt/IBM/db2/V8.1/instance/dlfmsmd dlfm\_mountpoint //Solaris

ここで、*dlfm\_mountpoint* は、変更したファイル・システムのマウント・ポイントです。

7. ログオフします。

Windows システムにおける DLFS のサイズを拡大または 縮小するには、次のようにします。

- 1. 変更したい DLFS が含まれているシステムに管理者ユーザーとしてログオンしま す。
- 2. ディスク管理プログラムを起動します。

Windows 管理ツールに含まれている標準ディスク管理プログラム (たとえば、 Windows 2000 の「ディスクの管理」)、または Partition Magic のような一般に販売 されているプログラムを使用することができます。

3. ディスク管理プログラムの指示に従って、DLFS のサイズを必要に応じて拡大または 縮小します。

**重要:** DLFS の拡大または縮小にかかわらず、ドライブ文字および DLFS ドライブ の共有ドライブ名を変更してはなりません。これらのいずれかを変更すると、ファイ ル・システムが Data Links Manager の制御から外れてしまいます。

DLFS ドライブ・パーティションのサイズを縮小するには、オリジナルの DLFS ド ライブを 2 分割する必要があります。必要に応じて、新規パーティションのスペー スをクリアすることができます。

**重要:** DLFS ドライブを分割する際に作成された新規ドライブ・パーティションは、 データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) の制御下に入らないの で、DLFS ドライブにはなりません。非 DLFS ドライブを DLFS ドライブとして定 義するには、dlff add コマンドを使用します。

4. コンピューターをリブートします。

変更したオリジナルの DLFS ドライブは、引き続きデータ・リンク・ファイル・シ ステム・フィルター (DLFF) によって制御されます。

# 関連作業:

- 69 ページの『DLFF のロード、照会、アンロード (AIX)』
- 70 ページの『DLFF のロード、照会、アンロード (Solaris オペレーティング環境)』
- 72 ページの『DLFF コントロールのファイル・システム・サイズを増加する (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

# Data Links サーバー上の DLFM への DB2 データベースの追加

ここでは、既存の Data Links サーバーに特定の DB2 データベースを追加する方法について説明します。この手順の一部として、特定のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM)を特定の DB2 データベースに関連付けます。

## 前提条件:

- Data Links Manager の管理者権限。
- 使用したいデータベースが含まれているデータベース・インスタンスにおけるシステム管理 (SYSADM) 権限を持つ有効な DB2 ユーザー ID。

# 手順:

既存の Data Links サーバーに特定の DB2 データベースを追加するには、次のようにします。

- 追加したい特定の DB2 データベースがすでに存在していることを確かめます。
   DB2 のインストールおよびデータベースの作成に関する詳細および指示に対するリンクについて、必要であれば、関連作業および関連概念のリンクを参照してください。
- 2. 特定の DB2 データベースが DB2 Data Links Manager を使用できるようにします。
  - a. 使用したいデータベースが含まれているインスタンスにおけるシステム管理 (SYSADM) 権限を持つ有効な DB2 ユーザー ID で DB2 ホスト・システムにロ グオンします。デフォルトでは、インスタンス所有者の 1 次グループに属するユ ーザー ID が、インスタンスにおける SYSADM 権限を持ちます。
  - b. 次のいずれかのコマンドを使用して、Data Links Manager を使用可能にするデー タベースが含まれている DB2 インスタンスの名前を設定します。

export DB2INSTANCE=instance name // UNIX Bash, Bourne, or Korn shell

setenv DB2INSTANCE=instance name // UNIX C shell

set DB2INSTANCE=instance name //Windows

c. 次の追加コマンドを実行します。

db2 get instance //optional, to ensure the database instance name set correctly db2 update dbm cfg using datalinks yes db2start  $% \left( \frac{1}{2}\right) =0$ 

- d. ログオフします。
- 3. 前のステップで選択したデータベースを Data Links サーバー上のデータ・リンク・ ファイル・マネージャー (DLFM) に登録します。
  - a. Data Links Manager 管理者として Data Links サーバーにログオンします。

- b. 次のコマンドを実行します。dlfm add db database instance hostname
  - database は、リモート・データベースのデータベース別名を表します。
  - instance は、データベースがあるインスタンスを表します。UNIX Data Links Manager に Windows インスタンスを登録する場合、インスタンスは英大文字 でなければなりません。
  - hostname は、データベースが存在する DB2 UDB サーバーのホスト名を表し ます。
- c. ログオフします。
- 4. Data Links サーバーを DB2 データベースに登録します。
  - a. DLFM に登録したデータベースが含まれているインスタンスにおけるシステム管理 (SYSADM) 権限を持つ有効な DB2 ユーザー ID で DB2 ホスト・システム にログオンします。デフォルトでは、インスタンス所有者の 1 次グループに属す るユーザー ID が、インスタンスにおける SYSADM 権限を持ちます。
  - b. 次のいずれかのコマンドを使用して、Data Links Manager を使用可能にするデー タベースが含まれている DB2 インスタンスの名前を設定します。

export DB2INSTANCE=instance name // UNIX Bash, Bourne, or Korn shell

```
setenv DB2INSTANCE=instance_name // UNIX C shell
set DB2INSTANCE=instance name //Windows
```

c. 次の追加コマンドを実行します。

db2 get instance //optional, to ensure the database instance name set correctly
db2start
db2 add datalinks manager for database database alias using node hostname port port number

- database alias は、データベースのデータベース別名を表します。
- hostname は、Data Links サーバーの完全修飾ホスト名を表します。
- port\_number は、Data Links サーバーと DB2 サーバーとの間の通信用に予約 したポート番号を表します。このポート番号は、DB2 Data Links Manager の インストール時に指定しています。

d. ログオフします。

5. Data Links サーバーを使用する人々およびアカウントに対して、必要な許可および 権限を付与します。

ユーザー許可および権限の付与についての詳細は、関連概念のユーザーの許可 トピックを参照してください。

Data Link サーバーに追加したい DB2 データベースごとに、この手順全体を繰り返し ます。

#### 関連概念:

• DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストールの『DB2 サーバーの インストールの概要 (UNIX)』

- DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストールの『DB2 サーバーの インストールの概要 (Windows)』
- 33 ページの『ユーザーに対するアクションの実行の許可』

# 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『UPDATE DATABASE MANAGER CONFIGURATION コマンド』
- 管理ガイド: パフォーマンスの『Enable Data Links Support configuration parameter datalinks』
- ・ コマンド・リファレンスの『ADD DATALINKS MANAGER コマンド』
- 191 ページの『dlfm add\_db コマンド』
- 37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# DB2 ホストの特定の DB2 データベースへの DLFM の追加

ここでは、DB2 ホストの特定の DB2 データベースに新規 Data Links Manager を追加 する方法について説明します。この手順の一部として、特定のデータ・リンク・ファイ ル・マネージャー (DLFM) を特定の DB2 データベースに関連付けます。

#### 前提条件:

- Data Links Manager の管理者権限。
- 使用したいデータベースが含まれているデータベース・インスタンスにおけるシステム管理 (SYSADM) 権限を持つ有効な DB2 ユーザー ID。

#### 制約事項:

単一の DB2 データベースは、最大 16 の DLFM と通信できます。

#### 手順:

DB2 ホストにある特定の DB2 データベースに新規 Data Links Manager を追加するに は、次のようにします。

1. Data Links サーバーとして使用したいマシンに DB2 Data Links Manager がまだイ ンストールされていない場合には、インストールします。

Data Links Manager をまだインストールしていない場合は、このトピックの最後に あるリンク先に記載されている Data Links Manager のインストールについての詳細 および指示を参照してください。

2. 必要に応じて、Data Links サーバーを作成および構成します。

Data Links サーバーがまだ構成されておらず、作動可能になっていない場合は、次のことを行う必要があります。

- リンク・ファイルを含むデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS) パスを識別します。
- 必要であれば、新規ネイティブ・ファイル・システムを作成します。

- ファイル・システム共有を使用可能にします。
- データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) を活動化して、ネイ ティブ・ファイル・システムを DLFS にします。
   この作業の一部として、実際には、dlfm add\_prefix コマンドを使用して、DLFM に DLFS パスを定義します。
- DLFS に対するクライアント接続を使用可能にします。

これらの手順に関する詳細および指示に対するリンクについては、関連作業を参照してください。

- 3. 特定の DB2 データベースが DB2 Data Links Manager を使用できるようにします。
  - a. 使用したいデータベースが含まれているインスタンスにおけるシステム管理 (SYSADM) 権限を持つ有効な DB2 ユーザー ID で DB2 ホスト・システムにロ グオンします。デフォルトでは、インスタンス所有者の 1 次グループに属するユ ーザー ID が、インスタンスにおける SYSADM 権限を持ちます。
  - b. 次のいずれかのコマンドを使用して、Data Links Manager を使用可能にするデー タベースが含まれている DB2 インスタンスの名前を設定します。

export DB2INSTANCE=instance name // UNIX Bash, Bourne, or Korn shell

```
setenv DB2INSTANCE=instance name // UNIX C shell
```

```
set DB2INSTANCE=instance_name //Windows
```

c. 次の追加コマンドを実行します。

db2 get instance //optional, to ensure the database instance name set correctly db2 update dbm cfg using datalinks yes db2start  $% \left( \frac{1}{2}\right) =0$ 

- d. ログオフします。
- 4. 前のステップで選択したデータベースを Data Links サーバー上のデータ・リンク・ ファイル・マネージャー (DLFM) に登録します。
  - a. Data Links Manager 管理者として Data Links サーバーにログオンします。
  - b. 次のコマンドを実行します。dlfm add db database instance hostname
    - database は、リモート・データベースのデータベース別名を表します。
    - instance は、データベースがあるインスタンスを表します。AIX Data Links Manager に Windows インスタンスを登録する場合、インスタンスは英大文字 でなければなりません。
    - hostname は、データベースが存在する DB2 UDB サーバーのホスト名を表し ます。
  - c. ログオフします。
- 5. Data Links サーバーを DB2 データベースに登録します。
  - a. 使用したいインスタンスにおけるシステム管理 (SYSADM) 権限を持つ有効な DB2 ユーザー ID で DB2 ホスト・システムにログオンします。デフォルトで は、インスタンス所有者の 1 次グループに属するユーザー ID が、インスタンス における SYSADM 権限を持ちます。

- b. 次のいずれかのコマンドを使用して、Data Links Manager を使用可能にするデー タベースが含まれている DB2 インスタンスの名前を設定します。 export DB2INSTANCE=instance\_name // UNIX Bash, Bourne, or Korn shell setenv DB2INSTANCE=instance\_name // UNIX C shell set DB2INSTANCE=instance\_name //Windows
- c. 次の追加コマンドを実行します。

db2 get instance //optional, to ensure the database instance name set correctly db2start db2 add datalinks manager for database *database alias* using node *hostname* port *port number* 

- database alias は、データベースのデータベース別名を表します。
- hostname は、Data Links サーバーの完全修飾ホスト名を表します。
- port\_number は、Data Links サーバーと DB2 サーバーとの間の通信用に予約 したポート番号を表します。このポート番号は、DB2 Data Links Manager の インストール時に指定しています。
- d. ログオフします。
- 6. 必要であれば、Data Links サーバーを使用する人々およびアカウントに対して、必要な許可および権限を付与します。

ユーザー許可および権限の付与についての詳細は、関連概念のリンクを参照してくだ さい。

特定の DB2 データベースに追加したい Data Links Manager ごとに、この手順全体を 繰り返します。単一の DB2 データベースは、最大 16 の DLFM と通信できます。

#### 関連概念:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Solaris オペレーティング環境)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Windows)』
- 33 ページの『ユーザーに対するアクションの実行の許可』

## 関連作業:

• 39 ページの『Data Links サーバーにおける追加のデータ・リンク・ファイル・シス テムの作成』

#### 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『UPDATE DATABASE MANAGER CONFIGURATION コマンド』
- 管理ガイド: パフォーマンスの『Enable Data Links Support configuration parameter datalinks』

- コマンド・リファレンスの『ADD DATALINKS MANAGER コマンド』
- 191 ページの『dlfm add\_db コマンド』
- 37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』

# DB2 ホストの特定の DB2 データベースからの Data Links Manager のドロップ

 $DB2^{\circ}$  データベースから Data Links Manager に関する情報を除去する処理を、DB2 デ ータベースからの Data Links Manager のドロップ といいます。

必要な場合は、DB2 データベースから Data Links Manager をドロップすることができ ます。たとえば、特定のデータベースで Data Links Manager を使用しなくなった場合 は、そのデータベースから Data Links Manager を除去することによって、処理オーバ ーヘッドを減らすことができます。あるいは、データベースから間違って定義された Data Links Manager を除去しなければならない場合があります。

DB2 データベースからの Data Links Manager のドロップ処理は、難しくはありません が、データベース環境の主要な変更です。また、Data Links Manager のドロップの結果 としてデータベースに行われた変更は、ロールバックすることができません。

Data Links Manager のドロップの重要性について詳しくは、このトピックの最後にある リンクを参照してください。

# 前提条件:

Data Links Manager の管理者権限

データに影響を及ぼす可能性があるため、データベースから Data Links Manager をドロップする際の準備として、次の作業を行ってください。

- すべてのレプリケーション・サブスクリプションが、ドロップしたい Data Links Manager を含むすべての変更を複製していることを確認する。
- Data Links Manager をドロップするデータベースをバックアップする。
- Data Links Manager をドロップするデータベースに、その Data Links Manager に関 する Data Links サーバー上のいかなる ファイルに対するいかなる 参照も含まれて いないことを確認する。

Data Links Manager がこの手順に記載されているように完全にドロップされるまで、 データベースとドロップされた Data Links Manager の間のリンクに対応するファイ ルは、リンクされたままで、読み取り、書き込み、リネーム、削除、許可の変更、ま たは所有権の変更などの操作に対してもアクセス不能になります。

#### 手順:

データベースから Data Links Manager をドロップするには、次のようにします。

- 1. Data Links Manager をドロップしたい DB2 データベース・インスタンスが含まれ ている DB2 ホストにログオンします。
- 2. Data Links Manager をドロップしたいデータベースの名前と、Data Links Manager が含まれている Data Links サーバーを指定して、DROP DATALINKS MANAGER コマンドを実行します。

データベースが複数の Data Links サーバーを使用しており、その一部またはすべて をドロップする場合には、ドロップする Data Links サーバーごとに、このコマンド を実行します。

- 3. Data Links Manager 管理者アカウントを使用して、Data Links Manager をドロップ する DB2 データベース・インスタンスに対応する Data Links サーバー・マシンに ログオンします。
- 4. dlfm drop\_dlm コマンドを実行します。

ステップ 2 で複数の Data Links サーバーをドロップした場合は、ドロップした Data Links サーバー・マシンごとに、ステップ 3 - 4 を繰り返します。

# 関連作業:

• 75 ページの『Data Links Manager からの DB2 データベース情報の除去』

# 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『DROP DATALINKS MANAGER コマンド』
- 37 ページの『基本的な DLFM 構成作業』
- 197 ページの『dlfm drop\_dlm コマンド』

# Data Links Manager レプリケーション・デーモンの使用可能化

DB2 DataPropagator (DB2 レプリケーション) を使用してリンク・ファイルを複製する 際に、外部ファイルをソース・ファイル・システムからターゲット・ファイル・システ ムにコピーする方法をカスタマイズすることができます。FTP デーモン、または Data Links Manager に組み込まれている Data Links Manager レプリケーション・デーモン DLFM\_ASNCOPYD を使用することができます。いずれのデーモンも、DB2 レプリケー ション ASNDLCOPY 出口ルーチンと共に作動して、DATALINK 列値によって参照さ れているファイルをコピーします。DLFM\_ASNCOPYD デーモンは、基本的な FTP コ マンドをサポートし、次の追加機能を提供します。

- DATALINK 列に RECOVERY YES と定義されているファイルの特定のバージョンを 検索できる機能
- ユーザーのアクセス特権に基づいて DATALINK 列に READ PERMISSION DB と定 義されているファイルを検索できる機能
- 複製されるファイルの最終変更時の状態を保存する機能

DLFM\_ASNCOPYD は、Data Links Manager の起動中にコンポーネント・プロセスとし て起動されます。許可ユーザーは、専用ポートを介して DLFM\_ASNCOPYD に接続す ることができます。

Data Links Manager のインストール・プロセスで、DLFM\_ASNCOPYD を使用可能にして、使用するデーモンのポートを指定するように指示するプロンプトが表示されます。 デフォルトでは、デーモンは使用不可のままになります。しかし、いつでも Data Links Manager 構成を変更して、DLFM\_ASNCOPYD を使用可能にすることができます。

# 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

## 手順:

Data Links サーバーにおいて Data Links Manager レプリケーション・デーモンを使用 可能にするには、次のようにします。

- 1. Data Links Manager レプリケーション・デーモンを使用可能にしたい特定の Data Links サーバー・マシンにログオンします。
- 2. **db2set** コマンドを使用して、レジストリー変数 DLFM\_START\_ASNCOPYD を YES に設定します。
- 3. **db2set** コマンドを使用して、レジストリー変数 DLFM\_ASNCOPYD\_PORT を 1 か ら 65535 までの値に設定します。このポート番号の値は、DB2 DataPropagator の ASNDLCOPY 出口ルーチン ASNDLUSER 構成ファイルに指定されているポート番 号の値と一致していなければなりません。

**UNIX システムのみ**: ポート番号は、/etc/services に予約されている必要があります。

4. dlfm restart コマンドを起動して、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を再始動します。

#### 関連概念:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Solaris オペレーティング環境)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Windows)』
- 管理ガイド: パフォーマンスの『DB2 レジストリー変数と環境変数』

# 関連作業:

レプリケーションのガイドおよびリファレンスの『特殊なデータ・タイプのレプリケーション』

#### 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『db2set DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』
- 200 ページの『dlfm grant replication read コマンド』
- 201 ページの『dlfm grant replication write コマンド』
- 213 ページの『dlfm revoke replication コマンド』

# 構成のチューニング

最適なシステム・パフォーマンスを維持するために、Data Links サーバー構成の次の状況を定期的にチェックして、必要に応じて調整してください。

- マシンのシステム・クロック
- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) データベースのロギングに使用可能なストレージ・スペースの量
- アクティブなコピー・プロセスの数

#### 関連概念:

- 57 ページの『システム・クロックの同期化』
- 58 ページの『DLFM\_DB に対する十分な DB2 ログ・スペースの確保』

#### 関連作業:

• 59 ページの『コピー・プロセス数の設定』

# 構成のチューニング:詳細

以下のセクションでは、下記の事項について説明します。

- すべてのマシンのすべてのシステム・クロックのチェックと、同期させる方法
- Data Links File Manager (DLFM)のデータベース・ログ・ファイルのための適切なディスク・スペースの維持に関するヒント
- アクティブなコピー・デーモン・プロセスの数の構成方法

# システム・クロックの同期化

すべての Data Links サーバー・マシンおよび関連したすべての DB2<sup>®</sup> ホスト・マシン 上のシステム・クロックは同期化されていなければならず、常に同期化された状態で保 たれていなければなりません。

マシン・システム・クロックの同期は、ファイル・アクセス・トークン有効期間が正し く機能するために重要です。ファイル・アクセス・トークン有効期間は、選択された DATALINK 列値 (組み込みファイル許可トークンをもつ URL で構成される)を使用で きる期間を制御します。

- AIX<sup>®</sup> マシンでシステム時刻およびシステム日付をチェックするには、date -u コマ ンドを使用します。システム時刻およびシステム日付の設定方法については、AIX の 管理資料を参照してください。
- Solaris オペレーティング環境を使用しているマシンでシステム時刻およびシステム日 付をチェックするには、date コマンドを使用します。システム時刻およびシステム 日付の設定方法については、Solaris オペレーティング環境の管理資料を参照してくだ さい。
- Windows<sup>®</sup> マシンでシステム時刻およびシステム日付を設定およびチェックするには、コントロール・パネルで「日付と時刻」アプリケーションを使用します。

# 関連資料:

- 管理ガイド: パフォーマンスの『Data Links Access Token Expiry Interval configuration parameter dl\_expint』
- *管理ガイド: パフォーマンス* の『Data Links Write Token Initial Expiry Interval configuration parameter dl\_wt\_iexpint』

# DLFM\_DB に対する十分な DB2 ログ・スペースの確保

すべての DB2<sup>®</sup> データベースのように、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DFLM) データベース DLFM\_DB は、多数のログ・ファイルを保守します。DLFM\_DB のログ・ファイルは、DLFM がある Data Links サーバー・マシンに保管されます。

**重要:** DLFM\_DB ログに十分なディスク・スペースがないと、*DLFM がシャットダウン* される恐れがあります。

DB2 は、ディスク容量がロギング目的には少ない場合に、警告メッセージを出します。 また、Data Links サーバー・マシンを定期的にモニターして、適切なディスク・スペー スが使用可能な状態であることを確認する必要があります。

ログ・ファイル容量の問題に関するチューニングを最小限にするために、Data Links サ ーバー・マシンで DLFM\_DB データベースの LOGFILSIZ、LOGPRIMARY、および LOGSECOND データベース構成変数を最適化することができます。

# 関連概念:

管理ガイド: プランニングの『ログ・ファイルのスペース所要量』

# 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『UPDATE DATABASE MANAGER CONFIGURATION コマンド』
- データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス の『データベース・ロギングの構成パラメーター』
# コピー・プロセス数の設定

Data Links Manager は、コピー・デーモン・プロセスを使用して、リンク・ファイルを アーカイブ域またはサーバーにコピーします。ファイルがアーカイブ域にコピーされる 速度は、システム全体のパフォーマンスに影響を与えます。レジストリー変数 DLFM\_NUM\_ARCHIVE\_SUBSYSTEMS の値を最適化することによって、特定の Data Links サーバーで使用可能にするコピー・デーモン・プロセスの数を構成することがで きます。デフォルト値は 2 です。

推奨:ご使用になっているシステムが高い並列処理環境である場合、

DLFM\_NUM\_ARCHIVE\_SUBSYSTEMS 値をストレージ・システムの独立入出力チャネ ル数に応じて設定することにより、Data Links Manager システム全体のパフォーマンス を向上させることができます。ストレージ・システムは、ローカル・ストレージ・デバ イス (たとえば、ハード・ディスクなど)のような複数の独立入出力チャネルから構成 されます。IBM Tivoli Storage Manager および XBSA 準拠のストレージ・アプリケー ションも、独立入出力装置を使用するように構成することができるので、高い並列処理 環境をサポートします。

# 前提条件:

システムに最適なコピー・デーモン・プロセス数を決定します。次の方法のいずれかまたは両方を使用することができます。

- アーカイブ・ファイル・システムを構成するストレージ・システム・ハードウェアおよびソフトウェアを分析する。
- レジストリー変数値を変更して、変更がシステム・パフォーマンスに及ぼす影響をテ ストする。システム・パフォーマンスを最適化するまで、必要に応じて、このアクシ ョンを繰り返す。

**重要:** DLFM\_NUM\_ARCHIVE\_SUBSYSTEMS レジストリー値の設定が高過ぎると、シ ステム・パフォーマンスが低下する 可能性があります。システム・パフォーマンスを向 上させる には、レジストリー値を前述の方法に基づいて最適化することが重要です。

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

# 手順:

Data Links サーバーにおけるコピー・デーモン・プロセス数を設定するには、次のよう にします。

- 1. コピー・デーモン・プロセス数を設定したい特定の Data Links サーバー・マシンに ログオンします。
- 2. **db2set** コマンドを使用して、レジストリー変数 DLFM\_NUM\_ARCHIVE\_SUBSYSTEMS を 1 から 64 までの値に設定します。
- 3. dlfm restart コマンドを起動して、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を再始動します。

# 関連概念:

- ・ 管理ガイド: パフォーマンスの『DB2 レジストリー変数と環境変数』
- 21 ページの『Data Links サーバー・ファイルのバックアップ』

# 関連資料:

• コマンド・リファレンスの『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

# 第3章 データ・リンク・ファイル・マネージャーでの作業

本章では、Data Links Manager 管理者が、データ・リンク・サーバー上のデータ・リン ク・ファイル・マネージャー (DLFM) を保守するするために使用する日常の操作手順に ついて説明します。

特に断りのない限り、本章で述べるコマンドは、AIX システム、Solaris オペレーティン グ環境、および Windows オペレーティング・システムで稼動するデータ・リンク・サ ーバーに共通のものです。

- すべてのオペレーティング・システムでのデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) コマンドの詳細な解説は、191ページの『付録 A. データ・リンク・ファイ ル・マネージャーのコマンド』をご覧ください。
- Windows オペレーティング・システム用のデータ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) コマンドの詳細な解説は、221ページの『付録 B. データ・リンク・ファイル・システム・フィルターのコマンド』をご覧ください。

# 基本操作 : DLFM の始動、停止、再始動

データ・リンク・サーバーのデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) コンポ ーネントを始動しなければならない理由は、以下に示すようにいくつかのものがありま す。

- ファイルにアクセスすること、およびファイルをリンクすること (READ PERMISSION 属性が FS に設定されている DATALINK 列から参照されるファイル は例外)
- 新しいファイル・システム・ディレクトリーを追加すること
- リンクまたは再リンクするファイルを作成すること
- リンクまたは再リンクするファイルを更新すること

データ・リンク・サーバーの DLFM コンポーネントを停止しなければならない理由 は、以下に示すように多くあります。

- DLFM 構成を変更すること
- 読み取りトークンと書き込みトークンをリフレッシュすること
- データ・リンク・サーバー・マシンの保守を実行すること
- 計画的なマシン停止をサポートすること
- テストまたはトラブルシューティングを行うこと
- データ・リンク・サーバー・マシンの障害

• DB2<sup>®</sup> データベースの障害

DLFM の再始動は、停止操作を実行してから、開始操作を実行することを意味します。 停止操作や開始操作を行うのと同じ理由で、DLFM の再始動を行わなければならない場 合があります。

DLFM の開始、停止、再始動 (つまり、1 回の操作で開始してから停止する) を行うに は、dlfm start、dlfm stop、および dlfm restart の各コマンドを使用します。

dlfm stop 処置が完全に成功しなかった場合は、dlfm shutdown コマンドを使用しな ければならない場合があります。「関連したリンク」のセクションでは、異常終了と dlfm shutdown コマンドについての詳細が説明されています。

Windows<sup>®</sup> オペレーティング・システムの場合のみ: DLFM をサービスとして開始した場合、DLFM サービスの停止と開始を行うには、「コントロール パネル」からアクセスできる「サービス」パネルを使用します。

#### 関連概念:

• 152 ページの『DB2 Data Links Manager のリカバリーのシナリオ』

関連作業:

• 62 ページの『異常終了後の DLFM の再始動』

# 関連資料:

- 210 ページの『dlfm restart コマンド』
- 216 ページの『dlfm shutdown コマンド』
- 216 ページの『dlfm start コマンド』
- 217 ページの『dlfm stop コマンド』

# 異常終了後の DLFM の再始動

dlfm stop コマンドを使用して DLFM を停止できない場合は、以下の説明に従って、 DLFM をシャットダウンしてから、それを再始動します。 DLFM が何らかの理由で異 常終了した場合も、IBM サービスから、これらの説明に従うように指示される場合もあ ります。

# 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

制約事項:

AIX および Solaris オペレーティング環境において: DLFM プロセスを停止するため に、kill または sigkill -9 signal を使用しないでください。ここで、9 は sigkill です。 ここに説明されているコマンドを使用してください。

# 手順:

異常終了後に DLFM を再始動するには、以下のようにします。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者としてデータ・リンク・サーバーにログオンしま す。
- 2. dlfm shutdown コマンドを入力して、アクティブな DLFM を停止させます。

**重要:dlfm shutdown** コマンドを実行すると、使用しているアカウント (この場合 は、Data Links Manager 管理者アカウント) のすべての 共用リソースが、すべての IPC を含め除去されます。これと同じアカウントでその他のプロセスを実行している 場合、それらのプロセスも終了する可能性があります。

3. dlfm start コマンドを入力して DLFM を開始します。

## 関連概念:

- 152 ページの『DB2 Data Links Manager のリカバリーのシナリオ』
- 61 ページの『基本操作: DLFM の始動、停止、再始動』

#### 関連資料:

- ・ 216 ページの『dlfm shutdown コマンド』
- 216 ページの『dlfm start コマンド』
- 217 ページの『dlfm stop コマンド』

# DLFM バックグラウンド・プロセスのモニター (AIX、Solaris オペレーティング環 境)

AIX システムや Solaris オペレーティング環境上のデータ・リンク・サーバーに対して DB2 が確立するすべての接続について、DLFM エージェント・バックグラウンド・プ ロセスが開始されます。

#### 手順:

データ・リンク・サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) のバ ックグラウンド・プロセスをモニターするには、次のようにします。

- 1. DLFM プロセスをモニターしたい特定のデータ・リンク・サーバー・マシンにログ オンします。
- 2. dlfm see を入力します。
  - バックグラウンド・プロセスが正常に実行されている場合は、次のような出力を 受け取ります。

PID	PPID	PGID	RUNAME	UNAME	ETIME DAEMON NAME
71326	185894	119252	root	dlfm	00:07 dlfm_gcd_(dlfm)
75788	185894	119252	root	dlfm	00:07 dlfm_delgrpd_(dlfm)
100042	100280	119252	root	dlfm	00:08 dlfm_agent_(dlfm)
100280	185894	119252	root	dlfm	00:07 dlfm_cmgrd_(dlfm)
154834	234604	119252	root	dlfm	00:05 dlfm_ar_ag_(dlfm)
185894	1	119252	root	dlfm	00:08 dlfm_wd_(dlfm)
210534	234604	119252	root	dlfm	00:05 dlfm_ar_ag_(dlfm)
226860	185894	119252	root	dlfm	00:07 dlfm_upcalld_(dlfm)
234604	185894	119252	root	dlfm	00:07 dlfm_archived_(dlfm)
250654	185894	119252	root	dlfm	00:07 dlfm_mon_wd_(dlfm)

DLFM222I: The "DLFM SEE" request was successful.

バックグラウンド・プロセスが正常に開始されていない場合は、dlfm see コマンドは出力を戻しません。

#### 関連資料:

• 214 ページの『dlfm see コマンド (AIX および Solaris オペレーティング環境)』

# DLFM バックグラウンド・プロセスのモニター (Windows)

Windows システム上のデータ・リンク・サーバーに対して DB2 が確立するすべての接 続について、DLFM エージェント・バックグラウンド・プロセスが開始されます。

## 手順:

データ・リンク・サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM)のバ ックグラウンド・プロセスをモニターするには、次のようにします。

- プロセスをモニターしたい特定のデータ・リンク・サーバー・マシンにログオンします。
- 2. 「Windows タスク マネージャ」を開きます。
- データ・リンク・サーバー・マシン上で現在実行されているその他のすべてのプロセスと一緒に、DLFM バックグラウンド・プロセスが表示されます。
   DLFM バックグラウンド・プロセスは、dlfm\_processname.exe の形式で表示されます。ここで、processname は、実行中の特定のプロセスの名前です。
   DLFM が正常に実行されると、次のバックグラウンド・プロセスが表示されます。
  - dlfm\_ar\_ag.exe
  - dlfm\_ar\_ag.exe
  - dlfm\_archived.exe
  - dlfm\_cmgrd.exe
  - dlfm\_delgrpd.exe
  - dlfm\_gcd.exe
  - dlfm\_mon\_wd.exe
  - dlfm\_upcalld.exe
  - dlfm\_wd.exe

DLFM がその時に実行している特定のアクティビティーまたはオペレーションに応じて、その他のプロセスも表示されます。

## 関連資料:

- 223 ページの『dlff get loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 224 ページの『dlff refreshtrace コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 229 ページの『dlff set loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

# ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティン グ環境)

データ・リンク・サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が、 Solaris の UNIX ファイル・システム (UFS) や AIX の Journaled ファイル・システム (JFS) を認識できるようにするには、次の操作を示されている順番に実行する必要があ ります。

- ファイル・システムが、データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) を使用できるようにする
- 2. そのファイル・システムを DLFM に登録する

#### 前提条件:

- DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。
- システム root 権限が必要です。

## 手順:

ファイル・システムで DLFF を使用できるようにし、ファイル・システムを DLFM に 登録するには、次のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- 2. DLFF を使用可能にしたいファイル・システムを選択します。新しいファイル・シス テムを作成するか、既存ファイル・システムを使用することができます。
  - Solaris オペレーティング環境では、newfs コマンドで UFS を作成します。
     newfs コマンドの詳細については、Solaris の製品資料または「MAN」ページを参照してください。
  - AIX システムでは、 smit manfs コマンドを使用して JFS を作成し、「Mount AUTOMATICALLY at system restart?」オプションを no に設定します。新しい JFS 作成の詳細については、AIX の製品資料または「MAN」ページを参照してく ださい。
- 以下のいずれかのスクリプトを呼び出すことによって、ファイル・システムをマウントします。

/opt/IBM/db2/V8.1/instance/dlfmfsmd *dlfm\_mountpoint* //Solaris Operating Environments /usr/opt/db2\_08\_01/instance/dlfmfsmd *dlfm\_mountpoint* //AIX systems

ここで、dlfm\_mountpoint は、前のステップからのマウント・ポイントです。

マウント処理の際に、dlfmfsmd スクリプトは、自動的に、必要なファイル、パラメ ーター、属性を更新します。

Solaris オペレーティング環境では、/etc/vfstab ファイルの次の項目が変更されます。

/dev/dsk/c0t0d0s6 /dev/rdsk/c0t0d0s6 /dlfs dlfs - yes Basefs=ufs

cOtOdOs6 は、この例のサンプル値です。

- AIX システムでは、次の処置が行われます。
  - /etc/filesystems ファイルの、vfs 項目の現行の設定が記録され、スタンザが以下のように編集されます。

```
mount = false
vfs = dlfs
```

- 次の nodename 属性が、ファイル・システム項目のスタンザに追加されます。

```
nodename = -
```

スクリプトが実行された後に、NULL 標識文字 (-) の後にブランク・スペース がないことを確認する必要があります。

 options 属性の Basefs パラメーターが、上記の vfs 項目で記録された値に設定 されます。たとえば、作成される項目は、以下のようになります。

```
options = rw,Basefs=jfs
```

- 4. ログオフします。
- 5. DB2 Data Links Manager 管理者としてシステムにログオンします。
- 6. dlfm start コマンドを入力することによって、データ・リンク・ファイル・マネー ジャーを開始します。
- 次のコマンドを入力することによって、DLFF によってコントロールされているファ イル・システムを登録します。

dlfm add\_prefix prefix\_path

ここで、*prefix\_path* は、DLFF がコントロールしているファイル・システムの位置です。

**例**:次のコマンドを入力することによって、test ファイル・システムに DLFF を 使用するデータ・リンク・サーバーを登録します。

dlfm add\_prefix /test

# 関連作業:

• 68 ページの『登録済みファイル・システムのリスト表示 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

## 関連資料:

- 192 ページの『dlfm add\_prefix コマンド』
- 216 ページの『dlfm start コマンド』

# DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)

データ・リンク・サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が、 Windows NT または Windows 2000 のドライブを認識できるようにするには、次の操作 を示されている順番に実行する必要があります。

- データ・リンク・サーバー・ドライブ上のファイル・システム (Windows NT および Windows 2000 のどちらも NTFS) が、データ・リンク・ファイル・システム・フィ ルター (DLFF) を使用できるようにする。
- 2. そのドライブを DLFM に登録する。

# 前提条件:

Windows 管理者グループのメンバーでなければなりません。

# 手順:

NTFS ファイル・システムで DLFF を使用できるようにし、ドライブを DLFM に登録 するには、次のようにします。

- 1. システムにログオンして、コマンド・プロンプト・セッションをオープンします。
- 2. 次のコマンドを入力して、ドライブを DLFF のコントロール下に置きます。

dlff add drive:

*ここで、drive:* は、DLFF のコントロールの下に置きたいドライブの文字です。たと えば、ドライブ文字が **d**: の場合は、コマンド dlff add *d*: を入力します。

3. 次のコマンドを入力して、ドライブをデータ・リンク・サーバー DLFM に登録しま す。

dlfm add\_prefix ¥sharename

ここで、sharename は、追加したばかりのドライブ上の既存の共用名の名前です。た とえば、共用名が grepository の場合は、コマンド dlfm add\_prefix *¥grepository* を入力します。

重要:いったん接頭部を追加すると、除去することはできません。

**重要:**追加したばかりのドライブを共用名として使用したいときに、そのドライブ がまだそれに関連した共用名をもっていない場合、**dlfm add\_prefix** コマンドを実 行する前に、ドライブに共用名を関連付ける必要があります。「**Windows エクスプ ローラ**」または「**マイ コンピュータ**」を開いて、ドライブに共用名を割り当てるた めに、ドライブのプロパティーを変更します。

# 関連作業:

• 69 ページの『登録済みドライブのリスト表示 (Windows オペレーティング・システム)』

# 関連資料:

- 221 ページの『dlff add コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 224 ページの『dlff list コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

# 登録済みファイル・システムのリスト表示 (AIX、Solaris オペレーティング環境)

この手順を使って、データ・リンク・サーバーのデータ・リンク・ファイル・システ ム・フィルター (DLFF) のコントロール下にあり、また データ・リンク・ファイル・ マネージャー (DLFM) に登録されているすべてのファイル・システムをリストします。

# 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

## 手順:

現在、DLFF のコントロール下にあり、DLFM に登録されているすべてのファイル・シ ステムをリストするには、次のようにします。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者としてシステムにログオンします。
- 2. データ・リンク・サーバー上のすべての登録済み接頭部をリストするには、dlfm list registered prefixes コマンドを入力します。
- DLFF がロードされている登録済みファイル・システムをリストするには、適切なコ マンドを以下のように使用します。

AIX システムでは、lsfs -v dlfs コマンドを入力して、現在定義されているデー タ・リンク・ファイル・システム (DLFS) をリストします。次に、mount -f | awk '\$3 == "dlfs"' コマンドを入力して、DLFF がロードされている DLFS をリストし ます。

Solaris オペレーティング環境では、cat /etc/vfstab | awk '\$4 == "dlfs" コマンド を入力して、現在定義されている DLFS をリストします。次に、/sbin/mount -v | awk '\$5 == "dlfs" コマンドを入力して、DLFF がロードされている DLFS をリス トします。

## 関連作業:

• 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

関連資料:

204 ページの『dlfm list registered prefixes コマンド』

# 登録済みドライブのリスト表示 (Windows オペレーティング・システム)

この手順を使用して、データ・リンク・サーバー上の、データ・リンク・ファイル・シ ステム・フィルター (DLFF) のコントロール下にあり、また データ・リンク・ファイ ル・マネージャー (DLFM) に登録されているすべての NTFS ドライブをリストしま す。

#### 前提条件:

- DLFM が Windows サービスとして実行されている必要があります。 DLFM がまだ 実行されていない場合は、dlfm start コマンドを使用して、DLFM を開始します。
- Windows 管理者グループのメンバーでなければなりません。

#### 手順:

データ・リンク・サーバー上で、DLFF を使用し、DLFM に登録されているすべての NTFS ドライブをリストするには、以下のようにします。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者としてシステムにログオンします。
- 2. コマンド・プロンプト・セッションを開きます。
- データ・リンク・サーバーで dlfm list registered prefixes コマンドを入力します。
- DLFF がロードされているドライブをリストするには、dlff list コマンドを入力します。

#### 関連作業:

• 67 ページの『DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)』

#### 関連資料:

- 224 ページの『dlff list コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 204 ページの『dlfm list registered prefixes コマンド』

# DLFF のロード、照会、アンロード (AIX)

次の手順は、データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF)のロード、照 会、およびアンロードの方法の説明です。これらの説明は、フィックスパックやデバッ グ・プログラムのインストール、または保守ルーチンの実行の際に参照してください。

#### 前提条件:

- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を開始する前に、DLFF ドライバ ーをロードする必要があります。そうしないと、DLFM を開始することはできませ ん。この前提条件では、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) もマウントさ れている必要はありません。
- 使用するシステムに関して、root 権限をもっている必要があります。

DLFF をロードするには、以下のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- 2. strload -f /usr/opt/db2\_08\_01/cfg/dlfs\_cfg コマンドを入力します。

DLFF を照会するには、以下のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- 2. strload -q -f /usr/opt/db2\_08\_01/cfg/dlfs\_cfg コマンドを入力します。

DLFF をアンロードするには、以下のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- 2. strload -u -f /usr/opt/db2\_08\_01/cfg/dlfs\_cfg コマンドを入力します。

## 関連作業:

- 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』
- 68 ページの『登録済みファイル・システムのリスト表示 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

# DLFF のロード、照会、アンロード (Solaris オペレーティング環境)

次の手順は、データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF)のロード、照 会、およびアンロードの方法の説明です。これらの説明は、フィックスパックやデバッ グ・プログラムのインストール、または保守ルーチンの実行の際に参照してください。

#### 前提条件:

- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を開始する前に、DLFF ドライバ ーをロードする必要があります。そうしないと、DLFM を開始することはできませ ん。この前提条件では、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) もマウントさ れている必要はありません。
- 使用するシステムに関して、root 権限をもっている必要があります。

#### 手順:

DLFF をロードするには、以下のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- add\_drv -m '\* 0777 dlfm dlfmgrp' dlfsdrv コマンドを入力します。この例では、
   1 次グループ dlfmgrp のマシンで、dlfm ID を作成することを前提としています。

DLFF を照会するには、以下のようにします。

1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。

2. /usr/sbin/modinfo | grep dlfs コマンドを入力します。

DLFF をアンロードするには、以下のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- 2. rem\_drv dlfsdrv コマンドを入力します。

#### 関連作業:

- 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』
- 68 ページの『登録済みファイル・システムのリスト表示 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

# DLFF の登録、照会、登録解除 (Windows オペレーティング・システム)

次の手順は、Windows NT と Windows 2000 のドライブ上でのデータ・リンク・ファイ ル・システム・フィルター (DLFF) の登録、照会 (またはリスト)、および登録解除の方 法の説明です。これらの説明は、フィックスパックやデバッグ・プログラムのインスト ール、または保守ルーチンの実行の際に参照してください。

# 前提条件:

- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を開始する前に、DLFF ドライバ ーをロードする必要があります。そうしないと、DLFM を開始することはできませ ん。この前提条件では、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) も、すべての ドライブ上で階層化されている必要はありません。
- 使用するシステムに関する Data Links Manager 管理者アカウントでログインする必要があります。

# 手順:

DLFF を登録するには、以下のようにします。

- 1. Data Links Manager 管理者アカウントを使用して、システムにログオンします。
- 2. Windows の「コマンド プロンプト」セッションを開きます。
- 3. dlff add drive コマンドを入力します。drive パラメーターは、DLFF をロードした いディスク・ドライブです。

DLFF を照会するには、以下のようにします。

- 1. Data Links Manager 管理者アカウントを使用して、システムにログオンします。
- 2. Windows の「コマンド プロンプト」セッションを開きます。
- 3. dlff list コマンドを入力します。

DLFF の登録を解除するには、次のようにします。

- 1. Data Links Manager 管理者アカウントを使用して、システムにログオンします。
- 2. Windows の「コマンド プロンプト」セッションを開きます。
- 3. dlff remove *drive* コマンドを入力します。 *drive* パラメーターは、DLFF をアンロ ードしたいディスク・ドライブです。
- 4. マシンをリブートします。

データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの登録が解除されます。

# 関連作業:

- 67 ページの『DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)』
- 69 ページの『登録済みドライブのリスト表示 (Windows オペレーティング・システム)』

## 関連資料:

- 221 ページの『dlff add コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 225 ページの『dlff remove コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 224 ページの『dlff list コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

# DLFF コントロールのファイル・システム・サイズを増加する (AIX、Solaris オペレ ーティング環境)

この手順では、AIX システムと Solaris オペレーティング環境の両方で、データ・リン ク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) を使用している、ファイル・システム・ サイズを増加させる方法について説明しています。

#### 前提条件:

使用するシステムに関して、root 権限をもっている必要があります。

#### 手順:

DLFF を使用している既存のファイル・システムにスペースをさらに割り当てるには、 以下のようにします。

- 1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- ファイル・システムが DLFF にコントロールされないようにするために、そのプロ パティーを変更します。次に、以下のいずれかのコマンドを入力することによって、 ファイル・システムをアンマウントします。

/usr/opt/db2\_08\_01/instance/dlfmfsmd -j filesystem\_name //AIX systems /opt/IBM/db2/V8.1/instance/dlfmfsmd -j filesystem\_name //Solaris Operating Environments

ここで、*filesystem\_name* は、DLFF を使用しているマウントされたファイル・システムの名前を指定します。

3. AIX システムでは、smit jfs コマンドを入力して、ファイル・システムのサイズを 増やします。

Solaris オペレーティング環境では、Solstice DiskSuite などのユーティリティー・プ ログラムを使用して、ファイル・システムのサイズを増やします。

 ファイル・システムを DLFF のコントロール下にするために、そのプロパティーを 変更します。次に、以下のいずれかのコマンドを入力することによって、ファイル・ システムをマウントします。

/usr/opt/db2\_08\_01/instance/dlfmfsmd dlfm\_mountpoint //AIX systems /opt/IBM/db2/V8.1/instance/dlfmsmd dlfm\_mountpoint //Solaris Operating Environment

ここで、*dlfm\_mountpoint* は、前のステップで DLFF のために作成した、ファイル・システムのマウント・ポイントです。

5. ログオフします。

## 関連作業:

- 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』
- 68 ページの『登録済みファイル・システムのリスト表示 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

# データ・リンク・サーバーへの DB2 Universal Databases の登録

データ・リンク・サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が DB2 データベースを認識できるようにするには、その DB2 データベースを DLFM に 登録する必要があります。

# 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

#### 手順:

データ・リンク・サーバー上で DB2 データベースを DLFM に登録するには、以下の ようにします。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者としてシステムにログオンします。
- 次のコマンドを入力して、DATALINK データ・タイプが定義されたリモート DB2 Universal Database を登録します。

dlfm add db database instance hostname

ここで、

• database は、リモート・データベースのデータベース別名です。

- instance は、データベースがあるインスタンスの名前です。 AIX または Solaris の Data Links Manager に Windows NT または Windows 2000 のインスタンスを 登録する場合は、英大文字でインスタンス名を入力します。
- hostname は、データベースが存在する DB2 UDB サーバーのホスト名を表します。DB2 UDB サーバーのホスト名の決定の仕方についての詳細は、下記の関連概念のリンクをご覧ください。

たとえば、次のコマンドは、STAFF と呼ばれるデータベースを登録します。

dlfm add\_db staff validate db2server.services.com

データベースは、db2server.services.com というホスト名を持つ、DB2 Universal Database 上の validate インスタンス上にあります。

3. ログオフします。

データベースをデータ・リンク・ファイル・マネージャーに登録するたびに、影響を受ける DLFM\_DB 表スペースが、自動的にバックアップされます。 DLFM\_DB は、データ・リンク・サーバー上の DLFM 用のロギング・マネージャーとして働く DB2 データベースです。

# 関連概念:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Solaris オペレーティング環境)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Windows)』

#### 関連作業:

74 ページの『データ・リンク・サーバーに登録済みのデータベースのリスト表示』

#### 関連資料:

191 ページの『dlfm add\_db コマンド』

# データ・リンク・サーバーに登録済みのデータベースのリスト表示

この手順は、データ・リンク・サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) に登録されている、すべての DB2 データベースを表示する方法について説明 しています。

# 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

## 手順:

データ・リンク・サーバーに登録されているデータベースをリストするには、以下のようにします。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者としてシステムにログオンします。
- 2. データ・リンク・サーバーで dlfm list registered databases コマンドを入力しま す。

# 関連作業:

• 73 ページの『データ・リンク・サーバーへの DB2 Universal Databases の登録』

関連資料:

202 ページの『dlfm list registered databases コマンド』

# Data Links Manager からの DB2 データベース情報の除去

必要な場合は、DB2 データベースから Data Links Manager を除去 (ドロップ) するこ とができます。たとえば、特定のデータベースで Data Links Manager を使用しなくな った場合は、そのデータベースから Data Links Manager を除去することによって、処 理オーバーヘッドを減らすことができます。あるいは、データベースから無効な Data Links Manager を除去しなければならない場合があります。

DROP DATALINKS MANAGER コマンドを使用して、データベースから DB2 Data Links Manager をドロップする場合、コマンド自体は、DB2 Data Links Manager 上の対応する情報をクリーンアップしません。データベースにリンクされたすべてのファイル のリンク解除を、明示的に開始する必要があります。これにより、後でバックアップ情報とファイル管理セキュリティー情報のクリーンアップを行うことができるようになります。クリーンアップ・オペレーションは、dlfm drop\_dlm コマンドを使用して行います。dlfm drop\_dlm コマンドは、特定データベースのすべての情報の非同期削除を開始します。

DB2 データベースから Data Links Manager をドロップする全体の作業を完了するに は、このセクションの説明に従って、dlfm drop\_dlm コマンドを呼び出す必要があり ます。

## 前提条件:

- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が必要なデータ・リンク・サーバ ー上で実行されている必要があります。
- 除去したい Data Links Manager のファイルを参照する、DB2 データベース内のすべての DATALINK 列値を削除したことを確認します。

 この手順を開始する直前に、Data Links Manager を除去したい DB2 データベース・ インスタンスから DROP DATALINKS MANAGER コマンドを出します。 DROP DATALINKS MANAGER コマンドの詳細については、この手順の最後にある「関連 リファレンス」を参照してください。

# 手順:

DB2 データベースから Data Links Manager を除去するには、次のようにします。

1. Data Links Manager をドロップしたい DB2 データベース・インスタンスに対応す るデータ・リンク・サーバー・マシンから、dlfm drop\_dlm コマンドを出します。

**重要:dlfm drop\_dlm** コマンドは、**DROP DATALINKS MANAGER** コマンドを使用 して、データベースから DB2 Data Links Manager をドロップした後でのみ使用してく ださい。そうしないと、DB2 Data Links Manager の重要な情報が、完全に失われてし まいます。

#### 関連資料:

- コマンド・リファレンス の『RECONCILE コマンド』
- ・ コマンド・リファレンス の『DROP DATALINKS MANAGER コマンド』
- 197 ページの『dlfm drop\_dlm コマンド』

# エラー・メッセージ・ログ・ファイルの診断レベルの変更

データ・リンクは、データ・リンク・サーバーからと DATALINK データ・ファイルを 管理する DB2 データベースからのエラー・メッセージ・ログ・ファイルを維持してい ます。基本のエラー・メッセージ・ログ・ファイルは、db2diag.log です。

**AIX システムまたは Solaris オペレーティング環境では**、db2diag.log ファイルは、デフォルトでは、/*INSTHOME*/sqllib/db2dump ディレクトリーに置かれます。ここで、 *INSTHOME* は、インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーです。

Windows NT と Windows 2000 のシステムでは、db2diag.log ファイルは、デフォル トでは、x:¥sqllib¥*instance* ディレクトリーに置かれます。

- ここで、x: は DB2 Data Links Manager がインストールされているドライブです。
- instance は診断設定を変更するインスタンスの名前です。Data Links Manager が実行 されているインスタンス名は DLFM です。

db2diag.log ファイルの場所は、DB2 サーバー構成パラメーター DIAGPATH によって コントロールされているため、ご使用のシステム上のディレクトリー・パスは、デフォ ルト・パスとは異なる場合があります。

手順:

*DIAGLEVEL* 構成パラメーターと *DLFM\_LOG\_LEVEL* レジストリー値を使用することに よって、db2diag.log ファイルに書き込まれる詳細情報のレベルをコントロールします。

# DIAGLEVEL

db2diag.log エラー・ログ・ファイルに記録される DB2 診断情報の重大度を決めます。有効値は 1 から 4 です。 1 は、最小の情報量を記録することを指示 し、4 は最大の情報量を記録することを指示します。デフォルト設定は 3 で す。コマンド db2 update dbm cfg using DIAGLEVEL 4 を使用して、記録する エラー情報の量を増やすことができます。この設定は、デバッグの目的で、 IBM のサービスまたは開発部門から要求されたときだけに変更してください。

#### DLFM\_LOG\_LEVEL

db2diag.log エラー・ログ・ファイルに記録される DLFM 診断情報の重大度を 決定します。デフォルト設定は LOG\_ERR です。コマンド db2set DLFM\_LOG\_LEVEL=LOG\_DEBUG を使用して、記録されるエラー情報の量を増やすこ とができます。

**重要:**診断出力量を増やすと、ご使用のデータベース・インスタンス・ファイル・シス テムでの性能低下とストレージ不足状態の両方の結果を招く可能性があります。この手 順は、追加診断の必要な問題のトラブルシューティングを行うときだけに使用する必要 があります。

# 関連資料:

- 管理ガイド: パフォーマンス の『Diagnostic Error Capture Level configuration parameter diaglevel』
- 管理ガイド: パフォーマンス の『Diagnostic Data Directory Path configuration parameter diagpath』

# データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロギングの変更 (AIX)

dlfs\_cfg ファイルを変更することによって、データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロギングを変更することができます。 dlfs\_cfg には、DLFF ドライバーをロードするのに使用される strload コマンドに対する入力となる構成パラ メーターが含まれています。このファイルは、/usr/opt/db2\_08\_01/cfg ディレクトリー の中にあります。シンボリック・リンクによって、ファイルは、/etc ディレクトリーで も見付けることができます。

#### 手順:

dlfs cfg ファイルは、次の形式になっています。

d <driver-name> <vfs number> <dlfm id> <dlfm write group id> <global message priority> <global module priority> - 0 1

ここで、

**d** ドライバーをロードすることを指定します。

#### driver-name

ロードするドライバーの絶対パス。たとえば、DB2 バージョン 8.1 の絶対パスは、/usr/opt/db2\_08\_01/bin/dlfsdrv です。ドライバー名は、dlfsdrv です。

# vfs number

/etc/vfs にある DLFS の vfs 項目

# dlfm id

Data Links Manager 管理者のユーザー ID。デフォルトでは、このユーザーの 名前 は、dlfm です。

## dlfm write group id

Data Links Manager 管理者が属する特別な書き込むグループの ID。デフォル トでは、このグループの名前 は、d1fmxgrp です。

## global message priority

DLFS ドライバー内の構成可能パラメーターであり、システム・ログ・ファイ ルに記録するドライバー・ルーチン、VFS 操作と Vnode 操作のリストを定義 します。

#### global module priority

DLFS ドライバー内の構成可能パラメーターであり、システム・ログ・ファイ ルに記録するメッセージ・カテゴリーのリストを定義します。

01 このドライバーの非クローン・ノードを作成するための小さな数。クローンされたドライバー・ノード名に小さな数を付加することによって、ノード名を作成します。4以下の小さな数を指定することができます(0-4)。

### 例:

d /usr/opt/db2\_08\_01/bin/dlfsdrv 14,208,210,255,-1 - 0 1

ログに記録されるメッセージは、グローバル・メッセージ優先順位とグローバル・モジ ュール優先順位の設定によって異なります。ロギングを最小化するために、グローバ ル・メッセージ優先順位の値を変更することができます。

次の 4 つのメッセージ優先順位値を使用することができます。

#define LOG\_EMERGENCY 0x01 #define LOG\_TRACING 0x02 #define LOG\_ERROR 0x04 #define LOG TROUBLESHOOT 0x08

DLFF のほとんどのメッセージは、メッセージ優先順位として LOG\_TROUBLESHOOT をもっています。以下に、いくつかの構成例を示します。

緊急メッセージとエラー・メッセージが必要な場合は、dlfs\_cfg 構成ファイルで、グロ ーバル・メッセージ優先順位を 5 (1+4) に設定します。

d /usr/opt/db2 08 01/bin/dlfsdrv 14,208,210,5,-1 - 0 1

エラー・メッセージだけが必要な場合は、グローバル・メッセージ優先順位を 4 に設定 します。

d /usr/opt/db2\_08\_01/bin/dlfsdrv 14,208,210,4,-1 - 0 1

DLFF のロギングが必要でない場合は、グローバル・メッセージ優先順位を 0 に設定します。

d /usr/opt/db2 08 01/bin/dlfsdrv 14,208,210,0,-1 - 0 1

#### 関連作業:

• 79 ページの『DLFF ドライバーをロードした後のメッセージのロギング (AIX)』

# DLFF ドライバーをロードした後のメッセージのロギング (AIX)

DLFF ドライバーをロードした後、緊急メッセージ、エラー・メッセージ、トラブルシ ューティング・メッセージをログに記録する必要がある場合は、dlfs\_cfg ファイルを特 別な値で変更する必要があります。 dlfs\_cfg ファイルは、/usr/opt/db2\_08\_01/cfg デ ィレクトリーにあります。

## 前提条件:

- すべてのデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS) がマウント解除されていなけ ればなりません
- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が実行されていてはいけません。
   手順:

DLFF ドライバーをロードした後、緊急メッセージ、エラー・メッセージ、トラブルシューティング・メッセージをログに記録するには、以下のようにします。

- 1. dlfsdrv カーネル拡張機能をアンロードします。
- dlfs\_cfg ファイルのグローバル・メッセージ優先順位を以下のいずれかに変更します。
  - 255 (最大優先順位)
  - 13 (8+4+1)。優先順位を 13 (8+4+1) に設定すると、緊急、エラー、トラブルシュ ーティングの情報がログに記録されるようになります。
- 3. 新しい優先順位の値をロード時に設定するには、dlfsdrv ドライバーを再ロードします。
- 4. すべての DLFS フィルター・ファイル・システムをもう一度マウントします。

**重要**: dlfs\_cfg ファイルをもう一度変更して、再ロードするまでは、dlfs\_cfg の設定 は、それ以後 dlfsdrv ドライバーをロードするときは同じままです。

#### 関連作業:

 77 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロ ギングの変更 (AIX)』

# データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロギングの最小化 (Solaris オペレーティング環境)

/etc/syslog.conf ファイルを変更することによって、データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロギングを最小化することができます。 /etc/syslog.conf には、システム・ログ・デーモン syslogd が、システム・メッセージを適切なログ・ファイルに転送するときに使用する情報が含まれています。

#### 手順:

DLFF 処理のロギングを減らすには、次のようにします。

- /etc/syslog.conf ファイルの kern.notice および kern.debug の項目をコメント化します。
- 2. syslogd デーモンを停止してから再始動します。

再び、すべてのカーネルの通知とエラーをログに記録しなければならなくなった場合 は、/etc/syslog.conf ファイルの kern.notice および kern.debug の項目のコメント化 を解除します。 syslogd デーモンを停止してから再始動します。

# データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロギングの変更 (Windows オペレーティング・システム)

dlff set loglevel コマンドを使用して、データ・リンク・ファイル・システム・フィル ター (DLFF) 処理のロギングを変更することができます。dlff set loglevel コマンドを 使用すると、すべての DLFS ファイル・ログのメッセージ重大度をカスタマイズするこ とができます。メッセージは、Windows のシステム・ログに入れられます。

#### 前提条件:

dlff get loglevel コマンドで、現行のメッセージ重大度をチェックします。

#### 手順:

データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) のロギングを変更するに は、次のようにします。

1. DLFF を使用可能なドライブで Windows の「コマンド プロンプト」を開きます。

- 2. コマンド dlff set loglevel x を入力します。ここで、x は、メッセージ重大度レ ベルを設定する、0 から 3 までの数です。
- 3. 変更を有効にするには、dlff refreshtrace コマンドを実行します。

# DLFF 使用可能ファイル・システムの異なるハード・ディスクへの移行 — 概要

データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) プログラムで使用可能なフ ァイル・システムは、あるハード・ディスクから別のハード・ディスクに移行すること ができます。データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) を別のハード・ディスクに 移行する理由として、次のような場合が考えられます。

- 同じマシン上の別のハード・ディスクに移動する場合。たとえば、1 つまたは複数の データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) を、同じマシンにすでに存在してい る、別の、より大きいハード・ディスクに移す必要がある場合があります。
- 現行のハード・ディスクを置き換える場合。たとえば、現行のハード・ディスクを新 規ハード・ディスクに置き換える場合などです。すべての DLFS が、新規ハード・デ ィスクに移動します。

ソース・ハード・ディスクは、DLFS が現在存在しているハード・ディスクです。ター ゲット・ハード・ディスクは、既存のハード・ディスクまたは新規ハード・ディスクで す。

DLFS をある DLFM サーバーから別の DLFM サーバーに移動することはできません。

DLFS をあるハード・ディスクから別のハード・ディスクに移行する手順は、オペレー ティング・システムによって異なります。ただし、異なるハード・ディスクに移行する 場合には、次の基本作業が必要です。

- 1. ファイル・サーバーで、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) を停止 します。
- 2. ご使用になっているオペレーティング・システムで管理タスクを実行する際に必要 な権限を持つユーザー ID でログオンします。
- 3. DLFS が存在するソース・ドライブで、ファイル・システム ID 値 (UNIX システム) または共有名 (Windows システム) を決定します。
- 4. 移行する DLFS をアンマウントします (UNIX システムのみ)。
- 5. DLFS の内容をソース・ハード・ディスクからターゲット・ハード・ディスクにコ ピーします。
  - DLFS を同じマシンにある既存のハード・ディスクに移動する場合は、データを 受信するターゲット・ハード・ディスク上にロケーションを準備します。その 後、DLFS の内容をターゲット・ハード・ディスク上のロケーションにコピーし ます。
  - ソース・ハード・ディスクを置き換える場合には、次のようにします。

- a. DLFS の内容をソース・ハード・ディスクからテープにコピーします。
- b. データを受信するターゲット・ハード・ディスク上にロケーションを準備します。
- c. DLFS の内容をテープからターゲット・ハード・ディスク上のロケーションに コピーします。
- 6. 新規ファイル・システムを Data Links 使用可能ファイル・システムとしてマウン トし、ファイル・システム ID 値をチェックします (UNIX システムのみ)。
- DLFF 制御下にリストされているドライブを更新し、ドライブ共有名を変更します (Windows システムのみ)。
- 8. Data Links Manager 管理者権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログオン します。
- 9. Data Links File Manager (DLFM) を開始します。
- 各ホスト・データベースごとのホスト・データベース・マシンで、db2\_recon\_aid ユ ーティリティーを実行します。このユーティリティーは、データベース表をチェッ クし、ファイル・サーバー上の DATALINK ファイル・データと矛盾している可能 性がある表に対して RECONCILE を実行します。

## 関連作業:

- 82 ページの『DLFS の異なるハード・ディスクへの移行 (AIX)』
- 86 ページの『DLFS の異なるハード・ディスクへの移行 (Solaris オペレーティング 環境)』
- 90 ページの『DLFS の異なるドライブへの移行 (Windows)』

# 異なるハード・ディスクへの DLFS の移動: 詳細

Data Links File System (DLFS) を異なるハード・ディスクに移動する場合、DLFS があ るオペレーティング・システムによって方法は異なります。以下のセクションでは、 AIX、Solaris オペレーティング環境および Windows オペレーティング・システム (OS) について、DLFS を異なるハード・ディスクに移動するために必要な特有なステップに ついて説明しています。

# DLFS の異なるハード・ディスクへの移行 (AIX)

AIX では、各データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) が 1 つの論理ボリューム にマップされます。論理ボリュームは、単一のハード・ディスクに単独で存在すること も、複数のハード・ディスクに分かれて存在することも可能です。DLFS をあるハー ド・ディスクから別のハード・ディスクに移動する場合には、論理ボリューム全体を移 動する必要があります。

DLFS を、同じマシンに既に存在している別のハード・ディスクに移動することも、現 行のハード・ディスクを置き換えるハード・ディスクに移動することもできます。

#### 前提条件:

DLFS を移動するには、root 権限が必要です。

# 手順:

この手順では、/dlfsfs という名前の DLFS が、論理ボリューム /dev/dlfslv にマッ プされていると想定します。コマンドは、オペレーティング・システムのコマンド・プ ロンプトから入力します。

/dlfsfs DLFS を異なるハード・ディスクに移動するには、次のステップに従ってくだ さい。

- 1. DLFS が含まれているハード・ディスク (またはディスク) が現在存在している DLFS サーバーで、dlfm stop コマンドを実行して、Data Links File Manager (DLFM) を停止します。
- 2. root 権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログオンします。
- 3. 移動する DLFS のファイル・システム ID (fsid) 値を入手します。
  - a. Is コマンドを実行して、/dlfsfs にマウントされる論理ボリュームのメジャーお よびマイナー番号をリストします。Is コマンドを次のフォーマットで使用しま す。

ls -1 /dev/dlfslv | awk '{print "major " \$5,"minor " \$6}'

/dev/dlfslv は、ファイル・システム /dlfsfs に対応する論理ボリュームです。 メジャーおよびマイナー番号が画面に表示されます。

- b. メジャー番号およびマイナー番号を 16 進形式に変換します。たとえば、メジャー番号が 10 でマイナー番号が 9 である場合、10 の 16 進数は 000a で 9 の 16 進数は 0009 になります。
- c. マイナー番号の 16 進数をメジャー番号の 16 進数に追加します。これが、ファ イル・システム ID 値になります。前述の例では、ファイル・システム ID 値は 000a0009 になります。この値は、10 進数の 655369 と同じです。
- 4. umount コマンドを使用して、ソース・ハード・ディスクから移動したい DLFS を アンマウントします。たとえば、次のようにします。

umount /dlfsfs

- 5. DLFS の内容をソース・ハード・ディスク上の論理ボリュームからターゲット・ハード・ディスクにコピーします。新規論理ボリュームのサイズは、元の論理ボリュームのサイズと同じか、またはより大きくなければなりません。内容をコピーする手順は、ターゲット・ハード・ディスクの状況によって異なります。
  - ターゲット・ハード・ディスクがソース・ハード・ディスクと同じマシンにある 場合は、dd コマンドを実行して、元の論理ボリュームの内容を新規論理ボリュー ムにコピーします。たとえば、新規論理ボリュームが /dev/newdlfslv の場合、 コマンド構文は次のようになります。

/usr/bin/dd if=/dev/dlfslv of=/dev/newdlfslv

制約事項: ソース・ハード・ディスクとターゲット・ハード・ディスクの両方が同 じマシンに接続されている場合、新規論理ボリュームを元の論理ボリュームと同 じファイル・システム ID 値にすることはできません。

- ターゲット・ハード・ディスクがソース・ハード・ディスクを置き換える場合には、次のようにします。
  - a. 元の論理ボリュームの内容をテープにコピーします。**dd** コマンドを次の構文 で使用します。

/usr/bin/dd if=/dev/dlfslv of=/dev/rmt0 bs=512b

- b. ソース・ハード・ディスクをターゲット・ハード・ディスクに置き換えます。
- c. 標準構成を使用して、ターゲット・ハード・ディスクを構成します。
- d. ターゲット・ハード・ディスク上に新規論理ボリュームを作成します。この例 では、新規ボリュームは /dev/newdlfslv です。

**推奨:** 新規論理ボリュームのメジャー番号およびマイナー番号が、元の論理ボ リュームの番号と同じであれば、移行時間がかなり削減されます。mkvg コマ ンドに -V オプションを指定して、新規ボリューム・グループを作成すること ができます。次に、このボリューム・グループに論理ボリュームを作成しま す。マイナー番号を事前定義して論理ボリュームを作成するオプションはあり ません。そのようにするには、古いボリューム・グループで表示された順序で 論理ボリュームを作成する必要があります。mkvg および mklv コマンドにつ いて詳しくは、AIX コマンド解説書を参照してください。

e. 元の論理ボリュームの内容をテープからターゲット・ハード・ディスクにある 新規論理ボリュームにコピーします。たとえば、次のようにします。

/usr/bin/dd if=/dev/rmt0 of=/dev/newdlfslv bs=512b

- 6. 使用したいファイル・システム・マウント・ポイントを指定します。
  - 同じファイル・システム・マウント・ポイントを維持したい場合は、ファイル・ サーバーにある /etc/filesystems ファイルの DLFS のファイル・システム・エ ントリーを変更します。装置名の値を元の論理ボリュームから新規論理ボリュー ム名に変更します。
  - ファイル・システム・マウント・ポイントを変更して、別のファイル・システム・マウント・ポイントを使用する場合は、ファイル・サーバーにある /etc/filesystems ファイルから元のファイル・システム・エントリーを除去します。その後、DLFM\_DB データベースの接頭部名エントリーを変更します。
    - a. Data Links Manager 管理者権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログ オンします。
    - b. 移行する各ファイル・システムごとに、DLFM ファイル・サーバーで dlfm\_migrate\_prefix ユーティリティーを実行します。たとえば、元の DLFS の 名前が /dlfsfs で、新規 DLFS の名前が /dlfsfsnew である場合、 dlfm\_migrate\_prefix ユーティリティーの構文は、次のようになります。

dlfm\_migrate\_prefix /dlfsfs /dlfsfsnew amit

ここで、*amit* は、DLFM データベース・インスタンスの所有者 ID です。 Data Links Manager のインストール時のデフォルトの DLFM データベース・ インスタンスの所有者 ID は d1fm です。

dlfm\_migrate\_prefix ユーティリティーのパラメーター構文を表示するには、パ ラメーターを指定しないでユーティリティーを実行します。たとえば、次のよ うにします。

dlfm\_migrate\_prefix

- c. root 権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログオンします。
- d. dlfmfsmd スクリプトを実行して、新規ファイル・システムを使用可能にしま す。たとえば、次のようにします。

/usr/opt/db2\_08\_01/instance/dlfmfsmd dlfm\_mountpoint

ここで、*dlfm\_mountpoint* は、新規 DLFS のファイル・システム・マウント・ ポイントです。たとえば /dlfsfsnew のようになります。

 ファイル・システムがまだマウントされていない場合は、Data Links Manager を使 用可能なファイル・システムとしてマウントします。たとえば、マウント・ポイント を /dlfsfsnew に変更した場合、構文は次のようになります。

mount -v dlfs /dlfsfsnew

- ファイル・システム ID (fsid) をチェックします。新規論理ボリュームのメジャーお よびマイナー番号が元の論理ボリュームの番号と違う場合、fsid は異なります。ステ ップ 3 および 5 を参照してください。
  - 新規論理ボリュームのメジャーおよびマイナー番号が元の論理ボリュームと同じ 場合は、ステップ 9 に進みます。
  - 新規論理ボリュームのメジャーおよびマイナー番号が元の論理ボリュームの番号 と異なる場合は、DLFM\_DB データベースのファイル・システム ID (fsid) エント リーを更新します。
    - a. Data Links Manager 管理者権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログ オンします。
    - b. 移行された各ファイル・システムごとに、DLFM ファイル・サーバーで dlfm\_migrate\_fsid ユーティリティーを実行します。

dlfm\_migrate\_fsid ユーティリティーのパラメーター構文を表示するには、パラ メーターを指定しないでユーティリティーを実行します。たとえば、新規 DLFS の名前が /dlfsfsnew である場合、dlfm\_migrate\_fsid ユーティリティー の構文は、次のようになります。

dlfm migrate fsid /dlfsfsnew amit

ここで、*amit* は、DLFM データベース・インスタンスの所有者 ID です。 Data Links Manager のインストール時のデフォルトの DLFM データベース・ インスタンスの所有者 ID は d1fm です。

9. dlfm start コマンドを実行して、Data Links File Manager (DLFM) を開始します。

DLFM サーバーで以上のステップを完了した後、各ホスト・データベースのホスト・デ ータベース・マシンごとに db2\_recon\_aid ユーティリティーを実行します。 db2\_recon\_aid ユーティリティーには、データベース表をチェックして、ファイル・サー バー上の DATALINK ファイル・データと矛盾する可能性のあるデータベース表に対し て RECONCILE を実行するメカニズムが備わっています。

AIX システムでは、db2\_recon\_aid ユーティリティーは、INSTHOME/sqllib/adm ディレ クトリーにあります。ここで、INSTHOME は、インスタンス所有者のホーム・ディレクト リーです。db2\_recon\_aid 構文の例は、次のとおりです。

db2\_recon\_aid -db abc -selective -server udbnew.in.ibm.com -reportdir /home/amit/changedsk/reports -prefixes /dlfsfs1:/dlfsfs2

db2\_recon\_aid ユーティリティーのパラメーター構文を表示するには、パラメーターを指 定しないでユーティリティーを実行します。たとえば、次のようにします。

db2\_recon\_aid

#### 関連作業:

• 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

## 関連資料:

- コマンド・リファレンスの『db2\_recon\_aid 複数の表の RECONCILE コマンド』
- 150 ページの『db2\_recon\_aid ユーティリティー』

# DLFS の異なるハード・ディスクへの移行 (Solaris オペレーティング環境)

Solaris オペレーティング環境では、各データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) が 1 つのハード・ディスク・スライスにマップされます。DLFS を、同じマシンに既に存 在している別のハード・ディスクに移動することも、現行のハード・ディスクを置き換 えるハード・ディスクに移動することもできます。

# 前提条件:

DLFS を移動するには、root 権限が必要です。

#### 手順:

この手順では、/dlfsfs という名前の DLFS が、ハード・ディスク・スライス /dev/dsk/c0t0d0s5 にマップされていると想定します。コマンドは、オペレーティン グ・システムのコマンド・プロンプトから入力します。

/dlfsfs DLFS を異なるハード・ディスクに移動するには、次のステップに従ってくだ さい。

- 1. DLFS が含まれているハード・ディスクが現在存在している DLFS サーバーで、 dlfm stop コマンドを実行して、Data Links File Manager (DLFM) を停止します。
- 2. root 権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログオンします。
- 3. df コマンドを実行して、移動する DLFS のファイル・システム ID (fsid) 値を入手 します。df コマンドを次のフォーマットで使用します。

df -g /dlfsfs | grep filesys | awk {'print "fsid: "\$4'}

/dlfsfs は、ハード・ディスク・スライス /dev/dsk/c0t0d0s5 に対応するファイル・ システムです。

ファイル・システム ID (fsid) 値が画面に表示されます。fsid 値は、たとえば 8388671 のようになります。

- umount コマンドを使用して、ソース・ハード・ディスクから移動したい DLFS を アンマウントします。たとえば、次のようにします。 umount /dlfsfs
- 5. DLFS の内容をソース・ハード・ディスク上のハード・ディスク・スライスからター ゲット・ハード・ディスクにコピーします。新規ハード・ディスク・スライスのサイ ズは、元のハード・ディスク・スライスのサイズと同じか、またはより大きくなけれ ばなりません。内容をコピーする手順は、ターゲット・ハード・ディスクの状況によ って異なります。
  - ターゲット・ハード・ディスクがソース・ハード・ディスクと同じマシンに存在 している場合は、dd コマンドを実行して、元のハード・ディスク・スライスの内 容を新規ハード・ディスク・スライスにコピーします。たとえば、新規ハード・ ディスク・スライスが /dev/dsk/c0t8d0s5 の場合、コマンド構文は次のようにな ります。

/usr/bin/dd if=/dev/dsk/c0t0d0s5 of=/dev/dsk/c0t4d0s5

制約事項: ソース・ハード・ディスクとターゲット・ハード・ディスクの両方が同 じマシンに接続されている場合、新規ハード・ディスク・スライスを元のハー ド・ディスク・スライスと同じファイル・システム ID 値にすることはできません。

- ターゲット・ハード・ディスクがソース・ハード・ディスクを置き換える場合には、次のようにします。
  - a. 元のハード・ディスク・スライスの内容をテープにコピーします。**dd** コマン ドを次の構文で使用します。

/usr/bin/dd if=/dev/dsk/c0t0d0s5 of=/dev/rmt0 bs=512b

- b. ソース・ハード・ディスクをターゲット・ハード・ディスクに置き換えます。
- c. 標準構成を使用して、ターゲット・ハード・ディスクを構成します。
- d. 元のハード・ディスク・スライスの内容をテープからターゲット・ハード・ディスクにある新規ハード・ディスク・スライスにコピーします。たとえば、次のようにします。

/usr/bin/dd if=/dev/rmt0 of=/dev/dsk/c0t4d0s5 bs=512b

- 6. 使用したいファイル・システム・マウント・ポイントを指定します。
  - 同じファイル・システム・マウント・ポイントを維持したい場合は、ファイル・ サーバーにある /etc/vfstab ファイルの DLFS のファイル・システム・エントリ ーを変更します。装置名の値を元のディスク・スライス名から新規ディスク・ス ライス名に変更します。
  - ファイル・システム・マウント・ポイントを変更して、別のファイル・システム・マウント・ポイントを使用する場合は、ファイル・サーバーにある /etc/vfstab ファイルから元のファイル・システム・エントリーを除去します。 その後、DLFM\_DB データベースの接頭部名エントリーを変更します。
    - a. Data Links Manager 管理者権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログ オンします。
    - b. 移行する各ファイル・システムごとに、DLFM ファイル・サーバーで dlfm\_migrate\_prefix ユーティリティーを実行します。たとえば、元の DLFS の 名前が /dlfsfs で、新規 DLFS の名前が /dlfsfsnew である場合、 dlfm\_migrate\_prefix ユーティリティーの構文は、次のようになります。

dlfm\_migrate\_prefix /dlfsfs /dlfsfsnew amit

ここで、*amit* は、DLFM データベース・インスタンスの所有者 ID です。 Data Links Manager のインストール時のデフォルトの DLFM データベース・ インスタンスの所有者 ID は d1fm です。

dlfm\_migrate\_prefix ユーティリティーのパラメーター構文を表示するには、パ ラメーターを指定しないでユーティリティーを実行します。たとえば、次のよ うにします。

dlfm migrate prefix

- c. root 権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログオンします。
- d. **dlfmfsmd** スクリプトを実行して、新規ファイル・システムを使用可能にしま す。たとえば、次のようにします。

/opt/IBM/db2/V8.1/int/instance/dlfmfsmd dlfm\_mountpoint

ここで、*dlfm\_mountpoint* は、新規 DLFS のファイル・システム・マウント・ ポイントです。たとえば /dlfsfsnew のようになります。  ファイル・システムがまだマウントされていない場合は、Data Links Manager を使 用可能なファイル・システムとしてマウントします。たとえば、マウント・ポイント を /dlfsfsnew に変更した場合、構文は次のようになります。

mount /dlfsfsnew

- 8. ファイル・システム ID (fsid) をチェックします。fsid のチェック方法について詳し くは、ステップ 3 を参照してください。
  - 新規ディスク・スライスが元のディスク・スライスと同じ fsid である場合は、ステップ9 に進みます。
  - 新規ディスク・スライスが元のディスク・スライスと異なる fsid である場合は、 DLFM\_DB データベースの fsid エントリーを更新します。
    - a. Data Links Manager 管理者権限を持つユーザーとして DLFM サーバーにログ オンします。
    - b. 移行された各ファイル・システムごとに、DLFM ファイル・サーバーで dlfm\_migrate\_fsid ユーティリティーを実行します。

dlfm\_migrate\_fsid ユーティリティーのパラメーター構文を表示するには、パラ メーターを指定しないでユーティリティーを実行します。たとえば、新規 DLFS の名前が /dlfsfsnew である場合、dlfm\_migrate\_fsid ユーティリティー の構文は、次のようになります。

dlfm\_migrate\_fsid /dlfsfsnew amit

ここで、*amit* は、DLFM データベース・インスタンスの所有者 ID です。 Data Links Manager のインストール時のデフォルトの DLFM データベース・ インスタンスの所有者 ID は d1fm です。

9. dlfm start コマンドを実行して、Data Links File Manager (DLFM) を開始します。

DLFM サーバーで以上のステップを完了した後、各ホスト・データベースのホスト・デ ータベース・マシンごとに db2\_recon\_aid ユーティリティーを実行します。 db2\_recon\_aid ユーティリティーには、データベース表をチェックして、ファイル・サー バー上の DATALINK ファイル・データと矛盾する可能性のあるデータベース表に対し て RECONCILE を実行するメカニズムが備わっています。

Solaris オペレーティング環境では、db2\_recon\_aid ユーティリティーは、 INSTHOME/sqllib/adm ディレクトリーにあります。INSTHOME は、インスタンス所有者の ホーム・ディレクトリーです。db2\_recon\_aid 構文の例は、次のとおりです。

```
db2_recon_aid -db abc
-selective
-server udbnew.in.ibm.com
-reportdir /home/amit/changedsk/reports
-prefixes /dlfsfs1:/dlfsfs2
```

db2\_recon\_aid ユーティリティーのパラメーター構文を表示するには、パラメーターを指 定しないでユーティリティーを実行します。たとえば、次のようにします。 db2 recon aid

# 関連作業:

• 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

## 関連資料:

- コマンド・リファレンス の『db2\_recon\_aid 複数の表の RECONCILE コマンド』
- 150 ページの『db2\_recon\_aid ユーティリティー』

# DLFS の異なるドライブへの移行 (Windows)

Windows では、DLFS を、同じマシンに既に存在している別のドライブに移動すること も、現行のディスク・ドライブを置き換える新規ディスク・ドライブに移動することも できます。

# 前提条件:

DLFS を移動するには、Windows の管理者権限が必要です。

#### 手順:

この手順では、DLFS が D.¥ ディスク・ドライブに存在し、このディスク・ドライブの 共有名が dl\_drive であると想定します。コマンドは、オペレーティング・システムの 「コマンド プロンプト」から入力します。

DLFS を異なるハード・ディスクに移動するには、次のステップに従ってください。

- 1. DLFS が含まれているディスク・ドライブが現在存在している DLFS サーバーで、 dlfm stop コマンドを実行して、Data Links File Manager (DLFM) を停止します。
- 2. 管理者ユーザー ID を使用して DLFM サーバーにログオンします。
- 3. DLFS があるソース・ディスク・ドライブの共有名を、次のようにして入手します。
  - a. dlff list コマンドを使用して、DLFF の制御下にあるすべての論理ドライブをリ ストします。たとえば、次のように入力します。

x:\PROGRA~1\IBM\SQLLIB\BIN>dlff list

ここで、*x*: は、**¥SQLLIB¥BIN** ディレクトリーがインストールされているドライブ です。このコマンドの出力は、次のようになります。

LogicalDrives = d:;m:

b. **net share** コマンドを使用して、共有されるリソースをリストします。たとえ ば、次のように入力します。

x:\PROGRA~1\FIBMFSQLLIBFBIN>net share

ここで、x: は、 $\pm$ SQLLIB $\pm$ BIN ディレクトリーがインストールされているドライブです。

- 4. DLFS の内容をソース・ディスク・ドライブからターゲット・ディスク・ドライブに コピーします。新規ディスク・ドライブのサイズは、元のディスク・ドライブのサイ ズと同じか、またはより大きくなければなりません。ターゲット・ディスク・ドライ ブの共有名は、元のディスク・ドライブによって使用されていた共有名と同じ共有名 に変更する必要があります。内容をコピーする手順は、ターゲット・ディスク・ドラ イブの状況によって異なります。
  - ターゲット・ディスク・ドライブがソース・ディスク・ドライブと同じマシンに ある場合は、SCOPY コマンドを使用して、元のディスク・ドライブの内容を新 規ディスク・ドライブにコピーします。たとえば、DLFS を D:¥ ドライブから E:¥ ドライブにコピーする場合、コマンド構文は次のようになります。

SCOPY D:¥ E:¥ /o /a /s

**注:** Windows 2000 では、代わりに XCOPY コマンドを使用できます。コマンド 構文は、次のとおりです。

XCOPY D:¥ E:¥ /x /o /s

- ターゲット・ディスク・ドライブがソース・ディスク・ドライブを置き換える場合には、次のようにします。
  - a. バックアップ・ユーティリティーを使用して、元のディスク・ドライブの内容 をテープにコピーします。Windows NT の場合、このユーティリティーは「管 理ツール」にあります。Windows 2000 の場合、このユーティリティーは、 「アクセサリー」 ―> 「システム ツール」にあります。
  - b. ソース・ディスク・ドライブをターゲット・ディスク・ドライブに置き換えま す。
  - c. 標準構成を使用して、ターゲット・ディスク・ドライブを構成します。
  - d. 新規ディスク・ドライブ上に論理ドライブを作成して、フォーマットします。
  - e. テープにコピーした DLFS の内容を、「管理ツール」にあるバックアップ・ユ ーティリティーを使用して、新規ドライブにリストアします。
- 5. DLFF の制御下にあるドライブのリストから、元のドライブを除去します。たとえ ば、次のようにします。

DLFF remove D:

- DLFF の制御下にあるドライブのリストに、新規ドライブ名を追加します。たとえば、新規ドライブが E:¥ である場合、コマンドは次のようになります。
   DLFF add E:
- 元のディスク・ドライブの共有名を他の名前に変更します。たとえば、元のディス ク・ドライブが D:¥ で共有名が dl\_drive であるとします。この場合、共有名を d\_drive に変更するには、次のようにします。
  - a. D:¥ ドライブで元の共有名を削除します。たとえば、次のように入力します。

net share dl drive /DELETE

b. 新規共有名 d\_drive を D:¥ ドライブに割り当てます。たとえば、次のように入力 します。

net share d drive=d:

 新規ディスク・ドライブを、元のディスク・ドライブで使用していた共有名に割り当 てます。たとえば、元の共有名が dl\_drive で新規ディスク・ドライブが E:¥ であ るとします。共有名 dl\_drive を E:¥ ディスク・ドライブに割り当てるには、次の ように入力します。

net share dl\_drive=e:

マシンをリブートして、Data Links Manager 管理者ユーザー ID を使用してログオンします。Data Links File Manager (DLFM) を開始します。
 dlfm start

DLFM サーバーで以上のステップを完了した後、各ホスト・データベースのホスト・デ ータベース・マシンごとに db2\_recon\_aid ユーティリティーを実行します。 db2\_recon\_aid ユーティリティーには、データベース表をチェックして、ファイル・サー バー上の DATALINK ファイル・データと矛盾する可能性のあるデータベース表に対し て RECONCILE を実行するメカニズムが備わっています。

Windows システムでは、db2\_recon\_aid ユーティリティーは、x:¥sqllib¥bin ディレクトリーにあります。ここで、x: は、DB2 Data Links Manager をインストールしたドライブです。DB2 サーバーも Windows 上にある場合、db2\_recon\_aid 構文の例は、次のとおりです。

db2\_recon\_aid -db mydb
-selective
-server dlserver.in.ibm.com
-reportdir c:¥reports
-prefixes ¥dl drive1:¥dl drive2

db2\_recon\_aid ユーティリティーのパラメーター構文を表示するには、パラメーターを指 定しないでユーティリティーを実行します。たとえば、次のようにします。

db2\_recon\_aid

#### 関連概念:

• 93 ページの『SCOPY と COPY の比較』

#### 関連資料:

- コマンド・リファレンス の『db2\_recon\_aid 複数の表の RECONCILE コマンド』
- 150 ページの『db2\_recon\_aid ユーティリティー』

# COPY の代わりに SCOPY を使用する

このセクションでは、DLFS を異なるディスクに移動する際に使用できる Windows の コピー・ユーティリティーについて説明します。

# SCOPY と COPY の比較

Windows<sup>®</sup> では、ファイルのコピーに関して多数のユーティリティーが用意されていま す。DLFS が別のディスク・ドライブに移行された後、正しく機能するために、DLFS セキュリティー情報をそのまま残しておく必要があります。

制約事項: コピーされるドライブに、ユーザー許可が SYSTEM に設定されているディ レクトリーが含まれている場合、それらのディレクトリーについては、コピー操作が失 敗します。コピー操作が正常に行われるようにするには、これらのディレクトリーのユ ーザー許可に ADMINISTRATOR 権限を追加する必要があります。

Windows NT の場合は、SCOPY ユーティリティーを使用します。このユーティリティ ーは、セキュリティー・アクセス制御リスト (ACL) をそのままにして、NTFS パーテ ィション間でファイルおよびディレクトリーをコピーします。Windows NT では、 COPY および XCOPY ユーティリティーは、NTFS 内で固有のセキュリティー情報を転 送しません。SCOPY ユーティリティーは、Windows NT<sup>®</sup> 「リソース キット」に組み 込まれています。

SCOPY ユーティリティーには、所有者のセキュリティー情報、監査情報、およびサブ ディレクトリー内のすべてのファイルをコピーすることができる多数のパラメーターが あります。SCOPY ユーティリティーを使用する場合には、コピー元とコピー先の両方 のディスク・ドライブにおいて、ファイルのバックアップおよびリストアに関するユー ザー権限を持っている必要があります。SCOPY 構文の例は、次のとおりです。

SCOPY <source> <destination> /o /a /s

ここで、

<source>

コピーするファイルを指定します。

#### <destination>

ファイルのコピー先を指定します。

- **/o** 所有者のセキュリティー情報をコピーします。
- /a 監査情報をコピーします。このパラメーターを指定する場合には、コピー元と コピー先の両方のディスク・ドライブにおいて、監査管理ユーザー権限を持っ ている必要があります。
- **/s** サブディレクトリー内のすべてのファイルをコピーします。

Windows 2000 の場合は、SCOPY ユーティリティーまたは XCOPY ユーティリティー を使用できます。 XCOPY ユーティリティーを使用して DLFS セキュリティー情報を そのままにしておく場合、正しい構文は次のようになります。

XCOPY <source> <destination> /o /x /s

ここで、

### <source>

コピーするファイルを指定します。

## <destination>

ファイルのコピー先を指定します。

- /o ACL 情報をコピーします。
- /x 監査情報をコピーします。このパラメーターを指定する場合には、コピー元と コピー先の両方のディスク・ドライブにおいて、監査管理ユーザー権限を持っ ている必要があります。
- **/s** サブディレクトリー内のすべてのファイルをコピーします。

#### 関連作業:

• 90 ページの『DLFS の異なるドライブへの移行 (Windows)』

# アーカイブ・サーバー・バックアップ・ファイル情報の検索

この手順では、アーカイブ・サーバーにバックアップされたファイルのリストおよびそ れらの各ファイルの状況を検索する方法について説明しています。

# 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

#### 手順:

アーカイブ・サーバーにバックアップされたファイルのリストを検索するには、以下の ようにします。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者としてシステムにログオンします。
- 2. 次の構文を使用して、dlfm retrieve コマンドを入力します。

dlfm retrieve -o output\_file -h hostname -d database\_name -i instance\_name -p registered\_prefix

ここで、

- *output\_file* は、コマンド出力を書き込みたいファイルの名前です。指定しない場合は、出力は画面に行きます。
- hostname は、DB2 ホスト・サーバーのホスト名です。
- database\_name は、アーカイブ・サーバーにバックアップされたファイルに対する DATALINK 列参照を含むデータベースの名前です。
- instance\_name は、指定したデータベースがあるインスタンスの名前です。 instance\_name 値には大文字小文字の区別があります。
- registered\_prefix は、dlfm add\_prefix コマンドを使用して登録されたファイル・ システムのパスです。

パラメーターなしに dlfm retrieve コマンドを入力すると、これらのパラメーター を入力するようにシステムから促されます。パラメーターを入力しないと、このコマ ンドは、次のような出力を生成します。

```
Using default datalinks server database dlfm db.
Please make your choice of hosts registered with DLFM.
0
        ARROW.TOROLAB.IBM.COM
Enter the number
Please make your choice of the database/instance.
0
        TSTDB001 regress ARROW.TOROLAB.IBM.COM
1
        TSTDB002
                         regress ARROW.TOROLAB.IBM.COM
2
        TSTDB003
                         regress ARROW.TOROLAB.IBM.COM
3
        TSTDB004
                         regress ARROW.TOROLAB.IBM.COM
Δ
        TSTDB005
                         regress ARROW.TOROLAB.IBM.COM
Enter the number
Please make your choice of the prefix Name.
0
        \dlfstest\
Enter the number
RETRIEVE QUERY OUTPUT
The following files were backed up from database TSTDB001, on host
ARROW.TOROLAB.IBM.COM from the instance regress
-----
Copy Status Link Status Operation time File Name
_____
                      2000-06-03-13.26.49.586476
E1
               L
                                                          \dlfstest\fileA1
              L
L
L
                       2000-06-03-13.26.50.243762
2000-06-03-13.25.55.345240
2000-06-03-13.27.03.034247
E1
                                                          \dlfstest\fileA2
E1
                                                           \dlfstest\fileA3
E1
                                                           \dlfstest\fileA31
               L
E1
              L 2000-06-03-13.27.03.937676

L 2000-06-03-13.25.56.176132

L 2000-06-03-13.25.56.961493

L 2000-06-03-13.25.58.424379

L 2000-06-03-13.25.59.126102

L 2000-06-03-13.26.51.973211

L 2000-06-03-13.26.52.623260

L 2000-06-03-13.26.53.278827
                        2000-06-03-13.27.03.937676
                                                           \dlfstest\fileA32
E1
                                                           \dlfstest\fileA4
F1
                                                           \dlfstest\fileA5
E1
                                                           \dlfstest\fileB1
E1
                                                           \dlfstest\fileB2
F1
                                                           \dlfstest\fileB3
E1
                                                           \dlfstest\fileB4
E1
                                                           \dlfstest\fileB5
Legend:
L - Linked
U - Unlinked
G - File to be garbage collected
E1 - Marked Copied and in backup
E2 - Marked Copied and not in backup
E3 - Marked To be Copied and not in backup
E4 - Marked To be copied but in backup
*****
```

### 関連資料:

210 ページの『dlfm retrieve コマンド』

# 第4章 セキュリティー

本章では、Data Links Manager のセキュリティー機能とそのインプリメントの方法について解説します。

# Data Links Manager のセキュリティーの概要

DB2<sup>®</sup> Data Links Manager を使用する重要な利点の 1 つにデータ・セキュリティーが あります。Data Links Manager には、リンクされたファイルへのアクセスを保護するこ とのできる、カスタマイズ可能な組み込みセキュリティー機能があります。

**重要**: Data Links Manager のどのようなデータ・アクセス・セキュリティー機能を使用 した場合でも、スーパーユーザーは、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) の、すべてのファイル操作を含めたすべての処理を実行することができます。 AIX<sup>®</sup> お よび Solaris オペレーティング環境では、root がスーパーユーザーです。Windows<sup>®</sup> NT および Windows 2000 の稼働環境では、dlmadmin アカウントがスーパーユーザーで す。 Data Links Manager 管理者は、スーパーユーザー ID でログインするときは、実 行する処理に注意する必要があります。特に DLFS では、Data Links Manager 環境で 非常に重要なさまざまなデータ保全性のコントロールや通常操作をう回することができ ます。ただし、状況によっては、スーパーユーザーでも特定の機能を実行できない場合 があります (たとえば、DLFM が稼動していないときにディレクトリーを作成する、あ るいは、ディレクトリーの名前変更のような、リンクされたファイルの参照保全を著し く損なう可能性のある処理を試みる、など)。

### 関連概念:

- 97 ページの『組み込みセキュリティーの機能』
- 98 ページの『データ・アクセス・セキュリティー機能』
- 99 ページの『リンクされたファイルの基本セキュリティー管理』
- 101 ページの『高度なファイル管理セキュリティー機能』
- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
- 107 ページの『読み取り操作のセキュリティー』
- 108 ページの『書き込み操作のセキュリティー』
- 110 ページの『リンクされたファイルの更新についてのセキュリティー問題』

# 組み込みセキュリティーの機能

次のセキュリティー機能はすべてのインストール・システムで使用することができま す。これらの機能を変更したり、使用不可にすることはできません。

- データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) アプリケーション・セキュリティー DLFM アプリケーションは、DB2<sup>®</sup> データベースを使用して、データ・リンク・サ ーバー上のリンクされたファイルに関するすべての情報を保管します。 DB2 を使 用することにより、DLFM は、DB2 の組み込みセキュリティー機能やデータ保全 性機能を使用できるようになります。たとえば、DLFM とその DB2 データベース 間の通信は、DB2 クライアント認証プロセスによって保護されます。
- データ・リンク・ファイル・フィルター (DLFF) セキュリティー DLFF はオペレーティング・システム・カーネルの拡張機能としてロードされま す。オペレーティング・システムはこの拡張機能によって、DLFF が行うコントロ ールを保護することができます。

### DLFM と DB2 サーバー・データベースの通信セキュリティー機能

Data Links Manager を使用したい DB2 サーバー上の DB2 データベースは、Data Links サーバー上の DLFM に登録する必要があります。

データベース登録プロセスでは、次のことを行います。1) 必要なデータベース名お よびインスタンス名を指定して、dlfm add\_db コマンドを呼び出す。2) DB2 サ ーバー上で、ADD DATALINKS MANAGER コマンドを呼び出す。通常、データ ベースは 1 回登録するだけで済みます。ただし、DLFM に登録済みのデータベー スをドロップした後に、後でもう一度全く同じデータベースを作成する場合は、そ のデータベースを登録する必要があります。DB2 DROP DATABASE コマンド は、追加のセキュリティー対策としてデータベースの登録を無効にします。

また、DB2 の各データベースに対して、すべてのデータ・リンク・サーバーと DLFM サービス・ポート番号を登録する必要があります。登録プロセスは、DB2 ADD DATALINKS MANAGER コマンドを呼び出して行います。

DB2 データベースと DLFM ソケット間の接続が開始されるたびに、DLFM は、要 求している DB2 データベースが登録されていることを確認します。要求している DB2 データベースが登録されていない場合は、DLFM はソケット接続を拒否し、 SQL エラー・メッセージを生成します。

### DLFM と DLFF の通信セキュリティー機能

DLFM とデータ・リンク・ファイル・フィルター (DLFF) 間の通信は、専用メッセ ージング・メカニズムによって保護されています。

### 関連概念:

- 97 ページの『Data Links Manager のセキュリティーの概要』
- 98 ページの『データ・アクセス・セキュリティー機能』

# データ・アクセス・セキュリティー機能

Data Links Manager のデータ・アクセス・セキュリティー機能には、単純なものから高度なものまであります。すべての機能はカスタマイズすることができます。各機能を比較対照して、各自の組織の目標と要件に一番適合するものを決めます。

重要:Data Links Manager のどのようなデータ・アクセス・セキュリティー機能を使用 した場合でも、スーパーユーザーは、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) の、すべてのファイル操作を含めたすべての処理を実行することができます。 AIX<sup>®</sup> お よび Solaris オペレーティング環境では、root がスーパーユーザーです。Windows<sup>®</sup> NT および Windows 2000 の稼働環境では、dlmadmin アカウントがスーパーユーザーで す。 Data Links Manager 管理者は、スーパーユーザー ID でログインするときは、実 行する処理に注意する必要があります。特に DLFS では、Data Links Manager 環境で 非常に重要なさまざまなデータ保全性のコントロールや通常操作をう回することができ ます。ただし、状況によっては、スーパーユーザーでも特定の機能を実行できない場合 があります (たとえば、DLFM が稼動していないときにディレクトリーを作成する、あ るいは、ディレクトリーの名前変更のような、リンクされたファイルの参照保全を著し く損なう可能性のある処理を試みる、など)。

重要:DB2<sup>®</sup> サーバーの DATALINK 列アクセス許可とデータベース構成は、データ・ リンク・ファイル・システム (DLFS) 操作に大きく影響します。また、インプリメント するすべてのデータ・アクセス・セキュリティー機能にも影響を与えることが考えられ ます。たとえば、DATALINK テーブル列が、READ PERMISSION 属性を DB に設定 して定義されている場合を考えてみます。その特定の表のユーザーに SELECT 特権を 割り当てるとします。この特定ユーザーは、所定の DLFS ファイル・システムに対し て、ローカルおよびリモートのアクセス権を持ちます。このような場合、データ・リン ク・サーバー上でどのようにデータ・アクセス・セキュリティーを構成したとしても、 ユーザーは、対応するデータ・リンク・サーバー上のその列にあるすべてのリンクされ たファイルを読み取ることができます。

### 関連概念:

- 99 ページの『リンクされたファイルの基本セキュリティー管理』
- 101 ページの『高度なファイル管理セキュリティー機能』

# データ・アクセス・セキュリティー機能:詳細

以下のセクションでは、データ・アクセス・セキュリティー機能について詳細に解説しています。

### リンクされたファイルの基本セキュリティー管理

ファイルをリンクする場合、Data Links Manager は、そのファイルに関して実行できる ほとんどの操作をコントロールします。一般に禁止されている操作として削除がありま す。スーパーユーザー以外は、リンクされたファイルを削除したり、名前変更したりす ることは**絶対に**できません。ファイルがリンクされている限り、すべてのコントロール は決まったとおりに行われます。ファイルのリンクが解除されると、操作コントロール はネイティブ・ファイル・システムに戻ります。 表2 には、リンクされたファイルに関して、データ・リンク・ファイル・マネージャー が禁止しているすべての操作が示されています。これらの操作は、スーパーユーザー以 外 のすべてのユーザーに対して禁止されています。

表2. リンクされたファイルに対する禁止操作

DATALINK 列アクセス許可属性 <sup>1</sup>	リンクされたファイルに対する禁止操作
・ READ PERMISSION DB ・ WRITE PERMISSION BLOCKED また は WRITE PERMISSION ADMIN	<ul> <li>ファイルの読み取り / 削除 / 名前変更 / 書き込み / 設定の属性。<sup>2</sup></li> <li>有効なアクセス・トークンが指定されていない場合に限り、読み取り操作は禁止されます。</li> <li>DATALINK 列が WRITE PERMISSION ADMIN で定義されており、有効な書き込みトークンが指定されている場合に限 り、書き込み操作は許可されます。</li> </ul>
<ul><li>READ PERMISSION FS</li><li>WRITE PERMISSION BLOCKED</li></ul>	ファイルの削除 / 名前変更属性と R/O フ ラグのリセット属性
<ul><li>READ PERMISSION FS</li><li>WRITE PERMISSION FS</li></ul>	ファイルの削除 / 名前変更

注:

- 1. DATALINK 列は、FILE LINK CONTROL 属性で定義する必要もあります。
- Windows<sup>®</sup>の場合のみ: dlmadmin アカウントだけでなく、すべての 管理者ユーザ ー・アカウントが、読み取りトークンまたは書き込みトークンを使用せずにリンク されたファイルの許可を見ることができます。ただし、ファイルを読み取ることが できるのは、dlmadmin ユーザーだけです。

Data Links Manager を使用して、データ・リンク・サーバー上に保管されているファイ ルに対して、誰が、リンク、読み取り、書き込み、レプリケーションの操作をさらに行 うことができるかどうかは、特定の表の DATALINK 列アクセス許可がどのように定義 されているかによって異なります。

### 関連概念:

• 101 ページの『高度なファイル管理セキュリティー機能』

### 関連資料:

- 200 ページの『dlfm grant replication read コマンド』
- 201 ページの『dlfm grant replication write コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- ・ 204 ページの『dlfm list registered replication access control コマンド』

- 203 ページの『dlfm list registered directories コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

# 高度なファイル管理セキュリティー機能

Data Links Manager には、データ・リンク・サーバー上に保管されているファイルに関 するリンク操作と書き込み操作を制限するためのカスタマイズ可能なセキュリティー機 能があります。これらの機能を使用すると、すべての ファイルにリンクできる人、およ び特定のデータ・リンク・サーバー上にあるリンクされた ファイルに書き込める人を誰 にするかを認可することができます。ファイル・リンク操作を実行したり、リンクされ たファイルに書き込みを行うことを明示的に許可されていない人は、その操作の実行を 禁止されます。これらのセキュリティー機能は、次のものと一緒に働きます。

- データ・リンク・サーバー上のネイティブ・ファイル・システムによって定義または 強制されたすべてのアクセス・コントロールと操作コントロール
- DB2<sup>®</sup> ホスト表 DATALINK 列の書き込みアクセス許可
- Data Links Manager のリンクされたファイルの基本セキュリティー管理

ファイル管理の高度なセキュリティー管理は、コントロールをインプリメントしたいデ ータ・リンク・サーバーから呼び出す一連の dlfm コマンドを使用して構成します。

- dlfm grant コマンドを使用すると、特定のデータ・リンク・サーバー・ディレクト リー上の個々の DB2 サーバー・ユーザー、または DB2 サーバー・ユーザー・グル ープに対してリンク特権と書き込み特権を割り当てることができます。
- dlfm deny コマンドを使用すると、特定のデータ・リンク・サーバー・ディレクトリー上の個々の DB2 サーバー・ユーザー、または DB2 サーバー・ユーザー・グループに対してリンク特権と書き込み特権を禁止することができます。
- dlfm revoke コマンドを使用すると、dlfm grant コマンドまたは dlfm deny コマ ンドの効果を逆転させることができます。

表3 には、DB2 ホスト表の DATALINK 列で可能なすべての書き込み許可属性が示さ れています。また、それらの属性に基づいて付与、否認、取り消しを行うことのできる 特権が比較されています。

	リンク特権 ?	書き込み特権?	リンク特権と書き込み 特権の両方 <b>?</b>
WRITE PERMISSION ADMIN	はい	はい	はい
WRITE PERMISSION FS	はい	いいえ	いいえ
WRITE PERMISSION BLOCKED	はい	いいえ	いいえ

表 3. DATALINK 列属性および適用できる DLM セキュリティー特権

DB2 ホスト表の DATALINK 列が WRITE PERMISSION ADMIN に設定されている場合は、書き込み特権しかコントロールできないことに注意してください。

ファイル・リンク・セキュリティー管理機能は、デフォルトでは、インストール時にオン (アクティブ) にされます。Data Links Manager 管理者が明示的にリンク特権を付与しない限り、スーパーユーザーを含め、データ・リンク・サーバー上のファイルにリンクできる人はいません。次の処理を行えばすぐに、ユーザーにリンク特権を付与することができます。

- DB2 サーバーの各データベースに、データ・リンク・サーバーと DLFM サービス・ ポート番号を登録する。
- データ・リンク・サーバーに接頭部を登録する

重要:特定のデータ・リンク・サーバーのリンク特権に関して、ユーザー・レベルまた はグループ・レベル (グループ PUBLIC も含む)のコントロールを必要としない場合、 あるいはそのようなコントロールが必要でないセキュアなネットワーク環境で操作を行 う場合は、ファイル・リンク・セキュリティー管理機能を完全に非活動化することによ って、すべてのユーザーにリンク特権を付与することができます。ファイル・リンク・ セキュリティー管理を非活動化するには、dlfm set link security コマンドを、正確に 次のとおりに呼び出します。

dlfm set link security off

ファイル・リンク・セキュリティー管理機能を一時的にだけ使用不可にする (たとえ ば、テスト環境で Data Links Manager を使用する) ために、上のコマンドを使用した場 合は、正確に次に示すように、dlfm set link security コマンドを呼び出すことによっ て、以前定義したすべてのリンク・セキュリティー管理を再び使用可能にすることがで きます。

dlfm set link security on

ファイル・リンク・セキュリティー管理機能を効果的に使用不可にすると、パフォーマンスを少し向上させることができます。ただし、これを行うのは、そのような「オープン」環境での操作が、御社のセキュリティー要件に準拠していることが明確な場合に**限** る必要があります。

**重要**: すべてのファイル・リンクとファイル書き込みのセキュリティー・アクセス権 は、データ・リンク・サーバー上に保管されます。ファイル・リンク・ファイル・セキ ュリティー管理機能を非活動化し、後でそれをもう一度活動化した場合は、以前に定義 したすべてのファイル・リンク・セキュリティー・アクセス権ももう一度活動化されま す。

### 関連概念:

- 99 ページの『リンクされたファイルの基本セキュリティー管理』
- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』

### 関連資料:

- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

# 高度なファイル管理セキュリティー機能 : 詳細

以下のセクションでは、ファイル・リンク・セキュリティー機能についてさらに詳しく 解説しています。

### ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン

特定のデータ・リンク・サーバー・ディレクトリー上の、個々の DB2<sup>®</sup> サーバー・ユー ザー、または DB2 サーバーのユーザー・グループに対して、リンク特権と書き込み特 権を割り当てるには、dlfm grant コマンドを使用します。 dlfm grant コマンドの構 文は以下のとおりです。

Lali privileges—	<pre>&gt;&gt;_dlfm grantwrite privilegeon dir_directory_nameto link privilegeall privileges</pre>	userdb2_authorization_id _group _public
------------------	---	---

►-for db-db\_name-inst-db\_inst\_name-node-server\_node\_name-

**重要**: 付与した特権は、指定したディレクトリーとそのサブディレクトリーにあるすべてのファイルに適用されます。

指定した DB2 サーバー・ユーザーが、指定したファイルにリンクまたは書き込みがで きるのは、このユーザーが、dlfm grant コマンドで指定されたデータベース、インス タンス、ノードそのものに関して操作を行う場合に限られます。たとえば、特定のデー タ・リンク・サーバー上で次のコマンドを出す場合を考えてみます。

dlfm grant link privilege on dir /dlfs/test to user SHERRYG for db EMP\_TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com

この結果、DB2 サーバー・ユーザー SHERRYG が、/dlfs/test ディレクトリーにあるフ ァイルを olympus.sanjose.bigco.com ノード上の HRaccess インスタンスの下にある DB2 サーバー・データベースの EMP\_TEST にリンクする場合に限り、SHERRYG はそれら のファイルにリンクすることができるようになります。

無許可のファイル・リンク・アクションを試みるユーザーがいる場合は、DB2 ホストの sqllib/db2dump/db2diag.log ファイルに監査レコードが書き込まれます。また、無許可の ユーザーが SQL の INSERT 操作または UPDATE 操作の間にファイルにリンクしよう とすると SQL エラーが生成されます。 ユーザー、ユーザーのアクセス権、および各ユーザーがアクセス権をもつ特定のデー タ・リンク・サーバー・ディレクトリーを見るには、dlfm list registered users コマ ンドまたは dlfm list registered directories コマンドを呼び出します。

 データ・リンク・サーバー上の特定ディレクトリーに関するすべてのユーザーとユー ザーのアクセス権をリストするには、dlfm list registered users コマンドを使用し ます。

例:

次のコマンドを出すと、

dlfm list registered users for directory /localfs/dbfiles/photos on db employee inst acct1 node storage.ca2.bigco.com

次のような出力が生成されます。

TYPE AUTHID PRIVILEGE ---- ----user JDOE write user MOHAN link

 ユーザーのすべてのグループまたは特定のグループがアクセス権をもつすべてのデー タ・リンク・サーバー・ディレクトリー、およびそれらのアクセス権をリストするに

は、dlfm list registered directories コマンドを使用します。

例:

次のコマンドを出すと、

dlfm list registered directories for all users on db drawings inst acct2 node storage.ak1.bigco.com

次のような出力が生成されます。

ТҮРЕ	AUTHID	PRIVILEGE	DIRECTORY
user	app1	write	/localfs/files/chips/
user	srgordon	link	/localfs/files/widgets/

DB2 サーバーのユーザーまたはグループに対する特定の特権を否認するには、dlfm deny コマンドを使用します。 dlfm deny コマンドの構文は、dlfm grant コマンドの構文と似ており、すべての同じ条件が適用されます。

dlfm grant コマンドおよび dlfm deny コマンドは、特定のデータ・リンク・サーバー 上の DLFM に対して、特定の特権 (ファイルをリンクしたり、ファイルに書き込んだ りする権限) に関する一連のルールを定義します。ルールは、次の属性をグループ化し たものです。

authorization-type、directory、user-set、specific-database

- authorization-type は、付与と否認のどちらかです。
- directory は、絶対パス、またはすべての定義済み接頭部の下のすべてのディレクト リーを示す "\*" です。

- user-set は、個人ユーザー、グループ、またはすべてのユーザー (PUBLIC) です。
- specific-database は、このルールによって影響を受ける特定の DB2 サーバー・デ ータベースを示すデータベースの名前、インスタンス、ノードです。

管理を簡単にするために、認可ルールでなく、否認ルールを定義することができます。 これは、状況によっては、許可する ものよりも許可しない ものを指定する方が簡単な 場合があるためです。

### 例 1:

/dlfs/test/restricted という特定のディレクトリー以外の /dlfs/test というディレクトリーの 下のすべてのユーザーに対してファイル・リンク権限を与える場合に、/dlfs/test の下に 多くのディレクトリーが存在する場合を考えてみます。

/dlfs/test の下のすべてのサブディレクトリーのすべてのユーザーにファイル・リンク権 限を付与することができますが、その場合は、各サブディレクトリーに対して別個の dlfm grant コマンドを出す必要があります。また、後から別のサブディレクトリーを 追加する場合は、その新しいサブディレクトリーでのリンク権限をすべてのユーザーに 与えるには、別の dlfm grant コマンドを出す必要があります。

次のような 2 つの許可ルールを定義すると簡単になります。1 つは、すべてのユーザー に、/dlfs/test ディレクトリーに対するファイル・リンク権限を付与するルールであり、 もう 1 つは、すべてのユーザーの、/dlfs/test/restricted サブディレクトリーに対するファ イル・リンク権限を否認するルールです。後で /dlfs/test に追加するサブディレクトリー の数に関係なく、この方法では、2 つの dlfm コマンドを出すだけで済みます。

- まず始めに、次のコマンドで、すべてのユーザーに、/dlfs/test の下のファイル・リン ク権限を与えます。: dlfm grant link privilege on dir /dlfs/test to PUBLIC for db EMP\_TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com
- さらに、次のコマンドで、特定の /dlfs/test/restricted/ ディレクトリーに対するすべてのユーザーのアクセス権を否認します。: dlfm deny link privilege on dir /dlfs/test/restricted to PUBLIC for db EMP\_TEST inst node olympus.sanjose.bigco.com

これらのコマンドを実行すると、DLFM に対して次の 2 つのルールを定義したことに なります。

grant , /dlfs/test , PUBLIC , {EMP\_TEST;HRaccess;olympus.sanjose.bigco.com}
deny , /dlfs/test/restricted, PUBLIC ,{EMP\_TEST;HRaccess;olympus.sanjose.bigco.com}

特定の処理を許可するかどうかを決定するときに、DLFM がこれらのルールをどのよう に解釈するかを理解することが重要です。DLFM は、まず始めに、すべての適用可能な 否認ルールを調べ、次に、すべての適用可能な付与ルールを調べます。要求された処理 が否認ルールによって禁止されておらず、さらに 認可ルールによって明示的に許可され ている場合は、この処理は許可されます。なんらかの処理を実行する許可をユーザーに 与えるには、少なくとも、1 つの認可ルールがなければなりません。 dlfm revoke コマンドの目的は、dlfm grant コマンドまたは dlfm deny コマンドで 以前定義したルールを除去することです。名前から分かるように、dlfm revoke コマン ドと dlfm deny コマンドの効果には重複する部分があります。どちらのコマンドも、 付与された特権を制限するために使用することができます。

# 例 2:

特定ディレクトリーの /dlfs/test/APP1 について、ユーザーにリンク特権が付与されているものとします。この特権を除去するには、次の 2 つの方法があります。

- これと同じディレクトリーに関する否認ルールを同じデータベースおよびユーザーに 対して定義する
- 既存の付与ルールを取り消す
- 2 つのコマンドを対比させると、次のようになります。

dlfm deny link privilege on dir /dlfs/test/APP1 to APP1 for db EMP\_TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com

dlfm revoke grant for link privilege on dir /dlfs/test/APP1 from APP1 for db EMP\_TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com

dlfm deny コマンドでは、特定の基準に関して、DLFM に定義された 2 つの ルール (元の付与ルールと新しい否認ルール) が作成されますが、dlfm revoke コマンドでは、 特定の基準に一致するルールは作成されません。

このような状況では、否認ルールを追加するよりも、付与ルールを取り消す方がよい方 法です。付与ルールを否定するために否認ルールを使用する場合は、時間の経過ととも に、特定の DLFM に関する多くのルールを管理する必要がでてくる可能性がありま す。それらのほとんどのルールはお互いを否定するものであり、意味がありません。よ り少ないルールを管理する方が簡単であり、よい方法です。また、より少ないルールを 特定の処理に適用すれば、権限検査に必要な処理オーバーヘッドが少なくなります。

最終的には、自分の組織のセキュリティーの目標や必要性に合った方法で、DLFM 許可 スキームを定義する最善の方法を決める必要があります。次の提案や考慮事項を参考に してください。

- ほとんどの場合、例1に示したように、より一般的に適用できる付与ルールを定義 するために、dlfm grant コマンドを使用し次に、1つ以上の dlfm deny コマンド を使用して、このルールの特定サブセットを否定する方法をお勧めします。このよう な方法は、これらのルールを定義する方法としては管理しやすい方法になる傾向があ り、ルールが少なくなる場合がよくあります。
- 一般に、例2に示すように、dlfm deny コマンドを使用して既存ルールを否定する よりも、dlfm revoke コマンドを使用して既存ルールを除去するほうが分かりやすく なります。
- 通常、ルールが多くあるより、ルールが少ししかない方が、管理のしやすさや処理オ ーバーヘッドを減らすという両方の点で優れています。

#### 関連概念:

- 107 ページの『読み取り操作のセキュリティー』
- 108 ページの『書き込み操作のセキュリティー』
- 110 ページの『リンクされたファイルの更新についてのセキュリティー問題』

### 関連資料:

- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 204 ページの『dlfm list registered prefixes コマンド』
- 205 ページの『dlfm list registered users コマンド』
- 203 ページの『dlfm list registered directories コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

### 読み取り操作のセキュリティー

スーパーユーザー以外の誰もが、リンクされたファイル (対応する DATALINK 列が FILE LINK CONTROL で定義されている場合)を読み取ることができるためには、次の 許可と条件がすべて必要となります。

- 該当する表を含む DB2® データベースに接続するための権限
- 指定した表または視点での、DATALINK タイプ列に対する SQL SELECT 権限
   DATALINK 列が READ PERMISSION FS で定義されている場合は、この権限は必ずしも必要ではありません。これは、ユーザーが、最初に URL を取得しなくてもファイルを読み取ることができるためです。
- 指定したデータ・リンク・サーバーを参照する指定した DATALINK 列からこのデー タベースを最初に検索する場合は、そのサーバー上の DLFM が稼働している必要が あります。
- 検索した DATALINK URL 値で参照する DLFS ファイル・システムに対するアクセス権。たとえば、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) が置かれているデータ・リンク・サーバー・マシンに対するログイン・アクセス権をもったり、あるいは指定した DLFS の NFS マウントを使用することによるアクセス権です。
- 指定した DLFS をマウントする (UNIX)、あるいは指定したドライブをオンラインに する (Windows) 場合は、DLFF が常にロードされている必要があります。
- ファイル・パスにあるすべてのディレクトリーに関するネイティブ・ファイル・シス テムでのディレクトリー・トラバース権限
- DATALINK 列が READ PERMISSION FS で定義されている場合は、ネイティブ・フ ァイル・システムで定義されている、指定するファイルに対する読み取り許可
- DATALINK 列が READ PERMISSION DB で定義されている場合は、次のとおりです。

- データ・リンク・サーバーが稼働している。
- READ モードでファイルを開くには、ユーザーは提供された読み取りトークン を 検索した DATALINK URL 値に含める必要がある。
- DATALINK URL の検索先のデータベースに対して定義された dl\_expint データベース構成パラメーターで指定された時間間隔内でファイルが開いている必要がある。

### 関連概念:

- 101 ページの『高度なファイル管理セキュリティー機能』
- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
- 108 ページの『書き込み操作のセキュリティー』
- 110 ページの『リンクされたファイルの更新についてのセキュリティー問題』

### 書き込み操作のセキュリティー

**重要:**部分更新操作を伴わない方式を使用して(たとえば、最初にファイルのリンクを 解除するか、DLREPLACECONTENT スカラー関数を使用して、ファイルを置き換える ことによって)ファイルを更新する場合は、リンクされたファイルに直接書き込むこと にはなりません。ここにリストした権限および条件は、部分更新操作を使用する場合に だけ適用されます。リンクされたファイルを更新するその他のメソッドの詳細について は、下の関連するリンク・セクションを参照してください。

スーパーユーザー以外の誰もが、リンクされたファイル (対応する DATALINK 列が FILE LINK CONTROL で定義されている場合) に書き込みができるためには、次の許可 と条件がすべて必要となります。

- ・ 該当する表を含む DB2® データベースに接続するための権限
- 指定した表または視点での、DATALINK タイプ列に対する SQL SELECT 権限 DATALINK 列が WRITE PERMISSION FS で定義されている場合は、この権限は必 ずしも必要ではありません。これは、ユーザーが、最初に URL を取得しなくてもフ ァイルを読み取ることができるためです。
- 指定した DATALINK 列は、WRITE PERMISSION BLOCKED で定義されていては いけません。
- 指定したデータ・リンク・サーバーを参照する指定した DATALINK 列からこのデー タベースを最初に検索する場合は、そのサーバー上の DLFM が稼働している必要が あります。
- DATALINK 列が WRITE PERMISSION ADMIN で定義されている場合は、指定した データ・リンク・サーバー上で dlfm grant コマンドで付与した指定したデータベー スと関連するディレクトリーのファイルに書き込むための権限
- 検索した DATALINK URL 値で参照する DLFS ファイル・システムに対するアクセ ス権。たとえば、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) が置かれているデー

タ・リンク・サーバー・マシンに対するログイン・アクセス権をもったり、あるいは 指定した DLFS の NFS マウントを使用することによるアクセス権です。

- 指定した DLFS をマウントする (UNIX)、あるいは指定したドライブをオンラインに する (Windows) 場合は、DLFF が常にロードされている必要があります。
- ファイル・パスにあるすべてのディレクトリーに関するネイティブ・ファイル・シス テムでのディレクトリー・トラバース権限
- DATALINK 列が WRITE PERMISSION FS で定義されている場合は、ネイティブ・ ファイル・システムで定義されている指定するファイルに対する書き込み許可
- DATALINK 列が WRITE PERMISSION ADMIN で定義されている場合は、次のとお りです。
  - データ・リンク・サーバーが稼働している。
  - WRITE モードのファイルを開くには、ユーザーは、提供された読み取りトークン を検索した DATALINK URL 値に含める必要があります。
  - DATALINK URL の検索先のデータベースに対して定義された dl\_wt\_iexpint デー タベース構成パラメーターで指定された時間間隔内でファイルが最初に WRITE モ ードで開いている必要があります。
  - 更新を最終確定するための、DATALINK 列に対する SQL UPDATE 権限 (たとえば、DLNEWCOPY スカラー関数を使用)
  - DATALINK 列が REQUIRING TOKEN FOR UPDATE で定義されている場合、 DB2 データベースで更新を最終確定するときは、ユーザーは、リンクされたファ イルの変更に使用するのと同じ書き込みトークン を、スカラー関数 (たとえば、 DLNEWCOPY) によって指定された DATALINK URL 値に含める必要がありま す。

### 関連概念:

- 107 ページの『読み取り操作のセキュリティー』
- 110 ページの『リンクされたファイルの更新についてのセキュリティー問題』
- 115 ページの『更新方法の概要』
- ・ 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

### 更新中のリンクされたファイルの保護:問題点

以下のセクションは、リンクされたファイルに書き込む (更新する)場合の問題点について解説します。

### リンクされたファイルの更新についてのセキュリティー問題

リンクされたファイルの更新操作を行うには、いくつかの異なる方法があります。それ ぞれの方法は、異なるレベルのファイル・アクセス・セキュリティーに対応したもので す。これらの方法を簡単に紹介します。

### アプローチ 1- 個々のファイルのリンク解除 / 更新の実行 / 再リンク

ファイルのリンクが解除された後で、ファイルに対する更新操作が行われま す。必要な SQL UPDATE 権限、ファイル・システム許可、ファイル・リンク 権限を持ったすべての特権ユーザーがファイルを更新することができます。

# アプローチ 2— WRITE PERMISSION FS で定義された表の DATALINK 列から参照 されるリンクされたファイルを更新する

ファイルが存在するシステム上のすべての特権ユーザーがファイルに書き込む ことができます。

# アプローチ 3— WRITE PERMISSION ADMIN で定義された表の DATALINK 列から 参照されるリンクされたファイルを更新する

ファイル書き込みアクセス特権は、dlfm grant コマンドまたは dlfm deny コ マンドを使用して、Data Links Manager 管理者によって定義されます。

### アプローチ 4- リンクされたファイルの内容を別のファイルの内容によって置き換え

る 更新操作は、単一の作業単位内で行われます。置き換えファイルがあるシステム上のすべての特権ユーザーが、リンクされたファイルを更新することができます。

使用するアプローチは、ご使用のシステムの目的や要求、さらに DB2<sup>®</sup> ホスト・データ ベース DATALINK 列定義に伴うすべての制約事項によって異なります。

### 関連概念:

- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
- 108 ページの『書き込み操作のセキュリティー』
- 115 ページの『更新方法の概要』
- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

### 関連資料:

- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』

・ 214 ページの 『dlfm set link security コマンド』

# 第 3 部 アプリケーション・プログラマーのための参考情 報

第5章 リンクされたファイルの更新		115
更新方法の概要		115
アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新	ŕ	
/ 再リンク		117
アプローチ 1: 手順 . . . . . . .		118
ファイルのリンク解除および再リンク .		118
アプローチ 2: リンクされたファイルの更新		
/ ネイティブ・ファイル・システムによるア		
クセスの定義		119
アプローチ 3: リンクされたファイルの更新		
/ ファイル・アクセス特権のカスタマイズ.		121
アプローチ 3: 詳細		122
アプローチ 3 の構成作業		122
アプローチ 3 の保守作業		125
アプローチ 3 のアプリケーション・プロ		
グラムのフロー		127
進行中の更新のバックアウト....		131
書き込みトークンの使用上の考慮事項 .		132
失われた書き込みトークンのリカバー .		133
アプローチ 4: リンクされたファイルの内容		
の置き換え		135
アプローチ 4: 詳細		136
アプローチ 4 を使用した、リンクされた		
ファイルの内容の置き換え.....		136
アプローチ 4 の使用例		137
更新アプローチのサマリー		138

# 第5章 リンクされたファイルの更新

この章では、リンクされたファイルの更新についての考慮事項について詳述し、リンク されたファイルの更新のためのいくつかの異なるアプローチについて説明します。

# 更新方法の概要

Data Links Manager は、リンクされたファイルの内容に加えられた**すべての**変更をファ イル更新 と見なします。

リンクされたファイルの更新を開始する前に、リンクされたファイルに対する結果のス トラテジーを選択する必要があります。選択したストラテジーは、使用する特定の更新 アプローチを決定する際のガイドとなります。以下のストラテジーのどちらかを使用す ることができます。

元のファイルを別の場所にコピーし、異なる名前を付けた別のファイルに新しい内容を追加する。この更新処理が終わると、異なる(新しい)リンクされたファイルをもつことになります。

新しいファイルを作成する主な利点は、オリジナル・ファイルが必要な場合(たとえば、バックアップとして、あるいは特定ファイルのヒストリーをすばやく確認するなどの場合)にオリジナル・ファイルが手を加えられないまま残っている点です。

内容を変更しても、更新処理の間、同一のファイルおよびファイル名を保持する。
 同一のファイルとファイル名を保持する利点には、更新処理中に作業が少なくて済む、ユーザーが混乱する可能性が少ない、新しいファイルを作成するよりストレージ・スペースが小さくて済むという点があります。 DB2<sup>®</sup> には、リンクされたファイルを包含するファイル・バックアップ・ユーティリティーおよびファイル・リカバリー・ユーティリティーがあり、Data Links Manager には、リンクされたファイルの内容に対するすべての変更をバックアウトできる機能が備わっています。

ここでは、2 つの結果のストラテジーを比較した例を説明します。

新規ファイルの結果ストラテジーを使用して、リンクされた特定のファイルに対する更 新を実行したいと仮定します。リンクされたファイルを別の場所にコピーし、異なる名 前を付けて新規バージョンのファイルを作成した後、その新規ファイルに新しい内容を 追加します。DB2 で SQL UPDATE 操作を実行して、その新規ファイルを指す、対応 する DATALINK 列値を変更します。これらのすべての操作は簡単な作業ですが、次の ようなリスクを内示していることを考慮に入れてください。ファイル名を変更する場合 は、DB2 ユーザーが、古い名前で元のファイルを検索できる短い時間帯ができるという 点です。そして、次にこのファイルにアクセスすると、このファイルはリンク解除され ているか、失われているという事態が発生することになります。 これに対し、更新処理中に同一のファイルおよびファイル名を保持する場合は、更新ア プローチ 4 を使用することができます。これについては、このセクションの後の方で詳 しく説明します。更新アプローチ 4 を使用すると、同じ結果、つまりリンクされた元の ファイルの更新バージョンをもつことができます。ただし、以下の点を考慮に入れてく ださい。

- 単一の作業単位内で更新処理が行われるため、ユーザーまたはアプリケーションに負担がかからない。
- DB2 でトランザクションが失敗、またはロールバックしても、リンクされた元のファ イルの内容は引き続き使用可能である。
- リンクされた元のファイルの内容は、更新処理中も引き続きアクセスできるため、そのファイルにアクセスしようとする DB2 ユーザーに対して、「時間帯」リスクが発生することがない。

それぞれの結果ストラテジーには、それに関連する利点とトレードオフが存在します。 最終的には、組織の目標や要件に基づいて、結果ストラテジーを選択する必要がありま す。一度その決定を行えば、最も効果的に働く更新アプローチを利用することができま す。

Data Links Manager では、ファイル更新処理を行う際に、いくつかの異なるアプローチ から選択することができます。これらの方法を簡単に紹介します。

- アプローチ 1- 個々のファイルのリンク解除 / 更新の実行 / 再リンク
  - ファイルのリンクが解除された後で、ファイルに対する更新操作が行われま す。必要な SQL UPDATE 権限、ファイル・システム許可、ファイル・リンク 権限を持ったすべての特権ユーザーがファイルを更新することができます。

# アプローチ 2— WRITE PERMISSION FS で定義された表の DATALINK 列から参照 されるリンクされたファイルを更新する

ファイルが存在するシステム上のすべての特権ユーザーがファイルに書き込む ことができます。

# アプローチ 3— WRITE PERMISSION ADMIN で定義された表の DATALINK 列から 参照されるリンクされたファイルを更新する

ファイル書き込みアクセス特権は、dlfm grant コマンドまたは dlfm deny コ マンドを使用して、Data Links Manager 管理者によって定義されます。

### アプローチ 4- リンクされたファイルの内容を別のファイルの内容によって置き換え

る 更新操作は、単一の作業単位内で行われます。置き換えファイルがあるシステム上のすべての特権ユーザーが、リンクされたファイルを更新することができます。

これらの各ファイル更新アプローチでは、更新処理の間、同一のファイルおよびファイ ル名を保持することが前提とされています。ただし、アプリケーションで必要になる場 合は、アプローチ 1 などを新規ファイル結果ストラテジーに適合させることもできま す。 すべてのファイル更新アプローチで、ファイル更新処理の特定の局面をカスタマイズす ることができます。これらのアプローチには単純なものから、複雑なものまであり、そ れぞれのアプローチには、それらに独自の利点と欠点があります。各アプローチを比較 して対比し、DB2 ホスト環境の管理を基礎にした、組織の目標、要求、および適用され る可能性のある制約事項に基づいて最も効率のよいものに決めてください。

### 関連概念:

- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

### 関連資料:

• 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク

これは、リンクされたファイルを更新するための簡単なアプローチです。リンクされた ファイルを修正または変更する必要がある場合は常に、DB2<sup>®</sup> データベースの DATALINK 列からのそのファイル参照のリンクを解除(除去)し、データ・リンク・サ ーバー上のファイルそれ自身に必要な修正を加えてから、もう一度、ファイル参照を DATALINK 列に再リンク(追加)します。ファイルを再リンクすると、ファイルは、も う一度 Data Links Manager にコントロールされるようになります。

**重要**: このアプローチを使用する場合は、次の問題に注意してください。

- 指定した表および DATALINK 列の両方に対して、DATALINK 値を更新するための SQL UPDATE 権限をもっていることを確認する必要があります。この権限がない場 合は、ファイルのリンク解除と再リンクを行うことができません。
- リンクが解除された状態にあるファイルは、Data Links Manager にはコントロールされません。ネイティブ・ファイル・システムによって定義された元のファイル・アクセス許可がリストアされるため、特権のあるすべてのファイル・システム・ユーザーがリンク解除されたファイルを変更することができます(たとえば、ファイル内容の変更、ファイルの名前変更、またはファイルの削除など)。

また、リンク解除されたファイルを更新するための必要なファイル・システム許可を もっていることも確認する必要があります。

リンクが解除された状態にあるファイルは、DB2 データベースには参照されません。
 リンクの解除されたファイルはデータベースに参照されなくなっているため、データ
 ベースのメタデータ検索や、データベースのバックアップなどでは使用することはで
 きません。

必要な DB2 データベースおよび必要なデータ・リンク・サーバー・ディレクトリーの両方で、ファイル・リンク権限をもっていることを確認する必要があります。この権限がない場合は、更新が完了した後に、ファイルを再リンクすることができません。

### 関連概念:

- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- ・ 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

### 関連作業:

• 118 ページの『ファイルのリンク解除および再リンク』

### 関連資料:

- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』
- 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 1: 手順

以下のセクションでは、手操作でファイルのリンクとリンク解除を行う方法について説 明します。

### ファイルのリンク解除および再リンク

この手順では、アプローチ 1 を使用した、ファイルのリンク解除と再リンクの方法を説 明します。

リンク解除と再リンクの操作は、2 つの別々のトランザクションで行う必要がありま す。リンク解除操作はファイルの変更前にコミットする必要があります。それ以後、も う 1 つの別個のトランザクションでファイルをもう一度再リンクする必要があります。

### 前提条件:

- 必要な DB2 データベースおよび必要なデータ・リンク・サーバー・ディレクトリーの両方で、必要なユーザーが、ファイル・リンク権限をもっていることを確認する必要があります。この権限がない場合は、更新が完了した後に、ファイルを再リンクすることができません。
- 必要なユーザーが、リンク解除されたファイルを更新するための必要なネイティブ・ ファイル・システム許可をもっていることを確認する必要があります。

 指定した表および DATALINK 列の両方に対して、DATALINK 値を更新するための SQL の UPDATE、DELETE、および INSERT の権限を必要なユーザーがもっている ことを確認する必要があります。この権限がない場合は、ファイルのリンク解除と再 リンクを行うことができません。

### 手順:

DATALINK 列からファイルのリンク解除を行うには、以下のどちらかを行うことができます。

- SQL UPDATE ステートメントを使用して、DATALINK 列値を NULL に変更する。
- SQL DELETE ステートメントを使用して、行全体を削除する。

ファイルがリンク解除の状態にある場合は、通常の操作と同じようにファイルを更新または置換することができます (たとえば、エディターやコピー・コマンドを使用することによって)。

ファイルを DATALINK 列に再リンクするには、以下のどちらかを行うことができます。

- SQL UPDATE ステートメントを使用して、DATALINK 列値を更新ファイルのパス に変更する。
- SQL INSERT ステートメントを使用して、新しい行を表に挿入する。

#### 関連概念:

- 115 ページの『更新方法の概要』
- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』

### 関連資料:

- SQL リファレンス 第2巻の『DELETE ステートメント』
- SQL リファレンス 第2巻の『INSERT ステートメント』
- SQL リファレンス 第 2 巻 の『UPDATE ステートメント』
- 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによ るアクセスの定義

これは、リンクされたファイルを更新するための簡単なアプローチです。リンクされた ファイルを修正または変更する必要があるときは常に、ファイルがあるデータ・リン ク・サーバー上のファイルに対して必要な変更を加えます。必要な操作はこれだけで す。 データベースの DATALINK 列値がリンクされたファイルを指しているときに、そのフ ァイルの内容を変更する処理は、部分更新 (updating-in-place) と呼ばれます。すべての 許可ユーザーは、リンクされたファイルに対して、部分更新操作の間に行われたすべて の変更をすぐに見ることができます。

### 要件:

- WRITE PERMISSION 属性を FS に、RECOVERY 属性を NO に設定して、DB2<sup>®</sup> データベースの DATALINK 列を定義する必要があります。
- ファイルに書き込むことができるためには、データ・リンク・サーバーの特権ユーザ ーでなければなりません。

**重要:**このアプローチを使用する場合は、次の問題に注意してください。

- WRITE PERMISSION 属性が FS に設定されて定義されている列では、DB2 整合バックアップと整合リカバリーのオプションはサポートされていません。リカバリー操作が行われても、リンクされたファイルは、データベース・データと整合した状態にはリストアされません。
- リンクされたファイルに加えられた変更をバックアウトする方法はありません。独自のバックアップ・コピーがほしい場合はそれらを保持しておく必要があります。
- WRITE PERMISSION 属性が FS に設定されて定義されている列の場合、Data Links Manager 管理者は、その列の対応するリンクされた各ファイルに対して、適切なファ イル・アクセス・コントロールが行われるようになっていることを確認する必要があ ります。これに対して、WRITE PERMISSION 属性が DB に設定されて定義されて いる列では、ファイル・アクセス・コントロールはデータベースで集中化して行われ るようになっているため、管理と保守のオーバーヘッドが少なくて済みます。
- すべての許可ユーザーは、リンクされたファイルに対して、部分更新操作の間に行われたすべての変更をすぐに見ることができます。更新ファイルを表のメタデータに対する更新と常に一緒に表示する必要がある場合は、これは最善のアプローチでない可能性があります。更新アプローチの1または4の使用を考えてください。これらのアプローチを使用すると、ファイル更新をデータベース上の大きな作業単位の一部として行うことができます。

### 関連概念:

- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

### 関連資料:

• 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特権のカスタマイ ズ

このアプローチを使用すると、アプローチ 2 と同じように、リンクされたファイルに対 して updates-in-place を実行することができます。アプローチ 2 とは異なり、ユーザー またはユーザー・アプリケーションは、リンクされたファイルの参照が保管されている DB2<sup>®</sup> サーバー**および**リンクされたファイルが常駐するデータ・リンク・サーバーの両 方のサーバー上で許可ユーザーでなければなりません。許可と許可を認可する方法は、 DB2 ホスト・サーバーとデータ・リンク・サーバーでは異なります。ユーザーまたはユ ーザー・アプリケーションが両方のサーバー上で許可を認可されていない場合は、リン クされたファイルに書き込むことはできません。

アクセス・コントロール・メカニズムには、DB2 データベースと Data Links Manager の両方の機能が使用されています。

- 更新のためにファイルをオープンするには、書き込みトークンが必要です。要求によって書き込みトークンを生成するには、WRITE PERMISSION 属性を ADMIN に設定して、DB2 表の DATALINK 列を定義する必要があります。書き込みトークン要求は、書き込みトークン要求を行うために特に提供されているスカラー関数を1つ以上呼び出す SELECT ステートメントによって行われます。SELECT ステートメントを使用して書き込みトークンを取り出すことができるのは、許可ユーザーだけです。
- 許可ユーザーは、特定のデータ・リンク・サーバー上のリンクされたファイルに対す る書き込み「特権」を付与されている DB2 ホスト・サーバー・ユーザーです。特定 の DB2 サーバー・サーバー・ユーザーに書き込み特権を付与するには、dlfm grant コマンドを使用します。
- ・更新を行うユーザーは、更新操作が完了するまでは、リンクされたファイルに対して 排他的書き込みアクセス権限をもちます。DB2 ホストは、SQL UPDATE ステートメ ントによって新しいバージョンのファイルについて通知を受けています。リンクされ たファイルが書き込みトークンを使用してオープンされている場合は、そのファイル は、更新進行中 (update-in-progress) 状態 になっています。DB2 が、新しいバージ ョンのリンクされたファイルについて通知を受けるまでは、ファイルは更新進行中 (update-in-progress) 状態のままであり、他のすべてのユーザーはこのファイルを読み 取ることしかできません。

アプローチ 3 では、特定の構成作業や保守作業を実行する必要があり、また、特定のア プリケーション・プログラミング・ロジックを使用する必要があります。必要な構成作 業や保守作業を実行するには、システム管理者またはデータベース管理者が必要な場合 があります。

ただし、アプローチ3は、最もカスタマイズしやすい更新方法です。データ・リンク・ サーバー上のリンクされた特定のファイル・セットに対して、**書き込み操作**を実行でき る**人**の定義とコントロールを行うことができます。このアプローチを使用するその他の 重要な利点には、DB2 整合バックアップや整合リカバリーのオプションを使用できること、ファイル変更をバックアウトできることなどがあります。

### 要件:

- WRITE PERMISSION 属性を ADMIN に、READ PERMISSION 属性を DB に設定 して、DB2 データベースの DATALINK 列を定義する必要があります。
- ファイル変更をバックアウトしたい場合は、RECOVERY 属性を YES に設定して、 DB2 データベースの DATALINK 列を定義する必要があります。

### 制約事項:

 ネットワーク・ファイル・システム (NFS) を使用する場合は、バージョン 3.0 以降 のものでなければなりません。

### 関連概念:

- 127 ページの『アプローチ 3 のアプリケーション・プログラムのフロー』
- ・ 132 ページの『書き込みトークンの使用上の考慮事項』

### 関連作業:

- 122 ページの『アプローチ 3 の構成作業』
- ・ 125 ページの『アプローチ 3 の保守作業』

### 関連資料:

- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 3: 詳細

以下のセクションでは、下記の事項について説明します。

- アプローチ3を使用するためにご使用のDB2ホスト・サーバー表とデータ・リンク・サーバーをセットアップし構成する方法
- アプローチ 3 の使用で必要になる可能性がある継続的な保守作業
- アプローチ 3 を使用する場合のリンクされたファイル更新のためのアプリケーション作成方法
- 更新進行中のバックアウトの方法
- 書き込みトークンの使用上の考慮事項
- 失われた書き込みトークンのリカバー

# アプローチ 3 の構成作業

このセクションでは、更新アプローチ 3 で使用する DB2 ホスト・サーバー表とデー タ・リンク・サーバーのセットアップと構成の方法を説明します。

### 前提条件:

必要な DB2 ホスト・サーバーと必要なデータ・リンク・サーバーに対して、管理者権 限をもっている必要があります。

### 手順:

アプローチ3を使用するために環境を構成するには、次のようにします。

1. DB2 表の DATALINK 列を次の属性で定義します。

表4. アプローチ3 で必要な DATALINK 列の属性

属性名	必要な値	注意事項
WRITE PERMISSION	ADMIN REQUIRING TOKEN FOR UPDATE または NOT REQUIRING TOKEN FOR UPDATE	<ul> <li>ADMIN は必須の属性で す。また、更新操作の完了 を DB2 に知らせるとき に、ファイルの変更で使用 されるのと同じ書き込みト ークン値を必要とするかど うかも指定する必要があり ます。</li> <li>NOT REQUIRING TOKEN FOR UPDATE 属性を使用する場合は、 リンクされたファイルを オープンする際、書き込 みトークン値のみが必要 になります。</li> <li>REQUIRING TOKEN FOR UPDATE 属性を使 用する場合は、 DLNEWCOPY または DLPREVIOUSCOPY のス カラー関数をもった SQL UPDATE ステートメント を呼び出すときに、同一 の書き込みトークン値も 含める必要があります。</li> </ul>
READ PERMISSION	DR	

表 4. アプローチ 3 で必要な DATALINK 列の属性 (続き)

属性名	必要な値	注意事項
RECOVERY	YES または NO	整合バックアップと整合リ
		カバリーを使用可能にし、
		ファイル変更をバックアウ
		トする機能を使用可能にす
		るには、この属性を YES
		にする必要があります。ど
		ちらの機能も必要でない場
		合は、この属性を使用する
		必要はありません。あるい
		は、この属性を NO にする
		こともできます。

- 2. 特定の DATALINK 列の場合は、その列によって参照されるリンクされたファイル を更新できる書き込みトークンを取得できる DB2 サーバー・ユーザーを決めます。 これらのユーザーには、次の権限を付与する必要があります。
  - その DATALINK 列から SELECT する権限
  - 対応するリンクされたファイルが保管されているデータ・リンク・サーバーに対 する書き込み特権
- それぞれの DATALINK 列ごとに、リンクされたファイルがあるデータ・リンク・ サーバー・ディレクトリーを決めます。
   必要なデータベース・ユーザーが書き込みトークンを生成できるようにするには、それらのユーザーにこれらのディレクトリーに対する書き込み特権を付与する必要があります。書き込みトークンを生成できれば、それらのユーザーは、リンクされたファ イルに書き込むことができるようになります。
- 該当するデータ・リンク・サーバーで dlfm grant コマンドを使用することによって、必要なディレクトリーについての書き込み特権を必要なユーザーに付与します。

dlfm grant write privilege on dir /dlfs/test to user SHERRYG for db EMP\_TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com

DB2 サーバー・ユーザー SHERRYG が、olympus.sanjose.bigco.com ノード上の HRaccess インスタンスの下の DB2 サーバー・データベース EMP\_TEST で参照さ れているファイルを更新しているときに、SHERRYG は /dlfs/test ディレクトリー、 およびそのすべてのサブディレクトリーにあるリンクされたファイルに対する書き込 みに使用できる書き込みトークンを生成できるようになります。

**重要:**あるデータ・リンク・サーバー・ディレクトリーで、WRITE PERMISSION ADMIN 属性で定義された DATALINK 列から参照されているファイルに関する書き 込み特権を明示的に付与されていないユーザーは、それらのリンクされたファイルに 書き込むことはできません。 これで、アプローチ 3 を使用して更新を実行するアプリケーションを作成できるように なります。

### 関連概念:

• 127 ページの『アプローチ 3 のアプリケーション・プログラムのフロー』

### 関連作業:

・ 125 ページの『アプローチ 3 の保守作業』

### 関連資料:

197 ページの『dlfm grant コマンド』

# アプローチ 3 の保守作業

このセクションでは、アプローチ 3 の使用で必要になる可能性がある、継続的な保守作 業を説明します。

### 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

### 手順:

 データ・リンク・サーバー上にある、あるいは特定の DB2 データベースについての 更新進行中 (update-in-progress) 状態にあるすべてのファイルまたは特定のファイルを 表示するには (たとえば、失われた書き込みトークンを回復するため)、dlfm list upd in progress コマンドのいずれかを使用します。

例:次のコマンドを出します。

dlfm list upd\_in\_progress files for db EMPLOYEE inst DB2 node storage.ca2.bigco.com tid 10 tsid 5 user joshua

joshua というユーザー名の表 ID 番号が 10 で、表スペース ID 番号が 5 の EMPLOYEE データベースにある、現在更新進行中 (update-in-progress) 状態にあるす べてのリンクされたファイルが表示されています。コマンド出力には、使用中の書き 込みトークンも表示されます。

 データ・リンク・サーバー上の特定ディレクトリーに関するすべてのユーザーとユー ザーのアクセス権をリストするには、dlfm list registered users コマンドを使用し ます。

例:次のコマンドを出します。

dlfm list registered users for directory /localfs/dbfiles/photos on db employee inst acct1 node storage.ca2.bigco.com

ノード storage.ca2.bigco.com 上のインスタンス acct1 にある EMPLOYEE データベー スを現在使用しているすべてのユーザー、およびデータ・リンク・サーバー・ディレ クトリー /localfs/dbfiles/photos についての、それらのユーザーのファイル・アクセス 特権 (リンクまたは書き込み) が表示されています。  ユーザーのすべてのグループまたは特定のグループがアクセス権をもつすべてのデー タ・リンク・サーバー・ディレクトリー、およびそれらのアクセス権をリストするに は、dlfm list registered directories コマンドを使用します。

**例**:次のコマンドを出します。

dlfm list registered directories for all users on db drawings inst acct2
node storage.ak1.bigco.com

ノード storage.ak1.bigco.com 上のインスタンス acct2 にある図面データベースで特別 に許可されているすべてのユーザーについての、すべてのデータ・リンク・サーバ ー・ディレクトリーおよびファイル・アクセス特権 (リンクまたは書き込み) が表示 されます。

- リンクされたファイルの特定セットについて、特定のユーザーに書き込み特権を割り 当てるには、dlfm grant コマンドを使用します。このコマンドの使用の詳細につい ては、『関連リンク』のセクションを参照してください。
- リンクされたファイルの特定セットに対する書き込み特権を特定のユーザーに対して 否認 (許可しない) するには、dlfm deny コマンドを使用します。このコマンドの使 用の詳細については、『関連リンク』のセクションを参照してください。
- 特定ユーザーについて、リンクされたファイルの特定セットに対する dlfm grant コ マンドまたは dlfm deny コマンドの効果を取り消すには、dlfm revoke コマンドを 使用します。このコマンドの使用の詳細については、『関連リンク』のセクションを 参照してください。
- 進行中の更新をバックアウトするには、DLPREVIOUSCOPY スカラー関数を使用して、DB2 サーバー上の影響を受けた DATALINK 列のファイル参照を更新します。
   このタスクの詳細については、『関連リンク』のセクションを参照してください。
- 書き込みトークンが失われた場合などは、失われた書き込みトークンをリカバリーします。ユーザーが、書き込みトークンで、リンクされた特定のファイルを変更すると、そのユーザーはそのファイルに対して「ロック」をもったようになるため、このタスクは重大な結果をもたらす可能性があります。更新操作が完了するまでは、その特定の書き込みトークンを使用するその特定のユーザーしかリンクされたファイルを変更することができません。また、特定のDATALINK列がREQUIRING TOKENFOR UPDATE 属性で定義されている場合は、DLNEWCOPYまたはDLPREVIOUSCOPYのスカラー関数をもったSQL UPDATEステートメントを出すには、それと同じ書き込みトークンが必要になります。このタスクの詳細については、『関連リンク』のセクションを参照してください。

### 関連概念:

- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 127 ページの『アプローチ 3 のアプリケーション・プログラムのフロー』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

関連作業:

- 131 ページの『進行中の更新のバックアウト』
- 133 ページの『失われた書き込みトークンのリカバー』

#### 関連資料:

- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 205 ページの『dlfm list registered users コマンド』
- 206 ページの『dlfm list upd\_in\_progress files for db コマンド』
- 208 ページの『dlfm list upd\_in\_progress files for prefix コマンド』
- 203 ページの『dlfm list registered directories コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』
- 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 3 のアプリケーション・プログラムのフロー

アプローチ 3 を使用するための環境の構成が終われば、更新を実行するアプリケーション・プログラムを作成することができます。

次のスキーマをもった、EMPLOYEE と呼ばれる表があると仮定します。

```
CREATE TABLE EMPLOYEE (
ID INTEGER NOT NULL,
         VARCHAR(20),
NAME
DEPT NO
        SMALLINT,
TITLE
         VARCHAR(50),
         DATALINK LINKTYPE URL FILE LINK CONTROL
PHOTO
     INTEGRITY ALL
     READ PERMISSION DB
     WRITE PERMISSION ADMIN REQUIRING TOKEN FOR UPDATE
     RECOVERY YES ON UNLINK RESTORE.
RESUME
        DATALINK LINKTYPE URL FILE LINK CONTROL
     INTEGRITY ALL
     READ PERMISSION DB
     WRITE PERMISSION ADMIN NOT REOUIRING TOKEN FOR UPDATE
     RECOVERY YES ON UNLINK RESTORE,
PRIMARY KEY (ID)
)
```

EMPLOYEE は、HR\_DB データベースにあります。EMPLOYEE 表がある DB2<sup>®</sup> サー バーは HR\_DB.XYZ.COM と呼ばれます。PHOTO 列についての、参照されるリンクさ れたファイルは、データ・リンク・サーバー HR\_SRV.XYZ.COM の/hr/emp\_pict ディレ クトリーに保管されています。

128 ページの図3 に、アプローチ3 を使用するときにアプリケーション・プログラムが、EMPLOYEE 表の PHOTO 列で参照されるリンクされたファイルの更新で実行しなければならない典型的な呼び出しと操作が説明されています。



図3. アプローチ 3 のアプリケーション・プログラムのフロー

次の説明には、完全なプログラミング例でもある SQL ステートメントの例が含まれています。

1. アプリケーション・プログラムは DB2 データベースに接続し、書き込みトークンを もった URL パスを取り出すために、テーブル行の DATALINK 列に SELECT ステ ートメントを出します。

SQL ステートメントの例: EXEC SELECT DLURLCOMPLETEWRITE( PHOTO ) INTO :url FROM EMPLOYEE WHERE ID = 50100;

この SQL ステートメント例では、URL パスは url ホスト変数に保管されます。

注:オープンするファイルのパスだけを取り出すには、DLURLCOMPLETEWRITE スカラー関数の代わりに DLURLPATHWRITE スカラー関数を使用することもでき ました。

- DB2 は、接続されたユーザーが、指定されたファイルを更新する権限をもっている かどうかを確認するために、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) に チェックします。
- 接続されたユーザーがファイルを更新する権限をもつ場合は DB2 は、書き込みトー クンを組み込むファイル参照値を戻します。例: HTTP://HR\_SRV.XYZ.COM/a/b/xxxx;emp50100.gif、ここで xxxx は、組み込まれた書 き込みトークンです。
- アプリケーション・プログラムは、ファイル参照値を使用してリンクされたファイル をオープンします。
   C アプリケーションのファイル・システム・コールの例は次のとおりです。

fptr = fopen(/a/b/xxxx;emp50100.gif);

- 5. データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) は書き込みトークンを 検証します。
- 6. 書き込みトークンが有効である場合は、DLFF はファイル・オープン操作の継続を許可し、アプリケーション・プログラムにファイル記述子ポインターを戻します。 書き込みトークンが無効である場合は、DLFF は、ファイル・オープン操作の継続を 禁止し、アプリケーションに標準エラー・コードを戻します。エラー・コード値は、 ネイティブ・ファイル・システムによって決まります。
- アプリケーション・プログラムは、ファイル記述子を使用して、ファイルの読み込み とファイルへのデータの書き込みを行います。

**重要:**この時点では、アプリケーション・プログラムは、ファイルに対して、排他 的書き込みアクセス権限をもっています。DB2 で、DLNEWCOPY または DLPREVIOUSCOPY のスカラー関数を使用して、SQL UPDATE を実行することに よってファイル変更が最終確定されるまでは、他のユーザーはファイルを読み取るこ とができるだけで、ファイルに書き込むことはできません。

8. ファイル変更が完了すると、アプリケーション・プログラムは、ファイルの新しいバージョンができたこと、および SQL をコミットすることによって、アーカイブ処理を開始できることを DB2 データベースに通知します。 DLNEWCOPY スカラー関数によって構成された値で同じ行と列を更新するための SQL UPDATE ステートメントを出すことによって、アプリケーション・プログラムはこの通知を行います。スカラー関数呼び出しを伴う更新は、テーブル行によって修飾されます。また、必要な場合は、この更新にはオリジナル・ファイル参照と書き込みトークンが含まれます。

SQL ステートメントの例:

EXEC SQL UPDATE EMPLOYEE SET PHOTO = DLNEWCOPY( :url, 1 ) WHERE ID = 50100;

EXEC SQL COMMIT;

### 重要:

- 更新処理を最終確定するには、表と列に関する SQL UPDATE 権限をもっている 必要があります。
- DLNEWCOPY スカラー関数呼び出しで、書き込みトークンを提供する必要がある かどうかは、DB2 ホスト表の DATALINK 列を、REQUIRING TOKEN FOR UPDATE 属性で定義したか、NOT REQUIRING TOKEN FOR UPDATE 属性で定 義したかによって異なります。
- 9. DB2 は、UPDATE 要求に関する情報を対応する DLFM に転送します。有効な書き 込みトークンが必要であり、しかもそれが提供されており、DATALINK 列が、 RECOVERY 属性を YES にして設定されている場合は、DLFM はファイル・アーカ イブ処理を開始して、変更ファイルを非同期にバックアップします。
  重要:データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) では、ファイルがアーカイブ されている間は、ファイルを変更することはできません。アーカイブ処理の間にファ イルを変更しようとすると、ファイル・システム・エラー・メッセージが生成されま す。

### 関連概念:

- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- ・ 132 ページの『書き込みトークンの使用上の考慮事項』

### 関連作業:

- 131 ページの『進行中の更新のバックアウト』
- 133 ページの『失われた書き込みトークンのリカバー』

### 関連資料:

- SQL リファレンス 第 1 巻 の『選択ステートメント』
- SQL リファレンス 第 2 巻 の『UPDATE ステートメント』
- SQL リファレンス 第1巻の『DLPREVIOUSCOPY スカラー関数』
- SQL リファレンス 第 1 巻 の『DLURLPATHWRITE スカラー関数』
- SOL リファレンス 第 1 巻 の『DLNEWCOPY スカラー関数』
- SOL リファレンス 第 1 巻 の『DLURLCOMPLETEWRITE スカラー関数』
## 進行中の更新のバックアウト

スカラー関数 DLNEWCOPY を呼び出す代わりに、スカラー関数 DLPREVIOUSCOPY を呼び出す SQL UPDATE ステートメントを出すことによってまだ進行中のファイル更新を簡単にバックアウトすることができます。

#### 前提条件:

DATALINK 列は、RECOVERY 属性を YES に設定して定義する必要があります。

#### 例:

次のスキーマをもった、EMPLOYEE と呼ばれる表があると仮定します。

CREATE TABLE EMPLOYEE ( ID INTEGER NOT NULL, NAME VARCHAR(20), SMALLINT, DEPT NO TITLE VARCHAR(50), рното DATALINK LINKTYPE URL FILE LINK CONTROL INTEGRITY ALL READ PERMISSION DB WRITE PERMISSION ADMIN REOUIRING TOKEN FOR UPDATE RECOVERY YES ON UNLINK RESTORE, RESUME DATALINK LINKTYPE URL FILE LINK CONTROL INTEGRITY ALL READ PERMISSION DB WRITE PERMISSION ADMIN NOT REQUIRING TOKEN FOR UPDATE RECOVERY YES ON UNLINK RESTORE, PRIMARY KEY (ID) )

EMPLOYEE は、HR\_DB データベースにあります。EMPLOYEE 表がある DB2 サーバーは HR\_DB.XYZ.COM と呼ばれます。ファイル emp50100.gif の更新を開始しましたが、結局、ファイルの変更をしないことに決め、元の、emp50100.gif の変更のないバージョンに復帰しようとしています。ファイルは、データ・リンク・サーバー HR SRV.XYZ.COM の /hr/emp pict ディレクトリーに保管されています。

ファイル更新を取り消すには、次の SOL UPDATE ステートメントを出します。

```
EXEC SQL UPDATE EMPLOYEE
SET PHOTO = DLPREVIOUSCOPY( 'HTTP://HR_SRV.XYZ.COM/hr/emp_pict/xxxx;emp50100.gif', 1 )
WHERE ID = 50100;
```

EXEC SQL COMMIT;

xxxx は書き込みトークン値です。

#### 関連概念:

- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- ・ 132 ページの『書き込みトークンの使用上の考慮事項』

#### 関連作業:

• 133 ページの『失われた書き込みトークンのリカバー』

#### 関連資料:

• SQL リファレンス 第2巻の『UPDATE ステートメント』

#### 書き込みトークンの使用上の考慮事項

書き込みトークン は、DATALINK 列が WRITE PERMISSION ADMIN 属性で定義さ れているときに取り出された DATALINK 列値に組み込まれている許可キーです。書き 込みトークン値は、スカラー関数の DLURLCOMPLETEWRITE または DLURLPATHWRITE を使用することによって生成され、戻されます。

書き込みトークンは、更新アプローチ 3 で、たいへん重要な役割をもっています。その 理由は、書き込みトークンには、リンクされたファイルに書き込み操作を行うことので きるユーザーを制限するための許可メカニズムがあるからです。また、特定の DATALINK 列が REQUIRING TOKEN FOR UPDATE 属性で定義されている場合は、 更新操作の完了を DB2 に知らせるときに、それと同じ書き込みトークンが必要になり ます。

ユーザーが、書き込みトークンを取得し、それを使用してリンクされた特定のファイル を変更すると、そのユーザーはそのファイルに対して「ロック」をもったようになりま す。ファイル更新操作が完了するまでは、その特定の書き込みトークン値を使用するそ の特定のユーザーしか、その特定のリンクされたファイルに書き込むことができませ ん。その特定のユーザーは、すべてのファイル更新操作が完了するまでは、リンクされ たそのファイルに対するあらゆる種類のアクセスで、その特定の書き込みトークンを続 けて使用する必要があります。「コントロールしているユーザー」がすべてのファイル 更新操作を完了するまでは、他のどのユーザーも、そのファイルに対して書き込み を行 うことはできません。有効な読み取りトークンや書き込みトークンの値をもっている場 合は、どのユーザーでもリンクされたファイルの読み取り を行うことができることに変 わりはありません。

書き込みトークン値が使用され始めると、ユーザーがファイルを更新している間は、その書き込みトークンは有効です。ただし、書き込みトークン値が生成されるときと、それが実際に使用されるときとの間に長い時間間隔がある場合は、そのトークンは期限切れになる、つまり無効になる可能性があります。無効な書き込みトークンを使用するユ ーザーがいると、ファイル・アクセス・セキュリティーの追加層が提供されて、試みられたファイル操作は失敗します。

DB2<sup>®</sup>構成パラメーター DL\_WT\_IEXPINT は、書き込みトークンの初期有効期限時間 間隔をコントロールします。この間隔は、書き込みトークンが生成されたときと、書き 込みトークン値が使用された最初の イベントとの間の秒数です。トリガー・イベント は、書き込みトークンが生成された後の書き込み呼び出しについての最初のファイル・ オープンです。 デフォルトの DL\_WT\_IEXPINT 値は 60 秒です。この値は、秒数で、最高 1 カレンダ 一年まで変更することができます。

推奨事項:書き込みトークンは、ファイル更新(書き込み)操作にのみ使用してください。読み取りトークンは、ファイル読み取りアクセスにのみ使用してください。書き込みトークンを使用して、読み取りトークンを必要とするファイルを読み取ることはできますが、他に方法がない場合を除いて、その方法はお勧めできません。ファイルに書き込みを行いたいからといって、ユーザーが簡単に書き込みトークンを使用するのを許可したり、それを勧めると、ある時点で多くの書き込みトークンが生成されるが、使用されないままであるという可能性を容認することになります。機密保護機能のある環境では、書き込みトークンの使用をできるだけ制限することが最善です。

#### 関連概念:

- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 127 ページの『アプローチ 3 のアプリケーション・プログラムのフロー』

#### 関連作業:

- ・ 122 ページの『アプローチ 3 の構成作業』
- ・ 133 ページの『失われた書き込みトークンのリカバー』

#### 関連資料:

• *管理ガイド: パフォーマンス* の『Data Links Write Token Initial Expiry Interval configuration parameter - dl\_wt\_iexpint』

### 失われた書き込みトークンのリカバー

あるユーザーが、書き込みトークンで、リンクされた特定のファイルを変更すると、あ たかもそのユーザーがそのファイルに対して「ロック」をもったようになります。更新 操作が完了するまでは、その特定の書き込みトークンを使用するその特定のユーザーし か、リンクされたファイルに書き込むことができません。他のユーザーは、そのファイ ルに書き込むことができなくなります。また、特定の DATALINK 列が REQUIRING TOKEN FOR UPDATE 属性で定義されている場合は、DLNEWCOPY または DLPREVIOUSCOPY のスカラー関数をもった SQL UPDATE ステートメントを出すに は、それと同じ書き込みトークンが必要になります。

データ・リンク・サーバー上のデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) は、 現在更新されているすべてのファイルを、使用中の書き込みトークンと共にトラッキン グします。進行中の更新を完了する前に書き込みトークンが失われた場合 (たとえば、 トークンをなくした場合) は、次の手順に従って、簡単にトークンを取り戻し、更新を 継続することができます。

#### 前提条件:

DB2 Data Links Manager の管理者権限が必要です。

更新が進行中の DB2 データベースの名前、インスタンス、ノードを知っている必要が あります。

#### 手順:

書き込みトークンをリカバリーするには、次のようにします。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者として、更新しているファイルがあるシステムにロ グオンする。
- 2. dlfm list upd\_in\_progress ファイル・コマンドのいずれかを入力する。

リターン情報には、指定した DB2 データベースについて、現在更新されているすべてのファイルのパス名と書き込みトークンが含まれます。

リカバリーしたばかりの書き込みトークン値を使用して、必要な更新操作の実行を継続します。

例:

データベース HR\_DB のなかに表 EMPLOYEE があります。データベース・インスタ ンスは HR\_INST と呼ばれます。EMPLOYEE 表がある DB2 サーバーは HR\_DB.XYZ.COM と呼ばれます。

ファイル emp50100.gif の更新中に書き込みトークンを失い、ファイルの更新を継続す るために、その書き込みトークンが必要です。ファイルは、データ・リンク・サーバー HR\_SRV.XYZ.COM の /hr/emp\_pict ディレクトリーに保管されています。書き込みトー クンを取得するには、次の操作を行います。

- 1. emp50100.gif があるデータ・リンク・サーバーにログオンする。
- 2. 次のコマンドを入力する。

dlfm list upd\_in\_progress files for db HR\_DB inst HR\_INST node HR\_DB.XYZ.COM コマンドの出力は次のようになります。

ユ 9 HD 2009 (hiapi) な、音さどのド 9 2 lie 04t0\_Ditike2\_0102.vtkA を使用 して emp50100.gif を更新中です。データ・リンク・サーバーは、ユーザー ID 1130 (newton) が、HR\_DB データベースにある同じ表の、別の DATALINK 列で参照され ているファイル (emp007.ocr) を更新中であることも報告していることに注意してく ださい。

#### 関連概念:

- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 127 ページの『アプローチ 3 のアプリケーション・プログラムのフロー』
- ・ 132 ページの『書き込みトークンの使用上の考慮事項』

#### 関連資料:

- 206 ページの『dlfm list upd\_in\_progress files for db コマンド』
- 208 ページの『dlfm list upd\_in\_progress files for prefix コマンド』

# アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え

このアプローチでは、リンクされたファイルの内容を直接は変更しません。その代わ り、リンクされたファイルの内容を別のファイルの内容と置き換えます。リンクされた ファイルは、そのオリジナルの名と許可を保持します。リンクされたファイルの内容を 置き換えるファイルは、置き換えファイル と呼ばれます。置き換えファイルを入手する には、リンクされたオリジナルのファイルをコピーし、そのコピーに変更を加えるか、 あるいは必要な変更を含んだ既存ファイルを使用することができます。

リンクされたオリジナルのファイル参照を含んだ DATALINK 列の値に、SQL UPDATE トランザクションで、置き換え操作を実行します。スカラー関数 DLREPLACECONTENT を使用すると、オリジナルのファイル名と置き換えファイル名 の両方を指定することができます。

アプローチ 4 を使用する主な利点は、DB2<sup>®</sup> データベースで、SQL UPDATE トランザ クションがコミットされたときのみ、リンクされたファイルに対する変更内容がユーザ ーに見えるようになるという点です。トランザクションが失敗したり、ロールバックさ れる場合は、リンクされたファイルのオリジナルの内容は変更されないままです。

#### 要件:

- ・置き換えファイルは、リンクされたファイルと同じディレクトリーにある必要があり
   ます。
- ・置き換えファイルを入れるための十分なディスク・スペースがなければなりません。
- ・置き換えファイル名は、オリジナルのファイル名と最大 20 文字にすることができる 接尾部ストリングで構成する必要があります。たとえば、オリジナル・ファイルの名 前が resume1.ocr であると仮定します。置き換えファイル名は、resume1.ocr.update と することはできますが、resume1a.ocr とすることはできません。
- 必要なデータ・リンク・サーバー・ディレクトリーに対して、必要なユーザーについてのファイル・リンク特権を付与したことを確認する必要があります。

#### 関連概念:

• 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』

- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- ・137 ページの『アプローチ 4 の使用例』

#### 関連資料:

- SQL リファレンス 第2巻の『UPDATE ステートメント』
- SQL リファレンス 第1巻の『DLREPLACECONTENT スカラー関数』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』
- 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 4: 詳細

このセクションでは、アプローチ 4 を使用してリンクされたファイルの内容を置き換え る方法について述べ、アプローチ 4 の使い方の例を示します。

# アプローチ 4 を使用した、リンクされたファイルの内容の置き換え

このセクションでは、更新アプローチ 4 を使用して、リンクされたファイルの内容を置 き換えるためのステップバイステップ手順を説明します。

#### 前提条件:

- 置き換えファイルがなければなりません。
- ・置き換えファイルは、リンクされたファイルと同じディレクトリーにある必要があり
   ます。
- ・置き換えファイルを入れるための十分なディスク・スペースがなければなりません。
- ・置き換えファイル名は、オリジナルのファイル名と最大 20 文字にすることができる
   接尾部ストリングで構成する必要があります。たとえば、オリジナル・ファイルの名
   前が resume1.ocr であると仮定します。置き換えファイル名は、resume1.ocr.update と
   することはできますが、resume1a.ocr とすることはできません。
- 必要なデータ・リンク・サーバー・ディレクトリーに対して、必要なユーザーへのファイル・リンク特権を付与したことを確認する必要があります。
- 必要なユーザーが、必要な DB2 データベース表と DATALINK 列に関して、SQL UPDATE 権限をもっていることを確認する必要があります。

#### 手順:

更新アプローチ 4 を使用して、リンクされたファイルの内容を置き換えるには、次のようにします。

- 更新したいリンクされたファイルの置き換えファイルを入手し、そのファイルを、リンクされたファイルがあるのと同じファイル・システム・ディレクトリーに置く。
- SQL UPDATE ステートメントで DLREPLACECONTENT スカラー関数を使用して、DB2 表のソース DATALINK 列値を更新する。ステートメントには、オリジナル・ファイルと置き換えファイルの両方のファイルに対する参照を含める必要があります。

更新トランザクションがコミットされると、置き換えファイルの名前は、リンクされた オリジナル・ファイルの名前に変更されます。リンクされたオリジナル・ファイルの許 可は保存されます。

#### 関連概念:

- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』
- 137 ページの『アプローチ 4 の使用例』

#### 関連資料:

- SQL リファレンス 第2巻の『UPDATE ステートメント』
- SQL リファレンス 第1巻の『DLREPLACECONTENT スカラー関数』
- 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# アプローチ 4 の使用例

次のスキーマをもった、EMPLOYEE と呼ばれる表があると仮定します。

```
CREATE TABLE EMPLOYEE (
ID INTEGER NOT NULL,
NAME
         VARCHAR(20),
DEPT NO
         SMALLINT,
TITLE
         VARCHAR(50),
рното
         DATALINK LINKTYPE URL FILE LINK CONTROL
     INTEGRITY ALL
     READ PERMISSION DB
    WRITE PERMISSION ADMIN REQUIRING TOKEN FOR UPDATE
    RECOVERY YES ON UNLINK RESTORE,
RESUME
        DATALINK LINKTYPE URL FILE LINK CONTROL
     INTEGRITY ALL
    READ PERMISSION DB
    WRITE PERMISSION ADMIN NOT REQUIRING TOKEN FOR UPDATE
     RECOVERY YES ON UNLINK RESTORE,
PRIMARY KEY (ID)
)
```

EMPLOYEE は、HR\_DB データベースにあります。EMPLOYEE 表がある DB2<sup>®</sup> サーバーは HR\_DB.XYZ.COM と呼ばれます。RESUME 列についての参照されるリンクされたファイルは、データ・リンク・サーバー HR\_SRV.XYZ.COM の /hr/emp\_resumes ディレクトリーに保管されています。

EMPLOYEE ID 50100 のリンクされたファイル resume1.doc を更新したいと考えてい ます。リンクされたファイル参照は、

HTTP://HR\_SRV.XYZ.COM/hr/emp\_resumes/resume1.doc で、EMPLOYEE の DATALINK 列 RESUME に保管されています。更新を実行するには、次の操作を行います。

- 1. resume1.doc が保管されているのと同じディレクトリーで、resume1.doc ファイルを 新しいファイル resume1.doc.new にコピーする。
- 2. ワード・プロセッサーで、resume1.doc.new に必要な変更を加える。
- 3. 次の SQL UPDATE ステートメントを出す。

```
EXEC SQL UPDATE EMPLOYEE

SET RESUME = DLREPLACECONTENT( 'HTTP://HR_SRV.XYZ.COM/hr/emp_resumes/resume1.doc',

'HTTP://HR_SRV.XYZ.COM/hr/emp_resumes/resume1.doc.new')

WHERE ID = 50100:
```

4. 更新トランザクションがコミットすると、resume1.doc.new の名前は、resume1.doc に変更されます。オリジナルの resume1.doc ファイルの許可は保存されます。

#### 関連概念:

- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- ・ 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

#### 関連資料:

- SQL リファレンス 第2巻の『UPDATE ステートメント』
- SQL リファレンス 第 1 巻 の『DLREPLACECONTENT スカラー関数』
- 138 ページの『更新アプローチのサマリー』

# 更新アプローチのサマリー

139 ページの表 5 に、4 つの更新アプローチすべてについての、DATALINK 列定義の 必要事項、制約事項、利点、欠点が要約されています。

表 5.	リンク	されたフ	rTNO.	)更新アフ	プローチ	ーのサマリー
------	-----	------	-------	-------	------	--------

アプローチ	制約事項	<b>DATALINK</b> 列の 必要事項 <sup>1</sup>	利点	問題点
1 - ファイルの リンク解除、更 新、そして再リ ンク	<b>か</b> おり手具 なし	<u>必要事項<sup>1</sup></u> なし	↑7JA インプリメントが簡単な アプローチ	<ul> <li>リンクが解除されたファイ ルは、Data Links Manager にはコントロールされなく なっています。ネイティ ブ・ファイル・システムに よって定義された元のファ イル・アクセス許可がリス トアされるため、特権のあ るすべてのファイル・シス テム・ユーザーがリンク解 除されたファイルを変更す ることができます(たとえ ば、ファイルの名前変更、また はファイルの剤前など)。 また、必要なユーザーが、 リンク解除されたファイル を更新するための、必要な ネイティブ・ファイル・シ ステム許可をもっているこ とを確認する必要がありま</li> </ul>
				<ul> <li>す。</li> <li>リンクが解除されたファイ ルは、DB2 データベースで は参照されなくなります。</li> <li>リンクの解除されたファイ ルはデータベースに参照さ れなくなっているため、デ ータベースのメタデータ検 索や、データベースのバッ クアップなどでは使用する ことはできません。</li> <li>必要な DB2 データベースお よび必要なデータ・リン ク・サーバー・ディレクト リーの両方で、必要なユー ザーが、ファイル・リンク 権限をもっていることを確 認する必要があります。こ の権限がない場合は、更新 が完了した後に、ファイル を再リンクすることができません。</li> <li>部分更新を実行することは できません。</li> </ul>

表 5.	リンク	されたこ	ファイル	の更新ア	'プロー	-チのサ	マリー	(続き)	)
------	-----	------	------	------	------	------	-----	------	---

アプローチ	制約事項	DATALINK 列の 必要事項 <sup>1</sup>	利点	問題点
2 - リンクされ たファイルの更 新 / ネイティ ブ・ファイル・ システムによる アクセスの定義		<ul> <li>WRITE PERMISSION 属性は FS に設定</li> <li>RECOVERY 属性は NO に設定</li> </ul>	<ul> <li>インプリメントが簡単 なアプローチ</li> <li>部分更新操作が可能。 データベース・ユーザーは、リンクされたフ ァイルに対して、部分 更新操作の間に行われ たすべての変更をすぐ に見ることができま す。また、SQL UPDATE 操作を行う ために、DB2 ホスト 表に戻る必要はありま せん。</li> </ul>	<ul> <li>WRITE PERMISSION 属性が FS に設定されて定義されている列では、DB2 整合パックアップと整合リカバリーのオプションはサポートされていません。リカバリー操作が行われても、リンクされたファイルは、データベース・データと整合した状態にはリストアされません。</li> <li>リンクされたファイルに加えられた変更をパックアウトできません。</li> <li>WRITE PERMISSION 属性が FS に設定されて定義されている列の場合、DataLinks Manager 管理者は、その列の対応するリンクされた各ファイルに対して、適切なファイル・アクセス・コントロールが行われるようになっていることを確認する必要があります。</li> <li>データベース・ユーザーは、リンクされたファイル</li> <li>は、リンクされたファイルに対して、適切なファイル・アクセス・コントロールが行われるようになっていることを確認する必要があります。</li> <li>データベース・ユーザーは、リンクされたファイル</li> <li>広対して、部分更新操作の間に行われたすべての変更をすぐに見ることができます。更新ファイルを、DB2ホスト表のメタデータに対する更新と常に一緒に表示する必要がある場合は、これは最善のアプローチでない可能性があります。</li> </ul>

$\mathcal{X}$	表 5.	リンク	されたフ	アイル	の更新フ	アプロ・	ーチの	サマ	リー	(続き
---------------	------	-----	------	-----	------	------	-----	----	----	-----

アプローチ	制約事項	DATALINK 列の	利点	問題点
		必要事項 <sup>1</sup>		
3 - リンクされ たファイルの更 新 / ファイル・ アクセスのカス タマイズ	ネットワーク・ファイ ル・システム (NFS) を使用する場合は、パ ージョン 3.0 以降の ものでなければなりま せん。	<ul> <li>WRITE PERMISSION 属性は ADMIN に設 定</li> <li>READ PERMISSION 属性は DB に設定</li> <li>ファイル変更をパック アウトするには、 RECOVERY 属性を YES に設定して、列 を定義する必要もあり ます。</li> </ul>	<ul> <li>リンクされたファイル の変更許可は、かなり 細かいレベルでコント ロールすることができます。</li> <li>アプローチ 2 におい てのように、各ファイ ルに対して、更新特権 を指定する必要はありませんが、ファイルが 保管されているデータ・リンク・サーバー 上のファイルやユーザ ーのグループごとに更 新特権を指定すること ができます。</li> <li>部分更新操作が可能。 データベース・ユーザ ーは、リンクされたファイルに対して、部分 更新操作の間に行われたすべての変更をすぐ に見ることができますが、実際に変更をコミットするには、DB2 ホスト表で SQL UPDATE 操作を行う 必要があります。</li> <li>DB2 整合バックアッ プと整合リカバリーの オプションがサポート されています。</li> <li>RECOVERY 属性が YES に設定されて DATALINK 表列が定 義されている場合は、 必要にパックアウト することができます。</li> </ul>	<ul> <li>このアプローチをインプリ メントするには複数の作業 が必要です。</li> <li>必要なデータ・リンク・サ ーバー・ディレクトリーに 対して、必要なユーザーに ついてのファイル書き込み 特権を付与したことを確認 する必要があります。</li> <li>データベース・ユーザー は、リンクされたファイル に対して、部分更新操作の 間に行われたすべての変更 をすぐに見ることができま す。更新ファイルを、DB2 ホスト表のメタデータに対 する更新と常に一緒に表示 する必要がある場合は、こ れは最善のアプローチでな い可能性があります。</li> <li>表の DATALINK 列が、 RECOVERY 属性を YES に 設定して定義されていない 場合は、リンクされたファ イルに加えられた変更をパ ックアウトできません。</li> </ul>

表5. リンクされたファイルの更新アプローチのサマリー (続き)

アプローチ 制約事項	DATALINK 列の 必要事項 <sup>1</sup>	利点	問題点
<ul> <li>4 - リンクされ たファイルの内 容の置き換え</li> <li>・ 更新したい! れたファイノ 同じディレク に存在してい がある。</li> <li>・ ファイル名に ジナルのファ と最大 20 3 ることができ 部ストリンク する必要がお</li> </ul>	7 ルは次 なし 、ている 、 レククさ レのある 7 トリー いる必要 は、オリ マイル名 文字にす 53 表 で 構成 53 。	<ul> <li>インプリメントが簡単 なアプローチ</li> <li>リンクされたファイル の変更は、DB2 でコ ミットされた場合だけ 見ることができるよう になるため、トランザ クションが失敗した り、ロールバックした 場合は、オリジナルの ファイル内容は変更さ れないままです。</li> </ul>	<ul> <li>         ・置き換えファイルは、オリ         ジナル・ファイルに置き換         わるまでは、Data Links         Manager や DB2 にはコン         トロールされません。         ・置き換えファイルを入れる         追加のディスク・スペース         が必要です。         ・必要なデータ・リンク・サ         ーバー・ディレクトリーに         対して、必要なユーザーに         ついてのファイル・リンク         特権を付与したことを確認         する必要があります。         </li> </ul>

注:

1. 4 つの更新アプローチすべてで、DATALINK 列が、FILE LINK CONTROL 属性で定義されている必要があります。

#### 関連概念:

- 115 ページの『更新方法の概要』
- 117 ページの『アプローチ 1: ファイルのリンク解除 / 更新 / 再リンク』
- 119 ページの『アプローチ 2: リンクされたファイルの更新 / ネイティブ・ファイル・システムによるアクセスの定義』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 135 ページの『アプローチ 4: リンクされたファイルの内容の置き換え』

# 第4部 トラブルシューティング

第6章 サーバーのリカバリー	145	DLFM402E .
データ・リンク・サーバー・マシンの障害	145	DLFM501E .
障害とリカバリーの概要	145	DLFM701E .
DB2 Data Links Manager システムのセット		DLFM703E .
アップとバックアップに関する推奨事項	147	DLFM704E .
ファイル・システムのバックアップとリスト		DLFM706W.
アに関する推奨事項	147	DLFM707I .
ファイル・システム・ディレクトリー階層を		DLFM721E .
現時点の状態まで戻す	148	DLFM741E .
db2_recon_aid ユーティリティー	150	DLFM742E .
DB2 Data Links Manager のリカバリーのシ		DLFM743E .
ナリオ	152	DLFM744E .
		DLFM746E .
第7章 データ・リンク・ファイル・マネー		DLFM747E .
ジャーのエラー・メッセージの解説	159	DLFM748I .
DLFM001I	161	DLFM749E .
DLFM101E	161	DLFM750I .
DLFM121E	162	DLFM751E .
DLFM122E	162	DLFM8011 .
DLFM124E	163	DLFM802I .
DLFM126E	163	DLFM803I .
DLFM128E	163	DLFM804I .
DLFM129I	163	DLFM805I .
DLFM151I	164	DLFM806I .
DLFM201E	164	DLFM807I .
DLFM202E	165	DLFM808I .
DLFM203E	165	DLFM809I .
DLFM204E	165	DLFM810I .
DLFM205E	165	DLFM811E .
DLFM206E	166	DLFM812I .
DLFM207E	166	DLFM813I .
DLFM208I	166	DLFM814I .
DLFM209E	167	DLFM900I .
DLFM210E	167	DLFM901E .
DLFM211E	167	DLEM908E

DLFM402E							170
DLFM501E							170
DLFM701E							178
DLFM703E							178
DLFM704E							178
DLFM706W							179
DLFM707I							179
DLFM721E							179
DLFM741E							179
DLFM742E							180
DLFM743E							180
DLFM744E							181
DLFM746E							181
DLFM747E							181
DLFM748I							182
DLFM749E							182
DLFM750I							182
DLFM751E							183
DLFM801I							183
DLFM802I							183
DLFM803I							184
DLFM804I							184
DLFM805I							184
DLFM806I							185
DLFM807I							185
DLFM808I							185
DLFM809I							186
DLFM810I							186
DLFM811E							186
DLFM812I							187
DLFM813I							187
DLFM814I							187
DLFM900I							187
DLFM901E							188
DLFM908E							188
DLFM909E							189

DLFM254I . .

# 第6章 サーバーのリカバリー

この章では、データ・リンク・サーバー上でのディスク障害や機械故障の後、リカバリ ーをどのように行うか、またそのような災害時回復のシナリオに対処するために管理者 がとるべきバックアップのストラテジーについて解説します。

特に断りのない限り、この章で述べる内容は、AIX システム、Solaris オペレーティング 環境、Windows オペレーティング・システムで稼動するデータ・リンク・サーバーに共 通のものです。

# データ・リンク・サーバー・マシンの障害

データ・リンク・サーバーのマシンに障害が発生した場合は、データ・リンク・ファイ ル・マネージャーと対話する DB2 アプリケーションは停止する可能性があります。 DB2 アプリケーションをシステムから切り離すには、db2 force application コマンド を使用します。

また、データ・リンク・サーバー・マシンに障害が発生した後は、次のコンポーネント もリカバリーしなければならない場合があります。

- DATALINK 列のある表が含まれている DB2 データベース
- Data Links Manager のデータベース (DLFM\_DB)
- データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF)
- Data Links Manager に登録された DLFF がコントロールしているファイル・システム
- Data Links Manager のアーカイブ領域

#### 関連概念:

・145 ページの『障害とリカバリーの概要』

#### 関連資料:

• コマンド・リファレンス の『FORCE APPLICATION コマンド』

# 障害とリカバリーの概要

DATALINK 列で参照されているファイルが入っているディスクに障害が発生した場 合、そのファイル・システムのディレクトリー階層だけでなく、ユーザー・ファイルも すべて破壊される可能性があります。そのような状況からでも回復できるように、管理 者はユーザー・データとディレクトリー階層が入っているファイル・システムのバック アップを定期的に作成して、リストアできるようにしていなければなりません。リスト アされるファイル・システムには、ディレクトリー、ファイルの所有権、およびタイム・スタンプが保存されている必要があります。

ファイル・システムをリストアした後、ファイル・システムのバックアップ後に行われ たディレクトリーの変更を適用し、破損した時点の状態までディレクトリー構造を戻す 必要があります。このステップを行ってから、損傷したディスク上のファイルを参照す るすべての表に対して DB2<sup>®</sup> **RECONCILE** コマンドを実行する必要があります。この 作業を簡単に行うため、*db2\_recon\_aid* ユーティリティーが提供されています。

破損が発生した場合、ファイルの状態については以下の 3 つのいずれかであると考えられます。

- リンクされた状態にあり、RECOVERY NO 属性を持つ DATALINK 列で参照される ファイルは、以下のように処理されます。
  - ファイル・システム上にそのファイルがなければ、対応する DATALINK 列の値は NULL に設定されます。
  - ファイルが存在し、DATALINK 列にも、READ PERMISSION FS 属性と WRITE PERMISSION FS 属性が定義されている場合は、ファイルの正確性の確認のための チェックはそれ以上行われません。
  - ファイルが存在し、参照している DATALINK 列にも WRITE PERMISSION BLOCKED 属性が定義されている場合は、ファイルの変更時刻とファイル・サイズがチェッ クされます。それらの値で一致しないものがあれば、DATALINK 列の値は NULL に 設定されます。
- 対応する DATALINK 列が RECOVERY YES 属性をもつときに、リンクされた状態に あるファイルは、ファイル変更時刻がリンク時のものと異なる場合、あるいはファイ ルが見付からない場合、アーカイブ・サーバーからリストアされます。

ファイル・システム上にあるバージョンの変更時刻が異なれば、.MOD という拡張 子が付けられて名前が変更され、それより新しい変更内容は失われません。アーカイ ブされたバージョンは引き続き検索され、名前が変更されたバージョンは例外報告に 報告されます。

名前が変更されて拡張子 .MOD が付けられたこのファイルのバージョンがすでにあ る場合、ファイルの検索は行われずに、DATALINK 列の値が NULL に変更され、例 外報告に報告されます。

3. ファイルはファイル・サーバー上でリンクされていない。この場合、ファイルはリス トアされず、正確性に関するチェックも行われません。

#### 関連資料:

- コマンド・リファレンス の『RECONCILE コマンド』
- コマンド・リファレンス の『db2\_recon\_aid 複数の表の RECONCILE コマンド』
- 145 ページの『データ・リンク・サーバー・マシンの障害』
- 150 ページの『db2\_recon\_aid ユーティリティー』

# DB2 Data Links Manager システムのセットアップとバックアップに関する推奨事項

システムをよりリカバリーしやすくするため、以下のような手順でシステムのセットア ップおよびバックアップを行うことが勧められています。

- DLFM データベース (DLFM\_DB)、DB2 データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) が制御しているファイル・システム、DLFM バックアップ・ディレクトリー、および DLFM ホーム・ディレクトリーは別々のファイル・システムに配置します。これらの間でディスクが共用されないようにしてください。
- IBM の Tivoli Storage Manager などのストレージ管理機能で、DLFF や DLFM が コントロールしているすべてのファイル・システムを定期的にバックアップします。 このようにしておくと、ディスク障害が発生したときにもデータが保護されます。
- 3. DB2 データベース **1** つのみを **1** つ以上の DB2 Data Links Manager に関連付ける ようにします。できるだけ、複数のデータベースを 1 つの DB2 Data Links Manager に関連付けないようにします。これを行うと、特定のリカバリー・シナリオ が必要以上に複雑になるからです。 DB2 データベースとデータ・リンク・サーバー 上の DLFM\_DB データベースのフル・データベース・バックアップを実行してくだ さい。データベース・バックアップがすべて一緒に行われるように、そのタイミング を調整します。

#### 関連概念:

• 145 ページの『障害とリカバリーの概要』

#### 関連資料:

• 147 ページの『ファイル・システムのバックアップとリストアに関する推奨事項』

# ファイル・システムのバックアップとリストアに関する推奨事項

IT 環境のデータ保全性と回復可能性を実現するために定期的なバックアップ体制を確立 する必要があります。

すべてのタイプのファイル・システムについて、市販の多くのバックアップ・リスト ア・プログラムを使用することができます。これらのプログラムを使用すると、ファイ ル・システムを選択したすべてのメディアにバックアップすることができます。また、 通常、これらのプログラムには、簡単に使用できるリストア操作機能が備わっていま す。このようなプログラムの例として IBM の Tivoli Storage Manager があります。 Tivoli Storage Manager は、DB2 データベース製品がサポートするすべての環境で稼働 します。

ご使用のオペレーティング・システムでもバックアップ・リストア・ユーティリティー が提供されています。 Windows NT と Windows 2000 には、バックアップ・ユーティ リティーがあります。 AIX には、システム・ストレージ管理ユーティリティーがあり ます。 Solaris オペレーティング環境では、ufsdump コマンドと ufsrestore コマンド を使用することができます。バックアップ・ユーティリティーの詳細については、オペ レーティング・システムの資料を参照してください。

**重要**: 増分バックアップ・ストラテジーを使用すれば、破損後のリカバリー時間を短縮 することができます。レベル 0 は全バックアップを、レベル 1 から 9 は増分バックア ップを意味します。レベル n バックアップでは、レベル (n-1) バックアップ後に変更 が行われたファイルだけがバックアップされます。レベル n のバックアップが行われた 後、次に行われるバックアップはレベル (n+1) バックアップになります。

#### 関連概念:

- ・ 145 ページの『障害とリカバリーの概要』
- 148 ページの『ファイル・システム・ディレクトリー階層を現時点の状態まで戻す』

#### 関連資料:

• 145 ページの『データ・リンク・サーバー・マシンの障害』

# ファイル・システム・ディレクトリー階層を現時点の状態まで戻す

ファイル・システムのリストア操作の後、必要に応じて、ディレクトリーを再作成する ことによって、手作業でファイル・システム・ディレクトリー階層を現時点の状態にす る必要があります。

再作成する必要のあるディレクトリーを特定するには、Data Links Manager の fsysadm.log ファイルを使用します。データは常に fsysadm.log に追加されます。

AIX<sup>®</sup> と Solaris オペレーティング環境では、ディレクトリーの変更は

*INSTHOME*/sqllib/fsysadm.log ファイルに記録されます。ここで、*INSTHOME* は、デー タ・リンク管理者のホーム・ディレクトリーです。イベントごとに 1 項目ずつ追加され ていきます。また、ファイルの属性の設定も記録されます。fsysadm.log ファイルの項目 のフォーマットは、次のとおりです。

Time = <timestamp> EUID = <integer> UID = <integer> GID = <integer> Mode = <octal>
Action = <CREATE/REMOVE/SETATTR> Object type = <DIR/FILE> Path = <fully qualified name>

ここで、

- Time は、その活動のローカルでの時刻です。
- EUID は、その処理を実行したユーザーの有効ユーザー ID です。
- *UID* は、作成された、あるいは属性が変更されたファイルまたはディレクトリーのユ ーザー ID 属性です。
- *GID* は、作成された、あるいは属性が変更されたファイルまたはディレクトリーのグ ループ ID 属性です。
- Mode は、ファイルまたはディレクトリーのモードの 8 進表示です。

上記の Action は以下のいずれかになります。

- CREATE は、ディレクトリーが作成されたことを示しています。
- REMOVE は、ファイルまたはディレクトリーが除去されたことを示しています。
- SETATTR は、ファイルまたはディレクトリーのモードがユーザーによって変更されたことを示しています。

上記の Object type は以下のいずれかになります。

- DIR は、ディレクトリーを示します。
- FILE は、ファイルを示します。

加えて、上記の Path はファイルまたはディレクトリーの完全修飾パスです。

Windows<sup>®</sup> システムでは、ディレクトリー変更は *x*:¥sqllib¥dlfm¥fsysadm.log ファイル に記録されます。ここで、*x*: は、DB2<sup>®</sup> Data Links Manager をインストールしたドライ ブを表します。指定したファイルまたはディレクトリーについて、アクセス・コントロ ール・リストをもつユーザーまたはユーザー・グループの数によって、単一イベントが 複数の項目をもつ場合があります。fsysadm.log ファイルの最初の項目のフォーマット は、次のとおりです。

```
Time = <timestamp> User = <string> Action = <CREATE/REMOVE/SETATTR>
```

Object type =<DIR/FILE> Owner = <string> Path = <fully qualified name>

最初の項目に関連した追加項目のフォーマットは、次のとおりです。

ACE User = <string> Access = <Hex integer> ACE Type = <Hex integer> ACE Flags =<Hex integer>

ここで、

- Time は、その活動のローカルでの時刻です。
- User は、その処置を実行したユーザーの名前です。
- Owner は、そのファイルまたはディレクトリーの所有者の名前です。
- Path は、ファイルまたはディレクトリーの完全修飾パスです。
- ACE User は、このファイルまたはディレクトリーの ACL 項目を持つユーザーの名 前です。
- Access\* は、ユーザーが持つアクセス・タイプを示すフラグのセットです。
- ACE Type\* は、ACE のタイプです (たとえば、allow/deny など)。
- ACE Flags\* は、ACE タイプに固有のコントロール・フラグ・セットです。

上記の Action は以下のいずれかになります。

- CREATE は、ディレクトリーが作成されたことを示しています。
- REMOVE は、ファイルまたはディレクトリーが除去されたことを示しています。

• SETATTR は、ファイルまたはディレクトリーのモードがユーザーによって変更され たことを示しています。

上記の Object type は以下のいずれかになります。

- DIR は、ディレクトリーを示します。
- FILE は、ファイルを示します。

(\*) これらの 16 進値の定義については、Windows NT<sup>®</sup> と Windows 2000 の Microsoft<sup>®</sup> SDK に関する資料のアクセス・コントロール項目の構造を参照してください。

#### 関連概念:

• 145 ページの『障害とリカバリーの概要』

### db2\_recon\_aid ユーティリティー

db2\_recon\_aid ユーティリティーには、ファイル・サーバー上の DATALINK ファイル・ データと矛盾する可能性のあるデータベース表で、RECONCILE の検査と実行を行うメカ ニズムが備わっています。

RECONCILE ユーティリティーと同じように、db2\_recon\_aid ユーティリティーは、調整 される DATALINK 列をもった表の入った DB2 サーバー上で実行する必要がありま す。

AIX システムまたは Solaris オペレーティング環境では、db2\_recon\_aid ユーティリティーは、*INSTHOME*/sqllib/adm ディレクトリーに置かれます。ここで、*INSTHOME* は、 インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーです。

Windows システムでは、db2\_recon\_aid ユーティリティーは、*x*:¥sqllib¥bin ディレクトリーにあります。ここで、*x*: は、DB2 Data Links Manager をインストールしたドライブです。

db2\_recon\_aid ユーティリティーを実行するには、次の構文を使用します。 ▶ db2 recon aid



database\_name

調整する必要のある DATALINK 列をもった表が入ったデータベース名を指定 する、必須の値。

-check 調整を必要とする可能性のある表をリストするようにユーティリティーに指示 するパラメーター。このパラメーターを使用すると調整操作は行われませ ん。-reportdir パラメーターを指定しない場合は、このパラメーターが必要で す。

#### -reportdir directory\_name

-check パラメーターを指定しない場合に必要です。ユーティリティーが、各 調整操作についてのレポートを置くディレクトリーを指定します。調整が実行 された表ごとに <tbschema>.<tbname>.<ext> の形式のファイルが作成されま す。

- <tbschema> は表のスキーマです。
- <tbname> は表名です。
- <ext>は .ulk または .exp のいずれかです。.ulk ファイルには、デー タ・リンク・サーバーでリンク解除されたファイル・リストが含まれ、.exp ファイルには、データ・リンク・サーバーで例外であるファイル・リストが 含まれます。

#### -selective

指定した -server と -prefixes の基準に一致するファイル参照を含む DATALINK 列をもった表のみを処理するようにユーティリティーに指示する オプショナル・パラメーター。

- このパラメーターを使用する場合は、-server と -prefixes の両方のパラメー ターも使用する必要があります。
- このパラメーターを使用しない場合は、指定した DB2 データベースに登録 されたすべてのデータ・リンク・サーバーとそれらの接頭部は調整される か、調整の必要性があることを示すフラグが立てられます。

#### -server data\_links\_server\_name

-selective パラメーターを使用した場合に必要です。調整操作を実行しなけれ ばならないデータ・リンク・サーバーの名前を指定します。名前値は、指定し た DB2 データベースに登録されたデータ・リンク・サーバーのホスト名と同 じ IP ホスト名でなければなりません。

このパラメーターを使用しない場合は、指定した DB2 データベースに登録されたすべてのデータ・リンク・サーバーが調整されます。

#### -prefixes *prefix\_list*

-selective パラメーターを使用した場合に必要です。1 つ以上のデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS)の接頭部の名前を指定します。接頭部値は、スラッシュで始まる必要があり、指定したデータ・リンク・ファイル・サーバーに登録する必要があります。複数の接頭部名はコロン (:) で区切ります

が、スペースは組み込まないようにします。たとえば、次のようになりま す。/dlfsdir1/smith/:/dlfsdir2/smith/

リストの接頭部がパスの一番左のサブストリングである場合は、DATALINK 列値のパスは、*prefix\_list* と一致すると見なされます。

このパラメーターを使用しない場合は、指定した DB2 データベースに登録されたすべてのデータ・リンク・サーバーのすべての接頭部が調整されます。

#### 例:

db2\_recon\_aid -db STAFF -check

db2 recon aid -db STAFF -reportdir /home/smith

db2\_recon\_aid -db STAFF -check -selective -server dlmserver.services.com -prefixes /dlfsdir1/smith/

db2\_recon\_aid -db STAFF -reportdir /home/smith -selective -server dlmserver.services.com -prefixes /dlfsdir1/smith/:/dlfsdir2/smith/

#### 関連概念:

• 145 ページの『障害とリカバリーの概要』

#### 関連資料:

- コマンド・リファレンス の『RECONCILE コマンド』
- コマンド・リファレンス の『db2\_recon\_aid 複数の表の RECONCILE コマンド』

# DB2 Data Links Manager のリカバリーのシナリオ

ここでは、DB2<sup>®</sup> Data Links Manager のいくつかの障害のシナリオとそれらの障害をリ カバリーするために必要なステップを紹介しています。

障害例のシナリオでは、次の用語が使用されています。

#### DLFS ファイル・システム

登録されている接頭部 (AIX での例:/dlink)

# DLFM バックアップ・ディレクトリー

ファイルがバックアップされるディレクトリー (例:/dlfm/dlfm\_backup)

#### DLFM インスタンス・ディレクトリー

Data Links Manager 管理者 ID のインスタンス・ディレクトリー (例: /home/dlfm)

### DLFM DB2 データベース

すべてのメタデータを含んでいる DB2 データベース (DLFM\_DB)

#### DB2 データベース

DATALINK データ・タイプを含んでいる登録されたデータベース (例: CROWN)

すべてのシナリオを通して、例としてとりあげる DB2 データベースは、「CROWN」 と呼ばれます。

**重要:**以下のシナリオの中には、DB2 ノードと DB2 ファイル・マネージャー・ノードの両方で操作を実行する必要があるものが含まれています。

シナリオ	リカバリー・ステップ
DB2 データベースが破損 した、または誤ってドロ ップされたが、DB2 バッ クアップとログ・ファイ ルが使用可能である。 <b>重要:</b> データベースをド ロップすると、db2 デー タベース構成パラメータ ー <i>dl_time_drop</i> で指定さ れた時間内にドロップさ れます。	<ol> <li>DB2 ホストで、次のコマンドを入力します。この結果、影響を受けるすべての表は、 Datalink_Reconcile_Not_Possible (DRNP) 状態になります。</li> <li>db2 "restore database CROWN" db2 "rollforward database CROWN to end of logs and stop" db2 "connect to CROWN"</li> <li>以下のコマンドを入力して、データ・リンクを含むすべての表を Datalink_Reconcile_Pending (DRP) 状態にします。</li> <li>db2 set integrity for  to datalink reconcile pending db2 set integrity for  to datalink reconcile pending db2 set integrity for  datalink reconcile pending immediate unchecked db2 reconcile  direport <filename></filename></li> </ol>
この例では、DB2 データ ベースは、データ・リン ク・サーバーからドロッ プされて <b>いません</b> 。	

シナリオ	リカバリー・ステップ
DB2 データベースが明示 的にドロップされたが、 DB2 バックアップとロ グ・ファイルは使用可能 である。 重要:データベースをド ロップすると、db2 デー タベース構成パラメータ ー <i>dl_time_drop</i> で指定さ れた時間内にドロップさ れます。	<ul> <li>要件:以下の手順に従って、DLFM_DB データベースを更 新する前に、そのバックアップをとっておく必要がありま す。</li> <li>推奨事項:DLFM_DB データベースを更新するには、 IBM<sup>®</sup> サービスを使用します。このデータベースは、Data Links Manager の構成の重要な部分を占めています。</li> <li>1. データベースのドロップ操作が完了しており、そのデー タベースに関連付けられていたすべてのファイルでリン クが解除されていることを確認します。</li> <li>2. データ・リンク・サーバーで以下のコマンドを入力しま す。db2 select ステートメントで設定するのと全く同 じにように、dbid 値を db2 update ステートメントに 設定することが重要です。</li> <li>db2 "connect to dlfm_db" db2 "select dbid, dbname, dbinst, hostname from dfm_dbid" db2 "connect to dlfm_dbi db2 "select dbid, dbname, dbinst, hostname from dfm_dbid" db2 "rollforward database CROWN" db2 "rollforward database CROWN" db2 "rollforward database CROWN" db2 "rollforward database CROWN" db2 "select to CROWN"</li> <li>4. ステップ 3 で DRNP 状態にしたそれぞれの表につい て、以下のコマンドを入力します。</li> <li>db2 set integrity for  to datalink reconcile pending db2 set integrity for  to datalink reconcile pending db2 set integrity for  datalink reconcile pending db2 set integrity for  datalink reconcile pending</li> <li>db2 set integrity for  datalink reconcile pending immediate unchecked db2 reconcile  direport <filename></filename></li> </ul>

シナリオ	リカバリー・ステップ
DLFM_DB データベース が破損したが、 DLFM_DB データベース のバックアップとすべて のログ・ファイルが使用	<ol> <li>データ・リンク・サーバーで以下のコマンドを入力します。         <ul> <li>db2 "restore database d]fm_db" db2 "rollforward database d]fm_db to end of logs and stop"</li> </ul> </li> <li>DB2 ホストで、db2 recon aid ユーティリティーを実</li> </ol>
可能である。	行するために次のコマンドを入力します。このユーティ リティーは、影響を受けたデータ・リンク・サーバーへ の URL ファイル参照をもった各表に対して RECONCILE を自動的に実行します。
	db2_recon_aid -db CROWN -reportdir <dirpath> -selective -server <dlm_hostname> -prefixes <dlfs_prefix> • <b>dlm_hostname</b> は、影響を受けた Data Links Manager の登録された IP ホスト名です。</dlfs_prefix></dlm_hostname></dirpath>
	<ul> <li>dlfs_prefix は、影響を受けたデータ・リンク・ファ イル・システム (DLFS) に対応する登録された接頭部 です。</li> </ul>
DLFM_DB データベース が破損したが、 DLFM_DB データベース のバックアップが使用可 能である。ただし、ロ グ・ファイルの中には使 用できないものがある。	<ol> <li>データ・リンク・サーバーで以下のコマンドを入力します。         <ul> <li>db2 "restore database dlfm_db" db2 "rollforward database dlfm_db to end of logs and stop"</li> <li>DB2 ホストで、次のコマンドを入力します。この結果、影響を受けるすべての表は、             Datalink_Reconcile_Pending (DRP) 状態になります。             db2 "restore database CROWN" db2 "rollforward database CROWN" db2 "rollforward database CROWN to end of logs and stop"             db2 "restore database CROWN" db2 "rollforward database CROWN to end of logs and stop"             db2 integrity for  大方して、データ・リンク値をもつすべての表を DRP 状態にします。             db2 set integrity for  to datalink reconcile pending immediate unchecked db2 reconcile  datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 set integrity for  to datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 set integrity dor  to datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 set integrity dor  to datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 reconcile  direport <filename< p="">         db2 set integrity for  to datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 reconcile  direport <filename< p="">         db2 set integrity for  datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 reconcile          db2 set integrity for  datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 reconcile          db2 set integrity for  datalink reconcile pending immediate unchecked         db2 reconcile          db2 set integrity for  display         db2 set integrity for</filename<></filename<></li></ul></li></ol>

シナリオ	リカバリー・ステップ			
データ・リンク・ファイ ル・システム (DLFS) が 破損した。	<ol> <li>ストレージ管理機能から DLFS をリストアします。</li> <li>DB2 ホストで、db2_recon_aid ユーティリティーを実行するために次のコマンドを入力します。-selective オプションを使用すると、破損した DLFS に対してのみ調整を実行することができます。         <sup>db2_recon_aid -db</sup> CROWN -reportdir <dirpath>             -selective -server <dlm_hostname -prefixes="" <dlfs_prefix=""> </dlm_hostname></dirpath></li> <li>dlm_hostname は、影響を受けた Data Links         Manager の登録された IP ホスト名です。     </li> <li>dlfs_prefix は、影響を受けたデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS) に対応する登録された接頭部です。     </li> </ol>			
DLFM バックアップ・デ ィレクトリーが破損し た。	ストレージ管理機能から DLFM バックアップ・ディレクト リーをリストアします。			
DLFS ファイル・システ ムと DLFM バックアッ プ・ディレクトリーが破 損した。	<ol> <li>ストレージ管理機能から DLFM バックアップ・ディレクトリーをリストアします。</li> <li>ストレージ管理機能から DLFS をリストアします。</li> <li>DB2 ホストで、db2_recon_aid ユーティリティーを実行するために次のコマンドを入力します。-selective オプションを使用すると、破損した DLFS に対してのみ調整を実行することができます。</li> <li>db2_recon_aid -db CR0MN -reportdir <dirpath> -selective -server <dlm_hostname>-prefixes <dlfs_prefix></dlfs_prefix></dlm_hostname></dirpath></li> <li>dlm_hostname は、影響を受けた Data Links Manager の登録された IP ホスト名です。</li> <li>dlfs_prefix は、影響を受けたデータ・リンク・ファイル・システム (DLFS) に対応する登録された接頭部です。</li> </ol>			

シナリオ	リカバリー・ステップ			
DLFM_DB データベー ス、DLFM バックアッ プ・ディレクトリー、お よび DLFS ファイル・シ ステムが破損したが、 DLFM_DB データベース のバックアップとすべて のログ・ファイルが使用 可能である。	<ol> <li>データ・リンク・サーバーで以下のコマンドを入力します。         <ul> <li>db2 "restore database dlfm_db" db2 "rollforward database dlfm_db to end of logs and stop"</li> </ul> </li> <li>ストレージ管理機能から DLFM バックアップ・ディレクトリーをリストアします。</li> </ol>			
	3. ストレージ管理機能から DLFS をリストアします。			
	4. DB2 ホストで、db2_recon_aid ユーティリティーを実 行するために次のコマンドを入力します。-selective オ プションを使用すると、破損した DLFS に対してのみ 調整を実行することができます。			
	db2_recon_aid -db CROWN -reportdir <dirpath> -selective -server <dlm_hostname> -prefixes <dlfs_prefix> • <b>dlm_hostname</b> は、影響を受けた Data Links Manager の登録された IP ホスト名です。</dlfs_prefix></dlm_hostname></dirpath>			
	<ul> <li>dlfs_prefix は、影響を受けたデータ・リンク・ファ イル・システム (DLFS) に対応する登録された接頭部 です。</li> </ul>			
DLFM_DB、DLFS ファ イル・システム、および DLFM バックアップ・デ ィレクトリーが破損し た。DLFM_DB データベ ースのバックアップは使 用可能だが、ログ・ファ イルの中には使用できな いものがある。	<ol> <li>データ・リンク・サーバーで以下のコマンドを入力します。         <ul> <li>db2 "restore database dlfm_db" db2 "rollforward database dlfm_db to end of logs and stop"</li> </ul> </li> <li>ストレージ管理機能から DLFM バックアップ・ディレクトリーをリストアします。</li> </ol>			
	3. ストレージ管理機能から DLFS をリストアします。			
	4. DB2 ホストで、 <b>db2_recon_aid</b> ユーティリティーを実 行するために次のコマンドを入力します。- <b>selective</b> オ プションを使用すると、破損した DLFS に対してのみ 調整を実行することができます。			
	db2_recon_aid -db CROWN -reportdir <dirpath> -selective -server <dlm_hostname> -prefixes <dlfs_prefix> • <b>dlm_hostname</b> は、影響を受けた Data Links Manager の登録された IP ホスト名です。 • <b>dlfs_prefix</b> は、影響を受けたデータ・リンク・ファ</dlfs_prefix></dlm_hostname></dirpath>			
	イル・システム (DLFS) に対応する登録された接頭部 です。			

# 関連資料:

- ・ コマンド・リファレンス の『RECONCILE コマンド』
- コマンド・リファレンス の『db2\_recon\_aid 複数の表の RECONCILE コマンド』
- 150 ページの『db2\_recon\_aid ユーティリティー』

# 第 7 章 データ・リンク・ファイル・マネージャーのエラー・ メッセージの解説

ここでは、Windows NT、Windows 2000、AIX、Solaris オペレーティング環境でデー タ・リンク・ファイル・マネージャーを使用するときに表示されるメッセージとエラー について説明します。各メッセージ・コードやエラー・コードには、対応するメッセー ジ、考えられる原因、推奨アクションが付いています。

Windows NT および Windows 2000 のシステム上では、エラー・メッセージは、 x:¥sqllib¥*instance*¥db2diag.log ファイルに送られます。ここで、x: は、DB2 Data Links Manager をインストールしたディレクトリーで、*instance* は、Data Links Manager 管理 者が所有するインスタンスです (デフォルトでは dlfm)。エラー・メッセージは、**dlfm** コマンドを実行した人にも表示されます。

AIX および Solaris オペレーティング環境システムでは、エラー・メッセージは、 *INSTHOME*/sqllib/db2dump/db2diag.log ファイルに送られます。ここで、*INSTHOME*は、 インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーです。エラー・メッセージは、dlfm コ マンドを実行した人にも表示されます。

ここでは、以下のメッセージについて説明します。

- 161 ページの『DLFM001I』
- 161 ページの『DLFM101E』
- 162 ページの『DLFM121E』
- 162 ページの『DLFM122E』
- 163 ページの『DLFM124E』
- 163 ページの『DLFM126E』
- 163 ページの『DLFM128E』
- 163 ページの『DLFM129I』
- 164 ページの『DLFM151I』
- 164 ページの『DLFM201E』
- 165 ページの『DLFM202E』
- 165 ページの『DLFM203E』
- 165 ページの『DLFM204E』
- 165 ページの『DLFM205E』
- 166 ページの『DLFM206E』
- 166 ページの『DLFM207E』

- 166 ページの『DLFM208Ⅰ』
- 167 ページの『DLFM209E』
- 167 ページの『DLFM210E』
- 167 ページの『DLFM211E』
- 167 ページの『DLFM221E』
- 168 ページの『DLFM222I』
- 168 ページの『DLFM223E』
- 168 ページの『DLFM252E』
- 169ページの『DLFM254I』
- 169 ページの『DLFM341E』
- 170ページの『DLFM402E』
- 170 ページの『DLFM501E』
- 178 ページの『DLFM701E』
- 178 ページの『DLFM703E』
- 178 ページの『DLFM704E』
- 179ページの『DLFM706W』
- 179ページの『DLFM707I』
- 179 ページの『DLFM721E』
- 179 ページの『DLFM741E』
- 180 ページの『DLFM742E』
- 180ページの『DLFM743E』
- 181 ページの『DLFM744E』
- 181 ページの『DLFM746E』
- 181 ページの『DLFM747E』
- 182 ページの『DLFM748I』
- 182 ページの『DLFM749E』
- 182 ページの『DLFM750I』
- 183 ページの『DLFM751E』
- 183 ページの『DLFM801I』
- 183 ページの『DLFM802I』
- 184 ページの『DLFM803I』
- 184 ページの『DLFM804I』
- 184 ページの『DLFM805I』
- 185ページの『DLFM806I』
- 185 ページの『DLFM807I』

- 185ページの『DLFM808I』
- 186ページの『DLFM809I』
- 186ページの『DLFM810I』
- 186ページの『DLFM811E』
- 187ページの『DLFM812I』
- 187ページの『DLFM813I』
- 187 ページの『DLFM814I』
- 187 ページの『DLFM900I』
- 188 ページの『DLFM901E』
- 188 ページの『DLFM908E』
- 189 ページの『DLFM909E』

# DLFM001I

DLFM サーバーが開始されました。(DLFM server started.)

原因:	データ・リンク・ファイル・マネージャーが正常に開始されました。
処置:	必要なし

# DLFM101E

DLFM サーバーの始動でエラーが発生しました。理由コード = "<reason-code>"。(Error in DLFM server startup. Reason code = "<reason-code>".)

#### 理由コード -3:

データ・リンク・ファイル・マネージャーの初期化が失敗しました。

- **原因:** 以下の理由が考えられます。
  - 1. トレースの初期化ではエラーは発生しませんでした。
  - 2. 共通サブシステムの初期化ではエラーは発生しませんでした。
  - 3. DB2 ログ・マネージャーの初期化ではエラーは発生しませんでした。
  - 4. 共用リソースの作成ではエラーは発生しませんでした。
  - 5. モニター・スレッドの作成ではエラーは発生しませんでした。
  - sqlowait コードまたは sqlopost コードにエラーはありませんでした。
  - 7. DLFM が正常に開始される前に停止要求がありました。
  - 8. Initdone 状態に移る際にエラーが発生しました。

以下のステップを実行してください。

- 1. DB2 Data Links Manager 管理者としてシステムにログオンしま す。
- 2. dlfm stop コマンドを入力して、データ・リンク・ファイル・マ ネージャーを停止します。
- 3. dlfm shutdown コマンドを入力して、データ・リンク・サーバー をシャットダウンします。
- 4. dlfm start コマンドを入力して、Data Links Manager を開始しま す。
- 5. 問題が継続する場合は、db2diag.log のエラー情報を参照してくだ さい。
- 6. システム管理者に連絡してください。

# DLFM121E

処置:

接頭部名 "<prefix-name>" はすでに登録されています。(Prefix name "<prefix-name>" already registered.)

- **原因:** 指定した prefix-name は、既にこのデータ・リンク・ファイル・マネ ージャーで定義されています。
- **W置:** prefix-name パラメーターの正しい値を指定してください。現在登録されている接頭部のリストを表示するには、dlfm list registered prefixes コマンドを使用します。

# DLFM122E

接頭部名 "prefix-name>" は登録することができません。指定した共有ドライブは、す でに別の接頭部名で登録されています。(Prefix name "<prefix-name>" cannot be registered. Given shared drive already registered under another prefix name.)

このエラーは Windows 環境でのみ発生します。

- **原因:** 指定した *prefix-name* で指定された共用名は、すでに別の接頭部名 で、このデータ・リンク・ファイル・マネージャーに登録されていま す。
- 処置: 異なる共有ドライブ用の共用名を、登録されている prefix-name で指 定してください。現在登録されている接頭部のリストを表示するに は、dlfm list registered prefixes コマンドを使用します。

# DLFM124E

接頭部名 "<prefix-name>" は共有ドライブとして登録されていません。(Prefix name "<prefix-name>" not registered as a shared drive.)

このエラーは Windows 環境でのみ発生します。

- **原因:** 指定した *prefix-name* で指定された共用名は、このシステムで定義された共有ドライブに対応していません。
- 処置: 異なる共有ドライブ用の共用名を、登録されている prefix-name で指定してください。接頭部を登録したい共有ドライブについて、 Windows に定義されている共用名をチェックしてください。

# DLFM126E

指定した接頭部名 "<prefix-name>" は、正しくないか、登録されていません。戻りコー ド = "<return-code>"。(Specified prefix name "<prefix-name>" is not correct or not registered previously. Return code = "<return-code>")

- **原因:** 指定した prefix-name は、このデータ・リンク・ファイル・マネージャーに登録されていません。
- ・ 正しい prefix-name パラメーター値を指定してください。現在登録されている接頭部のリストを表示するには、dlfm list registered
   prefixes コマンドを使用します。

# DLFM128E

要求された管理機能を実行することができません。 戻りコード =

"<return-code>"。 (Unable to perform requested administration function. Return code = "<return-code>".)

原因:	要求された管理機能は失敗しました。	return-code	は、	失敗に関連した
	内部 SQL コードを表します。			

処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
- 3. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

# DLFM129I

DLFM\_DB <db-scope> の自動バックアップが起動されました。バックアップが完了する までお待ちください。(Automatic backup of DLFM\_DB <db-scope> has been triggered. Please wait for the backup to complete.) 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャーは、そこに含まれる
 DLFM\_DB のデータベースまたは表スペースのバックアップを開始しました。バックアップが行われるのは、最後に入力した dlfm コマンドによって記録された重要な情報を保存するためです。

処置: バックアップを中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが保守するファイルの情報量によって異なりますが、この処理が完了するには、数分、またはそれ以上かかる場合があります。

# DLFM151I

次のファイルが更新されています。(The following files are being updated:)

- 原因: WRITE PERMISSION ADMIN 属性をもった DATALINK 列にリンクされた、 更新中のファイルのセットが、このメッセージに続いてリストされま す。書き込みトークンを使用して更新のために開いているファイルの みが表示されます。
- 処置: 処置の必要はありません。ただし、ファイル更新の継続や完了に必要 な書き込みトークンの置き場所を誤った場合は、ファイル名と一緒に リストされるトークンをメモにとっておくことができます。

# DLFM201E

DLFM 登録サービス中にエラーが発生しました。理由コード = "<reason-code>"。(Error in DLFM registration service. Reason code = "<reason-code>".)

#### 理由コード-2

データベース登録でエラーが起きました。

**原因:** データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーでエ ラーが起きました。

**処置:** 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### 理由コード-4

接頭部登録でエラーが起きました。

- **原因:** データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーでエ ラーが起きました。
- 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. 問題を IBM サービスに報告してください。

ファイル・システムの登録の詳細については、このトピックの終わり にある関連リンクを参照してください。

# DLFM202E

指定したデータベース・サーバーの登録が無効です。(Specified database server registration not valid.)

- **原因:** コマンドで指定した、*database\_name、instance\_name、*または *node\_name*(あるいはその全部)のパラメーターが無効です。
- 処置: database\_name、instance\_name、および node\_name の各パラメーターの正しい値を指定してください。現在登録されているデータベース・サーバーのリストを表示するには、dlfm list registered databasesコマンドを使用します。

# DLFM203E

指定したディレクトリーが無効です。(Specified directory not valid.)

- **原因:** コマンドで指定した directory パラメーターが無効です。
- 処置: 有効なディレクトリー名を指定してください。

## DLFM204E

指定したディレクトリーは、登録済み接頭部にはありません。(Specified directory does not belong to a registered prefix.)

- **原因:** コマンドで指定した *directory* パラメーターは、登録済み接頭部には ありません。
- 処置: directory パラメーターの正しい値を指定してください。現在登録されているデータベース接頭部のリストを表示するには、dlfm list registered prefixes コマンドを使用します。

# DLFM205E

指定したディレクトリー・アクセス・コントロールはすでに定義されています。 (Specified directory access control already defined.)

**原因:** 指定した directory、db2\_authorization\_id、および database\_server の各 パラメーターについてのアクセス・コントロールは、すでに定義され ています。  処置: コマンドを再実行する前に、指定したこれらのパラメーターの既存の アクセス・コントロール項目を表示するために、dlfm list registered directories コマンドを使用してください。

# DLFM206E

指定したディレクトリー・アクセス・コントロールが見付かりません。(Specified directory access control cannot be found.)

 原因: 指定した directory、db2\_authorization\_id、および database\_server の各 パラメーターについてのアクセス・コントロールが登録されていません。
 処置: パラメーターの正しい値を指定してください。

#### DLFM207E

指定した接頭部が無効です。(Specified prefix not valid.)

- **原因:** コマンドで指定した *prefix* パラメーターは、登録済み接頭部ではあり ません。
- 正しい prefix パラメーター値を指定してください。現在登録されている接頭部を表示するには、dlfm list registered prefixes コマンドを使用します。必要な場合は、dlfm add prefix コマンドを使用して、必要な接頭部を登録します。

### DLFM208I

"<user-set>" に属するすべての既存の DB2 サーバー接続が、データベース (データベー ス名 "<db-name>"、インスタンス "<instance>"、ノード "<node>") から切断されるまで は、この変更内容は有効になりません。(This change will not be effective until all of the existing DB2 server connections belonging to "<user-set>" are disconnected from the database (database name "<db-name>", instance "<instance>", node "<node>").)

user-set には、個々のユーザー、ユーザー・グループ、またはすべてのユーザー (つまり、PUBLIC) など、このコマンドによって影響を受けるユーザー (DB2 authids) が記述 されています。

- 原因: 指定した DB2 サーバーとデータ・リンク・ファイル・マネージャー 間の切断を要求するコマンドが、既存の接続が切断されていない間に 出された可能性があります。
- 処置: 指定したコマンドの変更点をすぐに有効にする必要がある場合は、指定したデータベースに属する指定したユーザーが開始した、このデータ・リンク・ファイル・マネージャーと DB2 サーバー間のすべての接続を終了してください。
### DLFM209E

指定したユーザ valid.)	- ID またはグループ ID が無効です。(Specified user or group id not
原因:	指定した ID がシステムの有効なユーザー ID またはグループ ID で はありません。
処置:	システムで ID を作成するか、すでに存在する ID を指定してくださ い。

# DLFM210E

このユーザーまたはグループについて指定したアクセス・コントロールはすでに定義されています。(Specified access control for this user or group has already been defined.)

- **原因:** 指定したユーザー ID またはグループ ID のアクセス・コントロール がすでに定義されています。
- 処置: 必要なアクセス・コントロールがすでに定義されていることを確認す るためには、dlfm list registered replication access control コマ ンドを使用してください。定義されていない場合は、ユーザー ID、グ ループ ID、その他の ID を、必要なパラメーター値と置き換え、も う一度コマンドを出してください。

### DLFM211E

指定したアクセス・コントロールが、このユーザーまたはグループに定義されていません。(Specified access control is not defined for this user or group.)

- **原因:** 指定したユーザー ID またはグループ ID についてのアクセス・コン トロールが見付かりません。
- 処置: 正しいアクセス・コントロール値を指定してください。登録されているアクセス・コントロール値を表示するには、dlfm list registered users コマンド、dlfm list registered directories コマンド、または dlfm list registered replication access control コマンドを使用することができます。

### DLFM221E

DROP\_DLM の処理が失敗しました。詳細については、db2diag.log ファイルを参照して ください。(DROP\_DLM processing failed. Refer to db2diag.log file for additional details.)

原因: Data Links Manager が、指定したデータベースに対して、リンク解除 やガーベッジ・コレクションの処理を開始できませんでした。以下の 理由が考えられます。

• Data Links Manager が実行されていない。 • database\_name、instance\_name、または host\_name (あるいはその全 部)のパラメーターの値が誤って指定されている。 • Data Links Manager のいずれかのコンポーネント・サービスが失敗 した。 以下のステップを実行してください。 如置 : 1. Data Links Manager が実行されていることを確認する。実行され ていない場合は、dlfm start コマンドを入力して、DLFM を再始 動する。 2. database\_name、instance\_name、および host\_name の各パラメータ ーの正しい値を指定する。現在登録されているデータベース・サー バーのリストを表示するには、dlfm list registered databases コマンドを使用します。 問題が継続する場合は、失敗したコンポーネント・サービス (接続管 理サービス、トランザクション管理サービスなど) があるかどうかを 確認するために、db2diag.log の情報を参照してください。 db2diag.log のエラー・コードを見て、そのエラー・コードの下に指 示されている適切な処置を実行してください。

# DLFM222I

"<request-type>" 要求は成功しました。(The "<request-type>" request was successful.)原因: 指定した要求 (またはコマンド) は正常に完了しました。

処置: 必要なし

### DLFM223E

"<request-type>" 要求は失敗しました。(The "<request-type>" request failed.)

- 原因: 指定した要求 (またはコマンド) は正常に完了しませんでした。
- 処置:
  このメッセージに一緒に付いているその他のメッセージとコードを記録しておくか、db2diag.logファイルの追加エラー情報を参照してください。

# DLFM252E

DLFM レジストリー変数 DLFM\_INSTALL\_PATH ("<variable-value>") が、必要な "sqllib" ディレクトリーを指していません。(The DLFM registry variable DLFM\_INSTALL\_PATH ("<variable-value>") does not point to the required "sqllib" directory.)

- **原因:** DLFM\_INSTALL\_PATH レジストリー変数は *variable-value* によって示さ れる値をもっていますが、必要な "sqllib" サブディレクトリーを指 していません。
- 処置: db2set コマンドを使用して、DLFM\_INSTALL\_PATH レジストリー変数 にデータ・リンク・ファイル・マネージャーがインストールされてい る "sql1ib" ディレクトリーを含むパスを割り当てます。

### DLFM254I

DLFS 構成ファイル "<file-name>" が、バックアップ・ファイル "<backup-file-name>" からリストアされています。(DLFS configuration file "<file-name>" is being restored from backup file "<backup-file-name>".)

原因: DLFS 構成ファイル file-name は見付かりませんでしたが、バックア ップ・コピー backup-file-name は見付かりました。このバックアッ プ・コピーが、file-name 構成ファイルを置き換えるために使用されて います。

**処置:** 必要なし

### DLFM341E

Data Links Manager が前に異常終了しています。"DLFM SHUTDOWN" コマンドがおそ らく必要です。アクティブ・プロセスの数は <num-processes> です。戻りコード = "<return-code>"。(Data Links Manager previously terminated abnormally. "DLFM SHUTDOWN" command may be required. Number of active processes was: <num-processes>, return code = "<return-code>".)

原因: Data Links Manager が、前回の実行から残っているシステム・リソースを検出しました。これは、Data Links Manager が異常終了し、残っているシステム・リソースをクリーンアップするまでは、Data Links Manager を再始動できないことを意味します。

処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
- 3. 残っているリソースをクリーンアップするために、dlfm shutdown コマンドを入力します。
- 4. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

### DLFM402E

DLFM は現在保守モードで動作しています。再始動リカバリー処理しか許可されていま せん。この時の DLFM に対しては、その他の処理を実行することはできません。(The DLFM is currently operating in Maintenance mode. Only restart recovery processing is allowed. No other activity can be performed with this DLFM at this time.)

- **原因**: データ・リンク・ファイル・マネージャーに重大エラーが発生しました。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - 2. 修正処置を実行します。
  - 3. データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します。
  - 4. 問題を解決できない場合は、その問題を IBM サービスに報告して ください。

# DLFM501E

<manager-type> 管理サービス "<service-type>" が失敗しました。戻りコード = "<return-code>"。(<manager-type> management service "<service-type>" failed. Return code = "<return-code>".)

接続、ファイル、グループ、接頭部、トランザクションの manager-type 値については、 下記の対応する service-type を参照してください。

#### AbortTxn

- **原因:** 以下の理由が考えられます。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
  - 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。

### 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
- 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### BeginTxn

**原因:** 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### CommitTxn

**原因:** 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - 2. データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

### Connect

原因:

- データベースがデータ・リンク・ファイル・マネージャーに接続する のに失敗しました。以下の理由が考えられます。
  - データベースがデータ・リンク・ファイル・マネージャーに登録されていません。
  - 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。

処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. DB2 Data Links Manager 管理者は、データベースをデータ・リン ク・ファイル・マネージャーに登録する必要があります。
- 3. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

#### DefineGroup

原因: 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### DeleteDatabase

- 原因: 以下の理由が考えられます。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
  - システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。

# 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
- 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### DeleteGroup

**原因:** 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### Disconnect

原因: 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - 2. データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### LinkFiles

#### 原因:

以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。

 データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。

### 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
- 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### PrepareTxn

- **原因:** 以下の理由が考えられます。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
  - 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### QueryARTxns

- 原因: 以下の理由が考えられます。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
  - システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。

#### 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
- 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### QueryGroups

原因: 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### QueryGroupsExt

- **原因:** 以下の理由が考えられます。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
  - 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### QueryGroupsExt2

原因: 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。

 データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。

処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
- 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### QueryPreparedTxns

- **原因:** 以下の理由が考えられます。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
  - 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### ReleaseDelete

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャーは、現在の状態のファイル を削除することができません。ファイルは、データ・リンク・ファイ ル・マネージャーによって管理されていたときに、管理ユーザーによ って削除または変更されました。
- **処置:** このファイルの状況をチェックしてから、必要に応じて削除してくだ さい。

#### ReleaseRestore

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャーは、このファイルの元の所 有者および許可をリストアできませんでした。ファイルは、データ・ リンク・ファイル・マネージャーによって管理されていたときに、管 理ユーザーによって削除または変更されました。
- 処置: このファイルの状況をチェックして、必要に応じて、所有権や許可の 属性を変更するか、ファイルを削除してください。

#### ResolvePrefixId

原因: 以下の理由が考えられます。

- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
- 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
- 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
  - 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

#### ResolvePrefixName

- **原因:** 所定のファイルの接頭部がデータ・リンク・ファイル・マネージャー に登録されていません。
- 処置:DB2 Data Links Manager 管理者は、指定したファイルの接頭部を、<br/>データ・リンク・サーバーに登録する必要があります。

#### **TakeOver**

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャーはファイルの管理を始める ことができません。データ・リンク・ファイル・マネージャーがこの ファイルをコントロールする前にファイルが削除または変更されました。
- 処置: このファイルの状況をチェックして、必要に応じて、所有権や許可の 属性を変更してください。

#### UnlinkFile

- 原因: 以下の理由が考えられます。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・マネージャーで エラーが起きました。
  - 2. システム共用リソースにアクセスするときにエラーが発生しました。
  - 3. オペレーティング・システムにエラーが発生しました。
  - データ・リンク・ファイル・マネージャーのログ・ファイルは破壊 されています。

処置:

以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- データ・リンク・ファイル・マネージャーを再始動します (必要な 場合)。
- 3. 問題を IBM サービスに報告してください。

### DLFM701E

"<command>" に無効な数の引き数 (<num-args>) が指定されました。理由コード = "<reason-code>"。(Invalid number of arguments (<num-args>) specified on "<command>". Reason code = "<reason-code>".)
原因: 指定した command で指定した引き数が多すぎるか、あるいは少なす

	ぎます。 num-args は、実際に指定された引き数の数です。
処置:	指定したコマンドで指定する引き数の数を修正してください。 command の正しい構文の詳細については、dlfm help を使用してくだ

# DLFM703E

指定したサーバー名 "<server-name>" を使用して、ネットワーク・ホスト項目を入力で きませんでした。戻りコード = "<return-code>"。(Unable to get network host entry using given server name "<server-name>". Return code = "<return-code>".)

- **原因:** "gethostbyname" システム機能は指定した server-name を解決することができず、特定の return-code で失敗しました。
- 処置: 指定した server-name が正しく指定されており、ローカル・ドメイン・ネーム・サーバーまたはシステム hosts ファイルで定義されていることを確認してください。

# DLFM704E

指定したコントロール・ファイル名はこの DLFM サーバーに関連していません。 (Specified control file name is not associated with this DLFM server.)

- 原因: "dlfm\_export" ユーティリティーでは、最初のパラメーターとしてそれに渡された "control file name" は、現行 DLFM サーバーのホスト名と一致している必要があります。
- 処置: 指定した "control file name" は正しく指定されており、DLFM サーバ ーのホスト名 (または IP アドレス) に一致することを確認してくださ い。

# DLFM706W

この DLFM サーバーからアーカイブされるファイルはありません。(No files to be archived from this DLFM server.)

- 原因: "dlfm\_export" ユーティリティーは、"control file"の入力の内容を読み取りましたが、その URL 項目を 1 つも処理できませんでした。この理由は、通常、ファイルに現行 DLFM サーバーを参照する URLが 1 つも存在していないためです。この結果、出力アーカイブ・ファイルに書き込まれるファイルはありません。
- 処置: コントロール・ファイルの少なくとも 1 つの URL が、現行 DLFM サーバーのホスト名と一致するホスト名を持つことを確認してください。このような URL がない場合は、この DLFM サーバーのアーカ イブに書き込む必要のあるファイルは実際に存在しません。また、このサーバーにこれ以上の処置は必要ありません。

# DLFM707I

"<command>" は正常に完了しました。("<command>" completed successfully.)

原因:	指定した command はその処理を正常に完了しました。
処置:	必要なし

### DLFM721E

コマンド "<command>" に無効な引き数 ("<arg>") が指定されています。(Invalid argument ("<arg>") supplied for command "<command>".)

- **原因:** 指定した arg 値は、指定した command の有効な引き数ではありません。
- **処置:** 指定した command の正しい構文を確認し、それに従って入力した引き数を修正してください。

# DLFM741E

DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数に無効なバックアップ・ディレクトリー 名 "<dir-name>" が指定されています。(Invalid backup directory name "<dir-name>" specified in DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME registry variable.)

- 原因: DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値 dir-name が無効です。 この変数で指定するディレクトリーは、絶対パス (つまり、スラッシュ文字で始まる) でなければなりません。
- **処置:** *dir-name* 値が、現行システム上に存在する、正しい形式の絶対パスで あることを確認してください。(このディレクトリーは、ファイル・

バックアップのためにデータ・リンク・ファイル・マネージャーによって使用されます。) db2set コマンドを使用して、 DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値が正しいものになるよう に修正してください。

## DLFM742E

DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数に指定されたバックアップ・ディレクト リー名 "<dir\_name>" にアクセスすることができません。(Unable to access backup directory name "<dir\_name>" specified in DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME registry variable.)

- 原因: DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値 dir-name が無効です。 この変数で指定するディレクトリーは、既存のディレクトリーの絶対 パスでなければなりません。指定した dir-name が見付かりませんで した。
- 処置: dir-name 値が、現行システム上に存在する絶対パスであることを確認してください。(このディレクトリーは、ファイル・バックアップのためにデータ・リンク・ファイル・マネージャーによって使用されます。) db2set コマンドを使用して、DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値が正しいものになるように修正してください。

# DLFM743E

ローカル・ディスク・バックアップに保管されているファイル "<file-name>" が見付か りませんでした。(Unable to find file "<file-name>" stored in local disk backup.)

- **原因:** 指定した file-name はローカル・ディスク・バックアップにあるはず ですが、そこにはありませんでした。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
  - db2set DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME コマンドを使用して、 DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数が、ファイル・バックア ップのためにこのデータ・リンク・ファイル・マネージャーが使用 するディレクトリーを指していることを確認してください。
  - 4. 正しく設定されていない場合は、db2set コマンドを使用して、 DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値が正しいものになる ように修正してください。
  - 5. 指定した *file-name* がバックアップ・ディレクトリーに存在することを確認してください。

### DLFM744E

ローカル・ディスク・バックアップのファイル "<file-name>" にアクセスできませんで した。(Unable to access file "<file-name>" in local disk backup.)

- **原因:** 指定した file-name はローカル・ディスク・バックアップにありましたが、それにアクセスできませんでした。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
  - 3. db2set DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME コマンドを使用して、 DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数が、ファイル・バックア ップのためにこのデータ・リンク・ファイル・マネージャーが使用 するディレクトリーを指していることを確認してください。
  - 4. 正しく設定されていない場合は、**db2set** コマンドを使用して、 DLFM\_BACKUP\_DIR\_NAME レジストリー変数の値が正しいものになる ように修正してください。
  - 5. 指定した file-name がバックアップ・ディレクトリーに存在し、少 なくとも、ファイル所有者が READ 許可をもっていることを確認 してください。

### DLFM746E

要求した <item-type> リストに対応するレコードはありませんでした。(No records found for requested <item-type> list.)

- **原因**: データ・リンク・ファイル・マネージャー・データベースに、すでに 指定済みの基準に一致する *item-type* のタイプ項目がありません。
- 処置: 探し出したいバックアップ・ファイル情報を検索できるかどうかを確認するために、別の引き数を指定するか、別の選択項目セットを指定することによって、このコマンドを再実行することをお勧めします。

### DLFM747E

<item-type> リストを取り出しているときに SQL エラーが発生しました。戻りコード = "<return-code>"。(An SQL error occurred while fetching <item-type> list. Return code = "<return-code>")

- 原因: すでに指定された基準に従ってタイプ項目 item-type のリストを検索しているときに、予期しないデータベース・エラーが発生しました。 return-code 値は、データベース処理に関連した SQL エラー・コードを示しています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
- 3. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

### DLFM748I

選択したい <item-type> に対応する番号を入力してください。(Enter the number corresponding to the <item-type> you want to choose.)

- 原因: このメッセージに続いて、有効な item-type 選択のリストがあります。コマンドの処理を継続するには、このリストのどれかの項目を選択する必要があります。
- 処置: 選択したい項目に対応する番号を入力してください。

### DLFM749E

<item-type> リストを処理しているときに SQL エラーが発生しました。戻りコード = "<return-code>"。(An SQL error occurred while processing <item-type> list. Return code = "<return-code>".)

- 原因: すでに指定された基準に従ってタイプ項目 item-type のリストを検索 しているときに、予期しないデータベース・エラーが発生しました。 return-code 値は、データベース処理に関連した SQL エラー・コード を示しています。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
  - 3. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

# DLFM750I

DLFM データベース "<dbname>" を使用しています。(Using DLFM database "<dbname>".)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー環境は、dbname がそのプ ライベート DB2 データベースの名前であることを示しています。こ のデータベースは、DLFM バックアップ・ファイルの情報を検索する ために使用されるデータベースです。
- **処置:** 必要なし

# DLFM751E

データベース "<dbname>" に接続することができませんでした。戻りコード =
"<return-code>"。(Unable to connect to database "<dbname>". Return code =
"<return-code>".)
 **原因:** *dbname* データベースに接続しようとしているときに、予期しないデ
 *ー*タベース・エラーが発生しました。*return-code* 値は、DB2 CONNECT
 ステートメントに関連する SOL エラー・コードを示しています。

- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
  - 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
  - dbname が、DLFM データベースの正しい名前であることを確認してください。(このデータベースのデフォルト名は "DLFM\_DB" です。)
  - 4. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

# DLFM801I

DLFM の移行を開始しています。処理が完了するまでお待ちください。(Starting DLFM migration. Please wait for processing to complete.)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャーの移行プログラムが開始されました。このプログラムは、前のバージョンの DLFM 環境を現在 インストールされているバージョンの DLFM 環境に変換します。
- 処置: 移行を中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファ イル・マネージャーが保持するファイルの情報量によって異なります が、この処置が完了するには、数分、またはそれよりかなりの時間が かかる場合もあります。

### **DLFM802I**

移行パッケージをバインドしています。(Binding the migration package.)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、現在インストールされているバージョンの DLFM への移行を進めるために、それ自身を既存の DLFM DB データベースにバインドしています。
- 処置: 移行を中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファ イル・マネージャーが保持するファイルの情報量によって異なります が、この処置が完了するには、数分、またはそれよりかなりの時間が かかる場合もあります。

### DLFM803I

DLFM データベースをバックアップしています。(Backing up the DLFM database.)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、現在インストールされているバージョンの DLFM への移行を進めるために、既存の DLFM\_DB データベースをバックアップしています。
- 処置: 移行を中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファ イル・マネージャーが保持するファイルの情報量によって異なります が、この処置が完了するには、数分、またはそれよりかなりの時間が かかる場合もあります。

### DLFM804I

次のデータベース処理が実行されています。(Following database actions are being performed:)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、現在インストールされているバージョンの DLFM への移行を進めるために、既存の DLFM\_DB データベースに対して数多くのデータベース処理を実行しています。このメッセージの次に、データベースの処理とその結果のリストが続いています。
- 処置: 移行を中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファ イル・マネージャーが保持するファイルの情報量によって異なります が、この処置が完了するには、数分、またはそれよりかなりの時間が かかる場合もあります。

### DLFM805I

"<database-action>": SQL コード = "<sql-code>"、戻りコード = "<return-code>"。("<database-action>": SQL code = "<sql-code>", Return code = "<return-code>".)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、現在インストールされているバージョンの DLFM に移行するために、既存の DLFM\_DB データベースに対して、指示された database-action を実行しました。sql-code および return-code は、指定した database-actionの結果を示します。
- 処置: 指定したデータベース処理と移行プログラム全体を、中断することな く完了させてください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが 保持するファイルの情報量によって異なりますが、この処置が完了す るには、数分、またはそれよりかなりの時間がかかる場合もありま す。

### DLFM806I

"<database-action>": SQL コード = "<sql-code>"、戻りコード = "<return-code>"、理由コ ード = "<reason-code>"。("<database-action>": SQL code = "<sql-code>", Return code = "<return-code>", Reason code = "<reason-code>".)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、現在インストールされているバージョンの DLFM に移行するために、既存の DLFM\_DB データベースに対して、指示された database-action を実行しました。sql-code、return-code、reason-code は、指定した database-action の結果を示しています。
- 処置: 指定したデータベース処理と移行プログラム全体を、中断することな く完了させてください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが 保持するファイルの情報量によって異なりますが、この処置が完了す るには、数分、またはそれよりかなりの時間がかかる場合もありま す。

# DLFM807I

データ "<data-name>" をファイル "<file-name>" にエクスポートしています。(Exporting the "<data-name>" data into file "<file-name>".)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、指示された data-name を作業ファイル file-name にエクスポートしています。このエクスポートは、現在インストールされているバージョンのDLFM に移行するために、既存の DLFM\_DB データベースを使用して実行されています。
- 処置: エクスポート処理と移行プログラム全体を、中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが保持するファイルの情報量によって異なりますが、この処置が完了するには、数分、またはそれよりかなりの時間がかかる場合もあります。

### DLFM808I

エクスポートされたデータ "<data-name>" の行数 = <num-rows>。(Number of rows of "<data-name>" data exported = <num-rows>.)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、指示された data-name の num-rows を作業ファイルにエクスポートしました。このエクスポートは、現在インストールされているバージョンのDLFM に移行するために、既存の DLFM\_DB データベースを使用して実行されています。
- 処置: エクスポート処理と移行プログラム全体を、中断することなく完了さ せてください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが保持する

ファイルの情報量によって異なりますが、この処置が完了するには、 数分、またはそれよりかなりの時間がかかる場合もあります。

### **DLFM809I**

ファイル "<file-name>" からデータ "<data-name>" をロードしています。(Loading the "<data-name>" data from file "<file-name>".)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、作業ファイル file-name から指示された data-name をロードしています。現在インストールされているバージョンの DLFM に移行するために、 既存の DLFM\_DB データベースの中へロードされています。
- 処置: ロード処理と移行プログラム全体を、中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが保持するファイルの情報量によって異なりますが、この処置が完了するには、数分、またはそれよりかなりの時間がかかる場合もあります。

# DLFM810I

ロードされたデータ "<data-name>" の行数 = <num-rows1>、コミットされた行数 = <num-rows2>。(Number of rows of "<data-name>" data loaded = <num-rows1>, number of rows committed = <num-rows2>.)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、作業ファイルから、指示された data-name の num-rows1 をロードし、これらの行の num-rows2 をコミットしました。現在インストールされているバージョンの DLFM に移行するために、既存の DLFM\_DB データベースの中へロードされています。
- 処置: ロード処理と移行プログラム全体を、中断することなく完了させてください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが保持するファイルの情報量によって異なりますが、この処置が完了するには、数分、またはそれよりかなりの時間がかかる場合もあります。

### DLFM811E

現行 DLFM データベースをバックアップすることができませんでした。戻りコード = "<return-code>"。DLFM 移行は停止しています。(The current DLFM database could not be backed up. Return code = "<return-code>". DLFM migration is stopping.)

原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、既存 DLFM\_DB データベースのバックアップに失敗しました。return-code は、DB2 バックアップ・ユーティリティー・プログラムからの戻りコ ードです。

#### 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
- 3. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

### **DLFM812I**

主要な DLFM パッケージをバインドしています。(Binding the main DLFM packages.)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、現在インストールされているバージョンの DLFM を、移行された DLFM\_DB データベースにバインドしています。
- ・ バインド処理と移行プログラム全体を、中断することなく完了させて ください。データ・リンク・ファイル・マネージャーが保持するファ イルの情報量によって異なりますが、この処置が完了するには、数 分、またはそれよりかなりの時間がかかる場合もあります。

### DLFM813I

DLFM 移行のすべてのステップが正常に完了しました。(All steps of DLFM migration completed successfully.)

- 原因: データ・リンク・ファイル・マネージャー移行プログラムは、現在インストールされているバージョンの DLFM に一致させるために、既存の DLFM\_DB データベースの変換を完了しました。すべてのステップが正常に完了しました。
- 処置: 必要なし

### DLFM814I

DLFM 移行が終了しました。(DLFM migration ended.)

- **原因:** データ・リンク・ファイル・マネージャーの移行プログラムが終了しました。
- 処置: DLFM 移行プログラムの成功や失敗を示す先行するメッセージを記録 しておいてください。成功した場合は、追加処置は必要ありません。 失敗した場合は、移行プログラムを再実行する前に、エラー・メッセ ージに関連した指示に従ってください。

### DLFM900I

DLFM サーバーが停止しました。(DLFM server has stopped.)

- **原因:** データ・リンク・ファイル・マネージャーが正常または異常に停止されました。
- 処置:DLFM が異常終了した場合は、dlfm shutdown コマンドを出してから、dlfm start コマンドを出して、DLFM を再始動してください。

### DLFM901E

システム・エラーが発生しました。戻りコード = "<return-code>"。現在のコマンドを実行することができません。追加情報については、db2diag.log ファイルを参照してください。(A system error occurred. Return code = "<return-code>". The current command cannot be processed. Refer to the db2diag.log file for additional information.)

原因: 予期しないシステム環境エラーまたは処理エラーが発生しました。以下の原因が考えられます。

- 1. DLFM DB データベースの自動バックアップを実行できない。
- 2. ファイル・システムからファイル情報を取得できない。
- 3. 子プロセスを作成できない。
- 4. システム・コマンドを実行できない。
- 5. データベース・インスタンス情報を取得できない。
- 6. 予期しない SQL エラーが発生した。
- ディレクトリーの変更のような、ファイル・システム操作を実行 できない。
- 8. システム時刻を取得できない。
- 9. 内部処理エラーが発生した。
- 10. db2diag.log ファイルを初期化できない。
- 11. 固有の内部接頭部 ID を生成できない。

処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. db2diag.log にあるエラー情報を参照してください。
- 2. そこに説明されている修正処置に従ってください。
- 3. 問題が継続する場合は、IBM サービスに報告してください。

### DLFM908E

ファイル "<file-name>" に処理 "<file-action>" を実行しているときに、繰り返し起きる 失敗が発生しました。DLFM は停止されています。(Repeated failures occurred while performing "<file-action>" action on file "<file-name>". DLFM is being stopped.)

原因: Data Links Manager は、ファイル・システムからのファイルの引き継ぎ、またはファイル・システムへのファイルのリリースに失敗しました。アーカイブにバックアップ中に、引き継がれているファイルが1

つ以上失敗した可能性があります。これらは、DATALINK 列に挿入 されたファイルか、DATALINK 列から削除されたファイルです。コ ミット処理が完了する前に、次のいずれかの状況が発生した可能性が あります。

- ファイルを含んでいるファイル・システムがオフラインにされた。
- 管理ユーザーによってファイルが削除された。
- アーカイブ・サーバーまたはアーカイブ・ストレージが一時的に使用できなくなっている。
- 処置: 以下のステップを実行してください。
  - 1. ファイル・システムが使用可能であることを確認し、そのファイル があるかどうかをチェックします。
  - ファイルは引き継がれているが、バックアップができなかった場合 は、アーカイブ・サーバーおよびアーカイブ・ストレージが使用可 能であることを確認します。
  - 3. ファイルが削除されておらず、現在使用可能である場合は、Data Links Manager を再始動してください。これにより、ファイルが解 放されて Data Links Manager は使用可能になります。

ファイルが削除された場合、あるいは問題が継続する場合は、その問題を IBM サービスに報告してください。

### DLFM909E

ファイル "<existing-file>" をファイル "<replacement-file>" と置き換えているときに、繰 り返し起きる失敗が発生しました。DLFM は停止されています。(Repeated failures occurred while replacing file "<existing-file>" with file "<replacement-file>". DLFM is being stopped.)

- 原因: Data Links Manager は、既存ファイルを置き換えファイルと置き換え るのに失敗しました。コミット処理が完了する前に、次のいずれかの 状況が発生した可能性があります。
  - ファイルを含んでいるファイル・システムがオフラインにされた。
  - 置き換えファイルが管理ユーザーによって削除された。

#### 処置: 以下のステップを実行してください。

- 1. ファイル・システムが使用可能であることを確認し、置き換えファ イルがあるかどうかをチェックします。
- 置き換えファイルが削除されておらず、現在使用可能である場合 は、Data Links Manager を再始動してください。再始動すると、 ファイルがリリースされ、Data Links Manager が使用可能になり ます。

ファイルが削除された場合、あるいは問題が継続する場合は、その問題を IBM サービスに報告してください。

# 付録 A. データ・リンク・ファイル・マネージャーのコマンド

この付録では、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) コマンドをリスト し、各コマンドの目的と構文を説明します。

### dlfm コマンド

現行のプラットフォームと環境に適用されるすべてのデータ・リンク・ファイル・マネ ージャー・コマンドの構文を表示します。

コマンド構文だけでなく、コマンド説明も表示するには、dlfm ? コマンドか、dlfm help コマンドを使用します。

#### 関連資料:

- 218 ページの『dlfm ? コマンド』
- 202 ページの『dlfm help コマンド』

# dlfm add\_db コマンド

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。 ▶──dlfm add db—*database\_name*—*instance\_name*—*node\_name*—

データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) にデータベースを登録します。

DB2 ADD DATALINKS MANAGER コマンドを使用して、この DLFM を DB2 データ ベースに対して定義するには、このコマンドを実行します。

database\_name

データベースの名前。

instance\_name

データベース・インスタンスの名前。

node\_name

DB2 サーバーのノード名。

例:

dlfm add\_db sampledatabase myinstance myhostname.com

#### 関連作業:

- 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』
- 67 ページの『DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)』

関連資料:

204 ページの『dlfm list registered prefixes コマンド』

### dlfm add\_prefix コマンド

要件:データ・リンクの管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーからこのコマンドを実行する必要があります。 ▶→--dlfm add prefix--*prefix name*--------

データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) に接頭部 を登録します。接頭部 は、リンクされたファイルが保管される、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) のマウント・ポイント (UNIX) またはドライブ共有名 (Windows) の絶対パスで す。

この接頭部が存在する DLFS を定義した後、そのファイル・システムの、DATALINK 列にあるファイルを参照する前に、このコマンドを実行します。

**重要:**いったん接頭部を追加すると、除去することはできません。

prefix\_name

接頭部名を指定します。この名前には、アンダースコアー (\_) 文字は使用しないでください。重要: AIX と Solaris オペレーティング環境では、ファイル・システム名には、大文字小文字の区別があります。Windows のファイル・システム名では、大文字小文字の区別はありません。

例:

• dlfm add prefix /myfilesystem

#### 関連作業:

- 65 ページの『ファイル・システムの使用可能化と DLFM への登録 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』
- 67 ページの『DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)』
- 68 ページの『登録済みファイル・システムのリスト表示 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』

• 69 ページの『登録済みドライブのリスト表示 (Windows オペレーティング・システム)』

# dlfm bind コマンド

要件: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。
 ▶→-dlfm bind-------

データ・リンク・ファイル・マネージャーが使用する実行可能ファイルを DLFM\_DB データベースにバインドします。このコマンドは、DLFM\_DB データベースの DB2 統 計も更新します。

このコマンドは、Data Links Manager 製品に修正 (たとえば、フィックスパックの修正) を適用した後で使用してください。

### dlfm create コマンド

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。 ▶──dlfm create────

データ・リンク・ファイル・マネージャーが使用するすべての DLFM\_DB 表を作成し ます。このコマンドは、新しいデータ・リンク・ファイル・マネージャーをインストー ルするか、再作成するときにだけ使用してください。

このコマンドは、Data Links Manager の通常のインストール・プロセスの際に、自動的 に呼び出されます。

#### 関連概念:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 セットアップ・ウィザードに よって実行されるアクション (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 セットアップ・ウィザードに よって実行されるアクション (Windows)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 セットアップ・ウィザードに よって実行されるアクション (Solaris オペレーティング環境)』

### dlfm create\_db コマンド

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

▶ → — dlfm create\_db — —

DLFM\_DB データベースの作成と構成を行います。データベースが作成されると、アー カイブ・ロギング機能がオンになり、データベースのオフライン・バックアップ・コピ ーが作成されます。

このコマンドは、新しいデータ・リンク・ファイル・マネージャーをインストールする か、再作成するときにだけ使用してください。このコマンドは、Data Links Manager の 通常のインストール・プロセスの際に、自動的に呼び出されます。

このコマンドは、dlfm start を出す前に実行してください。

#### 関連概念:

- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 セットアップ・ウィザードによって実行されるアクション (AIX)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 セットアップ・ウィザードによって実行されるアクション (Windows)』
- Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 セットアップ・ウィザードによって実行されるアクション (Solaris オペレーティング環境)』

# dlfm deny コマンド

#### 要件:

- このコマンドは、データ・リンク・サーバーの管理者 ID を使用してデータ・リン ク・サーバーから実行する必要があります。
- リンク許可の変更を有効にするには、ファイル・リンク・セキュリティー機能をオン (アクティブ) にしておく必要があります。ファイル・リンク・セキュリティーは、 dlfm set link security on コマンドを使用してアクティブにします。

➤—dlfm deny—\_write privilege—\_on dir—directory\_name—to\_\_\_user\_\_\_db2\_authorization\_id\_\_\_\_
↓ link privilege\_\_\_\_\_\_
↓ all privileges\_\_\_\_\_\_

►-for db\_db\_name\_inst\_db\_inst\_name\_node\_server\_node\_name\_

特定の DB2 データベース・ユーザー用のデータ・リンク・サーバー上に保管されてい るファイルに対する、リンク特権と書き込みアクセス特権を否認することができます。 リンク特権とは、ファイルへのリンクを可能にする特権です。書き込み特権とは、リン クされたファイルへの書き込み (更新) を可能にする特権です。特定のデータベース の、個々のデータベース・ユーザー、データベース・ユーザーのグループ、またはすべてのユーザーに対して、1つの特権または両方の特権を否認することができます。

**制約事項:** DB2 ホスト表の DATALINK 列が WRITE PERMISSION ADMIN に設定されている場合は、書き込み特権しかコントロールできません。

表6には、DB2ホスト表の DATALINK 列で可能なすべての書き込み許可属性が示されています。また、それらの属性に基づいて付与、否認、取り消しを行うことのできる特権が比較されています。

表 6. DATALINK 列属性および適用できる DLM セキュリティー特権

	リンク特権 <b>?</b>	書き込み特権?	リンク特権と書き込み 特権の両方 <b>?</b>
WRITE PERMISSION ADMIN	はい	はい	はい
WRITE PERMISSION FS	はい	いいえ	いいえ
WRITE PERMISSION BLOCKED	はい	いいえ	いいえ

**重要:**このコマンドを実行しても、DB2 ホストからのデータ・リンク・サーバーへの 既存の 接続には影響はありません。これ以後の 接続では、特権に関するすべての変更 が反映されます。

#### link privilegelwrite privilegelall privileges

否認したい特権を指定します。リンク、書き込み、またはその両方の特権 (all privileges)。

directory\_name

データ・リンク・サーバーのディレクトリーを指定します。ディレクトリー は、登録済み接頭部内またはその下の、登録済みデータ・リンク・ファイル・ システム (DLFS) 上になければなりません。否認する特権は、指定するディレ クトリー**および**すべてのサブディレクトリーにあるすべてのファイルに適用さ れます。

アスタリスク (\*) を使用して、すべてのディレクトリーを指定することもでき ます。AIX および Solaris オペレーティング環境では、UNIX コマンドとの置 換を防ぐために、アスタリスクの前に逆方向スラッシュ ()) を入力する必要が あります。(( が入力できない場合は、¥ を使用してください。)

#### userlgrouplpublic

1 つまたは複数の特権を否認したい DB2 ホスト・ユーザーを指定します。特定のユーザー (user)、ユーザー・グループ (group)、またはすべての DB2 ホ スト・ユーザー (public)。 db2\_authorization\_id

ユーザーまたはグループの許可 ID の値を指定します。

db\_name

リモート DB2 UDB データベースの名前。

db\_inst データベースが存在するインスタンスの名前。

server\_node\_name

DB2 サーバーのノード名。

### 例:

dlfm deny link privilege on dir /dlfs/test to user SHERRYG for db EMP TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com

結果: DB2 サーバー・ユーザー SHERRYG が、/dlfs/test ディレクトリー、およびその すべてのサブディレクトリーにあるファイルを、olympus.sanjose.bigco.com ノード上の HRaccess インスタンスの下にある DB2 サーバー・データベースの EMP\_TEST にリン クしようとする場合に限り、SHERRYG はそれらのファイルにリンクすることができな くなります。

#### 関連概念:

• 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』

#### 関連資料:

- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

# dlfm drop\_db コマンド

DLFM\_DB データベースをドロップします。

**重要:**FILE LINK CONTROL 属性で定義した DB2 ホスト表の DATALINK 列が、いずれもデータ・リンク・サーバー上のファイルを参照しない場合にのみこのコマンドを 使用します。このコマンドを実行すると、データ・リンク・サーバーが全く使用できな くなります。

# dlfm drop\_dlm コマンド

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

►→\_dlfm drop\_dlm\_database\_name\_instance\_name\_host\_name\_

特定のデータベースのすべての情報の非同期削除を開始することによって、データ・リ ンク・ファイル・マネージャーから DB2 データベースの登録を除去します。

このコマンドは、DB2 ホスト上の特定のデータベースから Data Links Manager をドロ ップした後でのみ使用してください。

database\_name

リモート DB2 UDB データベースの名前を指定します。

instance\_name

データベースが存在するインスタンスの名前を指定します。

host\_name

```
データベースがある DB2 UDB サーバーのホスト名を指定します。
```

例:

• dlfm drop dlm sampledatabase myinstance myhostname.com

関連作業:

• 75 ページの『Data Links Manager からの DB2 データベース情報の除去』

関連資料:

コマンド・リファレンスの『DROP DATALINKS MANAGER コマンド』

### dlfm grant コマンド

#### 要件:

- このコマンドは、Data Links Manager の管理者 ID を使用して、データ・リンク・サ ーバーから実行する必要があります。
- リンク許可の変更を有効にするには、ファイル・リンク・セキュリティー機能をオン (アクティブ) にしておく必要があります。ファイル・リンク・セキュリティーは、 dlfm set link security on コマンドを使用してアクティブにします。

	<pre>&gt;&gt;-dlfm grantwrite privilegeon dir_directory_nameto link privilege all privileges</pre>	userdb2_authorization_id group public
--	--	---

►-for db-db\_name-inst-db\_inst\_name-node-server\_node\_name-

データ・リンク・サーバー上に保管されているファイルに対するリンク・アクセスと書 き込みアクセスの特権を特定の DB2 データベース・ユーザーに付与することができま す。

- リンク特権を付与すると、指定したユーザーはファイルにリンクすることができます。
- 書き込み特権を付与すると、指定したユーザーは、書き込みトークンの生成や取得が可能になります。次にユーザーは、open-for-write 操作を実行するために、ファイル名に組み込まれる書き込みトークンを提供します。有効な書き込みトークンがないと、ユーザーは、リンクされたファイルを更新することができません。

特定のデータベースの個々のデータベース・ユーザー、データベース・ユーザーのグル ープ、またはすべてのユーザーに対して、1 つの特権または両方の特権を付与すること ができます。

**制約事項:** DB2 ホスト表の DATALINK 列が WRITE PERMISSION ADMIN に設定されている場合は、書き込み特権しかコントロールできません。

表7 には、DB2 ホスト表の DATALINK 列で可能なすべての書き込み許可属性が示さ れています。また、それらの属性に基づいて付与、否認、取り消しを行うことのできる 特権が比較されています。

	リンク特権 <b>?</b>	書き込み特権?	リンク特権と書き込み 特権の両方 <b>?</b>
WRITE PERMISSION ADMIN	はい	はい	はい
WRITE PERMISSION FS	はい	いいえ	いいえ
WRITE PERMISSION BLOCKED	はい	いいえ	いいえ

表 7. DATALINK 列属性および適用できる DLM セキュリティー特権

**重要:**このコマンドを実行しても、DB2 ホストからのデータ・リンク・サーバーへの 既存の 接続には影響はありません。これ以後の 接続では、特権に関するすべての変更 が反映されます。

### link privilegelwrite privilegelall privileges

付与したい特権を指定します。リンク、書き込み、またはその両方の特権 (all privileges)。

directory\_name

データ・リンク・サーバーのディレクトリーを指定します。ディレクトリー は、登録済み接頭部内またはその下の、登録済みデータ・リンク・ファイル・ システム (DLFS) 上になければなりません。付与された特権は、指定するディ レクトリー**および**すべてのサブディレクトリーにあるすべてのファイルに適用 されます。

アスタリスク (\*) を使用して、すべてのディレクトリーを指定することもでき ます。 AIX および Solaris オペレーティング環境では、UNIX コマンドとの置 換を防ぐために、アスタリスクの前に逆方向スラッシュ ()) を入力する必要が あります。() が入力できない場合は、¥ を使用してください。)

#### userlgrouplpublic

特権を付与したい DB2 ホスト・ユーザーを指定します。特定のユーザー (user)、ユーザー・グループ (group)、またはすべての DB2 ホスト・ユーザ ー (public)。

db2\_authorization\_id

ユーザーまたはグループの許可 ID の値を指定します。

db\_name

リモート DB2 UDB データベースの名前。

db\_inst データベースが存在するインスタンスの名前。

server\_node\_name

DB2 サーバーのノード名。

#### 例:

dlfm grant link privilege on dir /dlfs/test to user SHERRYG for db EMP TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com

結果: DB2 サーバー・ユーザー SHERRYG が、/dlfs/test ディレクトリーにあるファイ ルを、olympus.sanjose.bigco.com ノード上の HRaccess インスタンスの下にある DB2 サーバー・データベースの EMP\_TEST にリンクする場合に限り、SHERRYG は、それら のファイルにリンクすることができるようになります。

#### 関連概念:

103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』

#### 関連作業:

• 122 ページの『アプローチ 3 の構成作業』

#### 関連資料:

- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

# dlfm grant replication read コマンド

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

Ifm grant replication read privilege on dir—directory\_name—to system-

		dls id	
-			
	—user—		
	└_group		
	—public—		

このコマンドを使用すると、リンクされたデータを複製するためにリンクされたファイ ルにアクセスする必要のあるレプリケーション・ユーザーをサポートすることができま す。

dlfm grant replication read privilege コマンドは、特定のデータ・リンク・サーバ ー・システム・ユーザー (サーバーにアクセスする権限を与えられた個人、グループ、 またはすべての人) に、データ・リンク・サーバー上の特定のディレクトリーにあるリ ンクされたすべてのファイルにアクセスする (読み取る) 権限を付与します。

要件:

#### directory\_name

データ・リンク・サーバーのディレクトリーを指定します。ディレクトリー は、登録済み接頭部 (ディレクトリー階層) 内の、登録済みデータ・リンク・ ファイル・システム (DLFS) 上になければなりません。付与された特権は、指 定したディレクトリーおよびすべてのサブディレクトリー内のすべてのファイ ルに適用されます。

#### userlgrouplpublic

権限を付与したいデータ・リンク・サーバー・システム・ユーザーを指定しま す。個人ユーザー (user)、ユーザー・グループ (group)、またはすべての登録 済みデータ・リンク・サーバー・システム・ユーザー (public)。

*dls\_id* データ・リンク・サーバー・システムのユーザーまたはグループの ID 値を指 定します。

例:

• dlfm grant replication read privilege to system user mohans

#### 関連概念:

• 99 ページの『リンクされたファイルの基本セキュリティー管理』

関連作業:

**要件**: ユーザーまたはグループはローカルでなければなりません。Windows では、ID 値として他のドメインのユーザーを指定できません。

レプリケーションのガイドおよびリファレンスの『特殊なデータ・タイプのレプリケーション』

#### 関連資料:

- 201 ページの『dlfm grant replication write コマンド』
- 204 ページの『dlfm list registered replication access control コマンド』
- 213 ページの『dlfm revoke replication コマンド』

### dlfm grant replication write コマンド

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

▶ — dlfm grant replication write request privilege to system-



特定のデータ・リンク・サーバー・システム・ユーザー (サーバーにアクセスする権限 を与えられた個人、グループ、またはすべての人) に、Data Links Manager のレプリケ ーション・ファイル・コピー・デーモンの DLFM\_ASNCOPYD に対するファイル書き 込み要求を出す権限を付与します。 DLFM\_ASNCOPYD は、ASNDLCOPY 出口ルーチ ンと通信を行ってリンクされたデータを複製します。ASNDLCOPY は、DB2 Data Propagator 製品の一部です。

**重要:**このコマンドは、指定したユーザーが、実際にデータ・リンク・サーバー上のファイルを作成したり、ファイルに書き込みをできるかどうかには影響を与えません。ネ イティブ・ファイル・システムが適切な権限を付与する場合だけ、データ・リンク・サ ーバー・ユーザーはファイルの作成やファイルへの書き込みを行うことができます。

#### userlgrouplpublic

権限を付与したいデータ・リンク・サーバー・システム・ユーザーを指定しま す。個人ユーザー (user)、ユーザー・グループ (group)、またはすべての登録 済みデータ・リンク・サーバー・システム・ユーザー (public)。

*dls\_id* データ・リンク・サーバー・システムのユーザーまたはグループの ID 値を指 定します。

**要件**:ユーザーまたはグループはローカルでなければなりません。Windows では、ID 値として他のドメインのユーザーを指定できません。

例:

• dlfm grant replication write request privilege to system user mohans

#### 関連概念:

• 99 ページの『リンクされたファイルの基本セキュリティー管理』

#### 関連作業:

レプリケーションのガイドおよびリファレンスの『特殊なデータ・タイプのレプリケーション』

#### 関連資料:

- 200 ページの『dlfm grant replication read コマンド』
- ・ 204 ページの『dlfm list registered replication access control コマンド』
- 213 ページの『dlfm revoke replication コマンド』

### dlfm help コマンド

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。 ▶──dlfm help───

現行のプラットフォームと環境に適用されるすべてのデータ・リンク・ファイル・マネ ージャー・コマンドの構文と短い説明を表示します。dlfm ? コマンドと同じです。

コマンド構文だけを表示するには、dlfm コマンドを使用します。

#### 関連資料:

- 191 ページの『dlfm コマンド』
- 218 ページの『dlfm ? コマンド』

### dlfm list registered databases コマンド

データ・リンク・ファイル・マネージャーに登録されたすべてのデータベースをリスト します。

#### 関連作業:

74 ページの『データ・リンク・サーバーに登録済みのデータベースのリスト表示』
## dlfm list registered directories コマンド

**要件:** このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

►→ dlfm list registered directories for \_\_\_\_\_\_ db2\_authorization\_id \_\_\_\_\_

-user			
∟group—	J		
-all users	5	]	

►-on db-db\_name-inst-db\_inst-node-server\_node-

すべてのデータ・リンク・サーバー・ディレクトリーおよび指定したユーザー、ユーザ ー・グループ、または特定の DB2 データベース、データベース・インスタンス、デー タベース・サーバー・ノード上のすべての特権ユーザーのファイル・アクセス特権 (リ ンク、書き込み、すべて、なし)をリストします。

## userlgrouplall users

ディレクトリーおよびアクセス権をリストしたい人を指定します。特定のユー ザー (user)、ユーザー・グループ (group)、またはすべての特権ユーザー (all users)。

db2\_authorization\_id

ユーザーまたはグループの許可 ID の値を指定します。

db\_name

リモート DB2 UDB データベースの名前。

db\_inst データベースが存在するインスタンスの名前。

server\_node

DB2 サーバーのノード名。

## 例:

次のコマンドを出すと、

dlfm list registered directories for all users on db drawings inst acct2 node storage.ak1.bigco.com

次のような出力が生成されます。

ТҮРЕ	AUTHID	PRIVILEGE	DIRECTORY
user	app1	write	/localfs/files/chips/
user	srgordon	link	/localfs/files/widgets/

## 関連概念:

103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
 関連作業:

• 125 ページの『アプローチ 3 の保守作業』

#### 関連資料:

- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

## dlfm list registered prefixes コマンド

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。
 ▶—dlfm list registered prefixes—\_\_\_\_\_

データ・リンク・ファイル・マネージャーに登録されている、データ・リンク・ファイ ル・システム (DLFS) 内のすべての接頭部をリストします。

### 関連作業:

- 68 ページの『登録済みファイル・システムのリスト表示 (AIX、Solaris オペレーティング環境)』
- 69 ページの『登録済みドライブのリスト表示 (Windows オペレーティング・システム)』

### 関連資料:

192 ページの『dlfm add\_prefix コマンド』

## dlfm list registered replication access control コマンド

				dls id_
-				<i>uus_uu</i>
		-system	user—	
		L_system	group—	
	L	11		

Data Links Manager のレプリケーション・デーモンの DLFM\_ASNCOPYD を使用して データ・リンク・サーバー・ユーザーが実行できる操作 (読み取り要求、書き込み要 求、またはその両方の要求) をリストします。

#### system userlsystem grouplall

操作リストを表示したい人を指定します。特定のデータ・リンク・サーバー・

システム・ユーザー (system user)、データ・リンク・サーバー・システム・ ユーザー・グループ (system group)、またはすべてのデータ・リンク・サー バー・ユーザー (all)。

*dls\_id* データ・リンク・サーバー・システムのユーザーまたはグループの ID 値を指 定します。

例:

次のコマンドを出すと、

dlfm list registered replication access control for all

次のような出力が生成されます。

ТҮРЕ	ID	ACCESS	DIRECTORY
group	system	read	/localfs/files/chips/
public		read	<pre>/localfs/files/widgets/</pre>
user	app1	write	/localfs/files/chips/

## 関連作業:

レプリケーションのガイドおよびリファレンスの『特殊なデータ・タイプのレプリケーション』

#### 関連資料:

- 200 ページの『dlfm grant replication read コマンド』
- 201 ページの『dlfm grant replication write コマンド』

## dlfm list registered users コマンド

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。 ▶──dlfm list registered users for directory—*dir\_name*—

►-on db—db\_name—inst—db\_inst—node—server\_node—

特定の DB2 データベース、データベース・インスタンス、データベース・サーバー・ ノード上のすべてのユーザー、および特定のデータ・リンク・サーバー・ディレクトリ ーに関するそれらのユーザーのアクセス特権 (リンク、書き込み、すべて、なし)をリ ストします。

dir\_name

すべてのユーザーとこれらのユーザーのファイル・アクセス特権をリストした い、データ・リンク・サーバー・ディレクトリーを指定します。

db\_name

リモート DB2 UDB データベースの名前。

db\_inst データベースが存在するインスタンスの名前。

server\_node

例:

次のコマンドを出すと、

dlfm list registered users for directory /localfs/dbfiles/photos on db employee inst acct1 node storage.ca2.bigco.com

次のような出力が生成されます。

ТҮРЕ	AUTHID	PRIVILEGE
user	JDOE	write
user	MOHAN	link

### 関連概念:

• 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』

#### 関連作業:

・ 125 ページの『アプローチ 3 の保守作業』

#### 関連資料:

- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

## dlfm list upd\_in\_progress files for db コマンド

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。
 → dlfm list upd\_in\_progress files for

►-db—db\_name—inst—db\_inst—node—server\_node-

\_tid*—table id*\_\_

└─tsid—tablespace id─┘ └─user—dlsuser name—

特定のデータベースの現在更新中の状態にあるすべてのリンクされたファイルを表示し ます。またオプションとして特定の表、表スペース、およびデータ・リンク・サーバ ー・ユーザーに関しても同様に表示します。コマンド出力は、リンクされた各ファイル の書き込みトークン値も表示します。 **重要:dlfm list upd\_in\_progress files for db** コマンドを呼び出す直前または呼び出した後に、**dlfm refresh key** コマンドを実行した場合は、出力に示されたトークン値は無効になる場合があります。

db\_name

リモート DB2 UDB データベースの名前。

db\_inst データベースが存在するインスタンスの名前。

server\_node

DB2 サーバーのノード名。

table\_id このオプショナル・パラメーターを使用すると、現在更新進行中の状態にある すべてのリンクされたファイルを表示したい表の ID 番号を指定することがで きます。

対応する DB2 サーバー上の DB2 カタログ表 SYSCAT.TABLES の TABLEID 列から、表 ID 番号を入手することができます。

## tablespace\_id

このオプショナル・パラメーターを使用すると、現在更新進行中の状態にある すべてのリンクされたファイルを表示したい表スペース番号を指定することが できます。

対応する DB2 サーバー上の DB2 カタログ表 SYSCAT.TABLES の TBSPACEID 列から表スペース ID 番号を入手することができます。

#### dlsuser\_name

このオプショナル・パラメーターを使用すると、特定のデータ・リンク・サー バー・ユーザーの名前を指定することができます。重要: この値は、DB2 ホ スト・サーバーの authid ではなく、データ・リンク・サーバー・ユーザーの値 でなければなりません。

## 例:

 dlfm list upd\_in\_progress files for db EMPLOYEE inst DB2 node storage.ca2.bigco.com tid 10 tsid 5 user joshua

## 関連概念:

- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』

## 関連作業:

- 125 ページの『アプローチ 3 の保守作業』
- 133 ページの『失われた書き込みトークンのリカバー』

#### 関連資料:

197 ページの『dlfm grant コマンド』

209 ページの『dlfm refresh key コマンド』

## dlfm list upd\_in\_progress files for prefix コマンド

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。
 → \_\_dlfm list upd in progress files for prefix—prefix name—pathname—pathname pattern—\_\_\_\_

特定の接頭部の、現在更新進行中の状態にあるすべてのリンクされたファイルを表示し ます。接頭部 は、リンクされたファイルが保管される、データ・リンク・ファイル・シ ステム (DLFS) のマウント・ポイント (UNIX) またはドライブ共有名 (Windows) の絶 対パスです。

コマンド出力は、リンクされた各ファイルの書き込みトークン値も表示します。

**重要: dlfm list upd\_in\_progress files for prefixes** コマンドを呼び出す直前または 呼び出した後に、**dlfm refresh key** コマンドを実行した場合は、出力に示されたトー クン値は無効になる場合があります。

### prefix\_name

接頭部名を指定します。

有効な接頭部のリストを見るには、dlfm list registered prefixes コマンドを 使用します。

### pathname\_pattern

接頭部を除いた、残りのパス名の一致する表現を指定します。パス名が任意の ストリングでもかまわないことを表すために、アスタリスク (\*) を使用するこ とができます。

例:

• dlfm list upd\_in\_progress files for prefix /dlfs/test pathname "SELLIOT/\*"

このコマンドを呼び出すと、/dlfs/test/SELLIOT のディレクトリー、およびそのすべて のサブディレクトリーの下にあるすべての更新中ファイルがリストされます。パス名 パターンの "SELLIOT/\*" は、UNIX コマンドがアスタリスク文字を置換しないよう にするために、二重引用符で囲まれています。

## 関連概念:

- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』

### 関連作業:

・ 125 ページの『アプローチ 3 の保守作業』

• 133 ページの『失われた書き込みトークンのリカバー』

#### 関連資料:

197 ページの『dlfm grant コマンド』

## dlfm refresh key コマンド

READ PERMISSION DB および WRITE PERMISSION ADMIN の属性をもった DATALINK 列のアクセス・コントロール・トークンを生成するのに使用されるキーを リフレッシュします。このコマンドを呼び出すと、現在使用中のすべての読み取りトー クンおよび書き込みトークンを含め、すべての既存のアクセス・コントロール・トーク ンが無効になります。

このコマンドを出した後、**dlfm restart** コマンドを実行して、Data Links Manager を再 始動します。

データ・リンク・サーバー上のファイルを指す DB2 ホストに接続されているすべての アプリケーションは、新しいキーをそれらの DB2 ホスト上で使用する前に、切断する 必要があります。DB2 FORCE APPLICATION コマンドを使用して、アプリケーション を強制的に DB2 データベースから切断することができます。ご使用の環境で DB2 FORCE APPLICATION コマンドを使用するのが適切な場合にのみこのコマンドを使用 します。

**重要:**このコマンドを呼び出したときにファイルが更新進行中の状態にある場合、それ に割り当てられた書き込みトークンは無効になり、更新操作を続行できなくなります。 この状態が発生した場合は、ユーザーまたはアプリケーションは次のいずれかのことを 行うことができます。

- DLNEWCOPY スカラー関数を使用する SQL UPDATE ステートメントを出すことに より、既存の変更内容をコミットする。
- ファイルが RECOVERY YES 属性で定義した DATALINK 列から参照される場合 は、DLPREVIOUSCOPY スカラー関数を使用する SQL UPDATE ステートメントを 出すことにより、既存の変更内容をバックアウトする。

## 関連概念:

- 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』
- 132 ページの『書き込みトークンの使用上の考慮事項』

### 関連資料:

• コマンド・リファレンス の『FORCE APPLICATION コマンド』

## dlfm restart コマンド

要件:データ・リンクの管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーからこのコマンドを実行する必要があります。 ▶→\_\_dlfm restart\_\_\_\_\_

データ・リンク・ファイル・マネージャーを停止してから開始します。このコマンド は、dlfm stop コマンドに続けて、dlfm start コマンドを出すことと同じです。

### 関連概念:

• 61 ページの『基本操作: DLFM の始動、停止、再始動』

#### 関連作業:

• 62 ページの『異常終了後の DLFM の再始動』

## 関連資料:

- 216 ページの『dlfm start コマンド』
- 217 ページの『dlfm stop コマンド』

## dlfm retrieve コマンド

**重要:**このコマンドは、前のリリースに記述されていた retrieve\_query コマンドと同じものです。

データ・リンク・ファイル・マネージャーが管理する指定したファイル・セットのアー カイブ状況を表示します。このコマンドは、ホスト名、データベース名、インスタンス 名、接頭部名の入力を促す対話式ダイアログを開始します。次に、選択基準に基づい て、このコマンドは、現在データ・リンク・ファイル・マネージャーが追跡するすべて のリンクされたファイルおよびリンク解除されたファイルの状況をリストします。

あるいは、対話式ダイアログを開始せずに、次のように、コマンド行から直接、希望の パラメーターを指定してこのコマンドを呼び出すことができます。



## 例:

dlfm retrieve -o result.txt -h dev1.lhuron.bigco.com -d SAMPLE -i DB2INST -p /localdlfstest

## 関連作業:

• 94 ページの『アーカイブ・サーバー・バックアップ・ファイル情報の検索』

## dlfm revoke コマンド

#### 要件:

- このコマンドは、データ・リンク・サーバーの管理者 ID を使用してデータ・リン ク・サーバーから実行する必要があります。
- リンク許可の変更を有効にするには、ファイル・リンク・セキュリティー機能をオン (アクティブ)にしておく必要があります。ファイル・リンク・セキュリティーは、

dlfm set link security on コマンドを使用してアクティブにします。



►-for db-db\_name-inst-db\_inst\_name-node-server\_node\_name-

dlfm grant コマンドまたは dlfm deny コマンドの効果を取り消す (除去する) ことが できます。

dlfm revoke コマンドは、1 つ 1 つのパラメーターも含め、正確に元の dlfm grant コマンドまたは dlfm deny コマンドに対応するルールだけを取り消します。

**重要:dlfm revoke** コマンドが有効になるのは、データ・リンク・サーバー上のデー タ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) へのすべての既存の DB2 ホスト接続が 切断されているときのみです。

grant for link privilegelgrant for write privilegelgrant for all privileges/deny for link privilegeldeny for write privilegeldeny for all privileges

取り消したいコマンドおよび特権を指定します。

directory\_name

データ・リンク・サーバーのディレクトリーを指定します。ディレクトリー

は、登録済み接頭部内またはその下の、登録済みデータ・リンク・ファイル・ システム (DLFS) 上になければなりません。取り消した特権は、指定するディ レクトリーおよび すべてのサブディレクトリーにあるすべてのファイルに適用 されます。

アスタリスク (\*) を使用して、すべてのディレクトリーを指定することもでき ます。AIX および Solaris オペレーティング環境では、UNIX コマンドとの置 換を防ぐために、アスタリスクの前に逆方向スラッシュ ()) を入力する必要が あります。() が入力できない場合は、¥ を使用してください。)

## userlgrouplpublic

指定したコマンドおよび特権を取り消す DB2 ホスト・ユーザーを指定しま す。特定ユーザー (user)、ユーザー・グループ (group)、またはすべての DB2 ホスト・ユーザー (public)。

## $db2\_authorization\_id$

ユーザーまたはグループの許可 ID の値を指定します。

db\_name

リモート DB2 UDB データベースの名前。

db\_inst\_name

データベースが存在するインスタンスの名前。

server\_node\_name

DB2 サーバーのノード名。

## 例:

dlfm revoke grant for link privilege on dir /dlfs/test from user SHERRYG for db EMP\_TEST inst HRaccess node olympus.sanjose.bigco.com

結果:DB2 サーバー・ユーザー SHERRYG が、/dlfs/test ディレクトリー、およびその すべてのサブディレクトリーにあるファイルを olympus.sanjose.bigco.com ノード上の HRaccess インスタンスの下にある DB2 サーバー・データベースの EMP\_TEST にリン クしようとする場合に限り、SHERRYG は、それらのファイルにリンクすることができ なくなります。

## 関連概念:

• 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』

#### 関連資料:

- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 214 ページの『dlfm set link security コマンド』

## dlfm revoke replication コマンド

このコマンドにより、レプリケーションの目的でリンクされたファイルにアクセスする 必要のなくなったユーザー・アカウントに関する読み取り特権または書き込み要求特権 を取り消す(除去する)ことができます。

dlfm revoke replication command は、特定ディレクトリーにあるすべてのリンクさ れたファイルにアクセスする (読み取る) 権限を取り消すか、Data Links Manager のレ プリケーション・ファイル・コピー・デーモンの DLFM\_ASNCOPYD にファイル書き 込み要求を出す権限を取り消すために使用することができます。特定のデータ・リン ク・サーバー・ユーザー・アカウント (サーバーにアクセスする許可をもった個人、グ ループ、またはすべての人) から権限を取り消します。

**重要**: 同時に、特定のユーザーまたはユーザー・グループの読み取り特権および書き込み要求特権の両方を取り消すことはできません。除去したい特定の特権をそれぞれ指定して、dlfm revoke replication コマンドを 2 回出す必要があります。

## read privilege on dirlwrite request privilege

読み取り (アクセス) 特権または書き込み要求特権のどちらを取り消したいか を指定します。

directory\_name

データ・リンク・サーバーのディレクトリーを指定します。ディレクトリー は、登録済み接頭部 (ディレクトリー階層) 内の、登録済みデータ・リンク・ ファイル・システム (DLFS) 上になければなりません。read privilege on dir オプションを指定した場合だけ、この値が必要です。

## userlgrouplpublic

読み取り特権または書き込み要求特権を取り消したいデータ・リンク・サーバ ー・システム・ユーザーを指定します。個人ユーザー (**user**)、ユーザー・グル ープ (**group**)、またはすべての登録済みデータ・リンク・サーバー・システ ム・ユーザー (**public**)。

*dls\_id* データ・リンク・サーバー・システムのユーザーまたはグループの ID 値を指 定します。

**要件**: ユーザーまたはグループはローカルでなければなりません。Windows では、ID 値として他のドメインのユーザーを指定できません。

例:

- dlfm revoke replication write request privilege from system user dprop
- dlfm revoke replication read privilege on dir \ddrive\files\resumes from system group rplktor

### 関連作業:

レプリケーションのガイドおよびリファレンスの『特殊なデータ・タイプのレプリケーション』

#### 関連資料:

- 200 ページの『dlfm grant replication read コマンド』
- 201 ページの『dlfm grant replication write コマンド』
- 204 ページの『dlfm list registered replication access control コマンド』

## dlfm see コマンド (AIX および Solaris オペレーティング環境)

**要件:** データ・リンクの管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーからこのコマンドを実行する必要があります。 ▶→--dlfm see--------

システム上で現在実行されているすべての DLFM プロセスを表示します。このコマンドを使用すれば、DLFM が稼働中かどうかを簡単にチェックすることができます。

#### 関連作業:

• 63 ページの『DLFM バックグラウンド・プロセスのモニター (AIX、Solaris オペレ ーティング環境)』

## dlfm set link security コマンド

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。
 ▶ dlfm set link security \_\_\_\_on \_\_\_\_\_

データ・リンク・サーバーのファイル・リンク・セキュリティー機能を活動化および非 活動化します。ファイル・リンク・セキュリティーを使用すると、誰が、特定のディレ クトリーにあるファイルにリンクできるか、また誰が、特定のデータベースからファイ ルにリンクできるかを管理することができます。変更を有効にするには、dlfm restart コマンドを使用してデータ・リンク・サーバーを再始動する必要があります。

重要:デフォルトでは、Data Links Manager をインストールすると、ファイル・リン ク・セキュリティーはアクティブ (オン) になります。

- データ・リンク・サーバー上のファイルにリンク特権を付与するには、dlfm grant コマンドを使用します。
- データ・リンク・サーバー上のファイルのリンク特権を除去または否認するには、 dlfm revoke コマンドまたは dlfm deny コマンドを使用します。

**重要:**すべてのファイル・リンク・セキュリティー・アクセス権は、データ・リンク・ サーバー上に保管されます。ファイル・リンク・セキュリティー機能を非活動化し、後 でそれをもう一度活動化した場合は、以前定義したすべてのファイル・リンク・セキュ リティー・アクセス権も再び活動化されます。

on | off

ファイル・リンク・セキュリティーを活動化 (on) または非活動化 (off) しま す。

#### 関連概念:

- 103 ページの『ファイル管理の高度なセキュリティー・ルールおよびガイドライン』
- ・ 121 ページの『アプローチ 3: リンクされたファイルの更新 / ファイル・アクセス特 権のカスタマイズ』

#### 関連資料:

- 194 ページの『dlfm deny コマンド』
- 197 ページの『dlfm drop\_dlm コマンド』
- 197 ページの『dlfm grant コマンド』
- 211 ページの『dlfm revoke コマンド』

## dlfm setup コマンド

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

▶ — dlfm setup — —

DLFM\_DB データベース・リポジトリーをセットアップします。このコマンドは、次の 一連のコマンドを出すことと同じ効果をもっています。

- 1. dlfm startdbm
- 2. dlfm create\_db
- 3. dlfm create
- 4. dlfm stopdbm

このコマンドは、新しいデータ・リンク・ファイル・マネージャーのインストールまた は再ビルドのとき以外は実行する必要はありません。 **dlfm setup** コマンドは、通常の Data Links Manager のインストール・プロセスの際 に、自動的に呼び出されます。

#### 関連資料:

- 193 ページの『dlfm create コマンド』
- 194 ページの『dlfm create\_db コマンド』
- 218 ページの『dlfm stopdbm コマンド』
- 217 ページの『dlfm startdbm コマンド』

## dlfm shutdown コマンド

データ・リンク・ファイル・マネージャーを停止し、すべてのプロセス間通信 (IPC) リ ソースを除去します。このコマンドは、DLFM のクリーン・シャットダウンを試みま す。クリーン・シャットダウンができない場合は、このコマンドは DLFM プロセスを 強制終了します。完全なシャットダウンが完了するには、30 から 40 秒かかります。

**重要:** これと同じアカウントでその他のプロセスを実行している場合、おそらく、それ らのプロセスは終了します。このコマンドは、使用するアカウント (この場合は、Data Links Manager 管理者アカウント)の、すべての IPC を含めた、すべての 共有リソー スを除去します。

#### 関連概念:

• 61 ページの『基本操作: DLFM の始動、停止、再始動』

#### 関連作業:

62 ページの『異常終了後の DLFM の再始動』

## dlfm start コマンド

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。
 ▶ーdlfm start\_\_\_\_\_\_

データ・リンク・ファイル・マネージャーを開始します。 dlfm start コマンドを実行 する前に、dlfm setup (インストール中に自動的に実行)、dlfm add\_db、dlfm add\_prefix の各コマンドを実行します。DLFM プロセスが実行されていることを確認 するには、dlfm start コマンドを実行した後、dlfm see コマンドを出します。 Windows オペレーティング・システムのみ: DLFM をサービスとして開始する場合 は、DLFM サービスを開始するには、「コントロール パネル」から使用できる「サー ビス」パネルを使用します。

### 関連概念:

• 61 ページの『基本操作: DLFM の始動、停止、再始動』

#### 関連資料:

• 214 ページの『dlfm see コマンド (AIX および Solaris オペレーティング環境)』

## dlfm startdbm コマンド

DLFM プライベート・データベース DLFM\_DB の DB2 データベース・マネージャー を開始します。このコマンドは、DB2 Universal Database の **db2start** コマンドと同じ です。

## 関連概念:

• 61 ページの『基本操作: DLFM の始動、停止、再始動』

### 関連資料:

・ コマンド・リファレンス の『db2start - DB2 の開始コマンド』

## dlfm stop コマンド

データ・リンク・ファイル・マネージャーを停止します。このコマンドは、データ・リ ンク・ファイル・マネージャーを構成するすべてのプロセスを終了させます。

すべての DLFM プロセスが終了したことを確認するには、dlfm see コマンドを使用し ます。約 30 秒経過した後にまだ残っているプロセスがある場合は、DLFM を完全に終 了させるために dlfm shutdown コマンドを使用することができます。

dlfm stop コマンドによって、データ・リンク・ファイル・マネージャーが使用するす べての IPC リソースが常に除去されるわけではありません。すべての IPC を除去する には、dlfm shutdown コマンドを使用します。 Windows オペレーティング・システムのみ: DLFM をサービスとして開始する場合 は、DLFM サービスを停止するには、「コントロール パネル」から使用できる「サー ビス」パネルを使用します。

## 関連概念:

• 61 ページの『基本操作: DLFM の始動、停止、再始動』

#### 関連資料:

- 214 ページの『dlfm see コマンド (AIX および Solaris オペレーティング環境)』
- ・216 ページの『dlfm shutdown コマンド』

## dlfm stopdbm コマンド

DLFM プライベート・データベース DLFM\_DB の DB2 データベース・マネージャー を停止します。このコマンドは、DB2 Universal Database の **db2stop** コマンドと同じ コマンドです。

重要:データ・リンク・ファイル・マネージャーが実行されている間に、dlfm stopdbm コマンドを実行しないでください。

#### 関連概念:

• 61 ページの『基本操作 : DLFM の始動、停止、再始動』

### 関連資料:

• コマンド・リファレンス の『db2stop - DB2 の停止コマンド』

## dlfm ? コマンド

要件: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。 ▶──dlfm ?──

現行のプラットフォームと環境に適用されるすべてのデータ・リンク・ファイル・マネ ージャー・コマンドの構文と短い説明を表示します。 dlfm help コマンドと同じで す。

コマンド構文だけを表示するには、dlfm コマンドを使用します。

## 関連資料:

- 191 ページの『dlfm コマンド』
- 202 ページの『dlfm help コマンド』

# 付録 B. データ・リンク・ファイル・システム・フィルターの コマンド

この付録では、データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) コマンドを リストし、各コマンドの目的と構文について説明します。これらのコマンドは、 Windows オペレーティング・システムにのみ適用されます。

## dlff add コマンド (Windows オペレーティング・システム)

**要件:** このコマンドは、DLFM 管理者ユーザー ID を使用してデータ・リンク・サー バーから実行する必要があります。

このコマンドは、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムにのみ適用されます。

► dlff add drive letter:-

ファイル・システムをデータ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) のコ ントロールの下に置きます。このコマンドは、dlfm add\_prefix コマンドを出す前に実 行します。dlfm add\_prefix コマンドは、データ・リンク・サーバー上の DLFM (デー タ・リンク・ファイル・マネージャー) にファイル・システムを登録します。

追加するドライブが存在しない場合、あるいはサポートされているファイル・システム・タイプのドライブでない場合は、このコマンドは、エラー・メッセージを生成します。

drive letter:

DLFF のコントロールの下に置きたいドライブの文字。ドライブ文字の値の後 にコロンを入れます。(;) で区切って、複数のドライブ文字を指定することが できます。

例:

- dlff add d:
- dlff add d:;e:

## エラー・メッセージ

このコマンドを呼び出すと、次のエラー・メッセージが出る場合があります。

ドライブ x: は、DLFS によってサポートされていないタイプです。ドライブ x: の追加 に失敗しました。

- 原因: このメッセージは、NTFS ファイル・システム・タイプのものでない ドライブを追加しようとすると、コマンド・プロンプトに表示されま す。x は、エラーのドライブ文字です。
- 処置: 追加したいドライブが NTFS 用にフォーマットされたドライブである ことを確認してください。ドライブが NTFS 用にフォーマットされた ドライブでない場合は、既存ファイル・システムを NTFS に変換する か、あるいは新たに NTFS 区画を作成することができます。
  - 既存ファイル・システムを NTFS に変換するには、次のコマンドを 入力します。convert x:/fs:ntfs、ここで x: は、NTFS に変換し たいドライブです。このコマンドは、NTFS に変換するドライブ以 外のドライブに関するコマンド・プロンプト・ウィンドウから実行 します。
  - NTFS 区画を作成するには、Windows NT「ディスク アドミニスト レータ」ツールか、Windows 2000「ディスクの管理」を使用しま す。

ドライブ x: は、すでにリストにあります

- 原因: このメッセージは、すでに DLFF コントロールの下にあるドライブを 追加しようとすると、コマンド・プロンプトに表示されます。x: は、 エラーのドライブ文字です。
- **処置:** dlff list コマンドを呼び出して、追加したいドライブが実際に DLFF コントロールの下にあることを確認します。

#### 関連作業:

• 67 ページの『DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)』

#### 関連資料:

- 192 ページの『dlfm add\_prefix コマンド』
- 224 ページの『dlff list コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

## dlff get dlfmaccount コマンド (Windows オペレーティング・システム)

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

このコマンドは、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムにのみ適用されます。

Data Links Manager の現在の dlfmuser アカウント名を知るためには、このコマンドを 使用します。dlfmuser アカウント名を変更するには、dlff set dlfmaccount コマンドを 使用します。

例:

dlff get dlfmaccount

## 関連資料:

227 ページの『dlff set dlfmaccount コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

## dlff get loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、データ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

このコマンドは、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムにのみ適用されます。 ▶→\_\_dlff get loglevel\_\_\_\_\_

DLFS が生成するログの現在のメッセージ重大度を知るためには、このコマンドを使用 します。レベルは次のとおりです。

- 0 成功
- 1 通知
- 2 警告
- ・3-エラー

現在のメッセージ重大度を変更するには、dlff set loglevel コマンドを使用します。

例:

• dlff get loglevel

### 関連作業:

 80 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロ ギングの変更 (Windows オペレーティング・システム)』

#### 関連資料:

・ 229 ページの『dlff set loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

## dlff list コマンド (Windows オペレーティング・システム)

要件:このコマンドは、DLFM 管理者ユーザー ID を使用してデータ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) のコントロール下にあるす べてのドライブをリストします。

DLFF コントロール下のドライブがない場合は、NIL が表示されます。

#### 例:

• dlff list

## 関連作業:

• 69 ページの『登録済みドライブのリスト表示 (Windows オペレーティング・システム)』

関連資料:

- 221 ページの『dlff add コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 204 ページの『dlfm list registered prefixes コマンド』

## dlff refreshtrace コマンド (Windows オペレーティング・システム)

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

このコマンドは、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムにのみ適用されます。 ▶→\_\_dlff refreshtrace\_\_\_\_\_

データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) のコントロール下にあるす べてのドライブのトレース設定をリフレッシュするには、このコマンドを使用します。

dlff set loglevel コマンドを使用してメッセージ重大度レベルをリセットしてから、このコマンドを呼び出します。

例:

dlff refreshtrace

### 関連作業:

• 80 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロ ギングの変更 (Windows オペレーティング・システム)』

### 関連資料:

- 223 ページの『dlff get loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 229 ページの『dlff set loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

## dlff remove コマンド (Windows オペレーティング・システム)

**要件:**このコマンドは、DLFM 管理者ユーザー ID を使用してデータ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

このコマンドは、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムにのみ適用されます。



データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) のコントロールからドライ ブを除去します。

このコマンドを呼び出した後に、変更内容を有効にするには、システムをリブートする 必要があります。

### drive letter:

- DLFF を除去したいドライブの文字。ドライブ文字の値の後にコロンを入れま す。(;) で区切って、複数のドライブ文字を指定することができます。
- all 1 回の操作で、現在 DLFF コントロールの下にあるすべての ドライブを除去 するには、このオプショナル・キーワードを使用します。このキーワードを使 用するときは、ドライブ文字を指定しないでください。

すべてを除去の操作が完了すると、No drives in the list LogicalDrives = (NIL) のメッセージが表示されます。

例:

- dlff remove d:
- dlff remove d:;e:
- dlff remove all

## エラー・メッセージ

このコマンドを呼び出すと、次のエラー・メッセージが出る場合があります。

ドライブ x: は、リストにありません

- 原因: このメッセージは、DLFF コントロール下からドライブを除去しよう としたが、そのドライブが実際には DLFF コントロール下にないとき に、コマンド・プロンプトに表示されます。x: は、エラーのドライブ 文字です。
- **処置:** dlff list コマンドを呼び出すことによって、除去したいドライブが実際に DLFF コントロール下にあることを確認してください。

#### 関連作業:

- 67 ページの『DLFF へのドライブの登録 (Windows オペレーティング・システム)』
- 71 ページの『DLFF の登録、照会、登録解除 (Windows オペレーティング・システム)』

### 関連資料:

• 224 ページの『dlff list コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

## dlff set dlfm\_write\_group コマンド (Windows オペレーティング・システム)

要件:このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

dlfmuser アカウントが属する特別な書き込みグループを変更した場合に DLFF に通知す るには、このコマンドを使用します。

このコマンドは、Windows で、dlfmuser アカウントのグループ・メンバーシップを実際 に変更した後 で実行します。

dlff set dlfm\_write\_group コマンドを実行した後、変更内容を有効にするには、dlff refreshtrace コマンドを実行するか、マシンをリブートする必要があります。

**重要**: dlfmuser アカウントを置く場所を変更したい場合は、ファイルのリンクを開始す る前 に変更を行う必要があります。いったんファイルのリンクを開始すると、dlfmuser アカウントが属するグループを変更することはできなくなります。

## dlfmgroupname

dlfmuser アカウントが現在属する特別な書き込みグループの名前。

例:

dlff set dlfm\_write\_group dlfmxgrp

### 関連概念:

• Data Links Manager 概説およびインストール の『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Windows)』

## 関連作業:

• Data Links Manager 概説およびインストール の『DB2 Data Links Manager のインス トール (Windows)』

#### 関連資料:

- 224 ページの『dlff refreshtrace コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 227 ページの『dlff set dlfmaccount コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

## dlff set dlfmaccount コマンド (Windows オペレーティング・システム)

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

このコマンドは、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムにのみ適用されます。

►►—dlff set dlfmaccount

-account name-

dlfmuser アカウントのパスワードまたは名前の変更を DLFF に通知するには、このコマンドを使用します。Windows で実際に dlfmuser アカウントのパスワードまたは名前値 を変更した後 で、このコマンドを実行します。

**重要:**ファイルのリンクを始めた後は、dlfmuser アカウントの名前を絶対に 変更しな いでください。リンク済みファイルのすべて が、新しい dlfmuser アカウントにアクセ スできなくなる可能性があります。

このコマンドで dlfmuser アカウント名を変更しようとすると、名前変更にともなう危険 性を知らせる警告メッセージが表示されます。コマンドを実行する前に、このような危 険性があることに注意するよう指示されます。 dlfmuser アカウント名を変更した後、変 更内容を有効にするには、dlff refreshtrace コマンドを実行するか、システムをリブー トする必要があります。

パスワードだけを変更する場合は、コマンドを実行した直後に変更内容が有効になりま す。

account\_name

dlfmuser アカウントの変更した名前を指定するオプショナル・パラメーター。 dlfmuser アカウントの名前を変更したい場合は、この値を指定するだけです。 アカウントのパスワードを入力するようにプロンプトが出されます。 dlfmuser アカウント・パスワードだけを変更したい場合は、このパラメーター は指定しないでください。新しいパスワード値を入力するように、プロンプト が出されます。何らかの理由で DLFF が dlfmaccount 名を探し出せない場合 は、この名前を入力するように促されます。

例:

- dlfm set dlfmaccount
- dlfm set dlfmaccount dlfm

## エラー・メッセージ

このコマンドを呼び出すと、次のエラー・メッセージが出る場合があります。

LookupAccountName が xxxx を見つけられません。: アカウント名とセキュリティー ID 間のマッピングが行われていません。DlfmAccountName のパラメーターを xxxx に設定 するのに失敗しました。dlfmaccount のパラメーターに対して dlfscfgset が失敗しま した。

- 原因: このメッセージは、アカウント名を設定しようとしたが、その操作が 失敗したときに、コマンド・プロンプトに表示されます。xxxx は、エ ラーのアカウント名の値です。
- **処置:** 設定する dlfmuser アカウント名が、システム上にユーザー名として存 在することを確認します。

LogOnUser が失敗しました。: ログオンできません。: 不明のユーザー名または誤った パスワードです。最大再試行数の限界を超えました - 終了します。D1fmAccountName の パラメーターを xxxx に設定するのに失敗しました。d1fmaccount のパラメーターに対 して d1fscfgset が失敗しました。

- 原因: このメッセージは、アカウント名を設定しようとしたが、コマンド・ プロンプトでアカウントに対して指定したパスワードが誤っていると きに、コマンド・プロンプトに表示されます。xxxx は、エラーのアカ ウント名の値です。
- **処置:** dlfmaccount 自体が、コマンド・プロンプトで指定するものと同じパス ワードをもつようにしてください。

## 関連概念:

 Data Links Manager 概説およびインストールの『DB2 Data Links Manager をインス トールする前に (Windows)』

### 関連作業:

• Data Links Manager 概説およびインストール の『DB2 Data Links Manager のインス トール (Windows)』

関連資料:

- 224 ページの『dlff refreshtrace コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 226 ページの『dlff set dlfm\_write\_group コマンド (Windows オペレーティング・シ ステム)』

## dlff set loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)

**要件**: このコマンドは、Data Links Manager の管理者ユーザー ID を使用して、デー タ・リンク・サーバーから実行する必要があります。

このコマンドは、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムに のみ適用されます。 ▶—dlff set loglevel—*log level*—**→** 

DLFF が生成するメッセージ・ログのメッセージ重大度を設定するには、このコマンド を使用します。メッセージは、Windows のシステム・ログに入れられます。

このコマンドでメッセージ重大度レベルをリセットした後、変更内容を有効にするに は、dlff refreshtrace コマンドを実行する必要があります。

#### log\_level

ログに記録したいエラーのメッセージ重大度レベルを指定する、0 から 3 までの数。レベルは次のとおりです。

- 0 成功
- 1 通知
- 2 警告
- ・3-エラー

#### 例:

• dlff set loglevel 1

### 関連作業:

 80 ページの『データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) 処理のロ ギングの変更 (Windows オペレーティング・システム)』

## 関連資料:

- ・ 223 ページの『dlff get loglevel コマンド (Windows オペレーティング・システム)』
- 224 ページの『dlff refreshtrace コマンド (Windows オペレーティング・システム)』

# 付録 C. Data Links File System (DLFS) のエラー

この付録は、Data Links Filesystem Filter (DLFF) が出すエラー・メッセージをリストしています。これらのエラー・メッセージは、ご使用のオペレーティング環境のファイル・システムを通して表示されます。エラー・メッセージの出る可能性のあるコマンドあるいは操作ごとに、この付録では以下のことをリストしています。

- 表示されるエラー・メッセージ・テキスト
- エラー・メッセージの原因

この付録には、以下のセクションがあります。

- ・ 『コマンドに対する DLFS エラー (AIX)』
- 239 ページの『コマンドに対する DLFS エラー (Solaris オペレーティング環境)』
- 246 ページの『コマンドに対する DLFS エラー (Windows)』
- 251 ページの『WRITE PERMISSION ADMIN で定義された列で参照されたファイル からの DLFS エラー』

## コマンドに対する DLFS エラー (AIX)

このトピックでは、Data Links Filesystem Filter (DLFF) アクションの結果、AIX ベース のファイル・システムで受け取る可能性のあるエラー・メッセージを扱っています。

エラーになる可能性のある AIX コマンドは、以下の 2 つのセクションにまとめること ができます。

- ・ 『特定の AIX コマンドによる DLFS エラー』
- 234 ページの『ファイルをオープンする AIX コマンドによる DLFS エラー』

## 特定の AIX コマンドによる DLFS エラー

このセクションでは、Data Links Filesystem Filter (DLFF) から出るエラー・メッセージ のうち、特定の AIX コマンドで発生するエラー・メッセージについて記載していま す。共通のコマンドをアルファベット順にリストしています。それぞれのコマンド名に 続いて、このセクションでは以下のものをリストしています。

- 表示されるエラー・メッセージ・テキスト
- エラー・メッセージの原因
- 推奨アクション

このセクションでは、以下のコマンドをリストしています。

- 『chmod nnn filename コマンド』
- 『Is filename コマンド』
- 233 ページの『mkdir コマンド』
- 233 ページの『mount コマンド』
- 233 ページの 『mv dir11 newdir11 コマンド』
- 233 ページの『mv filename newfilename コマンド』
- 234 ページの『rm filename コマンド』
- 234 ページの『strload コマンド』

## chmod nnn filename コマンド

ファイルが READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされている場合

chmod: filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファ イル・アクセス許可では、指定されたアクションは許可されません)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの属性を変更しよ うとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
  Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列として
  リンクされたファイルの属性の変更は、root 以外のユーザーには許可
  しません。

READ PERMISSION FS および WRITE PERMISSION BLOCKED で定義された DATALINK 列にファイルがリンクされている場合

chmod: filename: Operation not permitted. (操作が許可されていません)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION FS および WRITE PERMISSION BLOCKED 表列とし てリンクされたファイルの属性を変更しようとしたことを示す、シス テム・メッセージです。
- 処置: 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links Manager のコントロールの下で WRITE PERMISSION BLOCKED 表 列としてリンクされたファイルの属性の変更は、root 以外のユーザー には許可しません。

## Is filename コマンド

ls: 0653-345 filename: Permission denied. (アクセスが拒否されました)

原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ

PERMISSION DB 表列からリンクされたファイルをリストしようとし たことを示す、システム・メッセージです。

処置: Data Links Manager は、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列からリンクされたファイルのリストは、 root 以外のユーザーには許可しません。リストを表示する (または属 性を表示する) には、データベースから有効なトークンを入手してコ マンドを再発行してください。

## mkdir コマンド

0653-358 Cannot create "...". "...": The specified device does not exist. (指定された装置 が存在しません)

- **原因:** Data Links File System (DLFS) にディレクトリーを作成しようとした がデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が開始されてい ないことを示すシステム・メッセージです。
- DLFM が稼働しているか、dlfm see コマンドを出して確認してください。DLFM が稼働していない場合は、dlfm start コマンドを出して開始させ、再度、ディレクトリーの作成を試してください。

## mount コマンド

dlfs mount Error: Function not implemented dlfs mount helper: Mount Unsuccessful Unmount the base file system (マウントに失敗。基本ファイル・システムをマウント解除)

- **原因:** DLFS をマウントするときは、Data Links File System (DLFS) ドライ バー (dlfsdrv) がロードされている必要があります。
- **処置:** dlfsdrv がロードされているか確認します。

## mv dir11 newdir11 コマンド

mv: 0653-401 Cannot rename dir11 to newdir11: Operation not permitted. (操作が許可されていません)

- **原因:** Data Links File System (DLFS) 内のディレクトリー名を変更しようとしたことを示すシステム・メッセージです。
- **処置**: 処置の必要はありません。Data Links Manager が、DLFS 内のディレクトリーの名前変更を許可しません。

## mv filename newfilename コマンド

mv: 0653-401 Cannot rename filename to newfilename: The file access permissions do not allow the specified action. (指定したアクションをファイル・アクセス許可が許可しません)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下でリンクされたファ イルの名前を変更しようとしたことを示す、システム・メッセージで す。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
  Manager のコントロールの下にあるファイルの名前の変更は、root 以外のユーザーには許可しません。

## rm filename コマンド

rm: filename: Cannot remove filename. (filename を除去できません) The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス許可では、指定 したアクションが許可されません)

- **原因:** これは、Data Links Manager のコントロールの下でリンクされたファ イルを除去しようとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
  Manager のコントロールの下にあるファイルの除去は、root 以外のユ ーザーには許可しません。

## strload コマンド

strload: cannot terminate dlfsdrv: The requested resource is busy. (要求されたリソースは 使用中です)

- 原因: Data Links File Manager (DLFM) が稼働中であるか、Data Links File System (DLFS) がマウントされていて、このドライバーを使用してい る。
- 処置: DLFM が稼働中であれば停止させ、ドライバーのアンロードを試して みてください。それで駄目な場合は、すでにマウントされている DLFS がこのドライバーを使用していないかどうかチェックしてくだ さい。DLFS をアンマウントして、再度、ドライバーをアンロードし てください。

## ファイルをオープンする AIX コマンドによる DLFS エラー

このセクションは、READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクし ているファイルをオープンするコマンドを出したときに、データ・リンク・ファイル・ システム (DLFF) から出る可能性のあるエラー・メッセージについての情報を記載して います。これらのエラーの該当するユーザーは、root 以外のユーザーです。エラーは、 オープンできるファイルのタイプ別に分類されています。ファイルのタイプ別に、この セクションでは以下のものをリストしています。

- ファイルの各タイプをオープンするのに使用する共通コマンドの例
- 表示されるエラー・メッセージ・テキスト
- エラー・メッセージの原因
- ・ 推奨アクション

このセクションでは、以下のタイプのオープン操作をリストしています。

- 『トークンなしでファイルをオープンする』
- 236ページの『有効期限が切れたトークンでファイルをオープンする』
- 237 ページの『無効なトークンでファイルをオープンする』

## トークンなしでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、トークンなしでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数のエラー・メ ッセージがでる場合があります。表8 は、トークンなしでファイルをオープンするのに 使用できる AIX コマンドの一部と、各コマンドに関連したエラー・メッセージをリス トしています。

表8 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 8. トークンなしでファイルをオープンするのに使用できる AIX コマンドの一部と、関連するエラー・ メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
cat filename	cat: 0652-050 Cannot open filename. (filename をオ ープンできません。)
cp filename newfilename	cp: filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス 許可では、指定されたアクションは許可されません)
diff filename filenamefs	diff: filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス 許可では、指定されたアクションは許可されません)
grep "str" filename	grep: 0652-033 Cannot open filename. (filename をオ ープンできません)
head filename	filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス許可で は、指定されたアクションは許可されません)
tail filename	filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス許可で は、指定されたアクションは許可されません)

トークンなしでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻されるエラー・メッ セージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

**原因:** これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ

PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうと したことを示す、システム・メッセージです。

**処置:** ファイルの内容を読み取るには、データベースから有効なトークンを 入手してコマンドを再発行してください。

## 有効期限が切れたトークンでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、有効期限が切れたトークンでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数 のエラー・メッセージがでる場合があります。表9 は、有効期限が切れたトークンでフ ァイルをオープンするのに使用する可能性のある AIX コマンドの一部と、各コマンド に関連したエラー・メッセージをリストしています。

表9 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 9. 有効期限が切れたトークンでファイルをオープンするのに使用する可能性のある AIX コマンドの一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
cat "04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename"	cat: 0652-050 Cannot open 04E2_DEGnck_JD8hFHOy6JU;filename. (04E2_DEGnck_JD8hFHOy6JU;filename をオープン できません)
cp ″04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename″ newfilename	cp: 04E2_DEGnck_JD8hFHOy6JU;filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス許可では、指定されたアク ションは許可されません)
diff ″04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename″ filenamefs	diff: 04E2_DEGnck_JD8hFHOy6JU;filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス許可では、指定されたアクションは許可されません)
grep ″str″ ″04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename″	grep: 0652-033 Cannot open 04E2_DEGnck_JD8hFHOy6JU;filename. (04E2_DEGnck_JD8hFHOy6JU;filename をオープン できません)
head "04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename"	04E2_DEGnck_JD8hFHOy6JU;filename: The file access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス許可では、指定されたアク ションは許可されません)

表 9. 有効期限が切れたトークンでファイルをオープンするのに使用する可能性のある AIX コマンドの一 部と、関連するエラー・メッセージのリスト。(続き)

コマンド名	エラー・メッセージ
more "04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename"	04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename: The file
	access permissions do not allow the specified action.
	(このファイル・アクセス許可では、指定されたアク
	ションは許可されません)
tail "04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename"	04E2_DEGnckJD8hFHOy6JU;filename: The file
	access permissions do not allow the specified action. (このファイル・アクセス許可では、指定されたアク ションは許可されません)

有効期限が切れたトークンでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻される エラー・メッセージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうと して、トークンが有効期限が切れであることを示す、システム・メッ セージです。
- **処置:** データベースから有効なトークンを入手してコマンドを再発行してく ださい。

## 無効なトークンでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、無効なトークンでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数のエラー・ メッセージがでる場合があります。表 10 は、無効なトークンでファイルをオープンす るのに使用する可能性のある AIX コマンドの一部と、各コマンドに関連したエラー・ メッセージをリストしています。

表 10 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 10. 無効なトークンでファイルをオープンするのに使用する可能性のある AIX コマンドの一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
cat "04E2_AAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename"	cat: 0652-050 Cannot open
	04E2_AAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename.

表 10. 無効なトークンでファイルをオープンするのに使用する可能性のある AIX コマンドの一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。(続き)

コマンド名	エラー・メッセージ
cp "04E2_AAAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename" newfilename	cp: 04E2_AAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename: A file or directory in the path name does not exist. (パ ス名にあるファイルまたはディレクトリーが存在し ません)
diff "04E2_AAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename" filenamefs	diff: 04E2_AAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename: A file or directory in the path name does not exist. (パ ス名にあるファイルまたはディレクトリーが存在しません)
grep "str" "04E2_AAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename"	grep: 0652-033 Cannot open 04E2_AAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename. (04E2_AAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename をオー プンできません)
head ″04E2_AAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename″	04E2_AAAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename: A file or directory in the path name does not exist. (パス名 にあるファイルまたはディレクトリーが存在しませ ん)
more "04E2_AAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename"	04E2_AAAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename: A file or directory in the path name does not exist. (パス名 にあるファイルまたはディレクトリーが存在しませ ん)
tail "04E2_AAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename"	04E2_AAAAAAAAAAAAAAAHOy6JU;filename: A file or directory in the path name does not exist. (パス名 にあるファイルまたはディレクトリーが存在しませ ん)

無効なトークンでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻されるエラー・メ ッセージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

原因:	これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ
	PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうと
	して、トークンが無効であることを示す、システム・メッセージで す。
処置:	データベースから有効なトークンを入手してコマンドを再発行してく ださい。

関連資料:
251 ページの『WRITE PERMISSION ADMIN で定義された列で参照されたファイル からの DLFS エラー』

### コマンドに対する DLFS エラー (Solaris オペレーティング環境)

このトピックでは、Data Links Filesystem Filter (DLFF) アクションの結果、Solaris オペレーティング環境のファイル・システムで受け取る可能性のあるエラー・メッセージを扱っています。

エラーになる可能性のある Solaris オペレーティング環境のコマンドは、以下の 2 つの セクションにまとめることができます。

- 『Solaris オペレーティング環境での特定のコマンドによる DLFS エラー』
- 242ページの『Solaris オペレーティング環境での、ファイルをオープンするコマンド による DLFS エラー』

### Solaris オペレーティング環境での特定のコマンドによる DLFS エラー

このセクションでは、Data Links Filesystem Filter (DLFF) から出るエラー・メッセージ のうち、Solaris オペレーティング環境で使用する特定のコマンドで発生するエラー・メ ッセージについて記載しています。共通のコマンドをアルファベット順にリストしてい ます。それぞれのコマンド名に続いて、このセクションでは以下のものをリストしてい ます。

- 表示されるエラー・メッセージ・テキスト
- エラー・メッセージの原因

このセクションでは、以下のコマンドをリストしています。

- 『chmod nnn filename コマンド』
- 240 ページの『Is filename コマンド』
- 240 ページの『mkdir コマンド』
- 241 ページの『mount コマンド』
- 241 ページの『mvdir dir11 newdir11』
- 241 ページの『mv filename newfilename コマンド』
- 242 ページの『rem\_drv コマンド』
- 242 ページの『rm filename コマンド』

### chmod nnn filename コマンド

ファイルが READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされている場合

chmod: WARNING: can't access filename (filename にアクセスできません)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの属性を変更しよ うとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
   Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列として
   リンクされたファイルの属性の変更は、root 以外のユーザーには許可しません。

READ PERMISSION FS および WRITE PERMISSION BLOCKED で定義された DATALINK 列にファイルがリンクされている場合

chmod: WARNING: can't change filename (filename を変更できません)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION FS および WRITE PERMISSION BLOCKED 表列とし てリンクされたファイルの属性を変更しようとしたことを示す、シス テム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
   Manager のコントロールの下で WRITE PERMISSION BLOCKED 表
   列としてリンクされたファイルの属性の変更は、root 以外のユーザー
   には許可しません。

### Is filename コマンド

filename: Permission denied (許可を拒否されました)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列からリンクされたファイルをリストしようとし たことを示す、システム・メッセージです。
- 処置: Data Links Manager は、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列からリンクされたファイルのリストは、 root 以外のユーザーには許可しません。Data Links File Manager (DLFM) が実行されているか、dlfm see コマンドを発行してチェッ クしてください。 DLFM が稼動していない場合は、dlfm start コマ ンドを発行して開始させ、再度、ディレクトリーの作成を試行してく ださい。

### mkdir コマンド

Failed to make directory "..."; No such device (ディレクトリーの作成に失敗しました。 このような装置はありません)

原因: Data Links File System (DLFS) にディレクトリーを作成しようとした がデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が開始されてい ないことを示すシステム・メッセージです。 DLFM が稼働しているか、dlfm see コマンドを出して確認してください。
 DLFM が稼動していない場合は、dlfm start コマンドを発行して開始させ、再度、ディレクトリーの作成を試行してください。

#### mount コマンド

dlfs mount Error : Invalid argument dlfs mount helper: Mount Unsuccessful Unmount the base file system /usr/sbin/umount /dlfstest umount: warning: /dlfstest not in mnttab (マウントに失敗。基本ファイル・システムをマウント解除)

- **原因:** DLFS をマウントするときは、Data Links File System (DLFS) ドライ バー (dlfsdrv) がロードされている必要があります。
- 処置: dlfsdrv がロードされているか確認します。

### mvdir dir11 newdir11

mv: dir11 is a directory (dir11 はディレクトリーです)

- **原因:** Data Links File System (DLFS) 内のディレクトリー名を変更しようとしたことを示すシステム・メッセージです。
- **処置**: 処置の必要はありません。Data Links Manager が、DLFS 内のディレクトリーの名前変更を許可しません。

#### mv filename newfilename コマンド

ファイルが READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされている場合

mv: cannot access filename (filename にアクセスできません)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの名前を変更しよ うとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
   Manager のコントロールの下にあるファイルの名前の変更は、root 以外のユーザーには許可しません。

READ PERMISSION FS および WRITE PERMISSION BLOCKED で定義された DATALINK 列にファイルがリンクされている場合

mv: cannot rename filename: Permission denied (filename の名前変更ができません。拒否 されました)

原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION FS および READ PERMISSION BLOCKED 表列として リンクされたファイルの名前を変更しようとしたことを示す、システ ム・メッセージです。 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
 Manager のコントロールの下にあるファイルの名前の変更は、root 以外のユーザーには許可しません。

### rem\_drv コマンド

Device busy Cannot unload module: dlfsdrv Will be unloaded upon reboot. (装置使用中。 モジュールをアンロードできません。リブートすれば dlfsdrv のアンロード可)

- 原因: Data Links File Manager (DLFM) が稼働中であるか、Data Links File System (DLFS) がマウントされていて、このドライバーを使用してい る。
- 処置: DLFM が稼働中であれば停止させ、ドライバーのアンロードを試して みてください。それで駄目な場合は、すでにマウントされている DLFS がこのドライバーを使用していないかどうかチェックしてくだ さい。DLFS をアンマウントして、再度、ドライバーをアンロードし てください。

### rm filename コマンド

rm: filename: override protection 444 (yes/no)? y

rm: filename not removed: Permission denied (filename は除去されていません。拒否されました)

- **原因**: これは、Data Links Manager のコントロールの下でリンクされたファ イルを除去しようとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
   Manager のコントロールの下にあるファイルの除去は、root 以外のユ ーザーには許可しません。

### Solaris オペレーティング環境での、ファイルをオープンするコマンドによる DLFS エラー

このセクションは、READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクし ているファイルをオープンするコマンドを出したときに、データ・リンク・ファイル・ システム (DLFF) から出る可能性のあるエラー・メッセージについての情報を記載して います。これらのエラーの該当するユーザーは、root 以外のユーザーです。エラーは、 オープンできるファイルのタイプ別に分類されています。ファイルのタイプ別に、この セクションでは以下のものをリストしています。

- ファイルの各タイプをオープンするのに使用する共通コマンドの例
- 表示されるエラー・メッセージ・テキスト
- エラー・メッセージの原因
- 推奨アクション

このセクションでは、以下のタイプのオープン操作をリストしています。

- 『トークンなしでファイルをオープンする』
- 244 ページの『有効期限が切れたトークンでファイルをオープンする』
- 245 ページの『無効なトークンでファイルをオープンする』

### トークンなしでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、トークンなしでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数のエラー・メ ッセージがでる場合があります。表 11 は、トークンなしでファイルをオープンするの に使用できる Solaris オペレーティング環境でのコマンドの一部と、各コマンドに関連 したエラー・メッセージをリストしています。

表 11 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 11. トークンなしでファイルをオープンするのに Solaris オペレーティング環境使用できるコマンドの 一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
cat filename	cat: cannot open filename (filename をオープンでき ません。)
cp filename newfilename	cp: cannot access filename (filename にアクセスできません。)
diff filename filenamefs	diff: filename: Permission denied (許可を拒否されま した)
grep "str" filename	grep: can't open filename (filename をオープンでき ません)
head filename	filename: Permission denied (許可を拒否されました)
more filename	filename: Permission denied (許可を拒否されました)
tail filename	tail: cannot open input (入力をオープンできません)

トークンなしでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻されるエラー・メッ セージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうと したことを示す、システム・メッセージです。
- **処置:** データベースから有効なトークンを入手してコマンドを再発行してく ださい。

### 有効期限が切れたトークンでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、有効期限が切れたトークンでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数 のエラー・メッセージがでる場合があります。表 12 は、有効期限が切れたトークンで ファイルをオープンするのに使用できる Solaris オペレーティング環境でのコマンドの 一部と、各コマンドに関連したエラー・メッセージをリストしています。

表 12 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 12. 有効期限が切れたトークンでファイルをオープンするのに Solaris オペレーティング環境で使用す る可能性のあるコマンドの一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
cat "04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename"	cat: cannot open 04E2_DEJ3FE_21WJSqB38XM;filename (04E2_DEJ3FE_21WJSqB38XM;filename をオープン できません)
cp "04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename" newfilename	cp: cannot access 04E2_DEJ3FE_21WJSqB38XM;filename (04E2_DEJ3FE_21WJSqB38XM;filename にアクセス できません)
diff ″04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename″ filenamefs	diff: 04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename:No such file or directory (このようなファイルまたはデ ィレクトリーはありません)
grep ″str″ ″04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename″	grep: can't open 04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename (04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename をオープン できません)
head "04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename"	04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename: No such file or directory (このようなファイルまたはディレ クトリーはありません)
more "04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename"	04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename: No such file or directory (このようなファイルまたはディレ クトリーはありません)
tail ″04E2_DEJ3FE21WJSqB38XM;filename″	tail: cannot open input (入力をオープンできません)

有効期限が切れたトークンでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻される エラー・メッセージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ

PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうとして、トークンが有効期限が切れであることを示す、システム・メッセージです。

**処置:** データベースから有効なトークンを入手してコマンドを再発行してく ださい。

### 無効なトークンでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、無効なトークンでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数のエラー・ メッセージがでる場合があります。表 13 は、無効なトークンでファイルをオープンす るのに使用できる Solaris オペレーティング環境でのコマンドの一部と、各コマンドに 関連したエラー・メッセージをリストしています。

表 13 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 13. 無効なトークンでファイルをオープンするのに Solaris オペレーティング環境で使用する可能性のあるコマンドの一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
cat "04E2AAAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename"	cat: cannot open 04E2AAAAAAAAAAAAAAAAAGqB38XM;filename (04E2AAAAAAAAAAAAAAAGqB38XM;filename をオー プンできません。)
cp "04E2AAAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename" newfilename	cp: cannot access 04E2AAAAAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename (04E2AAAAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename にアク セスできません。)
diff ″04E2AAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename″ filenamefs	diff: 04E2AAAAAAAAAAAAAAAABgB38XM;filename: No such file or directory (このようなファイルまた はディレクトリーはありません)
grep "str" "04E2AAAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename"	grep: can't open 04E2AAAAAAAAAAAAAAAAAGqB38XM;filename (04E2AAAAAAAAAAAAAAAGqB38XM;filename をオー プンできません)
head ″04E2AAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename″	04E2AAAAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename: No such file or directory (このようなファイルまたはデ ィレクトリーはありません)
more ″04E2AAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename″	04E2AAAAAAAAAAAAAAAABqB38XM;filename: No such file or directory (このようなファイルまたはデ ィレクトリーはありません)

表 13. 無効なトークンでファイルをオープンするのに Solaris オペレーティング環境で使用する可能性の あるコマンドの一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。(続き)

### コマンド名 エラー・メッセージ

tail: cannot open input (入力をオープンできません)

#### "04E2AAAAAAAAAAAAAASqB38XM;filename"

tail

無効なトークンでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻されるエラー・メ ッセージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうと して、トークンが無効であることを示す、システム・メッセージで す。
- **処置:** データベースから有効なトークンを入手して操作を再試行してください。

#### 関連資料:

 251 ページの『WRITE PERMISSION ADMIN で定義された列で参照されたファイル からの DLFS エラー』

### コマンドに対する DLFS エラー (Windows)

このトピックでは、Data Links Filesystem Filter (DLFF) アクションの結果、Windows NTFS で受け取る可能性のあるエラー・メッセージを扱っています。

エラーになる可能性のある Windows NTFS のコマンドは、以下の 2 つのセクションに まとめることができます。

- 『特定の Windows コマンドによる DLFS エラー』
- 248 ページの『ファイルをオープンする Windows コマンドによる DLFS エラー』

### 特定の Windows コマンドによる DLFS エラー

このセクションでは、Data Links Filesystem Filter (DLFF) から出るエラー・メッセージ のうち、特定の Windows コマンドで発生するエラー・メッセージについて記載してい ます。共通のコマンドをアルファベット順にリストしています。それぞれのコマンド名 に続いて、このセクションでは以下のものをリストしています。

- 表示されるエラー・メッセージ・テキスト
- エラー・メッセージの原因
- 推奨アクション

このセクションでは、以下のコマンドをリストしています。

- 『attrib + r filename』
- 『del "filename"』
- 『mkdir コマンド』
- 『move コマンド』
- ・ 248 ページの 『ren "d:\test\filename" "newfilename"』
- 248 ページの『Windows エクスプローラーからの rmdir または delete コマンド』

#### attrib + r filename

Access is denied. (アクセスが拒否されました)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの属性を変更しよ うとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
   Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列として
   リンクされたファイルの属性の変更は、dlmadmin 以外のユーザーには
   許可しません。

#### del "filename"

Access is denied. (アクセスが拒否されました)

- **原因:** これは、Data Links Manager のコントロールの下でリンクされたファ イルを削除しようとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
   Manager のコントロールの下にあるファイルの除去は、dlmadmin 以外のユーザーには許可しません。

### mkdir コマンド

The device is not ready. (この装置は作動不能です)

- 原因: Data Links File System (DLFS) にディレクトリーを作成しようとした がデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) が開始されてい ないことを示すシステム・メッセージです。
- 処置: DLFM が実行されているか、net start コマンドを出して確認してく ださい。このコマンドは、開始済みの Windows サービスをリストに して表示します。are started. DLFM が実行されていない場合は、dlfm start コマンドを使用して開始させ、再度、ディレクトリーの作成を 試してください。

### move コマンド

A duplicate file name exists, or the file cannot be found. (ファイル名が重複している か、ファイルが見つかりません)

- **原因:** Data Links File System (DLFS) 内のディレクトリー名を変更しようとしたことを示すシステム・メッセージです。
- **処置**: 処置の必要はありません。Data Links Manager が、DLFS 内のディレクトリーの名前変更を許可しません。

#### ren "d:\test\filename" "newfilename"

Access is denied. (アクセスが拒否されました)

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下でリンクされたファ イルの名前を変更しようとしたことを示す、システム・メッセージで す。
- 処置の必要はありません。Data Links Manager は、Data Links
   Manager のコントロールの下にあるファイルの名前変更は、dlmadmin
   以外のユーザーには許可しません。

### Windows エクスプローラーからの rmdir または delete コマンド

Access is denied. Or a dialog box displaying the message "Error Deleting File". (アクセ スが拒否されたか、メッセージ "Error Deleting File" を表示するダイアログ・ボックス)

- **原因:** Data Links File System (DLFS) 内のディレクトリーを dlmadmin 以外 のユーザーが削除しようとしたことを示すシステム・メッセージで す。
- 処置: ディレクトリーを削除する場合、そのディレクトリー・ツリー内に 「DB2 Data Links File Manager」の下でリンクされているファイルが ないことを確認してください。DLFS は、「DB2 Data Links File Manager」の下でリンクされているファイルが入っているディレクトリ ーの削除は許可しません。

### ファイルをオープンする Windows コマンドによる DLFS エラー

このセクションは、READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクし ているファイルをオープンするコマンドを出したときに、データ・リンク・ファイル・ システム (DLFF) から出る可能性のあるエラー・メッセージについての情報を記載して います。これらのエラーの該当するユーザーは、dlmadmin 以外のユーザーです。エラー は、オープンできるファイルのタイプ別に分類されています。ファイルのタイプ別に、 このセクションでは以下のものをリストしています。

- ファイルの各タイプをオープンするのに使用する共通コマンドの例
- 表示されるエラー・メッセージ・テキスト
- エラー・メッセージの原因
- 推奨アクション

このセクションでは、以下のタイプのオープン操作をリストしています。

249 ページの『トークンなしでファイルをオープンする』

- 『有効期限が切れたトークンでファイルをオープンする』
- 250ページの『無効なトークンでファイルをオープンする』

### トークンなしでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、トークンなしでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数のエラー・メ ッセージがでる場合があります。表 14 は、トークンなしでファイルをオープンするの に使用できる Windows コマンドの一部と、各コマンドに関連したエラー・メッセージ をリストしています。

表 14 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 14. トークンなしでファイルをオープンするのに使用できる Windows コマンドの一部と、関連するエ ラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ	
more <"d:\test\filename"	Access is denied. (アクセスが拒否されました)	
type "filename"	Access is denied. (アクセスが拒否されました)	

トークンなしでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻されるエラー・メッ セージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を表示しようとしたことを示す、システム・メッセージです。
- 処置: ファイルの内容を読み取るには、データベースから有効なトークンを 入手し、そのトークンを使用してコマンドを再発行してください。

#### 有効期限が切れたトークンでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、有効期限が切れたトークンでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数 のエラー・メッセージがでる場合があります。 250 ページの表 15 は、有効期限が切れ たトークンでファイルをオープンするのに使用する可能性のある Windows コマンドの 一部と、各コマンドに関連したエラー・メッセージをリストしています。

250 ページの表 15 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはあります。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンドのタイプを表しています。

表 15. 有効期限が切れたトークンでファイルをオープンするのに使用する可能性のある Windows コマン ドの一部と、関連するエラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
more	指定されたファイルが見つかりません。
"d:\test\04E2_D3iwQkH5G1CXMzq_g;filename"	
type ″04E2_D3iwQkH5G1CXMzq_g;filename″	Access is denied. (アクセスが拒否されました)

有効期限が切れたトークンでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻される エラー・メッセージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

- 原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうと して、トークンが有効期限が切れであることを示す、システム・メッ セージです。
- **処置:** データベースから新規トークンを入手してコマンドを再発行してくだ さい。

### 無効なトークンでファイルをオープンする

READ PERMISSION DB で定義された DATALINK 列にリンクされているファイルの 場合、無効なトークンでファイルをオープンしようとすると DLFF から多数のエラー・ メッセージがでる場合があります。表 16 は、無効なトークンでファイルをオープンす るのに使用する可能性のある Windows コマンドの一部と、各コマンドに関連したエラ ー・メッセージをリストしています。

表 16 にリストされているもの以外にも、オープン操作に使用できるコマンドはありま す。リストされているコマンドは、ファイルをオープンするときに使用できるコマンド のタイプを表しています。

表 16. 無効なトークンでファイルをオープンするのに使用する可能性のある Windows コマンドの一部 と、関連するエラー・メッセージのリスト。

コマンド名	エラー・メッセージ
more	指定されたファイルが見つかりません。
"d:\test\24E2_D3iwQkH5G1CXMzq_g;filename"	
type "24E2_D3iwQkH5G1CXMzq_g;filename"	Access is denied. (アクセスが拒否されました)

無効なトークンでファイルをオープンするコマンドを発行すると、戻されるエラー・メ ッセージには以下の原因および推奨アクションが含まれています。

原因: これは、Data Links Manager のコントロールの下で READ PERMISSION DB 表列としてリンクされたファイルの内容を読もうと して、トークンが無効であることを示す、システム・メッセージで す。

### WRITE PERMISSION ADMIN で定義された列で参照されたファイルからの DLFS エ ラー

このトピックには、WRITE PERMISSION ADMIN で定義された DATALINK 列にリン クされたファイルをオープンしようとした場合に、UNIX ベースのファイル・システム および Windows NTFS で受け取る可能性のあるエラー・メッセージを記載していま す。これらのエラーは、dlmadmin 以外のユーザー (Windows の場合)、または root 以 外のユーザー (UNIX の場合) に関係します。それらのエラーは、Data Links Filesystem Filter (DLFF) アクションの結果です。

オープン操作に失敗すると、DLFF はプラットフォームによって異なるエラー・メッセ ージを出す場合があります。エラーの原因はいろいろあります。このセクションでは、 以下のことをリストしています。

- オープン操作が失敗したときに行おうとしていたアクション
- その状態で DLFF が戻す可能性のあるエラー・メッセージ
- エラー・メッセージの原因

### 読み取り操作用にファイルをオープンする

ファイルの内容またはファイル属性を読むためにファイルをオープンしようとしてオー プン操作で失敗すると、ご使用の稼働環境のファイル・システムが UNIX および Windows プラットフォーム用にいくつかのエラー・メッセージを表示する場合がありま す。

ファイル・システムが UNIX ベースの場合に DLFS から戻るエラー・コードとそれぞれの意味の説明を以下に示します。

#### ENOENT

ファイルまたはディレクトリーがありません。

### EPERM

操作が許可されていません。

#### EACCES

アクセスが拒否されました。

ファイル・システムが Windows NTFS の場合に DLFS から戻るエラー・コードとそれ ぞれの意味の説明を以下に示します。

#### ERROR\_FILE\_NOT\_FOUND

指定されたファイルが見つかりません。

#### ERROR\_ACCESS\_DENIED

アクセスが拒否されました。

表 17. 読み取り操作用にファイルをオープンしたときのエラーの考えられる原因と推奨アクション

原因	処置
トークンが無効 (たとえば、有効期限切れトークン、またはトークンの形がよくない)、あるいはトー	対応する表の行および列に対して SQL SELECT ス テートメントを発行して有効なトークンを再生成す
クンが指定されていない。	る。
ファイルがリンクされていない。	ファイル許可に応じて、トークンなしでオープンを 試行してください。
現在、トークンを使用してファイルを変更していま すが、そのファイルに対する読み取りまたは書き込 みで同一のトークンを使用していません。	ファイルの変更を開始するときは、読み取りまたは 書き込み操作のいずれかで同一のトークンを引き続 き使用する必要があります。

### 書き込み操作用にファイルをオープンする

書き込み操作のためにファイルをオープンしようとしてオープン操作で失敗すると、ご 使用の稼働環境のファイル・システムが UNIX および Windows プラットフォーム用に いくつかのエラー・メッセージを表示する場合があります。

ファイル・システムが UNIX ベースの場合に DLFS から戻るエラー・コードとそれぞれの意味の説明を以下に示します。

### ENOENT

ファイルまたはディレクトリーがありません。

#### EPERM

操作が許可されていません。

#### EACCES

アクセスが拒否されました。

ファイル・システムが Windows NTFS の場合に DLFS から戻るエラー・コードとその 意味の説明を以下に示します。

#### ERROR\_ACCESS\_DENIED

アクセスが拒否されました。

表 18. 書き込み操作用にファイルをオープンしたときのエラーの考えられる原因と推奨アクション

原因	処置
トークンが無効 (たとえば、有効期限切れトーク ン、またはトークンの形がよくない)、あるいはトー クンが指定されていない。	対応する表の行および列に対して、 DLCOMPLETEWRITE または DLPATHWRITE スカ ラー関数のいずれかと一緒に SQL SELECT ステー トメントを発行して有効な書き込みトークンを再生 成する。
このファイルは、RECOVERY YES の列にリンクさ れており、ファイル・アーカイブ処理がまだ完了し ていません。	数秒待って、再試行してください。
このファイルは、現在、更新中の状態にあり、別の トークンを使用して、または別のユーザーによって 変更されています。	dlfm list upd_in_progress files コマンドを使用 して、誰が現在、このファイルを更新しているかを 調べてください。そして、現行の更新操作が終了す るのを待って、同じ操作を再試行してください。
ファイル更新操作を完了させるために誰かがファイ ルのリンクを解除したか SQL UPDATE コマンドを 出したが、DB2 トランザクションがまだコミットし ていません。	数秒待って、再試行してください。
ファイルがリンクされていない。	ファイル許可に応じて、トークンなしでオープンを 試行してください。

### 関連資料:

- 231 ページの『コマンドに対する DLFS エラー (AIX)』
- 239 ページの『コマンドに対する DLFS エラー (Solaris オペレーティング環境)』

## DB2 Data Links Manager 用語集

## [カ行]

**書き込みトークン (write token).** WRITE PERMISSION ADMIN DATALINK 列値に組み込まれる許可 キー。スカラー関数の DLURLCOMPLETEWRITE または DLURLPATHWRITE を使用して戻される。書 き込みトークンは、WRITE PERMISSION ADMIN DATALINK 列で参照されるファイルの更新に使用さ れる。

コール・レベル・インターフェース (CLI) (call level interface (CLI)). データベース・アクセス用の組 み込み SQL API に替わる呼び出し可能 API。組み込み SQL と対照的に、CLI では、プリコンパイルや データベースへのバインディングの必要がなく、実行時に SQL ステートメントや関連サービスを処理す る機能の標準セットを提供する。「DB2 コール・レベル・インターフェース (DB2 CLI)」も参照。

更新 (updating). DB2 Data Links Manager 環境では、リンクされたファイルを変更する処置。

更新進行中状態 (update-in-progress state). 更新処理中の、DB2 Data Links Manager のコントロール 下にあるファイルの論理状態。リンクされたファイルは、書き込みトークンを使用していったんオープン されると、この状態に入るが、DB2 ホストに更新が完了したことが通知されると、この状態ではなくな る。

## [サ行]

**スーパーユーザー (superuser).** 一般ユーザーがもつ権限よりも強いさまざまなシステム・コントロール 権限をもつユーザー。UNIX 環境では、標準スーパーユーザーは「root」である。

**絶対パス (absolute path).** オブジェクトの絶対パス名。絶対パス名は最高レベルのディレクトリー、つ まり「root」ディレクトリー (スラッシュ (/) 文字または逆方向スラッシュ (\) 文字で示される) から始ま る。

接頭部 (prefix). DB2 Data Links Manager 環境では、リンクされたファイルが保管される DLFS マウン ト・ポイント (UNIX) またはドライブ共有名 (Windows) の絶対パス。

## [夕行]

置換ファイル (replacement file). DB2 Data Links Manager では、ファイルの内容が、既存のリンクさ れたファイルに取って代るファイル。 データ・リンク・サーバー (Data Links server). 次の DB2 Data Links Manager コンポーネントを含む マシン:データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM)、データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) をコントロールするデータ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF)、および DB2 (ロ ギング・マネージャーとして使用)。

**データ・リンク・ファイル・システム (DLFS) (Data Links File System (DLFS))**. データ・リンク・ ファイル・システム・フィルター (DLFF) のコントロール下にあるファイル・システム。

**データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (DLFF) (Data Links Filesystem Filter (DLFF)).** DB2 Data Links Manager のコンポーネント。リンクされたファイルに対する有効でコントロールされた アクセスを確保することによって、データ保全性を強制するファイル・システム・フィルター。「リンク されたファイル (linked files)」も参照。

**データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) (Data Links File Manager (DLFM)).** DB2 データ ベースがデータベースの外部にあるファイルを管理できるようにする、DB2 Data Links Manager のコン ポーネント。

デーモン (daemon). リモートのアプリケーションまたはユーザーに対して、特定のサービスを提供する システム・プロセス。

## [ハ行]

バックアップ (backup). データベースまたは表スペースのコピー。異なるメディアに保管でき、障害が 発生したり、オリジナルが損傷を受けたりしたときにリストアに使用できる。

**ファイル属性 (file attributes).** オペレーティング・システムが管理する、ファイルを説明するすべての 特性のセット (包含ファイル・システムにある)。ファイル所有者、アクセス許可、最新の更新タイム・ス タンプ、サイズなどが含まれる。

**ファイルの更新操作 (file update operation).** ファイルの変更に関連したすべての処理。特に、ファイルが DATALINK タイプ列で参照され、DB2 Data Links Manager のコントロール下にある場合。リンク されたファイル (linked file) も参照。

ファイル・アクセス・トークン (file access token). 「読み取りトークン (read token)」を参照。

ファイル・システム・マイグレーター (FSM) (File System Migrator (FSM)). Tivoli Space Manager に よってスペースの使用量がコントロールされる仮想ファイル・システム。 DB2 Data Links Manager は、 AIX の稼働環境でこのファイル・システムの使用をサポートしている。

部分更新 (update-in-place). DB2 Data Links Manager 環境では、データベースの DATALINK 列値が ファイルを指している間に、そのリンクされたファイルを変更する処理。データベース・ユーザーは、リ ンクされたファイルに、部分更新操作の間に加えられた変更をすぐに見ることができるようになる。ただ し、特定の DATALINK 列の WRITE PERMISSION 属性の定義の仕方によっては、DB2 ホストに更新操 作が完了したことが通知されるまでは、リンクされたファイルに対する変更は実際には最終変更にならな い場合がある。 **プロセス間通信 (IPC) (Inter-Process Communication (IPC)).** 同一コンピューター内で、またはネットワークを介してプロセスがお互いに通信できるようにするオペレーティング・システムのメカニズム。

# [ヤ行]

読み取りトークン (read token). READ PERMISSION DB DATALINK 列値に組み込まれる許可キー。 単純な列値として戻されるか、スカラー関数の DLURLCOMPLETE または DLURLPATH を使用して戻さ れる。読み取りトークンは、READ PERMISSION DB DATALINK 列で参照されるファイルを読み取ると きに必要。

[ラ行]

**リンク (link).** DATALINK 列を含む表で参照されるファイルをコントロールするために DB2 Data Links Manager が行う処置。SQL の UPDATE、INSERT、IMPORT、または LOAD などのデータベース処理を 行うと、ファイルをリンクすることができる。

**リンク解除 (unlink).** DATALINK 列を含む表で参照されなくなったファイルのコントロールを中止する ために DB2 Data Links Manager が行う処置。 SQL の UPDATE、DELETE、または DROP TABLE な どのデータベース処理を行うと、ファイルをリンク解除することができる。

**リンク解除されたファイル (unlinked file).** DB2 Data Links Manager 環境では、オペレーティング・シ ステム上のネイティブ・ファイル・システムがコントロールするファイル。これに対し、リンクされたフ ァイルは、DLFF コンポーネントによってコントロールされる。

**リンクされたファイル (linked file).** DB2 Data Links Manager では、FILE LINK CONTROL で定義された表の DATALINK 列で参照されるファイル。リンクされたファイルは、参照保全を保証するために、 DLFF コンポーネントのコントロール下で管理される。

レプリケーション (replication). 定義されたデータ・セットを複数の場所で保持するプロセス。ある場所 (ソース) の指定した変更内容を別の場所 (ターゲット) にコピーしたり、また、両方の場所でデータを同 期化する。

## Α

ADSM. ADSTAR 分散ストレージ・マネージャー。「Tivoli Storage Manager」を参照。

### D

**Data Link Reconcile DLM Pending (DRDP).** 1 つ以上の DATALINK タイプ列が、保全性を検証でき ない可能性のあるファイル参照を含む DB2 表の状態 (たとえば、DB2 RECONCILE ユーティリティーを 実行している間に、Data Links Manager を使用できない場合)。 **Data Link Reconcile Not Possible (DRNP).** 1 つ以上の DATALINK タイプ列が、保全性が確保され ていないファイル参照を含む DB2 表の状態 (たとえば、そこで参照されるファイルをリストアできない 状態で、データベースをリストアする場合)。

**Data Link Reconcile Pending (DRP).** 1 つ以上の DATALINK タイプ列が、保全性が完全でない可能 性のあるファイル参照を含む DB2 表の状態 (たとえば、データベース・ログによるロールフォワードを 行わないでデータベースをリストアした場合)。

**Data Links Manager 管理者 (Data Links Manager Administrator).** DB2 Data Links Manager とその 関連環境の管理に責任を持つ人およびユーザー ID の両方を意味する。「DLFM ユーザー」とも呼ばれる ことがある。DB2 Data Links Manager がインストールされるときに、Data Links Manager 管理者が使用 するために、デフォルトのユーザー ID "dlfm" のアカウントが設定されるからである。 Data Links Manager 管理者 ID は、また DLFM コンポーネントが使用するすべてのリソースを所有する。たとえ ば、(1) "DLFM\_DB" データベースを含む DB2 インスタンス、(2) READ PERMISSION DB DATALINK タイプ列で参照されるリンクされたファイル、(3) DLFM サーバー自身を実行できるユーザー ID など。 Windows NT と Windows 2000 の環境の場合のみ、インストール時に追加の "dlmadmin" ユーザー・アカ ウントが作成されるが、このアカウントは、データ・リンク管理者が必要な高度な管理操作を実行すると きに使用するスーパーユーザー・アカウントである。dlmadmin アカウントは、UNIX 上での「root」ユー ザーと同じである。「dlmadmin アカウント (dlmadmin account)」、「スーパーユーザー (superuser)」も参 照。

**DATALINK.** データベースからデータベースの外部に保管されているファイルへの論理参照を可能にする SQL データ・タイプ。

**DB2 Data Links Manager.** アプリケーションが、非構造化ファイルとリレーショナル・データベース 管理システム (RDBMS) の両方にあるデータを操作できるようにする、別個に購入できる DB2 機能。 DB2 Data Links Manager は、DB2 Universal Database が、非構造化ファイルを、あたかも直接データベー スに保管されているかのように管理できるようにし、DB2 Universal Database への拡張によって、RDBMS と外部ファイル・システムを統合する。

**DB2 DataPropagator.** OS/390、z/OS、OS/400、z/VM、VM、VSE のオペレーティング・システム環境 で、DB2 レプリケーションを提供する製品。UNIX と Windows のオペレーティング・システム環境で は、レプリケーション機能は DB2 に統合化されており、別個のライセンスは必要ない。「レプリケーシ ョン (replication)」も参照。

**DB2 コール・レベル・インターフェース (CLI) (DB2 Call Level Interface (CLI)).** 実行時に SQL ステ ートメントや関連サービスを処理する機能の標準セットを使用するアプリケーション。プリコンパイルや バインドの必要はない。

**DB2 ホスト (DB2 host).** DB2 Data Links Manager 構成では、DB2 サーバー上で、DATALINK 列を含む DB2 データベース。

**db2\_recon\_aid ユーティリティー (db2\_recon\_aid utility).** DATALINK タイプ列を含むデータベース 表を識別し、オプションとして、これらの表に対して DB2 Reconcile ユーティリティーを実行するユーテ ィリティー。 **DLFF.** 「データ・リンク・ファイル・システム・フィルター (Data Links Filesystem Filter)」を参照。

**DLFM.** 「データ・リンク・ファイル・マネージャー (Data Links File Manager)」を参照。

DLFM\_ASNCOPYD ファイル・コピー・デーモン (Data Links Manager レプリケーション・デーモン) (DLFM\_ASNCOPYD file-copy daemon (Data Links Manager Replication daemon)). DataPropagator 製品のサポートで、DB2 Data Links Manager ファイル (関連した DB2 リレーショナル・データと一緒 に) のレプリケーションを可能にする DLFM プロセス。

**DLFM\_DB データベース (DLFM\_DB database).** データ・リンク・サーバーのロギング・マネージャー として機能する DB2 データベース。

**DLFS.** 「データ・リンク・ファイル・システム (Data Links File System)」を参照。

**DLM.** 「DB2 Data Links Manager」を参照。

**dlmadmin アカウント (dlmadmin account).** DB2 Data Links Manager で、Windows NT と Windows 2000 の環境でのみ、インストール時に作成されるアカウント。デフォルトでは、このアカウントの名前は "dlmadmin" である。このアカウントは、高度なユーザー特権をもち、UNIX 環境では「root」ユーザーと 同等なアカウントである。データ・リンク・サーバー上での、DLFM コンポーネントと Data Links Manager の管理者の両者による、必要で高度な管理操作を実行するスーパーユーザーの役割を果たすこと が目的である。ただし、"DLFM User" アカウントと異なり、dlmadmin は、DLFM リソースを所有しな い。 Data Links Manager 管理者は、"DLFM User" アカウント以外にこのアカウントを使用する。

## Η

High Availability Cluster Multiprocessor (HACMP). ある CPU 上のオペレーションを別の CPU が 引き継げるようにする複数の CPU ノードをもったハードウェア環境。DB2 Data Links Manager 構成で は、DB2 ホストとデータ・リンク・サーバーの両方を HACMP 環境で構成できる。

## J

JDBC (Java Database Connectivity). Java プログラム言語で使用するための、データベース API の セット。

JFS (Journaled File System). AIX オペレーティング・システムのネイティブ・ファイル・システム。

### Ν

NTFS. Windows NT および後続の稼働環境での、ネイティブ・ファイル・システムの1つ。

## R

**RECONCILE.** 表の DATALINK 列にあるファイルに対する参照の検証と修理に使用される DB2 ユーティリティー。

**RESTORE.** 損傷を受けた、または破壊されたデータベースまたは表スペースを、BACKUP ユーティリ ティーが生成したバックアップ・イメージから再ビルドするために使用される DB2 ユーティリティー。

retrieve\_query ユーティリティー (retrieve\_query utility). 特定のデータ・リンク・サーバーが管理す るすべてのファイルのバックアップまたはアーカイブ状況を表示するスタンドアロン DLFM ユーティリ ティー。retrieve\_query ユーティリティーは、dlfm retrieve コマンドで呼び出すこともできる。

## Т

**Tivoli Space Manager.** Tivoli Storage Manager 製品の機能。1 次ネイティブ・ファイル・システムでの 実際のファイル・アクセスに基づいて、2 次ストレージ・メディアとの間でファイルの出し入れを行う。 この機能により、DB2 Data Links Manager と共に使用して DATALINK ファイルを事実上無限のサイズ のファイル・システムに保管できる。

Tivoli Storage Manager (TSM). 異機種環境でストレージ管理とデータ・アクセス・サービスを提供す るクライアント / サーバー製品。TSM は、さまざまな通信方式をサポートし、ファイルのバックアップ と保管を管理する機能、バックアップのスケジューリング機能を提供する。

## U

**UFS (UNIX ファイル・システム) (UFS (UNIX File System)).** Solaris オペレーティング環境でのネイ ティブ・ファイル・システム。

## Х

XBSA. バックアップ・ユーティリティーとリストア・ユーティリティーのための、業界標準の API の セット。XBSA は、DB2 Data Links Manager 環境でリンク済みファイルのバックアップ・コピーの保持 に使用できるアーカイブ領域オプションの 1 つである。XBSA オプションは、DLFM\_BACKUP\_TARGET レジストリー変数で指定する。

## 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があ ります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業 担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及して いても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意 味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのな い、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。た だし、IBM 以外の製品、プログラムまたはサービスの操作性の評価および検証は、お客 様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む)を保有 している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許 諾することを意味するものではありません。実施権の許諾については、下記の宛先に書 面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木 3-2-31 IBM World Trade Asia Corporation Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

本書に含まれる情報には、技術的に不正確なもの、または誤植が含まれる場合がありま す。これらに対する変更は、定期的に行われます。これらの変更は、資料の改訂版に含 まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラム に対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため 記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。そ れらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それ らの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および(ii) 交換された情報の相互利用 を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に 連絡してください。

IBM Canada Limited Office of the Lab Director 8200 Warden Avenue Markham, Ontario L6G 1C7 CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができます が、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の 条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたもの です。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測 定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利 用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推 定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お 客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利 用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりま せん。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については 確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願 いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回され る場合があり、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示 するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客 様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのア プリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プ ログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対 価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・ プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。したがって IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があること をほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのすべての部分、またはすべての派生した創 作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラ ムから取られています。 © Copyright IBM Corp. \_西暦年\_. All rights reserved.

### 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	LAN Distance
AISPO	MVS
AIX	MVS/ESA
AIXwindows	MVS/XA
AnyNet	Net.Data
APPN	NetView
AS/400	OS/390
BookManager	OS/400
C Set++	PowerPC
C/370	pSeries
CICS	QBIC
Database 2	QMF
DataHub	RACF
DataJoiner	RISC System/6000
DataPropagator	RS/6000
DataRefresher	S/370
DB2	SP
DB2 Connect	SQL/400
DB2 Extenders	SQL/DS
DB2 OLAP Server	System/370
DB2 Universal Database	System/390
Distributed Relational	SystemView
Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
iSeries	zSeries

以下は、他社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米 国およびその他の国における商標です。

"Pentium" "MMX" "ProShare" "LANDesk" および "Action Media" は Intel Corporation の米国およびその他の国における商標。

(Intel の商標は http://www.intel.com/sites/corporate/tradmarx.htm で参照できます)。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録 商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。

# 索引

日本語,数字,英字,特殊文字の 順に配列されています。なお,濁 音と半濁音は清音と同等に扱わ れています。

# [ア行]

アーカイブ・サーバー 94.210 Data Link Manager での Tivoli Storage Manager の使用 AIX 24 Solaris オペレーティング環境 26 Windows 28 Data Link Manager でのローカ ル・ディレクトリーとしての使 用 30 移行 DLFF-ファイル・システムを他の ハード・ディスクに使用可能化 する 81 異常終了 データ・リンク・ファイル・マネ ージャー (DLFM) 62 エラー・メッセージ 診断レベルの変更 76 データ・リンク・ファイル・シス テム・フィルター (DLFF) AIX 231 Solaris オペレーティング環境 239 Windows 246 Data Links File Manager 159

# [カ行]

書き込み操作セキュリティー DB2 Data Links Manager で 108 書き込みトークン Data Links Manager での考慮事項 の使用 132 書き込みトークン (続き) Data Links Manager での無効化 209 Data Links Manager でのリカバー 206 クラッシュ・リカバリー 145 コマンド DLFF を参照 71 DLFM を参照 69

# [サ行]

障害のリカバリー 145 概要 145 シナリオ 152 セキュリティー 書き込み操作 DB2 Data Links Manager で 108 ファイル・リンク 194, 197, 205, 211. 214 規則と指針 103 読み取り操作 DB2 Data Links Manager 107 接頭部 追加、Data Links Manager で 192 登録済みリスト、Data Links Manager の 204 リスト作成がリンク済みファイル に対して進行中 208

# [夕行]

データ・リンク・ファイル・システ ム・フィルター (DLFF) 6 エラー・メッセージ AIX 231 Solaris オペレーティング環境 239 Windows 246 データ・リンク・ファイル・マネー ジャー (DLFM) 6 エラー・メッセージ 159 再始動 61 異常終了後 62 始動 61 停止 61 にデータベースを登録 191 モニター 214 リスト で登録済みの接頭部 204 で登録済みのデータベース 202 と登録済みのディレクトリー 203 ディレクトリー DLFM で登録、リスト 203 トークン 書き込み 132 Data Links Manager 209 Data Links Manager でのリカ バー 206 等時性伝送 9

# [ハ行]

バックアップ ファイル・システム AIX 上の JFS 147 Solaris オペレーティング環境 上の UFS 147 Windows NT 上の 147 ファイル・システム 使用可能された Data Links Manager 81 ファイル・システムのディレクトリ 一階層 148

# [ヤ行]

読み取り操作セキュリティー DB2 Data Links Manager で 107

# [ラ行]

リカバー Data Links Manager でのトークン の書き込み 206 リストア ファイル・システム AIX 上の JFS 147 Solaris オペレーティング環境 上の UFS 147 Windows NT 147 リンク済みファイル 書き込みアクセスを否定する 194 書き込みアクセスを付与する 197 書き込み操作セキュリティー 108 からアクセス権の取り消し 211 許可 アクセスするレプリケーショ ン・ユーザー 200 レプリケーションの要求 201 更新 手動で 117 ネイティブ・ファイル・シス テムによるアクセスの定義 119 ファイル内容の置き換えによ る 135 Data Links サーバー認証 121 更新処理中の表示 206 セキュリティー、オン / オフ 214 読み取り操作セキュリティー 107 リスト 更新の進行中、接頭部によっ T 208 へのアクセスを持ったユーザ

### - 205

レプリケーション リンクされたファイルの複製 200, 201 Data Links Manager での特権の取 り消し 213 Data Links Manager での付与され た操作のリスト作成 204 レプリケーション (replication) DLFM\_ASNCOPYD の使用可能化 55 ロギング・マネージャー (DLM) 6

## D

Data Link Manager でのアーカイブ・ サーバー・バックアップの検索 210 Data Links Manager DB2 Data Links Manager を参照 197 Data Links サーバー DLFS を他のハード・ディスクに 移動 81 AIX 82 Solaris オペレーティング環境 86 Windows 90 databases ドロップ からデータ・リンク・ファイ ル・マネージャー 197 DLFM で登録、リスト 202 DATALINK データ・タイプ 概要 13 DB2 Data Links Manager アプリケーションと一緒に動作す る 11 概要 4 コンポーネントの説明 5 サポートされているシステム 5 典型的なセットアップ 15 ファイル・システムの枠組み 9 レプリケーション 201 レプリケーション (replication) 200 DB2 サーバー 9

DB2 Data Links Manager (続き) prefixes 192 DB2 Universal Database サーバー DB2 Data Links Manager による 使用法 9 DB2 クライアント Data Links Manager を使用して 8 db2\_recon\_aid コマンド 150 DFS クライアント 概要 8 DFS クライアント・イネーブラー 概要 8 dlff add コマンド 構文 221 dlff get dlfmaccount  $\exists \forall \lor \lor$ 構文 222 dlff get loglevel コマンド 構文 223 dlff list コマンド 構文 224 dlff refreshtrace コマンド 構文 224 dlff remove コマンド 構文 225 dlff set dlfmaccount コマンド 構文 227 dlff set dlfm\_write\_group コマンド 構文 226 dlff set loglevel コマンド 構文 229 DLFF コマンド dlff add 221 222 dlff get loglevel 223 dlff list 224 dlff refreshtrace 224 dlff remove 225 dlff set dlfmaccount 227 dlff set dlfm\_write\_group 226 dlff set loglevel 229 DLFF (データ・リンク・ファイル・ システム・フィルター) アンロード JFS 環境 69

DLFF (データ・リンク・ファイル・ システム・フィルター) (続き) アンロード (続き) UFS 環境 70 エラー・メッセージ AIX 231 照会 JFS 環境 69 UFS 環境 70 Windows 71 登録済みファイル・システムのリ スト表示または追加 AIX 68 Solaris オペレーティング環境 68 ロード JFS 環境 69 UFS 環境 70 JFS 環境での追加 65 Windows での登録 71 Windows での登録抹消 71 dlfm add\_db コマンド 構文 191 dlfm add\_prefix コマンド 構文 192 dlfm bind コマンド 構文 193 dlfm create コマンド 構文 193 dlfm create\_db コマンド 構文 194 dlfm deny コマンド 構文 194 例 103 dlfm drop\_db コマンド 構文 196 dlfm drop\_dlm コマンド 構文 197 構文 200 dlfm grant replication write コマンド 構文 201 dlfm grant コマンド 構文 103, 197 例 103

dlfm help コマンド 構文 202 dlfm list registered databases  $\exists \forall \rangle$ ド 構文 202 例 103 dlfm list registered directories  $\exists \forall \checkmark$ ド 構文 203 dlfm list registered prefixes  $\exists \forall \rangle$ 構文 204 dlfm list registered replication access control コマンド 構文 204 dlfm list registered users コマンド 構文 205 例 103 dlfm list upd\_in\_progress files for db コマンド 構文 206 dlfm list upd\_in\_progress files for prefix コマンド 構文 208 dlfm refresh key コマンド 構文 209 dlfm restart コマンド 構文 210 dlfm retrieve コマンド 構文 210 構文 213 dlfm revoke コマンド 構文 211 dlfm see コマンド 構文 214 dlfm set link security コマンド 構文 214 dlfm setup コマンド 構文 215 dlfm shutdown コマンド 構文 216 dlfm start コマンド 構文 216 再始動の場合 62 dlfm startdbm コマンド 構文 217

dlfm stop コマンド 構文 217 dlfm stopdbm コマンド 構文 218 DLFM コマンド のヘルプを得る 191, 202, 218 dlfm 191 dlfm add db 191 dlfm add\_prefix 192 dlfm bind 193 dlfm create 193 dlfm create db 194 dlfm deny 194 dlfm drop\_db 196 dlfm drop\_dlm 197 dlfm grant 197 dlfm grant replication read 200 dlfm grant replication write 201 dlfm help 202 dlfm list registered databases 202 dlfm list registered directories 203 dlfm list registered prefixes 204 dlfm list registered replication access 204 dlfm list registered users 205 dlfm list upd\_in\_progress files for db 206 dlfm list upd\_in\_progress files for prefix 208 dlfm refresh key 209 dlfm restart 210 dlfm retrieve 210 dlfm revoke 211 dlfm revoke replication 213 dlfm see 214 dlfm set link security 214 dlfm setup 215 dlfm shutdown 216 dlfm start 216 dlfm startdbm 217 dlfm stop 217 dlfm stopdbm 218 dlfm ? 218 dlfm コマンド 構文 191

DLFM (データ・リンク・ファイル・ マネージャー) 異常終了後の再始動 62 エラー・メッセージ 159 再始動 61 始動 61 仉理 AIX 63 Solaris オペレーティング環境 63 Windows 64 障害リカバリーのシナリオ 152 セットアップ手順 147 データベースの登録 73.191 停止 61 バックアップ手順 147 モニター 214 リスト で登録済みの接頭部 204 で登録済みのデータベース 74. 202 と登録済みのディレクトリー 203 DLFM の再始動 異常終了後 62 説明 61 dlfm ? コマンド 構文 218 DLFM ASNCOPYD ファイル・コピ ー・デーモン へのアクセス権の取り消し 213 Data Links Manager での権限の付 与 201 Data Links Manager での使用可能 化 55 DB2 Data Links Manager での付 与された操作のリスト作成 204 DLFM DB 作成と構成 194 設定 215 ドロップ 196 の DB2 統計を更新 193 の初期表の作成 193 のデータベース・マネージャーの 開始 217

```
DLFM_DB (続き)
のデータベース・マネージャーの
停止 218
のログ・スペースの確保 58
DLFS-DMAPP
概要 6
```

### F

FORCE APPLICATION コマンド 209

### J

JFS サイズの増加 72

### R

RECONCILE コマンド db2\_recon\_aid ユーティリティー 150

## Т

Tivoli Storage Manager (TSM) Data Link Manager でのアーカイ ブ・サーバーとしての使用 AIX 24 Solaris オペレーティング環境 26 Windows 28

## U

UFS サイズの増加 72

### W

Windows 2000 x Windows NT x

## IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートに連絡をとってください。

### 製品情報

以下の情報は英語で提供されます。内容は英語版製品に関する情報です。

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、www.ibm.com/software/data/db2/udb から 入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、クライアント・ダウンロード、 ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに 関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



部品番号: CT19RJA

Printed in Japan



(1P) P/N: CT19RJA

SC88-9169-00



日本アイ・ビー・エム株式会社 〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

Spine information:

バージョン 8 Data Links Manager 管理ガイドおよび リファレンス IBM<sup>®</sup> DB2<sub>.</sub> Universal Database